浅科村文化財調査報告　第12集

大平遺跡

1998

長野県北佐久郡

浅科村教育委員会

浅科村文化財調査報告　第12集

大平遺跡

1998

長野県北佐久郡

浅科村教育委員会

序

浅科村は、豊かな自然環境に恵まれ、古来から生活の営みの中で文化を育んできました。

平成10年は冬季長野オリンピックが開催され、関連する様々な開発事業が進められました。当村でも、北陸新幹線佐久平駅の開業により首都圏との交通も大幅に短縮しました。

こうした開発事業によって、私たちの暮らしも大きく変わろうとしていますが、地下に眠る遺跡にも開発事業による破壊が余儀なくされることにもなります。

遺跡（埋蔵文化財）は、その土地に暮らした先人たちが残した文化遺産であり、まさに土地に刻まれた歴史を我々に伝えるものと言えます。こうした埋蔵文化財は、現状を保存することが、遺跡を守ることになりますが、やむをえず保存ができない場合、発掘調査を実施し、詳しく記録に残し、後世の子孫達へ正しく伝えていくことは我々の義務でもあります。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴式住居跡24軒の他、掘立建物跡、小鍛冶炉などが検出され、土師器・須恵器といった当時の人々が生活に使っていた焼き物の容器がたくさん出土し、浅科に暮らした先人たちの村跡が明らかになりました。

本報告書は、発掘調査及びその成果を図版を付してまとめた冊子です。本書が、学術研究、教育資料、地域史研究の一助として多くの人々に活用され、また、村民の皆さんが埋蔵文化財に対して関心と理解を深める手引きとなれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査を担当された岡田裕先生、佐藤幸信先生、学生諸君、発掘のお手伝いをいただいた調査協力員の皆様、調査に関わられた多くの方々には、夏の暑い中、大変ご苦労していただきました。厚く感謝いたします。

平成10年３月

浅科村教育委員会
教育長　栁澤哲郎

例　　言

1　本書は、長野県北佐久郡浅科村に所在する、「大平（おおひら）遺跡」発掘調査の調査報告書である。

2　発掘調査は、宅地造成工事に伴う事前の記録保存のために、浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）が主体となり、次のように実施した。

遺　跡　名：大平遺跡

発掘調査期日：平成９年７月13日～同年９月30日

発掘調査地：長野県北佐久郡浅科村大字八幡字大平710番他

発掘調査面積：5,000㎡

発掘調査組織：浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎、組織は本文第４頁に掲載）

発掘担当者：岡田　裕・佐藤幸信

3　現地の発掘調査、遺物整理・報告書刊行事業は、次のように実施した。

平成９年７～９月……現地での発掘調査

平成９年10～11月……遺物の洗浄・注記・図面類の整理

平成９年12月……遺物の復元・実測・トレース

平成10年１月……図版作成・原稿執筆

4　現地での写真撮影は岡田、出土遺物の写真撮影は小宮山が行った。

5　遺構のトレース、出土遺物の実測及びトレースは、石坂、内田、岡田、小宮山が行った。

6　図版作成は、石坂、内田、岡田、小宮山が行った。

7　本書の挿図の縮尺は、各々挿図に示した通りである。

8　竪穴住居跡の主軸は、長・短辺にかかわらず、カマドの軸を通るラインとした。また、掘立建物跡の主軸は、両端の短辺（梁間）の中心を結んだ線である。

9　挿図中の水糸標高値の単位はメートルである。

10　本遺跡の基準点測量、グリッド杭打ち、全体図の作成は、株式会社東京航業研究所に委託した。

11　本書の執筆は、石坂、内田、岡田、小宮山、佐藤幸信、秀島、宮沢が各々分担して行った。

12　本書の編集は、浅科村教育委員会が報告書刊行会を組織して行った。

13　出土遺物・図面・写真類は、浅科村教育委員会で保管している。

14　本書をまとめるにあたり、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝します。
（敬称略）

長野県教育委員会・浅科村土地開発公社・浅科村立図書館・金井　靖・福島邦男・北原郁生
峯村袈裟雄

目　　次

序
例　言
目　次

第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1
第１節　発掘調査に至る経過 …… 1
第２節　発掘調査組織 …… 4
第３節　発掘調査日誌 …… 5
第４節　調査の概要 …… 7

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 9
第１節　地理的環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 9

第Ⅲ章　浅科村における考古学的調査の歩み …… 13
第１節　概　　要 …… 13
第２節　発掘調査の歩み …… 13
第３節　ま と め …… 17

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物 …… 19
第１節　遺構外出土の遺物 …… 19
第２節　掘立建物跡 …… 21
第３節　竪穴住居跡 …… 27
第４節　鍛 冶 炉 …… 89
第５節　土　　壙 …… 94
第６節　ピ ッ ト …… 97

第Ⅴ章　ま　と　め …… 105

あとがき
報告書抄録
図　版

挿図目次

付　図　大平遺跡全体測量（1/200）
第１図　大平遺跡位置図（1/25,000）……１
第２図　大平遺跡付近図（1/2,500）……２
第３図　トレンチ配置図（1/1,000）……３
第４図　遺跡全体図（1/600）……７
第５図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……12
第６図　遺構外出土遺物（1/3）……20
第７図　第１号掘立建物跡実測図（1/60）…21
第８図　第２号掘立建物跡実測図（1/60）…22
第９図　第３号掘立建物跡実測図（1/60）…22
第10図　第４号掘立建物跡実測図（1/60）…23
第11図　第５号掘立建物跡実測図（1/60）…24
第12図　第６号掘立建物跡実測図（1/60）…25
第13図　第７号掘立建物跡実測図（1/60）…26
第14図　第７号掘立建物跡出土遺物（1/3）　27
第15図　第１号住居跡実測図（1/60）……28
第16図　第２号住居跡実測図（1/60）……29
第17図　第２号住居跡カマド実測図（1/20）30
第18図　第２号住居跡出土遺物（1/3）……31
第19図　第３号住居跡実測図（1/60）……32
第20図　第４・５・11号住居跡実測図
（1/60）……34
第21図　第４号住居跡出土遺物（1/3）……35
第22図　第５号住居跡出土遺物（1/3）……36
第23図　第６号住居跡実測図（1/60）……37
第24図　第６号住居跡出土遺物（1/3）……38
第25図　第７号住居跡実測図（1/60）……38
第26図　第７号住居跡カマド実測図（1/20）40
第27図　第７号住居跡出土遺物（1/3）……41
第28図　第８・９号住居跡実測図(1)（1/60）42
第29図　第８・９号住居跡実測図(2)（1/60）43
第30図　第８号住居跡出土遺物（1/3）……43
第31図　第９号住居跡出土遺物（1/3）……44
第32図　第10号住居跡実測図（1/60）……44
第33図　第11号住居跡出土遺物（1/3）……46
第34図　第12号住居跡実測図（1/60）……46
第35図　第13号住居跡実測図（1/60）……48
第36図　第13号住居跡ピット・焼土実測図
（1/40）……48
第37図　第13号住居跡カマド実測図（1/20）49
第38図　第13号住居跡出土遺物（1/3）……50
第39図　第14号住居跡実測図（1/60）……51
第40図　第14号住居跡カマド実測図（1/20）52
第41図　第14号住居跡出土遺物（1/3）……53
第42図　第15号住居跡実測図（1/60）……54
第43図　第15号住居跡カマド実測図（1/20）55
第44図　第15号住居跡出土遺物(1)（1/3）…57
第45図　第15号住居跡出土遺物(2)（1/3）…58
第46図　第16号住居跡実測図（1/60）……59
第47図　第16号住居跡カマド実測図（1/20）60
第48図　第16号住居跡出土遺物（1/3）……61
第49図　第17号住居跡実測図（1/60）……62
第50図　第17号住居跡カマド実測図（1/20）63
第51図　第17号住居跡遺物出土状況（1/60）63
第52図　第17号住居跡出土遺物(1)（1/3）…65
第53図　第17号住居跡出土遺物(2)（1/3）…67
第54図　第18号住居跡実測図（1/60）……68
第55図　第18号住居跡出土遺物（1/3）……69
第56図　第19号住居跡実測図（1/60）……70
第57図　第19号住居跡遺物出土状況(1/60）71
第58図　第19号住居跡出土遺物（1/3）……72
第59図　第20・24号住居跡実測図（1/60）…73
第60図　第20号住居跡出土遺物（1/3）……74
第61図　第21号住居跡実測図（1/60）……76
第62図　第21号住居跡出土遺物（1/3）……77
第63図　第22号住居跡実測図（1/60）……78

第64図　第22号住居跡出土遺物（1/3）……79
第65図　第23号住居跡実測図(1)（1/60）……80
第66図　第23号住居跡実測図(2)（1/60）……81
第67図　第23号住居跡カマド実測図（1/20）81
第68図　第23号住居跡出土遺物(1)（1/3）…83
第69図　第23号住居跡出土遺物(2)（1/3）…84
第70図　第23号住居跡出土遺物(3)（1/3）…85
第71図　第23号住居跡出土遺物(4)（1/3）…87
第72図　第23号住居跡出土遺物(5)（1/3）…88
第73図　第１号炉実測図(1)（1/20）……89
第74図　第１号炉実測図(2)（1/20）……90
第75図　第１号炉出土遺物（1/3）……91
第76図　第２号炉実測図（1/20）……92
第77図　第２号炉出土遺物（1/3）……93
第78図　土壙実測図（1/40）……95
第79図　第４号土壙出土遺物（1/3）……95
第80図　ピット出土遺物（1/3）……98
第81図　ピット実測図(1)（1/40）……101
第82図　ピット実測図(2)（1/40）……102
第83図　ピット実測図(2)（1/40）……103
第84図　ピット実測図(2)（1/40）……104
第85図　竪穴住居跡の主軸方向……106
第86図　竪穴住居跡の規模……107
第87図　各時期の様相……108
第88図　ピット群の復元（1/200）……110

表目次

第１表　周辺遺跡地名表……5
第２表　ピット観察表(1)……99
第３表　ピット観察表(2)……100

図版目次

図版１　遺跡遠景（北側調査区、東から）・遺跡遠景（南側調査区、東から）
図版２　調査区全景（北側調査区、南西から）・調査区全景（北側調査区、西から）
図版３　調査区全景（南側調査区、北東から）・調査区全景（南側調査区、北から）
図版４　調査区全景（南側調査区、北から）・重機による表土掘削（南から）
図版５　遺構確認作業（北側調査区、南から）・遺構調査風景
図版６　遺跡見学会風景・第１号建物跡（南から）
図版７　第３号建物跡（西から）・第４号建物跡（南から）
図版８　第５号建物跡（北から）・第６号建物跡（南から）
図版９　第７号建物跡（北から、手前は第17号住居跡）・第１号住居跡（南東から）
図版10　第２号住居跡（南東から）・第２号（左）、第３号（右）住居跡（南から）
図版11　第４号（奥）、第11号（中）、第５号（手前）住居跡・第６号住居跡（南から）
図版12　第７号住居跡（南から）・第８（左奥）、９号（右奥）、第10号（手前）住居跡（南から）
図版13　第12号住居跡（南から）・第13住居跡（南東から）
図版14　第13号住居跡ピット１遺物出土状態（南から）・第14号住居跡（南西から）
図版15　第15号住居跡（南から）・第17号住居跡（南西から）

図版16　第17号住居跡遺物出土状況（南東から）・第17号住居跡遺物出土状態（カマド東側）
図版17　第17号住居跡遺物出土状態（カマド東脇）・第18号住居跡（南から）
図版18　第19号住居跡（南から）・第20号住居跡（南から）
図版19　第21号（手前）、第22号（奥）住居跡（南東から）・第23号（右）、第20、24号（左）住居跡（東から）
図版20　第23号住居跡遺物出土状態（南東から）・第20、24号住居跡（南東から）
図版21　第１号炉完掘状態（南西から）・第１号炉遺物出土状態（北東部、東から）
図版22　第１号炉復元状況・第１号炉遺物出土状態（南から）
図版23　第２号炉完掘状態（西から）・第２号土壙完掘状態
図版24　第３号土壙完掘状態・第５号土壙完掘状態
図版25　第７号土壙土層断面・ピット群
図版26　遺構外出土遺物
図版27　第７号建物出土遺物・第２号住居跡出土遺物
図版28　第４号住居跡出土遺物・第５号住居跡出土遺物
図版29　第６号住居跡出土遺物・第７号住居跡出土遺物・第８号住居跡出土遺物・第９号住居跡出土遺物
図版30　第11号住居跡出土遺物・第13号住居跡出土遺物
図版31　第14号住居跡出土遺物・第15号住居跡出土遺物(1)
図版32　第15号住居跡出土遺物(2)
図版33　第16号住居跡出土遺物
図版34　第17号住居跡出土遺物(1)
図版35　第17号住居跡出土遺物(2)
図版36　第17号住居跡出土遺物(3)・第18号住居跡出土遺物
図版37　第19号住居跡出土遺物(1)
図版38　第19号住居跡出土遺物(2)・第20号住居跡出土遺物
図版39　第21号住居跡出土遺物・第22号住居跡出土遺物
図版40　第23号住居跡出土遺物(1)
図版41　第23号住居跡出土遺物(2)
図版42　第23号住居跡出土遺物(3)
図版43　第１号炉出土遺物
図版44　第２号炉出土遺物・第４号土壙出土遺物
図版45　ピット出土遺物

第Ｉ章　発掘調査の概要

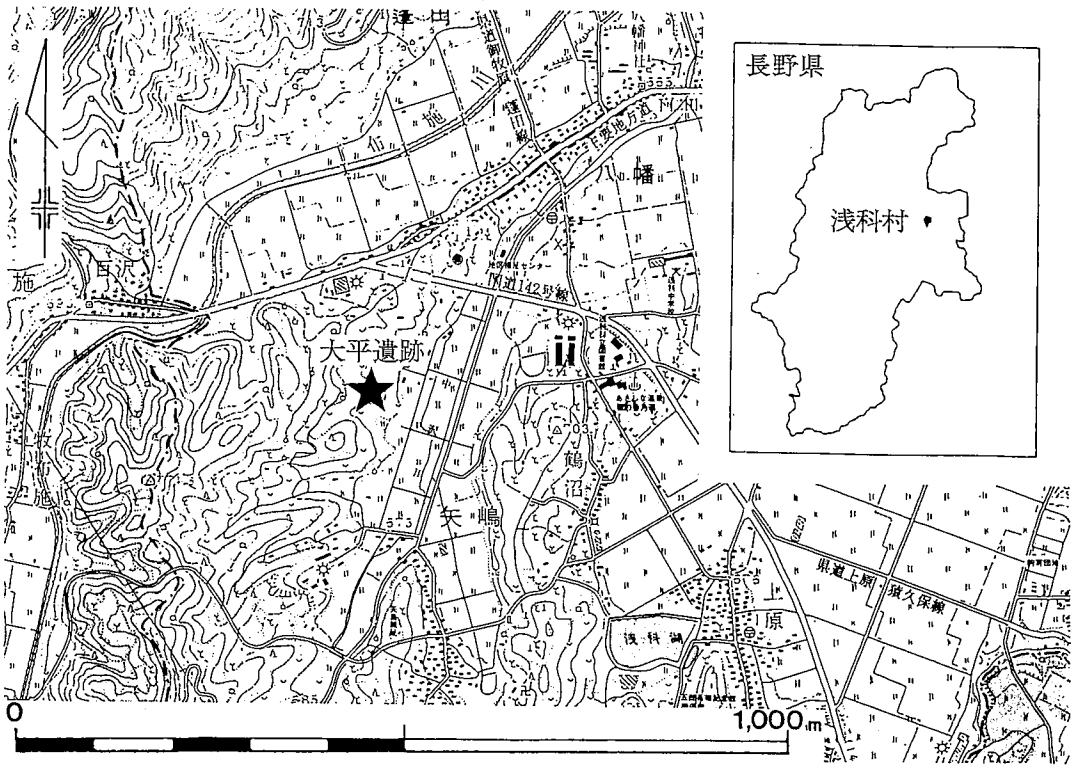
第１節　発掘調査に至る経過

農村地域として知られる浅科村は、近年の上・信越道の開通や北陸新幹線佐久平駅の開設、冬季長野オリンピックを契機とした様々な開発事業が進められている。こうした交通網の整備によって首都圏との距離も大幅に縮まったこともあり、新興の住宅地域が形成されつつある。

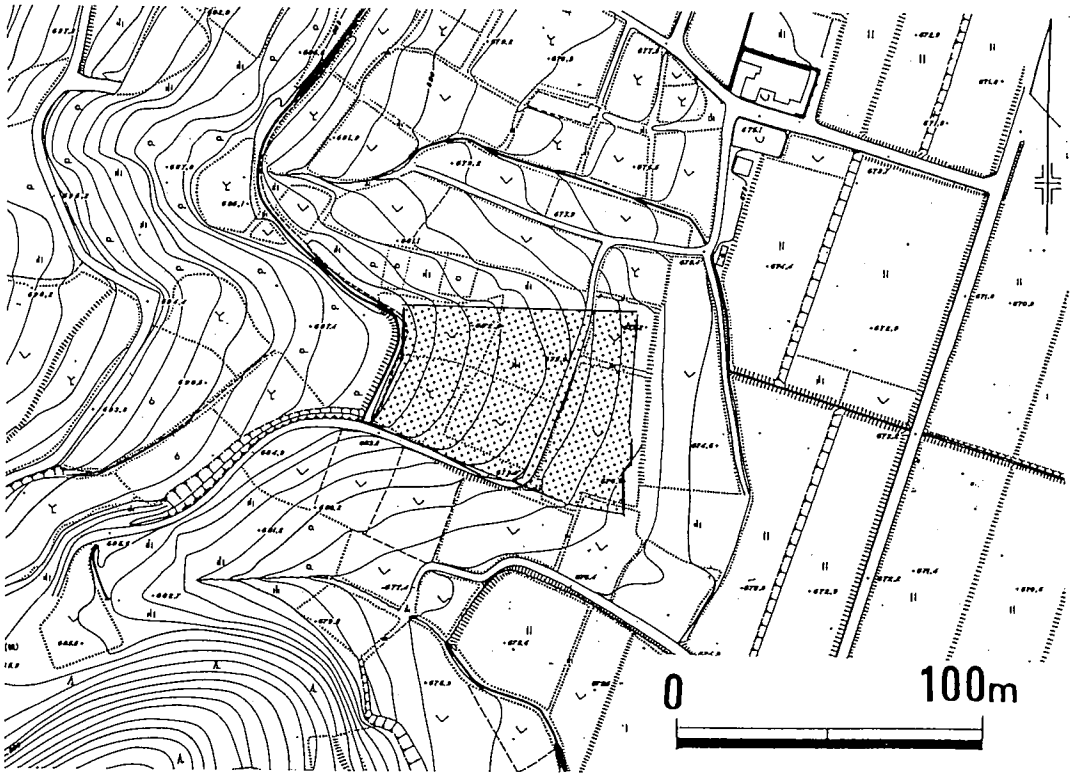
浅科村土地開発公社（理事長：井手文男、以下、土地開発公社と略す）では、こうした時代の要求に応えるべく、優良宅地の建設にも積極的に取り組んでいる。

平成８年、土地開発公社から浅科村大字八幡字大平地内での宅地造成計画が具体化し、開発予定地内に於ける埋蔵文化財所在の有無について、浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎、以下、村教育委員会と略す）に照会があった。

村教育委員会では、文化財保護審議会と協議の上、早速現地での踏査を行ったところ、開発予定地の一部で多量の土器片（土師器・須恵器）を採集した。現状は畑として利用され、その耕作によって遺物が表面に散布している事が予想されたが、過去に朝鮮人参を栽培した経緯もあり、遺物のみが散布し、地下の遺構が消滅している可能性も危惧された。これらの所見を土地開発公社へ伝えると共に、埋蔵文化財の取扱いについて協議を進めていった。村教育委員会では、範囲確認および



第１図　大平遺跡位置図（1/25,000）



第２図　大平遺跡付近図（1/2,500）

文化財の残存状態を確認するのために、試掘調査が必要である旨を説明し、試掘調査結果を待って、具体的な計画を進めることで両者が合意した。現地の用地買収は進行していたものの、現状では畑の耕作が行われており、作物の収穫終了後に試掘調査を実施する計画とした。

秋も深まった平成８年11月末日、霜の降りる直前の時期に、試掘調査実施が可能との見通しが土地開発公社から示され、村教育委員会では、早速試掘調査の体制を整備し、11月28日から12月１日までの４日間に亘る試掘調査を実施した。

開発予定地19,000㎡は、地形的には西から東へ突き出した舌状台地と、その両脇に開析する沼沢地から成る。遺物の散布状況や地形的特徴から、開析谷部分を除く台地部分に古代集落の存在が予想された。台地部分では、南北方向の畦道及び耕作地の関係で、大きく３区分され、地形的に高い西側からＡ・Ｂ・Ｃに調査区を別け、各々地形傾斜に沿ってトレンチを設定し、重機で表土掘削を行った後に、人力で遺構・遺物の精査を行った。

西側のＡ区は、調査対象地の中で最も高く、東端は旧五郎兵衛用水が巡る。地形の等高線に直行する方向の東西に長いトレンチを主体に設定したが、耕作中の作物の関係で、十分なトレンチ設定が出来なかった部分もある。

Ｂ区は、Ａ区と農道を挟んだ東側で、一部用地未買収地を含む。この区域は、低地に接する斜面地で、地山の一部は白色粘土層である。遺構の残存状態は比較的良好である。

Ｃ区は、低地で、地山は白色粘土層が主体である。遺構は見られなかった。

試掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡の存在を示すピット等が確認され、平安

第３図　トレンチ配置図（1/1,000）

時代の土師器・須恵器が検出された。竪穴式住居跡は奈良・平安時代に属し、出土遺物も、他の時期を含まないことから、古代の集落跡としての遺跡の性格が予想されると同時に、切り合い関係や、長軸方向に差のある竪穴住居跡が認められることから、数時期に亘って営まれた集落であることが予想された。しかし、遺構の残存状態は、斜面地形のために表土が流れ易いことに加え、過去に於ける耕作の深さに影響されて多くの遺構の立上がりが失われ、低地に接する低い部分を除き、住居跡も床面或いは掘り方といった、住居の存在を示す痕跡程度しか検出されない可能性が高いと判断された。また、最下段は、白色粘土を地山とする低地で、湧水が認められた。遺構は確認されなかったが、耕作地である可能性が高いと思われる。また、南側には沢が西から東へ流れている。現在は土地改良の構造改善が行われているため、調査対象から除外した。

これらの試掘調査結果に基づき、発掘調査が必要な範囲を明確にするとともに、具体的な発掘調査計画及び発掘調査経費の概算を、土地開発公社に通知した。

平成９年４月25日、浅科村役場内に於いて、村教育委員会と土地開発公社の間で、文化財の取扱いに関する協議を行った。まず、村教育委員会から、発掘調査の具体的な計画・手順と、必要経費の内訳等を土地開発公社に説明した。土地開発公社からは、優良宅地の造成事業は、浅科村の行政施策の一環として急務であり、計画変更は事実上不可能である。村の歴史を物語る遺跡の重要性は理解しているので、村教育委員会に発掘調査の実施を委託したい。また、現地で耕作を続けている地権者へ、発掘調査実施についての説明も済んでいることから、当初の計画どおりに発掘調査を進めて欲しい、という意向であった。土地開発公社は、文化財保護の趣旨を尊重し、調査経費、調査

計画について両者の合意に至った。

これに基づき、土地開発公社と村教育委員会との間で、大平遺跡発掘調査に関する契約書が取り交わされ、平成９年６月議会にて、発掘調査経費に関する委託料が、土地開発公社から村教育委員会への歳入として議会の承認を受けた。

平成９年６月30日付け９浅土開第17号で、文化財保護法第57条の３第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を、また、村教育委員会は、平成９年７月４日付け９浅教第177号で、文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を県教育委員会経由で文化庁長官宛てに提出した。

長野県教育委員会からは、平成９年７月28日付け９教文第５－137号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で、工事着手前の発掘調査を浅科村教育委員会に委託の上、実施するよう通知がなされた。

村教育委員会は平成９年６月に調査体制を整備し、同年７月に現地での発掘調査実施に至った。

第２節　発掘調査組織

発掘調査

調査主体　浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）

調査担当者　岡田　裕（東洋大学職員、國学院大學考古学専攻卒業）

佐藤幸信（浅科村埋蔵文化財調査員）

調　査　員　佐藤純一朗（浅科村文化財保護委員）

石坂智子、内田宏美、古平　愛、杉田美香、中村絵美、秦　弘子、秀島幸江

宮沢真央（以上、駒沢大学生）

調査協力員　井出春江、木村清美、工藤松子、小泉とも枝、小泉政志、小泉やい、土屋なおい

中沢政夫、永田礼子、小林　茂、

報告書刊行

調査主体　浅科村教育委員会（教育長：柳澤哲郎）

担　当　者　岡田　裕、佐藤幸信

調　査　員　石坂智子、内田宏美、秀島幸江、宮沢真央

調査協力員　長江京子、小宮山トキ、藤田玲子、森沢　優、佐竹亜矢子

調査・編集協力　小宮山克己（日本考古学協会々員）

奥村恭史　（　〃　）

事務局

調査事務局　浅科村教育委員会

教育長：柳澤哲郎

社会教育係　係　長：有賀喜二

書　記：高野吉章

（事務局）

第３節　発掘調査日誌

平成９年

６月28日(土)　雨。調査区域を現地に設定し、縄張りを行う。

７月１日(火)　晴れ。重機による表土掘削開始。

７月７日(月)　晴れ。グリッド杭打ち開始。

７月12日(土)　晴れ。発掘調査協力員への説明会。

７月13日(日)　晴れ。北半面の西側から調査開始。人力による表土掘削及び遺構確認作業。竪穴住居跡５軒を確認。第１号住居跡は覆土が無い。第４号住居跡から羽釜出土。

７月14日(月)　晴れ。調査区周囲の草刈り。調査区壁面精査。

７月15日(火)　晴れ。人力による表土掘削継続。表土は堅く、作業は困難。

７月16日(水)　曇り後晴れ。人力による表土掘削・遺構確認継続。

７月17日(木)　雨。出土遺物の洗浄。

７月18日(金)　晴れ。人力による表土掘削継続。昨日の雨で、遺構確認は容易になる。

７月19日(土)　晴れ。人力による表土掘削･遺構確認継続。さらに竪穴住居跡を確認(計10軒)、３棟の掘立建物跡を確認。

７月20日(日)　晴れ。第１～３号住居跡に土層観察用ベルトを設定し、遺構調査開始。調査区内の地形測量開始。

７月21日(月)　晴れ。地形測量図作成終了。遺構概要図作成開始。第４・５号住居跡の間に住居跡を確認し、第11号住居跡とする。第２・３号住居跡土層断面図作成。

７月22日(火)　晴れ。第２・３・11号住居跡土層ベルト除去。第９号住居跡調査開始。

７月23日(水)　晴れ。第１・２号掘立建物跡調査。第８～10号住居跡土層ベルト除去。

７月24日(木)　雨。遺物洗浄。

７月25日(金)　晴れ。第３号掘立建物跡調査。第６・８・９号住居跡土層ベルト除去。

７月26日(土)　曇り。第２号住居跡カマド調査。第１・３号住居跡完掘し、写真撮影後、平面実測開始。第４・５・11号住居跡土層断面図作成。

７月27日(日)　曇り。第６号住居跡完掘。第４号掘立建物跡調査開始。

７月28日(月)　曇り後雨。第７～９、４・５・11号住居跡、第４号掘立建物跡完掘。遺物洗浄。

７月29日(火)　曇り後雨。第８～10号住居跡の床面精査。遺物洗浄。

７月30日(水)～８月１日(金)　遺物洗浄。

８月２日(土)　晴れ後雨。第３号掘立建物跡、４・５・11号住居跡平面実測。遺物洗浄。

８月３日(日)　晴れ。遺構完掘写真撮影。平面実測。遺物注記。

８月４日(月)　晴れ。遺物注記。発掘器材の整備。

８月５日(火)～10日(日)　重機による埋め戻し。

８月11日(月)　晴れ。重機による南半面の表土掘削開始。遺構確認開始。

８月12日(火)　晴れ。重機による表土掘削、遺構確認継続。

８月13日(水)　曇り。重機による表土掘削、遺構確認継続。

8月14日(木)　曇り後晴れ。第12号住居跡調査開始。

8月15日(金)　曇り。第12号住居跡土層断面図作成。

8月16日(土)　曇り。遺物洗浄。

8月17日(日)　曇り後晴れ。第16号住居跡調査開始。第13～17号住居跡土層観察用ベルト設定。

8月18日(月)　晴れ。グリッド杭打ち。第16号住居跡土層断面図作成。

8月19日(火)　晴れ。第17号住居跡調査開始。第5号掘立建物跡調査開始。

8月20日(水)　晴れ。第5号掘立建物跡完掘。第1～3号土壙土層断面図作成。

8月21日(木)　晴れ。第17号住居跡から須恵器坏の完形品出土。第12～14号住居跡平面実測。

8月22日(金)　晴れ。遺構概要図作成。

8月23日(土)　雨後晴れ。遺物洗浄。

8月24日(日)　晴れ。第16号住居跡完掘。調査区内の地形測量。

8月25日(月)　晴れ。第13・17号住居跡の土層断面図を作成し、ベルト除去。第18号住居跡調査開始。

8月26日(火)　晴れ。第16号住居跡平面実測。第18号住居跡床面の焼土周辺精査。土を採取する。

8月27日(水)　晴れ。第18号住居跡の土層図を作成しベルト除去。第6号掘立建物跡調査。

8月28日(木)　晴れ。遺構確認作業を継続し、遺構概要図へ追加記入する。

8月29日(金)　晴れ。調査区南東部でピット群を確認するが、掘立建物跡としては認識できない。第15号住居跡の東側の焼土部分の調査開始。竪穴住居のカマドと思われたが、鍛冶炉の可能性が考えられ、覆土を採取する。

8月30日(土)　晴れ。第15号住居跡のベルト除去。第1～4号土壙調査。

8月31日(日)　晴れ。第6号掘立建物跡完掘。第19・20号住居跡調査。

9月1日(月)　晴れ曇り。第15号住居跡の焼土周辺の土を採取。第22号住居跡土層断面図作成。

9月2日(火)　晴れ。第20号住居跡調査。第21号住居跡ベルト除去。

9月3日(水)　晴れ後雨。第19号住居跡土層断面図を作成。第17・19号住居跡遺物出土写真撮影。

9月4日(木)　晴れ。第23号住居跡調査。第21号住居跡完掘。

9月5日(金)　晴れ。第17・20号住居跡土層断面図作成。

9月6日(土)　曇り。第15号住居跡ベルト除去。

9月7日(日)　晴れ。第17住居跡カマド調査。南東部のピット群調査。

9月8日(月)　晴れ。南東部のピット群調査継続。ピット群は掘立建物と認識できるものはない。

9月9日(火)　雨後晴れ。遺物洗浄。

9月10日(水)　晴れ。南東部のピット群調査継続。

9月11日(木)　晴れ。第20号住居跡ベルト除去。第23号住居跡から遺物多数出土。

9月12日(金)　曇り。第20号住居跡完掘。

9月13日(土)　晴れ。第23号住居跡ベルト除去。

9月14日(日)　曇り。遺跡見学会開催（午後）。約30名参加。

9月15日(月)　曇り。第7号掘立建物跡を確認し、調査開始。

9月16日(火)　曇り。第7号掘立建物跡調査継続。遺物洗浄。

９月17日(水)～19日(金)　遺物洗浄。

９月20日(土)　晴れ。遺構平面実測。遺物洗浄。

９月21日(日)　曇り。遺構平面実測終了。遺物洗浄。

９月22日(月)～26日(金)　遺物洗浄。発掘器材の片付け。

９月27日(土)　晴れ。発掘器材を撤出し、現地での発掘調査を終了する。

（宮沢・秀島）

第４節　調査の概要

試掘（範囲確認）調査の結果及び、造成工事の内容を考慮し、山裾が東の低地に張り出す斜面地を調査対象とした。

排土の関係から調査区域を分割し、南北に細長い調査区を設定した。第１期を北側、第２期を南側として調査を進めた。

調査に際しては、調査区域内に５ｍ×５ｍの間隔で測量基準杭を設け、杭の全てに第Ⅷ系座標を設置した。

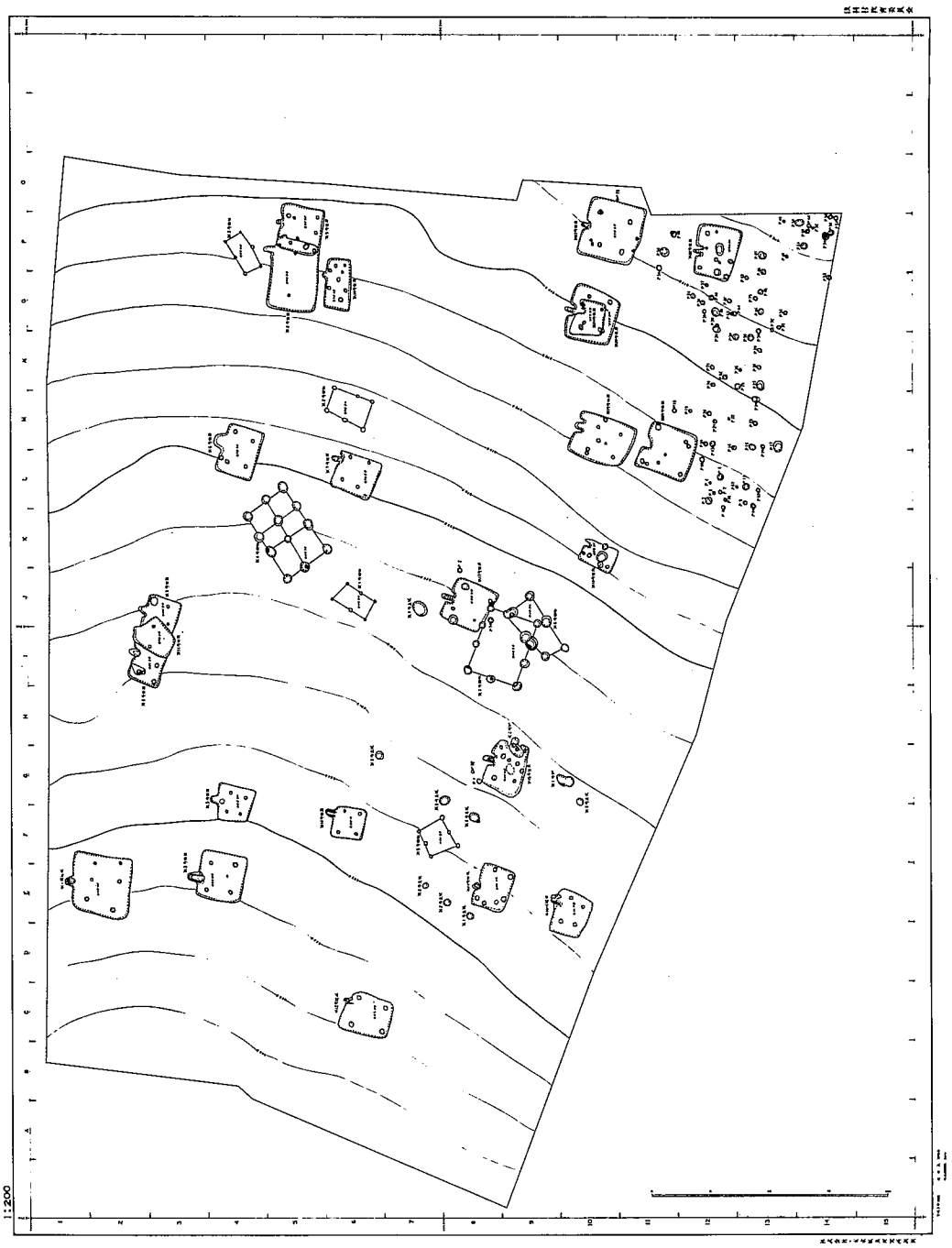
調査区域内の標高は、最高部で684ｍ、低地際で676.5ｍであり、比高差7.5ｍである。

調査区域内の基本層序は、表土に耕作土が分布し、それらを除去した段階で地山が確認される状態であり、層厚約30～50cmである。この地が耕作地として長く利用されてきたことを如実に物語っている。とりわけ、朝鮮人参栽培が行われ、その深い畝跡が、遺構確認を困難なものにすることもあった。耕作土の下は、上部から暗黄褐色の粘質土、白色粘土、岩盤（相浜層）の順に堆積しているが、調査区域全体で、この様な基本層序が確認できたわけではない。調査区の北西部を中心に、岩盤の露呈する深度は浅く、南東に行くに従って深くなる傾向にあった。また、暗黄褐色粘質土は、調査区の南側に広く分布し、この層の上面を東に向かって検出していくと、調査区の南東隅（Ｐ・Ｑ－12～14グリッド付近）では白色粘土が露呈する状況で、この白色粘土層は、東側の低地へと連続することが試掘調査で確認されている。また、調査区南西部は、耕作の畝跡が深く、地山の暗黄褐色粘質土が荒れた状態が広く確認された。

重機で耕作土を除去した後、人力で遺構確認を行ったが、乾燥時には全体が白くなり、降雨後はぬかるんで粘る土質のため、調査区全面を均一な条件で遺構確認するのは困難であった。従って、乾燥時には適時水を撒いてシートで覆った後に、人力で精査を行った。しかし、土の保湿条件が良好ならば、遺構確認は比較的容易な色調の土質である。

竪穴住居跡は、調査区全域に分布し、それらの間に掘立建物跡などが検出されている。また、調査区南端では、ピットが集中して分布する。試掘調査では、掘立建物の存在を予想したが、建物跡として認識できなかった。地形傾斜に併せて、直線的に並ぶ部分もあり、柵列の可能性が高いと考えられる。このピット群よりも南側は、谷に向かって傾斜しており、地形の変換点であることからも、柵列と理解する方が蓋然性があるように思える。いずれにせよ、特徴ある遺構分布の在り方を示す場所と言える。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡24軒、掘立建物跡７棟、土壙８基、ピット75基、



第４図　遺跡全体図（1/600）

生産関係遺構（鍛冶炉）２基が検出された。出土遺物は、60cm×35cm×20cmのコンテナに６箱で、その主体は、奈良・平安時代の土師器、須恵器である。こうした検出遺構や出土遺物から見て、古代の一定期間に営まれた集落という印象が強い遺跡である。また、縄文時代と思われる黒曜石の剥片、打製石斧の破片も見られた。

（岡田・小宮山）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

北佐久郡浅科村は、郡内の西方に位置し、北は北御牧村と小諸市、西と南は望月町、東と西は佐久市に隣接した総面積19.54㎢の小さい村である。地形的には中央部に粘性の強い土壌から成る平坦地が広がり、西には蓼科山塊に連なる尾根、北は御牧原台地がそびえ、南東には千曲川の河岸段丘が発達している。

千曲川は佐久平中央部で大きく蛇行し、善光寺平へ「Ｖ」字渓谷を形成し北流する。この西岸に広がる高位の平坦地が御牧原である。この台地は佐久平より150ｍの比高差がある。台地は緩やかな起伏の平坦地が広く展開し、東部が高く西及び北西に傾斜している。南西部は標高を減じて望月町との境にある瓜生坂を経て、蓼科山の北麓に連なる。

村の中央部は、粘性の強い土壌から成る平坦地が広がり、かつては水の少ない荒涼地であったが、近世に五朗兵衛用水が開鑿されるに及び、現在に至るまで穀倉地帯となっている。

村の中央部は、近世以降に開発が行われた地域であり、浅科村における原始・古代から中世に至る遺跡の多くは、蓼科山に連なる尾根上や御牧原台地、千曲川とその支流が形成する河岸段丘に多く分布する特徴がある。

今回発掘調査を実施した大平遺跡は、蓼科山塊の末端が、御牧原と合流する地点の手前、西から東へ突き出した舌状台地に立地し、南北両脇には山地を開析する沢、東には沼沢地が広がる。

第２節　歴史的環境

浅科村における遺跡は、千曲川と布施川流域の河岸段丘、或いは蓼科山塊の末端の尾根上とその裾野、及び御牧原台地上に分布している。特に布施川流域は縄文時代以降、中世に至る遺跡が確認されている。また、この流域が古東山道の推定地とされ、古くから人々の往来の場所でもあった。村中央の平坦地は近世以降に開発されたため、遺跡は極わずかである。

以下、時代を追って、遺跡の概要をまとめてみることにする。

１　縄文時代

現在のところ、浅科村における最古の文化は縄文時代にまで溯る。この時期の遺跡分布は村の東部の千曲川流域に偏在する傾向が窺える。

蓼科山北麓から流出する布施川は、漏斗状の地形を形成している。この中央部は、東山道途上の地点でもある。布施川が千曲川に合流する地域は、渓谷状を呈し、その右岸には発達した河岸段丘があり、そこに土合遺跡がある。以前から縄文時代中期の勝坂式・加曽利Ｅ式期の土器片が確認されていた。平成４年北陸新幹線建設工事に伴う発掘調査で、縄文時代後期の竪穴式住居跡が検出された。同時に、この付近の開発計画に伴う試掘（遺跡確認）調査では、縄文時代前期から後期の遺

物が広範囲に散布することが確認され、かなり大きな縄文時代集落の存在が明らかにされた。

この土合遺跡の対岸の御牧原台地南麓では、発掘調査が実施された遺跡は無いものの、中期の勝坂式・加曽利Ｅ式、後期の堀之内式の土器片が採集されている。塩名田地籍の中平・田中島遺跡からは、遺構は検出されていないものの、中期から後期の土器片が多量に出土している。

大平遺跡でも、わずかに縄文時代に属する石器が出土しており、蓼科山塊に連なる尾根などにも、遺跡が存在する可能性を示している。

2　弥生時代

弥生時代の遺跡は、分布調査によって11か所が確認されている。塩名田原、田中島、上の平、上屋敷、入の沢、明神平、大門先、天神平、須釜原などである。いずれも後期後葉の箱清水式期の時期に属する。この弥生文化の担い手は、前代の縄文時代とは隔絶し、遺跡の継続性は認められない。縄文時代終末期から弥生時代中期は、遺跡の空白期間となっている。

平成４・６年の発掘調査では、土合遺跡から後期の住居跡１軒検出され、平成６年度に調査された田中島遺跡からは方形周溝墓が３基検出されている。

3　古墳時代

平成４・６年度に発掘調査された砂原遺跡からは、地表下２ｍから古墳時代前・後期の集落遺跡が検出されている。古墳時代前期の遺跡は、弥生時代後期の遺跡と、分布や立地が重なる傾向が窺われ、継続性が強いと思われる。寺田遺跡からは、東海地方に出自のある「Ｓ」字状口縁台付甕形土器が検出され、当時の文化交流を示している。この遺跡は「古東山道」に面しており、東海系土器の伝播経路を辿る上でも興味深いと言えよう。

村内の古墳は千曲川の段丘面と布施川流域に多く築かれている。布施川右岸の土合１号墳からは円頭柄頭・銀象眼八窓倒卵形の鍔・馬具・金環・玉類が、対岸の久保畑古墳からも頭椎柄頭等が出土している。いずれも古墳時代後期に属する。これらは次代になって隆盛する望月の牧・須恵器生産等との関わりが想定される。

4　奈良・平安時代

奈良・平安時代になると、御牧原台地・八重原台地において須恵器の生産が本格化する。８世紀後半から窯跡の数が増え、９世紀に入るときわめて多くの窯が操業され、佐久地方一帯に須恵器の供給がなされるようになる。また、これらの台地上では、前代より設置された望月の牧が、信濃国最大の御牧となり、馬の逃亡を防いだとされる「野馬除け」が断続的に残っている。八幡地籍の八幡神社の高良（こうら）社、御牧原尾尻から出土した鉄鐘、古墳出土の副葬品は、望月の牧に経営参画した人々が渡来系氏族であった可能性を示している。

塩名田地籍の砂原遺跡からは、千曲川の洪水によって埋没した住居跡が、耕地とセットとして検出されている。また、古東山道に面した地域にある寺田遺跡では平安時代の竪穴住居跡が、土合遺跡でも試掘調査の結果、平安時代集落が確認されている。

今回発掘調査を実施した大平遺跡もこの時期に属し、竪穴住居跡や鍛冶関連遺構が検出された。

御牧原台地とその周辺は、牧の経営や須恵器の生産といった、奈良・平安時代の社会において特徴のある地域と言えよう。大平遺跡の集落は、他の遺跡とも密接な関連性の中で成立したものと推定される。発掘結果からは、前代の７世紀代の資料は認められないことから、８世紀中葉の奈良時代後期に突如として大平の地に村が営まれ、10世紀前半まで続いた集落と考えられる。その背景には、意図的な計画村落としての可能性が予測され、地域の中で、何らかの役割のために形成された集落であると考えられる。

５　中　　世

中世に入ると、佐久地方は日本の歴史の中へと巻き込まれてゆく。鎌倉時代の承久の乱では、小笠原長清が東山道の大将として、信濃の兵を率いて京都に攻め上ぼった。その当時の佐久武士の中に矢島次郎の名が知られる。この矢島氏の本貫が矢島地籍にあったと考えられている。大平遺跡の南方約200ｍの矢島地籍に矢嶋（矢島）城があるが、城跡と矢島氏との関連については後究の余地がある。矢嶋城は既に６回に亘る発掘調査が実施され、堀跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡等が検出され、出土した遺物から室町時代に属することが明らかにされている。

また、望月の牧の牧官から武士として成長した滋野氏は延徳３（1491）年、八幡神社の高良社を八幡宮として建立している。

６　近世以降

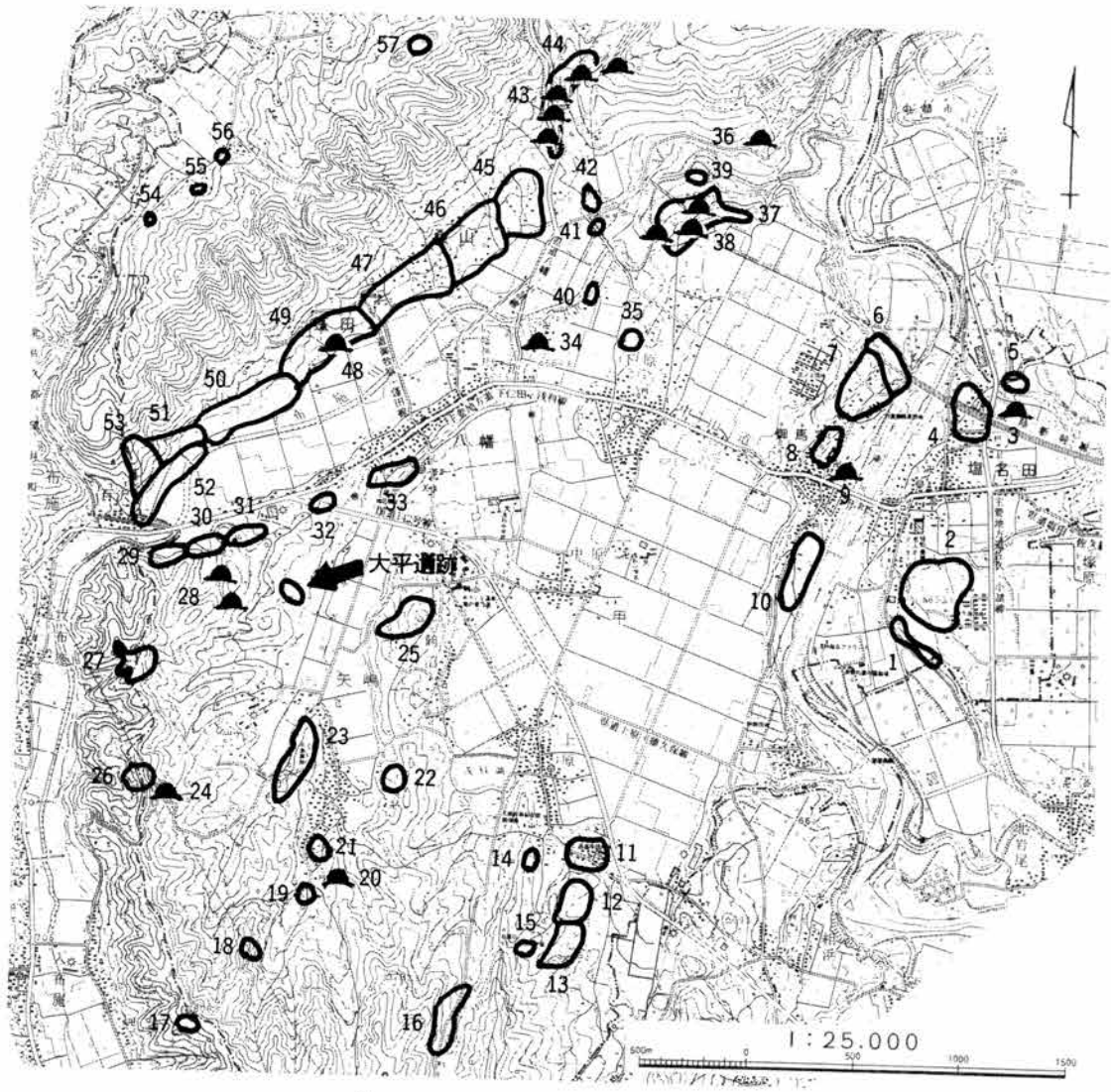
近世になると徳川幕府により中山道が整備され、塩名田や八幡などの宿場が設置された。大平遺跡周辺にも、古くは集落があったが、中山道の整備と八幡宿の設置に伴って、村が移動したと言われている。寛永３（1626）年には、小諸藩主から市川五郎兵衛が用水開鑿の許可を得て、「五郎兵衛用水」が開鑿された。この用水によって村の中央部が現在のような田園地帯へと変貌し、土地の生産性も飛躍的に高まった。長野県のなかでも有数の米所として現在に至っている。

幕末には矢島・桑山・蓬田・八幡・塩名田・御馬寄・市左衛門新田・五郎兵衛新田の八ケ村があったが、明治９年に市左衛門新田と塩名田が合併して塩名田村が成立した。明治22年には矢島・桑山・蓬田・八幡が南御牧村になり、塩名田村と御馬寄村が合併して中津村がそれぞれ誕生し、昭和30年１月15日、南御牧村・五郎兵衛新田・中津村の３ケ村が合併し、現在の浅科村が誕生した。

北に浅間山、南に蓼科山が見渡せることから、浅間の「浅」と蓼科の「科」をとって「浅科村」の村名とした。自然環境に恵まれた、田園情緒あふれる村である。

浅科村教育委員会では、平成９・10年度の２か年にわたり、村内の遺跡についての詳細分布調査を進めている。従来、浅科村で行われた考古学的な調査は、断片的に実施されたに過ぎなかった。遺跡詳細分布調査の成果が、浅科村の原始・古代の様子を叙述する上で、大いに期待されるところである。

（佐藤幸信）



第5図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

1	舟久保遺跡	13	打越窯址	25	権見山遺跡	37	土合遺跡	49	唐沢遺跡
2	塩名田遺跡	14	菖蒲沢窯址	26	細久保城跡	38	土合古墳群	50	中村遺跡
3	洞口遺跡	15	前林窯址	27	虚空蔵城跡	39	久保畑古墳跡	51	松ケ沢遺跡
4	砂原遺跡	16	中荻久保遺跡	28	兜山古墳	40	山の田遺跡	52	寺田遺跡
5	五領城遺跡	17	布施氏城跡	29	砂山遺跡	41	駒込遺跡	53	西の平遺跡
6	中平遺跡	18	上山の神塚	30	島久保遺跡	42	山梨遺跡	54	尾尻遺跡
7	田中島遺跡	19	雨の宮遺跡	31	吹上遺跡	43	入の沢古墳群	55	須窯原遺跡
8	上の平遺跡	20	宮脇古墳	32	神明遺跡	44	入の沢遺跡	56	柳沢窯址
9	上平の塚古墳	21	上屋敷遺跡	33	宿遺跡	45	明神平遺跡	57	富士見塚
10	神平遺跡	22	天徳城跡	34	経塚古墳	46	天神平遺跡	**58**	**大平遺跡**
11	西連寺遺跡	23	矢嶋城跡	35	植木辺窯址	47	水地村遺跡		
12	一本松遺跡	24	茨尾根古墳	36	火の雨塚古墳	48	蓬田唐沢古墳		

第1表　周辺遺跡地名表

第Ⅲ章　浅科村における考古学的調査の歩み

第１節　概　　要

浅科村には、原始・古代からの遺跡が多く眠っている。それらの多くは、地下に埋まった状態で保存されているものも多く、考古学的に見た場合、地域の歴史を叙述するには未だまとまった状況ではないかもしれない。しかし、近年は開発事業が地下の遺跡に及ぶことも多くなり、辛うじて発掘調査が行われた遺跡がある一方では、何等記録も残されないまま失われた文化財もあったと思われる。本章では過去の発掘調査の成果を概括しておくことも必要であるという観点から、刊行された報告書に準じ、調査年次の順を追ってまとめてみたい。

第２節　発掘調査の歩み

(1)〈土合（どあい）１号古墳〉

＊調査年月：昭和44年５月

＊調査原因：学術調査

①調査の経緯と概要　浅科村の教育委員会と文化財保護審議委員会では、村内の文化財調査を行い、文化財の村指定を計画していた当時、その候補に土合１号墳を挙げた。この古墳は明治32年に地元有志によって発掘が行われ、出土品の大半は帝室博物館（現在の東京国立博物館）へ寄託された。古墳の保存状態が悪化しているため、石室の清掃を行って実測図を作成し、村の史跡に指定して保存に努めることとした。

②総　括　石室内部の清掃の結果、石室には羨道がなく、今まで羨道と思われていた部分は閉塞石の部分であった。石室の平面形は中央部が膨らむ胴張である。中央より奥で鉄平石による仕切りが設けられ、前室と奥室とに区切られ、奥室の床は一段高くなる。どちらも基底部には玉石が敷き詰められ、木棺釘、武具、須恵器が、奥室からは玉類が出土した。

(2)〈矢嶋（やしま）城跡―第１次調査―〉

＊調査年月：昭和59年７月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　矢嶋城跡の緊急発掘調査は、ここ数年来の大雨及び冬季間における凍上がりの影響、地域経済の変貌から畑地の荒廃が進み、城跡のある土地そのものが自然崩壊しつつある状況であった。このことから、緊急に発掘調査を実施し、矢嶋城跡の規模、遺構・遺物の状態を確認するために調査を実施した。

②総　括　矢嶋城跡の構造は、輪郭式で単純な築城形式であり、主郭の虎口の形態、出土遺物か

ら、比較的古いタイプの城と考えられる。年代的には南北朝から室町時代の早い時期と思われ、戦国時代には使われていないと考えられる。城は築城に際しては、最新の技術を用いるものであり、新たな技術が伝わればそれを用いるといった具合に、備えに関しては形式的に流動的な姿勢をとる傾向にある。矢嶋城跡にはそういった痕跡が認められない。但し、築城に際しては、舌状台地に占地するものの、梯郭式を用いれば比較的簡単で済むところを、時間をかけて大土木工事を行い、輪郭式に仕立てている。また、現在の発掘状況からは、戦闘に使われた痕跡が見られない。築城の目的は、街道の抑え等のような戦術的なものでなく、非常時に矢島氏を守ることが主目的と考えられる。

(3)〈矢嶋城跡―第2次調査―（五朗兵衛用水)〉

＊調査年月：昭和61年7月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　浅科村矢島区は、昭和61年度に農道新設工事を計画、施工することとなった。この計画路線には、矢嶋城跡と寛永年間に市川五朗兵衛真親が中心となって、望月町春日本郷から延長5里余りを開鑿した「五朗兵衛用水」がある。農道の路線上の当たる矢嶋城跡腰曲輪部に位置する用水路を利用、施工する計画であるため、緊急調査を実施し、記録保存することになった。

②総　括　莫大な労働力と資金を投じて五朗兵衛新田村は成立した。全体を考察すると、これほどの苦労をしてまでも村をおこした市川五朗兵衛他の人々のバイタリティは、現代人も見習わなくてはならない。また、技術的にも現代と遜色のない工事を行っている。矢嶋城跡内の模様は、この部分は用水全域の中でも特に緩斜面（ほぼ水平）であり、測量では特に注意を要する部分であった。発掘の結果、最新の注意を払って工事に取り掛かっていたことが窺われる。また、城域内は崩壊の危険性を常に持ち、特に最北端の土手の厚みは芸術的な程である。また、腰曲輪と考えていたこの部分は、五朗兵衛用水の跡地であり、城跡の曲輪ではないことが判明した。

(4)〈矢嶋城跡―第3次調査―〉

＊調査年月：昭和62年7月

＊調査原因：学術調査

①調査の経緯と概要　1984年の第1次トレンチ調査の結果、第2曲輪から建築遺構の存在を示すピット（方形の柱穴）が多数検出されたため、城跡内の建物の確認や、城跡の全容解明を目的に実施した。

②総　括　第2曲輪内からは、竪穴状遺構が2基検出され、その壁面には「のみ」の痕跡が確認された。出土遺物は少量で、時代を決定できる遺物は見られなかった。また、竪穴状遺構の内部における火の使用は見られなかった。295基の柱穴が認められたが、建物跡として配列を確認できたのは1棟だけである。礎石となるような石の検出も見られなかった。この発掘結果から、城跡内には生

活遺物が少なく、井戸跡も見られないことから、中世特有の根小屋式城郭の可能性が高い。検出された柱穴などの遺構は、城跡に伴う倉庫群であった可能性が考えられる。また、遺物の出土状況から、一度も戦乱に使われること無く、平和なうちに廃城になり、武器や生活用具は別なところに移されたと考えられる。

(5)〈矢嶋城跡―第4次調査―〉

＊調査年月：昭和63年7月

＊調査原因：学術調査

①調査の経緯と概要　主郭部分の状態を確認するために実施した調査である。調査に際しては、主郭内の遺構・遺物の確認はもとより、主郭の周囲には土塁状の痕跡が認められていたが、その基部の確認と、第1次調査で確認した主郭北側の堀跡が、主郭を取り巻いて南側に巡るのかを確認することを主な目的とし、トレンチ法による調査を実施した。

②総　括　土層断面の観察から、主郭の南北端で土塁基部の様相が観察された。東側では土塁の痕跡が確認されなかった。これは、東側に虎口が存在する可能性を示している。また、柱穴も多数検出され、複数の建物の存在を窺わせると同時に、時間的な幅が想定される。これに対応して、出土遺物にも時間的な幅が認められ、15世紀を中心に、16世紀前半という年代観が与えられる。

(6)〈矢嶋城跡―第5次調査―〉

＊調査年月：平成4年7月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　村道2－8号線が、矢嶋城跡の主郭南側を貫通する計画となったため、緊急発掘を実施するに至った。

②総　括　主郭の南側部分は、第4次調査で一部にトレンチを設定し、堀跡は確認されなかったが、今回面的な調査を実施したところ、全体に深まる様子で、東側に堀跡が検出された。これは竪堀に類するもので、主郭直下の第2曲輪を分かつ目的の堀と考えられる。この堀の南側では多数の柱穴が検出され、時間的な幅が窺われる。出土遺物は少量であったが、土師質土器の皿・土鍋に混じって青磁碗の破片も出土した。

(7)〈砂原（すなはら）遺跡〉

＊調査年月：平成4年11月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　平成3年、村の東部、大字塩名田字砂原地区に、2市1群による北佐久農業共済組合庁舎の移転計画が表面化した。この地区には砂原遺跡が存在することから、県教育委員会、

共済組合、村教育委員会の三者で協議の結果、記録保存のための発掘調査実施に至った。

②総　括　千曲川の洪水によって地中深く埋没した砂原遺跡の調査は、狭い調査面積ながらも、村では始めての集落遺跡調査となった。古墳時代前期の住居跡からは、土器類を中心として生活用具が出土した。平安時代では、植物珪酸体の分析から、陸稲耕作が行われていたことが明らかにされた。現在の佐久地方では陸稲は見られないことからも、興味深い事実と言えよう。

(8)〈寺田（てらだ）遺跡〉

＊調査年月：平成５年７月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　浅科村大字蓬田字寺田地区は、村内でも遺跡が密集する地域である。ここに民間開発が行われることとなり、原因者と県教育委員会、村教育委員会の三者で協議を行い、記録保存のための発掘調査実施に至った。浅科村での民間開発に起因する緊急調査の初例である。

②総　括　古墳時代前期では、遺物が数点出土したのみであるが、遺跡の立地する布施川流域には遺跡が連綿と分布しており、今後更にこの時期の遺跡が検出される可能性が高い。出土土器の中には、「Ｓ」字状口縁台付甕形土器の破片があり、当時の交流を知る上で貴重な資料である。

平安時代では９世紀から10世紀にかけての住居跡が５軒検出された。一時期に１～２軒の住居で構成される小集落と思われる。出土須恵器には、窯傷のある資料も見られ、御牧原台地での須恵器生産との関わりも想定される。

中世では井戸跡、竪穴状遺構、柵列が検出された。昔から「殿屋敷」と呼ばれる場所で、武田信玄の弟信繁の３男、義勝（望月氏の養子となり、長篠の戦いで戦死）の屋敷跡との伝承がある。歴史上の人物との直接的関連は不明だが、屋敷地は段状に広がっていると推定される。

(9)〈御馬寄古城跡（みまよせこじょうあと）〉

＊調査年月：平成５年９月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　御馬寄古城跡から十二川原地区の下水道処理場に至る村道の改良工事が具体化した。御馬寄古城跡は中世城郭あるいは牧監居館跡とも推定される場所であり、村と村教育委員会、村文化財保護委員会で協議し、記録保存のための発掘調査実施に至った。

②総　括　今回の調査地点は、御馬寄古城跡の伝承地であった。調査の結果は城郭に関連する遺構の検出は見られなかった。しかし、中世の竪穴状遺構、土鍋などが出土し、また、城郭関連の地名、以前には土塁があったとの記録、千曲川対岸の耳取城との関係などから、御馬寄古城の存在を否定するものではない。調査では、縄文時代の土器・石器や、弥生時代終末期の土器なども見られた。

⑽〈矢嶋城跡―第6次調査―〉

＊調査年月：平成5年10月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　平成4年、村道2－8号線改良工事に伴って発掘調査を実施したが、この路線に変更があり、矢嶋城跡の主郭の南側半分を調査することになった。

②総　括　主郭部分は、昭和63年に実施した第4次調査で、土塁の存在が確認されていたが、今回は面的な調査によって土塁を確認した。同時に、竪穴状遺構、石組の土壙、多数のピットが検出され、陶磁器、土器、鉄器等の遺物が出土した。他の曲輪と異なり、多くの遺構・遺物から、数時期に渡って使用されたと考えられるが、土塁裾端に作られた石組の土壙は、明らかに城の機能とは異なり、廃城後にも利用された可能性が高い。

⑾〈入の沢遺跡〉

＊調査年月：平成8年6月

＊調査原因：緊急調査

①調査の経緯と概要　村の北部、悪地山地区の農道整備にともなって、事前の発掘調査を実施した。

②総　括　調査面積が狭いことから、トレンチ法で調査を行った。ピット2基と縄文土器の破片がわずかに出土した程度である。しかし、周辺には黒曜石の破片が多量に散布する地点や、入の沢古墳、古代の土器が出土した場所等、遺跡が存在することは事実であり、今後の調査に期待される遺跡である。

第3節　ま　と　め

以上、浅科村に於ける発掘調査の履歴を、刊行された報告書に基づいてまとめてみた。

土合1号古墳の発掘調査についての報告が最初である。この報告以前にも、塩名田の舟久保団地造成の時に、縄文時代の遺跡が調査されたと報じられているが、本稿では触れられ無かった。当時の調査記録や出土遺物の行方等の追跡に関しては後究を待ちたい。次いで、矢嶋城跡の発掘調査が継続的に行われてきた。矢嶋城跡の調査は、浅科村に於ける考古学的調査の歩みの主体を成すとも言えるものである。矢嶋城跡の発掘調査は第6次にも及び、当初は学術目的であったものが、緊急調査へと移行している。発掘調査が最初に実施された昭和59年当時、中世城郭の発掘調査は、長野県内でも数例しか行われておらず、城郭研究における考古学の果たす役割の大きいことを提起したものとして注目されよう。現在、矢嶋城跡は、主郭の南半分と第2曲輪の南側は道路建設によって消失し、元の形態はすっかり失われてしまった。長年に亘った発掘調査の総括と、成果の活用が図られるべき時期に来ていると言えよう。

村では、砂原遺跡の発掘調査以後、開発行為に伴う発掘調査が急増してきた。民間業者による開

発に関連した発掘調査としては、寺田遺跡の調査が最初である。今後、都市化が進むにつれ、民間開発と埋蔵文化財の保護との調整や協議が増加することが予想される。

また、入の沢遺跡のように、最たる成果が得られなかったとは言え、面積の大小や検出遺構・出土遺物の多寡で、発掘調査の是非が問われるのではなく、周知の埋蔵文化財包蔵地内で行われる開発行為に先だって発掘調査が行われたことは、浅科村での文化財保護行政の在り方が定着してきたことを示している。

浅科村の発掘調査歴を簡単にまとめたが、調査された遺跡については、そのつど報告書がまとめられている。開発に関連して実施される緊急調査の場合、ともすると現地での発掘調査を終了させることが優先し、調査記録のまとめが大幅に遅れたり、概要報告のみで終始するケースが多いといわれている。本稿でまとめた通り、浅科村での発掘調査に関しては、調査の記録保存としての役割が果たされており、大いに評価されよう。

このほか、近年の北陸新幹線建設等に関連して長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査も行われている。

近年の様々な開発によって生活環境が変化する中で、遺跡の保護・保存と活用が、現実社会との利害関係に絡む状況が予想されることから、浅科村教育委員会では平成９・10年度の２か年に亘って、村内遺跡の詳細分布調査が実施されている。この調査は、表面調査を主体とするものの、遺跡の所在地、時代、範囲が明確にされることにより、適切な保護が行われることになろう。一方、遺跡に関する情報量が飛躍的に増えることによって、記録（文字）に記されなかった浅科村の歴史解明に大きく寄与することであろう。その成果には大いに期待される。

遺跡は土地に残された貴重な文化遺産である。地域の歴史を明らかにする上で、欠くことのできないものであり、後世に残していくことは我々の責務である。

（佐藤幸信）

〈参考文献〉

浅科村文化財調査報告書
第１集　『土合１号墳の調査』（1969年）
第２集　『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書（1985年）
第３集　『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開した用水路の調査（1987年）
第４集　『矢嶋城跡』第２曲輪部の建築遺構（1988年）
第５集　『矢嶋城跡』主郭部の試掘調査（1991年）
第６集　『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村（1993年）
第７・８集　『矢嶋城跡』村道２－８号線道路改良工事に伴う発掘調査（1996年）
第９集　『御馬寄古城跡』村道北―50号線道路改良工事に伴う発掘調査（1996年）
第10集　『寺田遺跡』古東山道・中仙道沿いの村（1995年）
第11集　『入の沢遺跡』村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査（1997年）

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

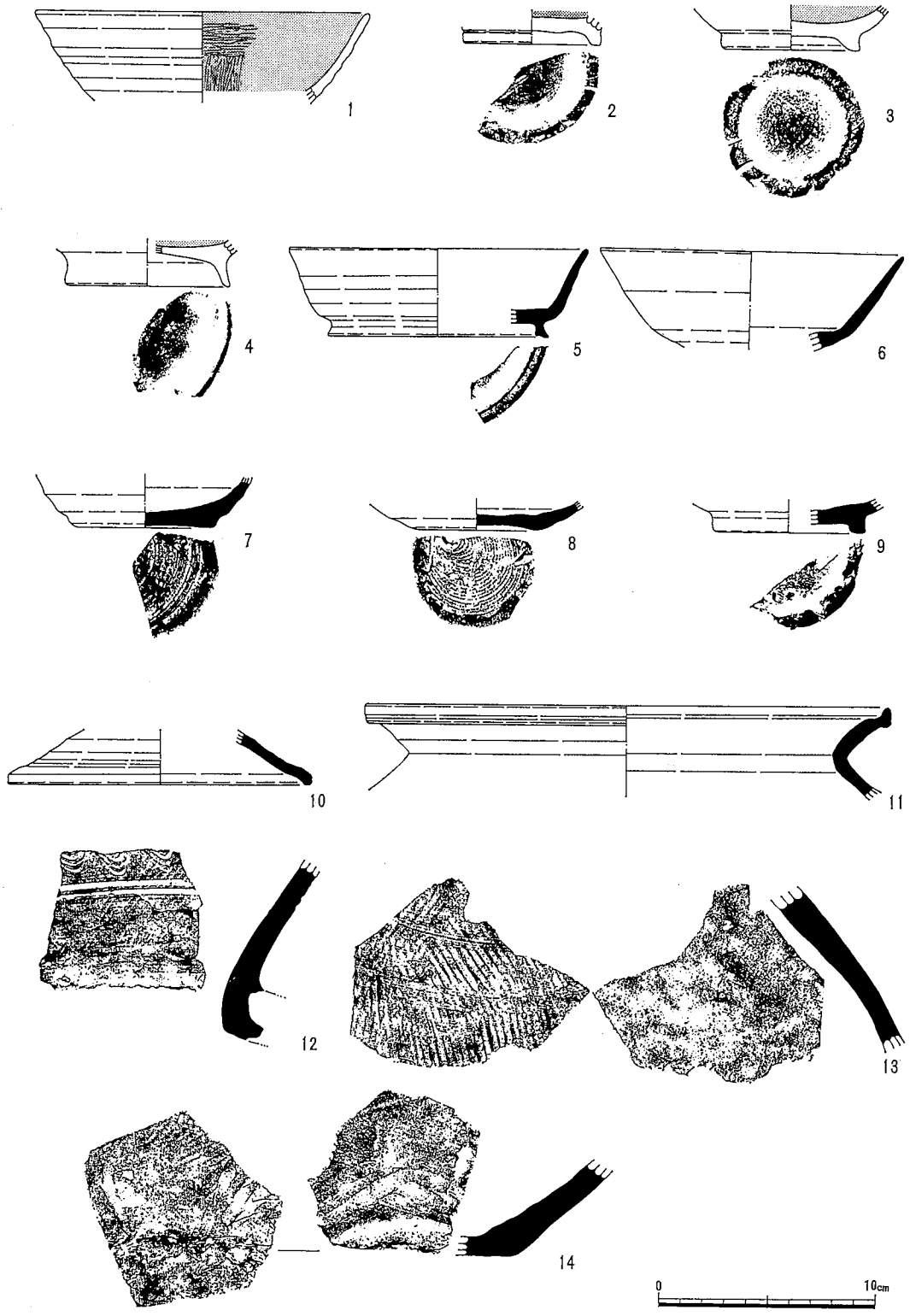
第１節　遺構外出土の遺物

表面採集資料の多くは、土師器、須恵器の破片で、特に須恵器は甕の破片が多く見られた。量的には多いが、図示可能な資料は少ない。表採資料の多くは摩耗が著しい傾向である。発掘調査で検出された遺構の年代と同一時期の資料が大部分で、近世以降の陶磁器を若干含んだ内容である。

また、表土層出土資料とは言え、出土地点によっては、掘立建物跡に関連する資料も含まれると思われるが、ここでは遺構の覆土以外から出土した資料（表採資料、表土層、排土等）を一括して扱うこととした。なお、表土層出土資料が遺構出土資料と接合したものについては、遺構出土資料として扱った。

第６図１は土師器の坏の口縁部破片である。右回転のロクロ成形で、外面には水挽痕が顕著に見られる。推定口径約15.6cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。外面は暗橙褐色、内面は黒色処理が施される、内面の口縁部付近は横方向、底部に向かって縦方向のミガキが施され、器面は滑沢を有する。胎土に微砂粒、角閃石を含む。表採資料。２～４は土師器高台付坏の底部破片である。２は推定底径6.4cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。高台は台形を呈し、外底部の高台脇はナゾリが施される。体部と高台の接する外面にはヘラ状工具による沈線が巡る。暗橙褐色を呈し、内面は黒色処理される。胎土に微砂粒、石英、角閃石を多く含み、器面は荒れている。３は推定底径6.4cmを測る。高台は内削ぎ状を呈し、外底部の高台脇はナゾリが施される。暗橙褐色を呈し、内面は黒色処理される。胎土に微砂粒、石英、角閃石を多く含み、器面は荒れている。表採資料。４は推定底径7.6cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。高台は「ハ」の字に直線的に開き、高台高は約1.1cmと高い。外底部には回転糸切痕が認められる。暗赤褐色を呈し、内面は黒色処理され、ミガキが施される。胎土に微砂粒、石英、角閃石を多く含み、外面は荒れている。

５は須恵器の高台付坏である。推定で口径14cm、器高4.1cm、底径10.4cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。右回転のロクロ成形で、外底部の高台脇はナゾリが施される。体部は直線的で、口縁は先細る。高台は「ハ」の字に開き、外方がわずかに突出する。内面の体部と底部の境には沈線が巡る。暗青灰色を呈し、微砂粒を多く含む。Ｉ－３グリッド出土。６は須恵器の坏である。推定で口径14cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。右回転のロクロ成形で、腰部が張り、体部は直線的に立上がる。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。Ｌ－６グリッド出土。７は須恵器坏の底部破片である。推定で底径6.2cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。体部には水挽痕が顕著である。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。８は須恵器坏の底部破片である。推定で底径5.6cmを測り、実測部分の残存率は約70％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。表採資料。９は須恵器高台付坏の底部破片である。推定で底径７cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。右回転のロクロ成形で、高台は台形を呈し、外



第６図　遺構外出土遺物（1/3）

底面には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。

10は須恵器の蓋と思われる。推定で口径14cmを測り、実測部分の残存率は約７％である。右回転のロクロ成形で、口縁の返りは浅い。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。

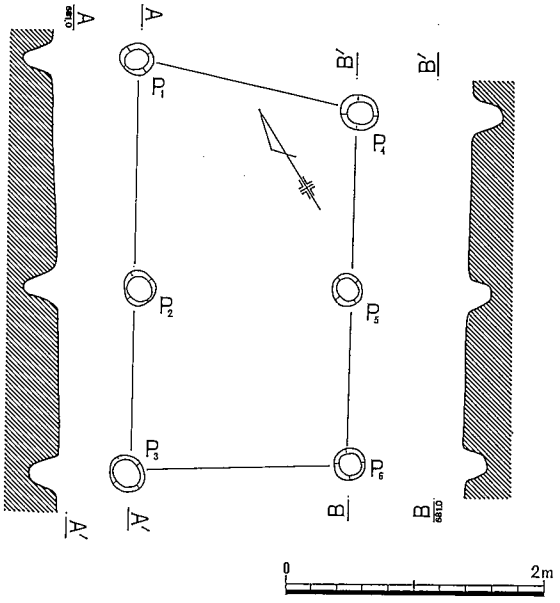
11は須恵器壺の口縁部破片と思われ、推定で口径24.6cmを測る。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は直立して縁帯を成す。暗青灰色を呈し、口縁部分は自然釉により光沢を持つ。胎土に小石、微砂粒を多く含む。Ｋ－９グリッド出土。

12～14は須恵器甕の破片である。12は口縁を欠損する。頸部接合部分で欠損する。外面には叩きの後に櫛描波状文、平行沈線を施す。黒褐色から暗青灰色を呈し、外面は自然釉により光沢を持つ。胎土に小石、微砂粒を多く含む。Ｋ－10グリッド出土。13は肩部破片と思われる。外面には平行叩きが見られ、一部に沈線が横方向に巡る。内面には指ナデ調整痕が認められる。暗青灰色を呈し、胎土に小石、微砂粒を多く含む。Ｋ－10グリッド出土。14は底部破片で、外面には平行叩きが見られ、内面には指ナデ調整痕が認められる。外底部にはナデ調整が施され平滑である。暗青灰色を呈し、外面は自然釉により光沢を持つ。胎土に小石、微砂粒を多く含む。Ｍ－12グリッド出土。

第２節　掘立建物跡

〈第１号掘立建物跡〉（第７図）

調査区の中央部、Ｊ－６グリッドで検出された。第４号掘立建物の南側約３ｍに位置する。２間×１間の矩形を呈する掘立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行でP_1－1.8ｍ－P_2、P_2－1.5ｍ－P_3、P_4－1.48ｍ－P_5、P_5－1.4ｍ－P_6、梁間でP_1－1.8ｍ－P_4、P_2－1.65ｍ－P_5、P_3－1.8ｍ－P_6を測る。主軸方向はＮ－32°－Ｅである。

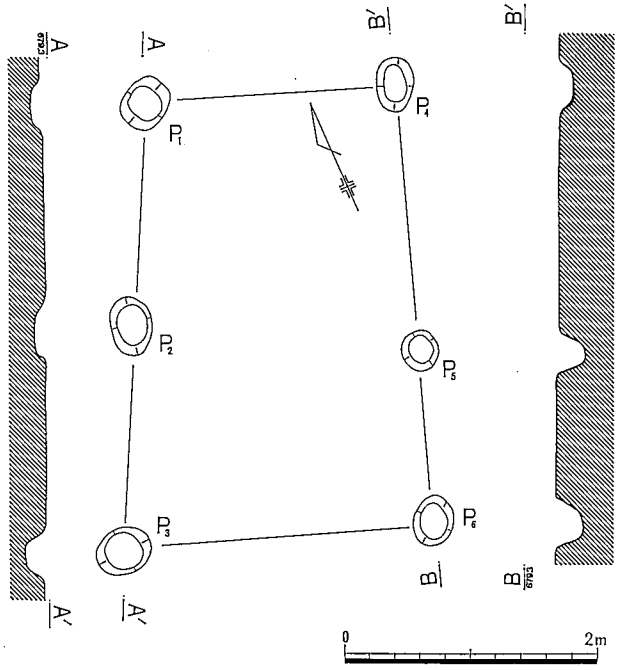


第７図　第１号掘立建物跡実測図（1/60）

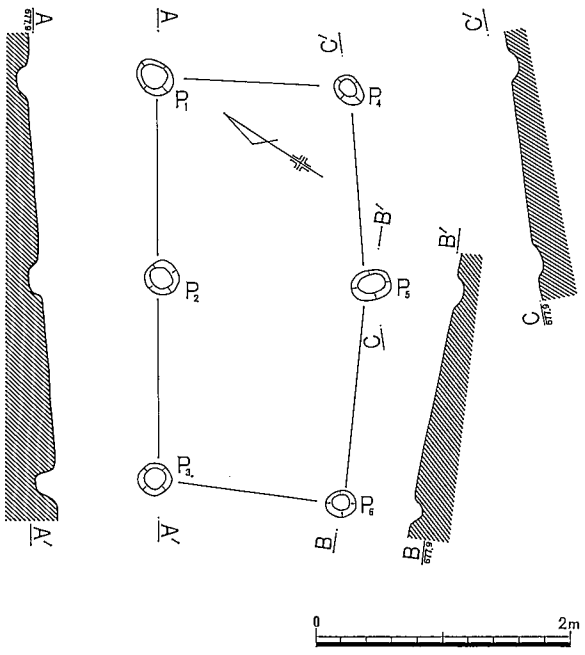
各柱穴の規模は、P_1は36cm×26cm、深さ27cmを測る。P_2は27cm×27cm、深さ28cmを測る。P_3は30cm×27cm、深さ25cmを測る。P_4は31cm×28cm、深さ35cmを測る。P_5は27cm×24cm、深さ21cmを測る。P_6は25cm×24cm、深さ17cmを測る。西側の桁行の方がわずかに長く、P_2とP_5がわずかに内側に位置するのが特徴である。いずれの柱穴も、岩盤を掘り込んでいた。出土遺物は見られなかった。

〈第２号掘立建物跡〉（第８図）

調査区の東寄り、Ｍ･Ｎ－６グリッドで検出された。第７号住居跡の東側２ｍに位置する。２間×１間の矩形を呈する掘立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行でP_1－1.75ｍ－P_2、P_2－



第８図　第２号掘立建物跡実測図（1/60）



第９図　第３号掘立建物跡実測図（1/60）

1.75m－P_3、P_4－2.15m－P_5、P_5－1.35m－P_6、梁間でP_1－２m－P_4、P_2－2.3m－P_5、P_3－2.5m－P_6を測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅである。

各柱穴の規模は、P_1は43cm×35cm、深さ８cmを測る。P_2は46cm×33cm、深さ９cmを測る。P_3は44cm×37cm、深さ９cmを測る。P_4は44cm×32cm、深さ12cmを測る。P_5は31cm×29cm、深さ24cmを測る。P_6は40cm×32cm、深さ25cmを測る。北側の梁間が短く、東側の桁行のP_4－P_5の間隔が短い。いずれの柱穴も、岩盤を掘り込んでいた。出土遺物は見られなかった。

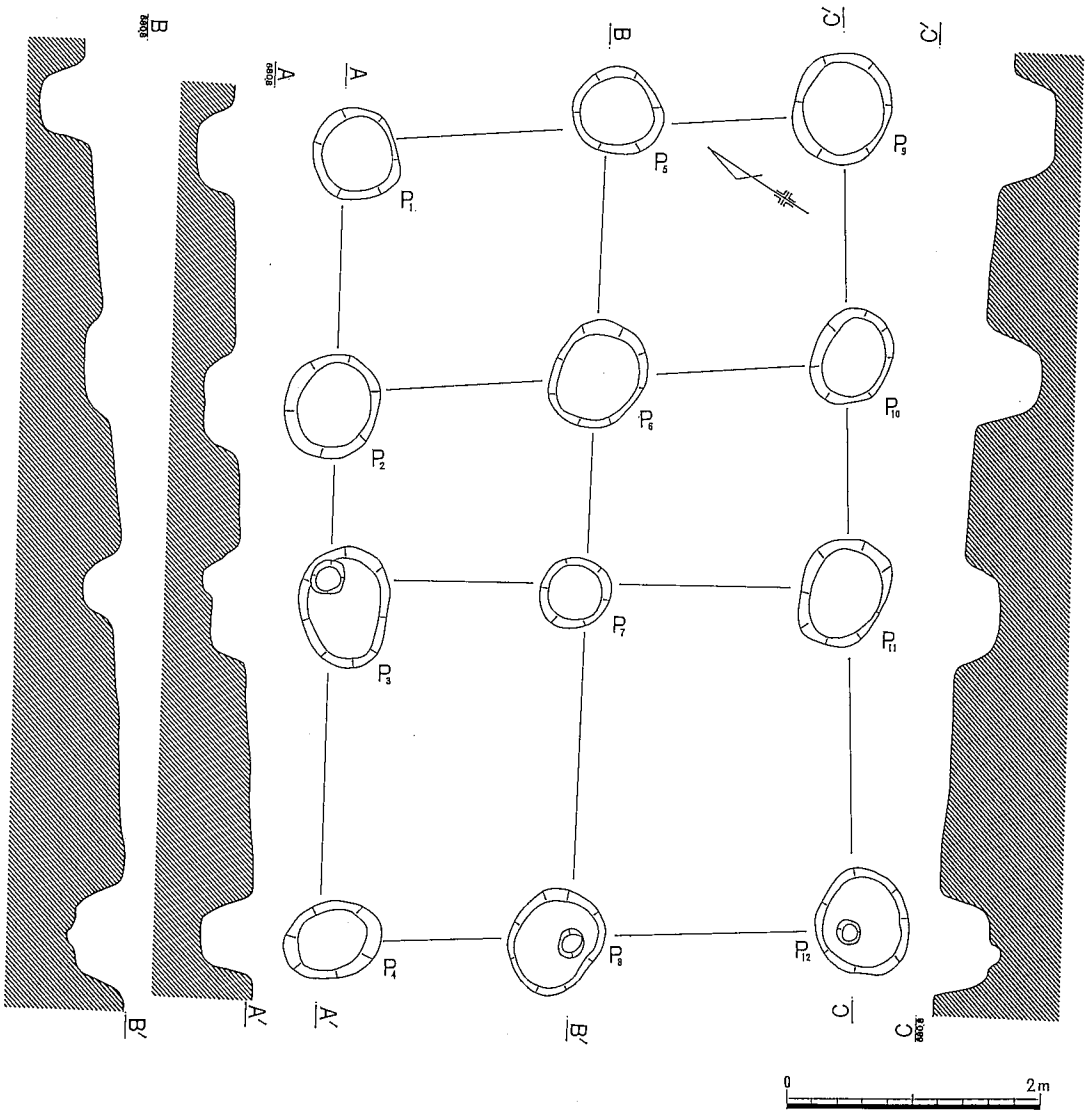
〈第３号掘立建物跡〉（第９図）

調査区の北東部、Ｏ・Ｐ－４グリッドで検出された。２間×１間の矩形を呈する掘立建物跡である。柱穴間の距離(芯－芯)は桁行でP_1－1.6m－P_2、P_2－1.6m－P_3、P_4－1.6m－P_5、P_5－1.75m－P_6、梁間でP_1－1.5m－P_4、P_2－1.7m－P_5、P_3－1.5m－P_6を測る。主軸方向はＮ－59°－Ｅである。

各柱穴の規模は、P_1は31cm×28cm、深さ９cmを測る。P_2は27cm×27cm、深さ９cmを測る。P_3は26cm×25cm、深さ12cmを測る。P_4は25cm×22cm、深さ７cmを測る。P_5は35cm×24cm、深さ７cmを測る。P_6は25cm×23cm、深さ８cmを測る。P_5がわずかに外側に位置している。出土遺物は見られなかった。

〈第４号掘立建物跡〉（第10図）

調査区の中央よりわずかに東側、Ｊ・Ｋ－４・５、Ｋ－６グリッドで検出された。３間×２間の矩形を呈する総柱の掘立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行でP_1－2.1m－P_2、P_2－1.7m－P_3、P_3－2.7m－P_4、P_5－2.1m－P_6、P_6－1.7m－P_7、P_7－2.3m－P_8、P_9－２m－P_{10}、P_{10}－1.9m－P_{11}、P_{11}－2.7m－P_{12}。梁間でP_1－2.2m－P_5－1.8m－P_9、P_2－2.1m－P_6－２m－P_{10}、P_3－1.85m－P_7－2.1m－



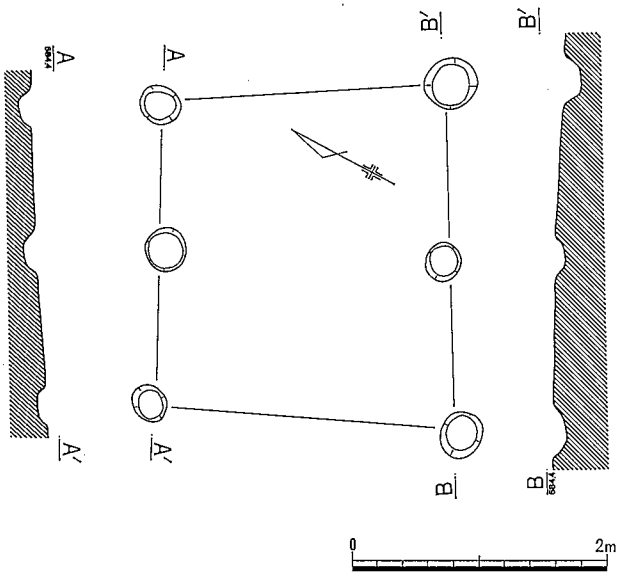
第10図　第４号掘立建物跡実測図（1/60）

P_{11}、P_4－1.9m－P_8－2.5m－P_{12}を測る。主軸方向はN－55°－Eである。

各柱穴の規模は、P_1は73cm×67cm、深さ29cmを測る。P_2は82cm×76cm、深さ31cmを測る。P_3は96cm×71cm、深さ31cmを測る。P_4は78cm×60cm、深さ41cmを測る。P_5は72cm×70cm、深さ38cmを測る。P_6は75cm×72cm、深さ16cmを測る。P_7は58cm×54cm、深さ25cmを測る。P_8は83cm×70cm、深さcmを測る。P_9は89cm×76cm、深さ43cmを測る。P_{10}は78cm×62cm、深さ50cmを測る。P_{11}は88cm×70cm、深さ34cmを測る。P_{12}は82cm×74cm、深さ40cmを測る。$P_{3\cdot8\cdot12}$の底面には、柱痕部と思われる深まりが確認された。出土遺物はP_{12}から、須恵器の甕、土師器の甕の砕片が見られた。

〈第５号掘立建物跡〉（第11図）

調査区の中央よりわずかに西寄り、Ｆ－７・８グリッドで検出された。２間×１間の矩形を呈する掘



第11図　第５号掘立建物跡実測図（1/60）

立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行でP_1－1.15m－P_2、P_2－1.2m－P_3、P_4－1.4m－P_5、P_5－1.35m－P_6、梁間でP_1－2.4m－P_4、P_2－2.2m－P_5、P_3－2.5m－P_6を測る。主軸方向はN－64°－Eである。

各柱穴の規模は、P_1は32cm×30cm、深さ７cmを測る。P_2は34cm×32cm、深さ９cmを測る。P_3は29cm×26cm、深さ８cmを測る。P_4は42cm×39cm、深さ14cmを測る。P_5は31cm×28cm、深さ９cmを測る。P_6は37cm×33cm、深さ11cmを測る。P_2とP_5がわずかに内側に位置する。出土遺物は見られなかった。

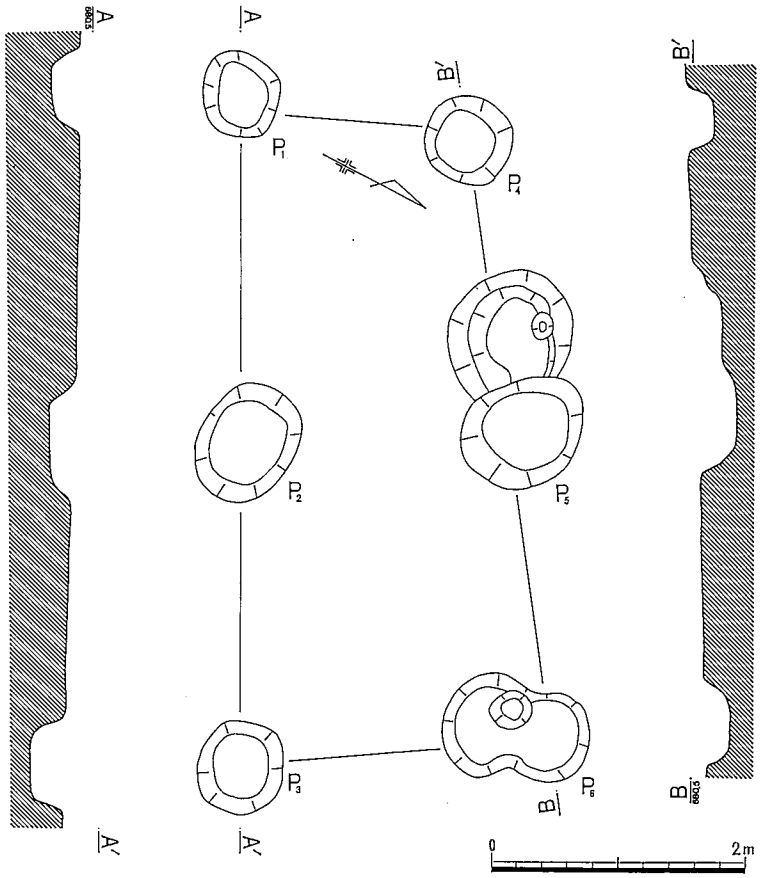
〈第６号掘立建物跡〉（第12図）

調査区の中央よりわずかに南寄り、Ⅰ・Ｊ－９・10で検出された。２間×１間の矩形を呈する掘立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行でP_1－2.7m－P_2、P_2－2.7m－P_3、P_4－2.4m－P_5、P_5－2.4m－P_6、梁間でP_1－1.8m－P_4、P_2－2.2m－P_5、P_3－2.4m－P_6を測る。主軸方向はN－55°－Eである。P_1は68cm×60cm、深さ20cmを測る。P_2は97cm×77cm、深さ19cmを測る。P_3は74cm×68cm、深さ25cmを測る。南側の一部はカクランを受けている。P_4は71cm×68cm、深さ23cmを測る。P_5は100cm×84cm、深さ28cmを測る。南西部は第７号掘立建物のP_6と重複する。P_6は71cm×55cm（推定）、深さ18cmを測る。南側は第７号掘立建物のP_9と重複する。P_2の覆土から須恵器の甕、土師器の甕の砕片がわずかに出土した。

〈第７号掘立建物跡〉

遺構（第13図）

調査区の中央よりわずかに南寄り、Ｈ・Ⅰ・Ｊ－８・９で検出された。第６号掘立建物、第17号住居跡と重複する。３間×２間の矩形を呈する掘立建物跡である。柱穴間の距離（芯－芯）は桁行で南側からP_1－2.1m－P_4、P_4－1.8m－P_6、P_6－1.75m－P_8。中央はP_2－5.9m－P_9、北側でP_3－2.35m－P_5、P_5－1.7m－P_7、P_7－1.7m－P10である。梁間は西側からP_1－2.3m－P_2、P_2－2.2m－P_3、P_4－4.5m－P_5、P_6－4.4m－P_7、P_8－2.3m－P_9、P_9－1.9m－P_{10}を測る。主軸方向はN－72°－Wである。P_1は75cm×72cm、深さ36cm、柱痕部は北東に位置し43cm×35cm、深さ17cm（底面から）を測る。P_2は70cm×64cm、深さ62cmを測る。柱痕部は中央より南に位置し17cm×14cm、深さ６cm（底面から）を測る。P_3は73cm×67cm、深さ60cmを測る。柱痕部は中央より東に位置し21cm×17cm、深さ14cm（底面から）を測る。P_4は73cm×72cm、深さ46cmを測る。P_5は57cm×51cm、深さ46cmを測る。P_6は102cm×95（推定）cm、深さcmを測る。北東部は第６号掘立建物P_5と重複する。柱痕部は中央より西に位置し22cm×17cm、深さ５cm（底面から）を測る。P_7は60cm×56



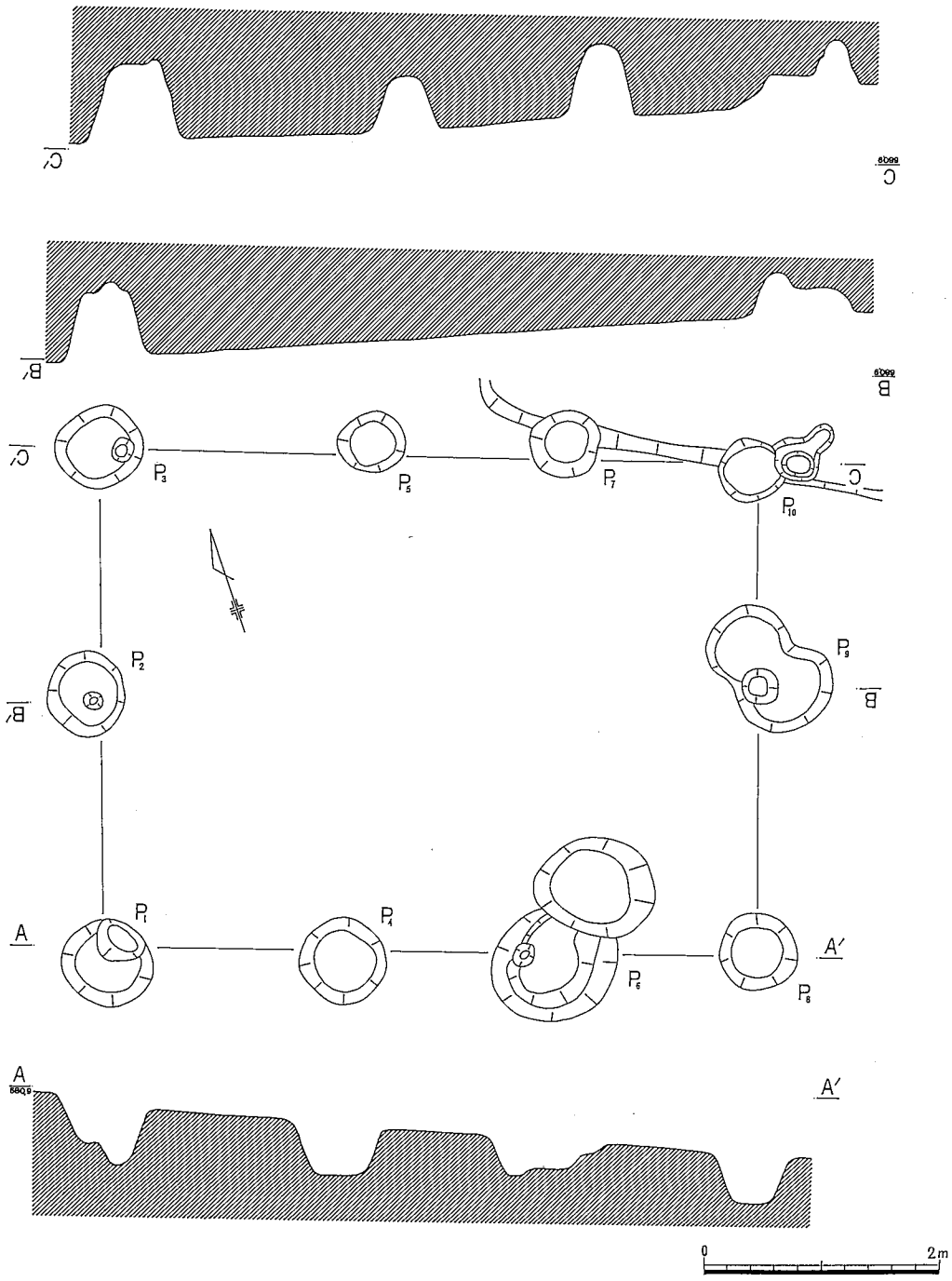
第12図　第６号掘立建物跡実測図（1/60）

cm、深さ60cmを測る。北側は第17号住居跡と重複する。P_8は64cm×63cm、深さ38cmを測る。P_9は84cm×65cm(推定)、深さ28cmを測る。柱痕部は中央より西に位置し31cm×30cm、深さ７cm(底面から)を測る。第６号掘立建物跡P_6と重複する。P_{10}は56cm×55cm、深さ29cmを測る。北側は第17号住居跡と重複する。

発掘調査では最後に確認された遺構であり、第６号掘立建物及び第17号住居跡との切り合い関係は、調査段階で明らかにできなかった。出土遺物には、土師器の坏・甕、須恵器の坏・壺・甕が見られたが、これらの出土遺物の中には、混入したものも含むと考えられる。

遺物（第14図）

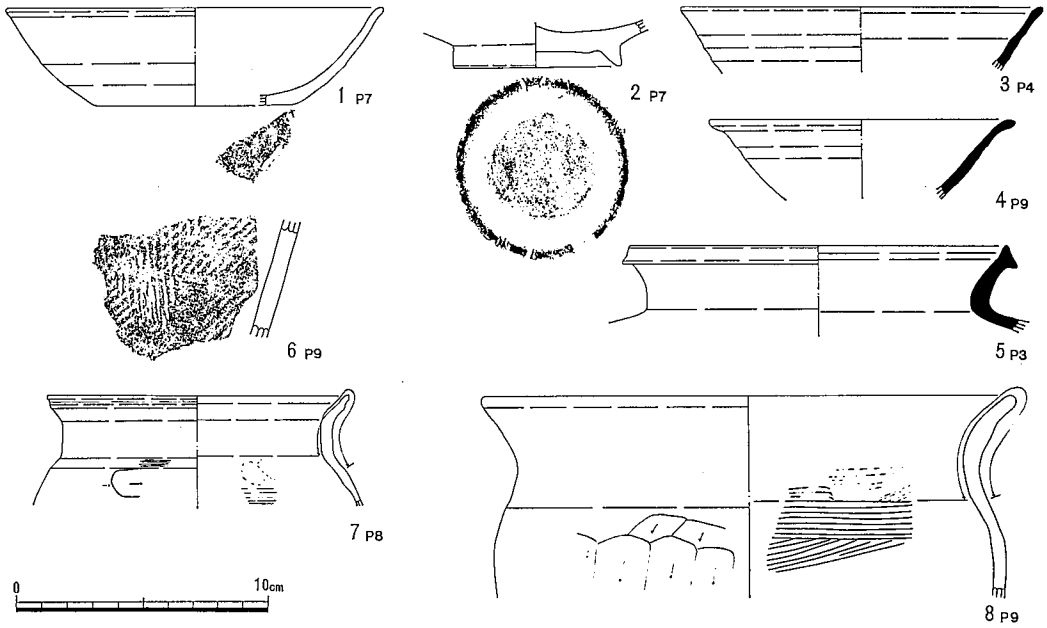
１は土師器の坏である。推定で口径15cm、器高４cm、底径８cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。右回転のロクロ成形で、底部は回転糸切と思われる。体部は丸みを帯びて立上がり、口縁はわずかに外反する。外面橙褐色、内面は黒色処理され、微砂粒、角閃石を含む。器面は全体に荒れている。P_7出土。２は土師器の坏の底部破片である。底径6.7cmを測る。器面は全体に荒れており、細かい観察はできないが、ロクロ成形で、付高台、外底部には回転糸切が認められる。高台は「ハ」の字に開き、高台の内側にはヘラナデ調整によって窪む。内面の中央部は高まる。橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、わずかに雲母を含む。P_7出土。３・４は須恵器坏の口縁部破片である。３



第13図　第７号掘立建物跡実測図（1/60）

は推定口径14.4cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。右回転のロクロ成形で、体部は直線的に立上がり、水挽痕が顕著である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。素地のきめは細かい。P_4出土。

４は推定口径12.2cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。右回転のロクロ成形で、口縁が



第14図　第７号掘立建物跡出土遺物（1/3）

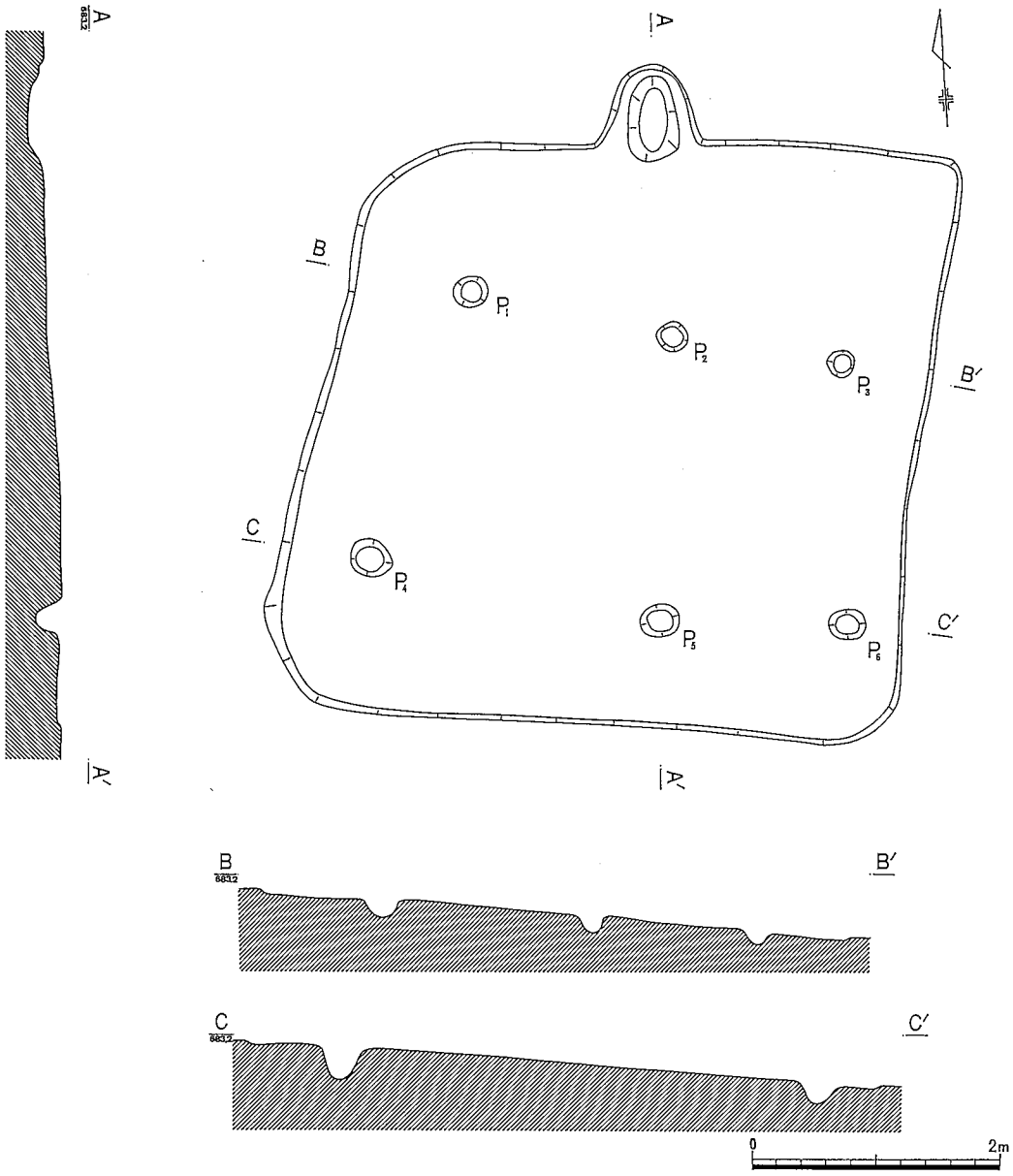
外反する。口縁は青灰色、体部下半は淡黄灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。器面はざらついて荒い。P_9出土。５は須恵器壺の口縁部破片と思われ、推定口径約15cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。頸部で「く」に字に屈曲し、口縁は縁帯を成して口端は尖る。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。一部に自然釉による光沢を有し、含有鉱物の溶解が認められることから焼成温度は高いと思われる。P_3出土。６は土師器の甕の胴部下半の破片と思われる。外面には掻目が見られる。暗褐色を呈し、微砂粒を多く含む。P_9出土。

７は口縁が「コ」の字形を呈する土師器の甕である。推定口径約12cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。口縁は内外面ともヨコナデ、頸部外面は軟質木口状工具による調整痕が認められ、肩部は横方向のケズリが施される。内面は軟質木口状工具によるナデ、一部に指頭押圧が認められる。暗赤褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。一部に煤の付着が認められる。P_8出土。８は土師器甕の口縁部破片である。推定口径約21.2cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。口縁は外反し、肩部の張りは弱い。口縁部はヨコナデ、外面は肩部から胴部にかけてタテケズリが施される。内面は肩部に軟質木口状工具による横方向のナデが認められる。橙褐色を呈し、微砂粒、小石を含む。P_9出土。

第３節　竪穴住居跡

〈第１号住居跡〉（第15図）

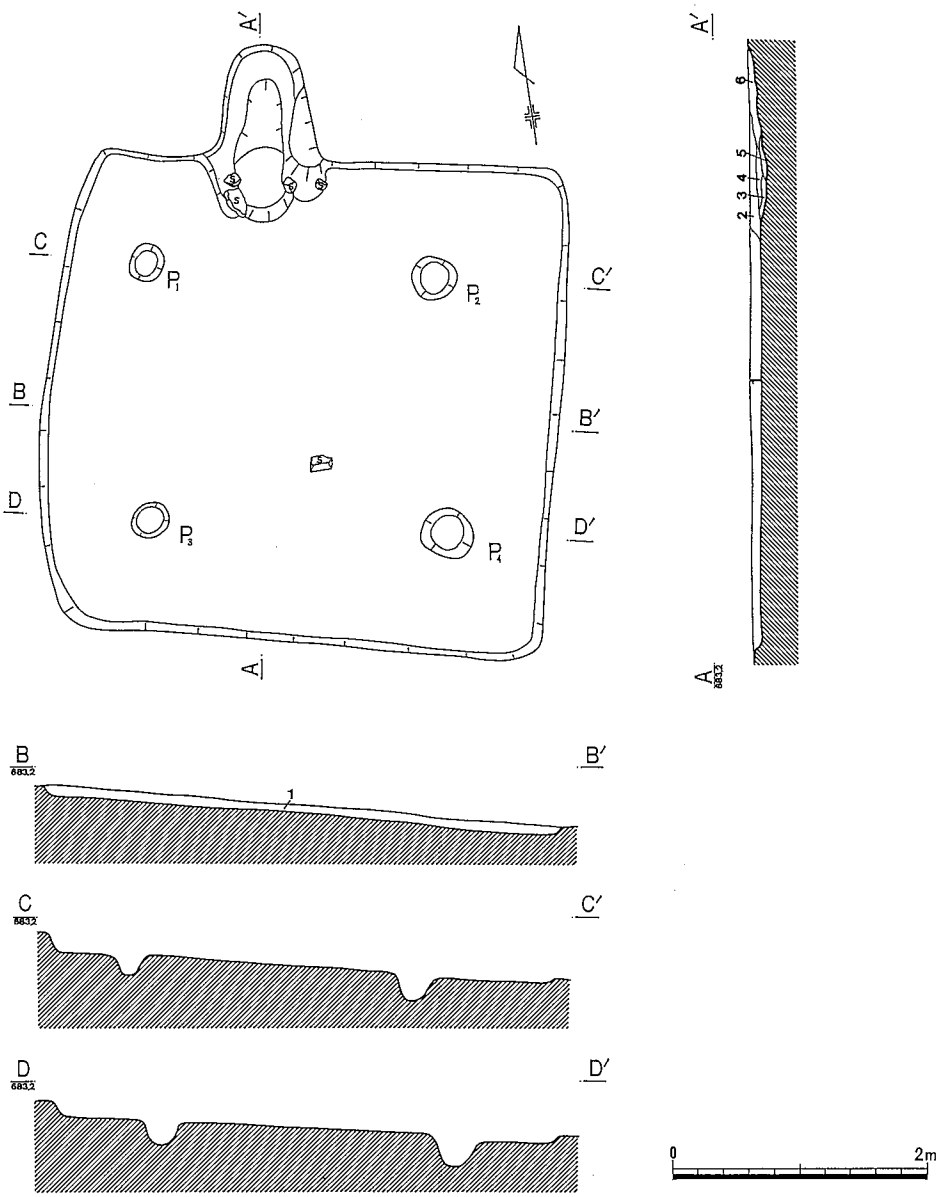
調査区の北西部、Ｅ・Ｆ－１・２グリッドで検出された。標高は683～682.5ｍに立地する。方形プランを呈し、東西4.9ｍ、南北4.85ｍ、深さ0.04ｍを測り、主軸はＮ－３°－Ｅである。北辺の中央部付近にカマドが付設される。底面が辛うじて残存し、岩盤を堀込んで深まっている。袖や関連する施設などは検出されなかった。



第15図　第１号住居跡実測図（1/60）

試掘調査では、西辺の一部が溝状に確認された程度で、発掘調査でもほとんど覆土は存在しなかった。床面は岩盤まで掘り込まれ、平坦であるが、地形に沿って東に向かって傾斜する。柱穴は６か所確認された。P_1は30cm×25cm、深さ15cmである。P_2は25cm×23cm、深さ11cmである。P_3は23cm×23cm、深さ11cmである。P_4は35cm×30cm、深さ23cmである。P_5は32cm×28cm、深さ19cmである。P_6は30cm×26cm、深さ10cmである。ピットは３基づつ２列に並んでいる。

出土遺物は、覆土がほとんど残存しなかったことから非常に微量で、土師器の甕の砕片がわずかに出土した程度である。



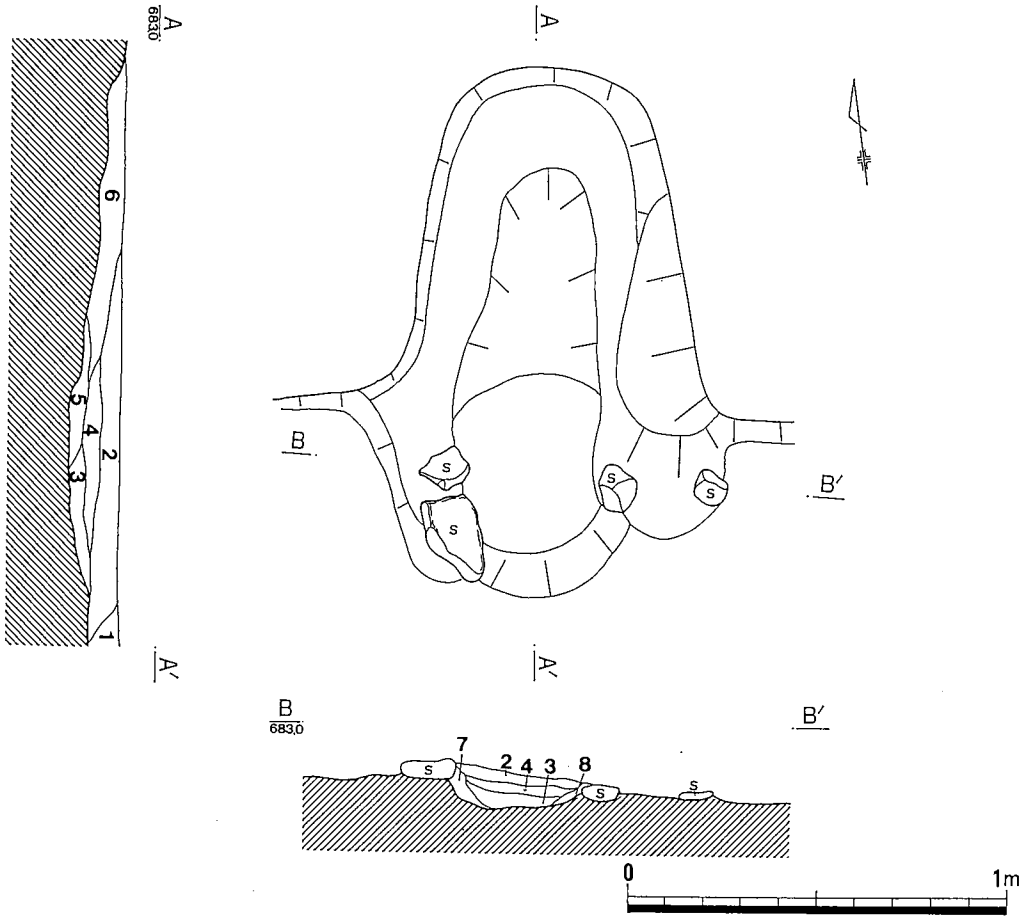
第16図　第２号住居跡実測図（1/60）

〈第２号住居跡〉

遺構（第16図）

調査区の北西部、Ｅ・Ｆ－３・４グリッドで検出され、第１号住居跡の南方約５ｍに位置する。標高は683～682.5ｍに立地する。方形プランを呈し、東西4.1ｍ、南北3.85ｍ、深さ0.14～0.1ｍを測り、主軸はＮ－10°－Ｅである。北辺の西寄りにカマドが付設される。

床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かって傾斜する。柱穴は４か所確認された。P_1は30cm×27cm、深さ17cmである。P_2は36cm×34cm、深さ24cmである。P_3は30cm×28cm、深さ18cmである。P_4は42cm×38cm、深さ24cmである。



第17図　第２号住居跡カマド実測図（1/20）

出土遺物は、土師器の甕の砕片がわずかに出土した程度である。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。しまり良い。）

第２層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土ブロック・粒子を多く含む。しまり良い。）

第３層　暗茶褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物を多く含む。しまり良い。）

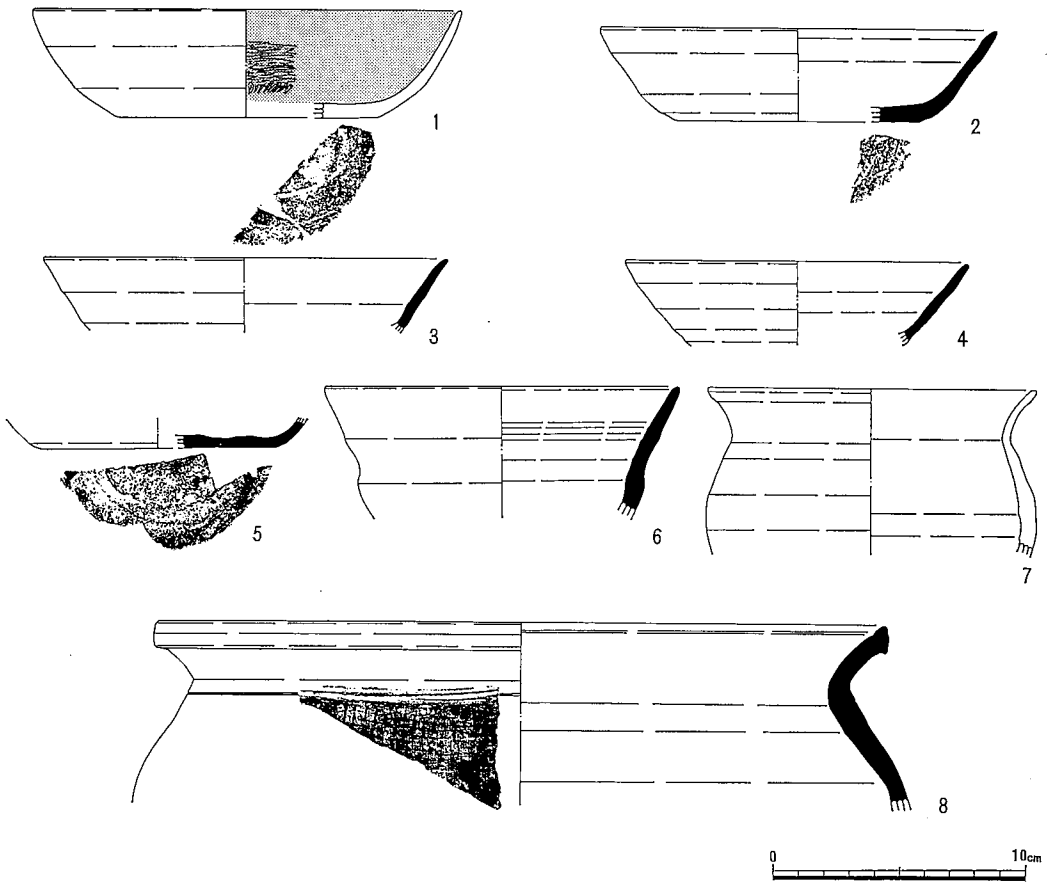
第４層　暗茶褐色土（焼けた岩盤ブロックを多く含む。）

第５層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子、炭化物を多く含む。）

第６層　暗茶褐色土（岩盤粒子を少量含む。焼土粒子を多く含む。しまり良い。）

カマド（第17図）

焚口部から掛口部にかけて深まり、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は大部分が失われていたが、岩盤に接する基部には、円礫が据え置かれていた。第17図Ｂ－Ｂ′断面の第７・８層が、カマド内壁面と考えられよう。



第18図　第２号住居跡出土遺物（1/3）

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。しまり良い。住居跡の覆土。）

第２層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土ブロック・粒子を多く含む。しまり良い。）

第３層　暗茶褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物を多く含む。しまり良い。）

第４層　暗茶褐色土（焼けた岩盤ブロックを多く含む。）

第５層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子、炭化物を多く含む。）

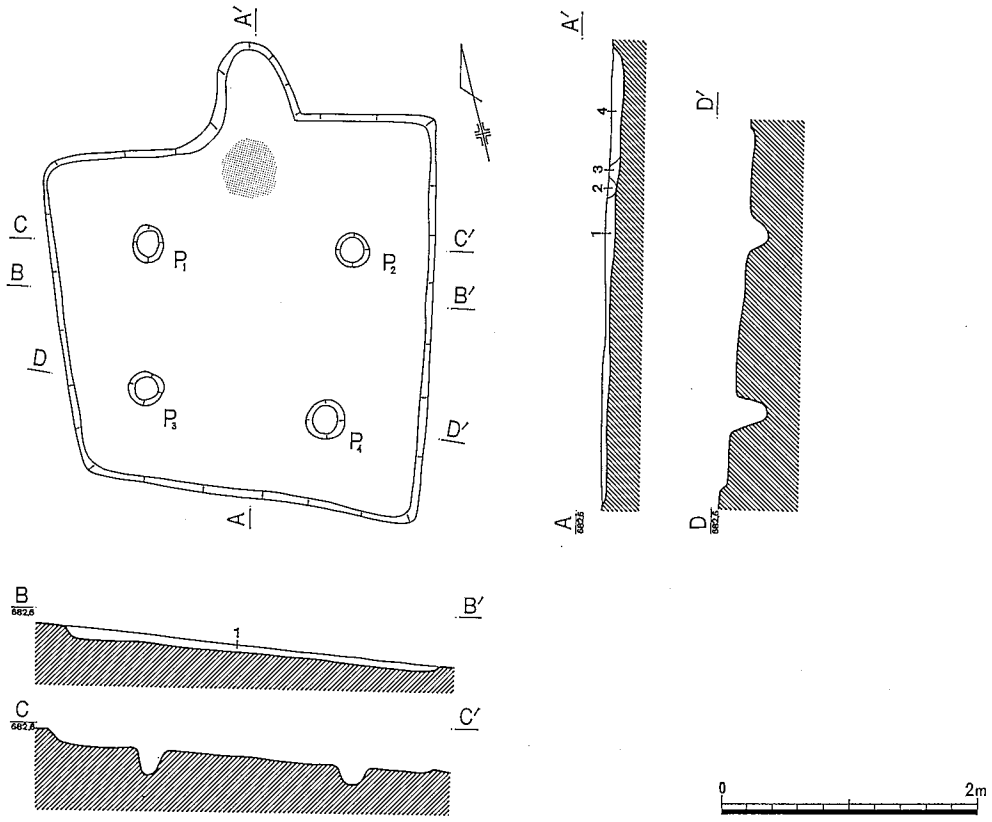
第６層　暗茶褐色土（岩盤粒子を少量含む。焼土粒子を多く含む。しまり良い。）

第７層　茶褐色土（焼けた岩盤粒子が主体で、被熱による硬化面。）

第８層　茶褐色土（焼けた岩盤がブロック状に混在する。）

遺物（第18図）

１は土師器の坏である。推定で口径17.1cm、器高4.3cm、底径10.5cm、実測部分の残存率は約20％である。体部は丸みを帯びて立上がり、口端は先細る。ロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。体部外面のロクロ痕は平滑である。体部内面は円周方向、内底部は不定方向のミガキが施される。口縁内面のミガキは判然としない。外面は黄灰色、内面は黒色処理され黒褐色を呈する。胎土に微砂粒、角閃石を含む。２～５は須恵器坏である。２は推定で口径15.8cm、器高3.7cm、底径9.6



第19図　第３号住居跡実測図（1/60）

cm、実測部分の残存率は約７％である。体部は逆「ハ」の字に立上がり、口端は先細る。右回転のロクロ成形である。外底部の調整は判然としない。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。３は推定口径約16.1cm、実測部分の残存率は約８％である。体部は逆「ハ」の字に直線的に立上がり、口端はわずかに外反する。右回転のロクロ成形で、器面は内外面とも平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。４は推定口径約13.7cm、実測部分の残存率は約15％である。体部は逆「ハ」の字に直線的に立上がり、口端はわずかに外反する。右回転のロクロ成形と思われる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色小石を含む。５は底部破片で、推定底径約9.4cm、実測部分の残存率は約40％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転ヘラケズリ調整が施される。内底面は中央部がわずかに高まる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色小石を含む。６はロクロ成形の須恵器で、口縁は外反し、括れの下が張る形態を呈する。小型広口壺の様な器種と思われる。推定口径約14.2cm、実測部分の残存率は約15％である。青灰色を呈し、微砂粒、白色小石を含む。７は土師器の小形甕である。推定口径約13.1cm、実測部分の残存率は約15％である。口縁は外反し、器壁は薄い。頸部の屈曲は丸みを帯びている。微砂粒、赤色粒子、角閃石を多量に含み、暗橙褐色を呈する。８は須恵器の甕である。推定口径約29cm、実測部分の残存率は約30％である。口縁は外反し、肩部に弱い張りが認められる。口縁部は縁帯を成し、口端は尖る。頸部から肩部は叩きの後ロクロ調整が施される。灰白色から青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色小石を含む。

〈第３号住居跡〉（第19図）

調査区の北西部、Ｆ・Ｇ－３・４グリッドで検出され、第２号住居跡の東方約２ｍに位置する。標高は682.5～682ｍに立地する。北東隅がわずかに突出した方形プランを呈し、東西2.95ｍ、南北3.1ｍ、深さ0.1ｍを測り、主軸はＮ－10°－Ｅである。北辺の中央部付近にカマドが付設される。覆土はほとんど残存せず、カマドの袖は検出できなかったが、被熱によって赤変した箇所が確認され、焚口部から掛口部に当たると考えられる。

床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かって傾斜する。柱穴は４か所確認された。P_1は30cm×24cm、深さ22cmである。P_2は28cm×25cm、深さ14cmである。P_3は27cm×26cm、深さ24cmである。P_4は32cm×30cm、深さ16cmである。

出土遺物は、土師器の甕の砕片がわずかに出土した程度である。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第３層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子、焼土ブロックを多く含む。）

第４層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。）

〈第４号住居跡〉

遺構（第20図）

調査区北側のほぼ中央部、Ｈ・Ｉ－２グリッドで検出され、標高681ｍに位置する。第５・11号住居跡と重複して検出された。プラン確認の段階では、遺構の新旧関係は判然としなかったが、土層断面の観察から、第４号住居跡が最も新しいと判断される。東西3.82ｍ、南北2.65ｍの東西方向がわずかに長い長方形プランで、深さ0.14ｍを測り、主軸はＮ－15°－Ｅである。

北辺の中央部付近にカマドが付設されるが、袖はわずかに検出されたのみである。焚口から掛口へと深まり、煙道部は緩やかに立ち上がる。

床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かって傾斜する。柱穴は４か所確認され、$P_{1\cdot2}$の周囲は深まっている。P_1は43cm×35cm、深さ16cmである。P_2は35cm×31cm、深さ16cmである。P_3は40cm×38cm、深さ16cmである。P_4は38cm×37cm、深さ３cmである。

出土遺物は、土師器の甕、羽釜、須恵器の甕、坏が見られた。

〔土層説明〕

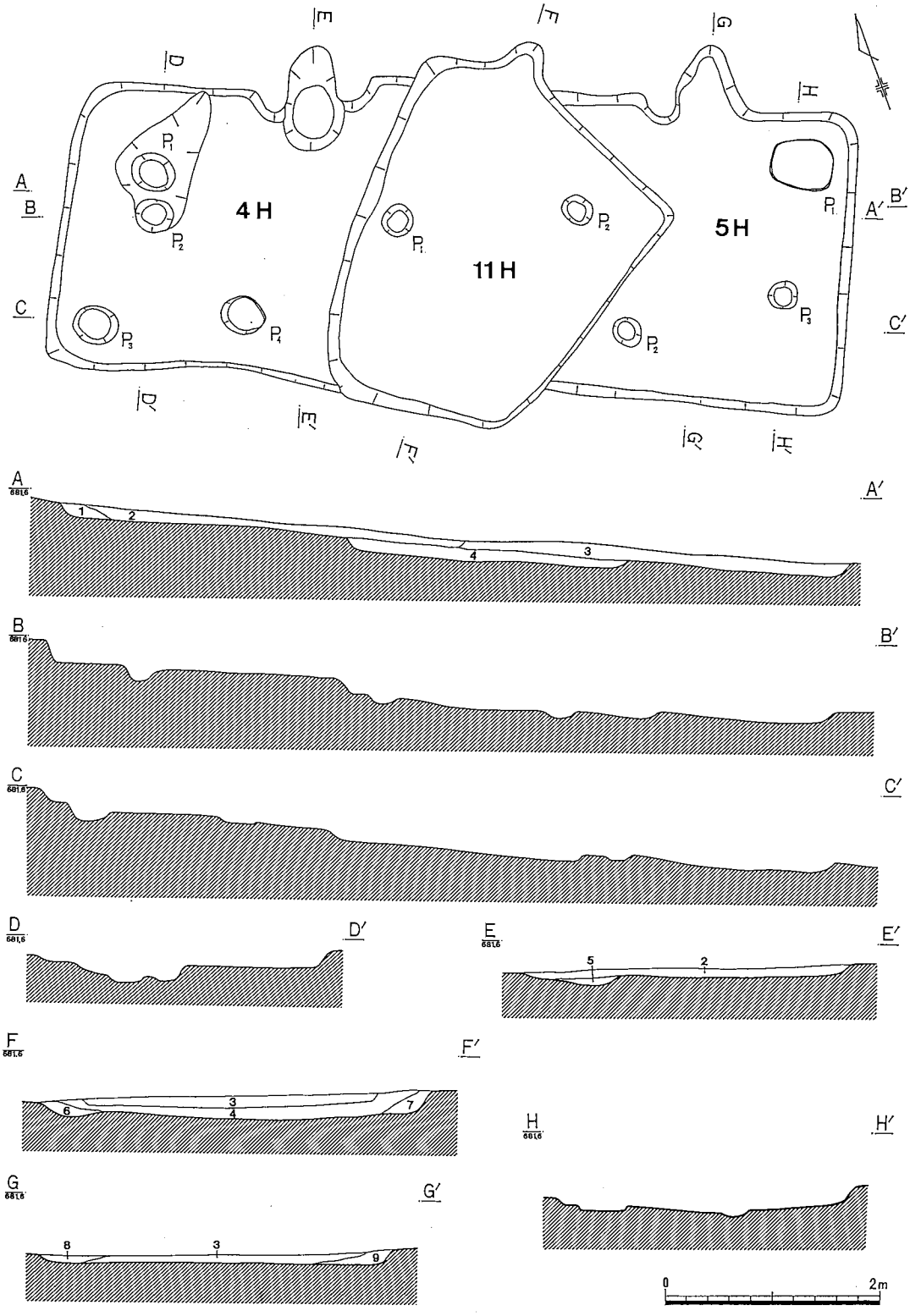
第１層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。炭化物、焼土粒子を少量含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。炭化物、焼土粒子を多く含む。）

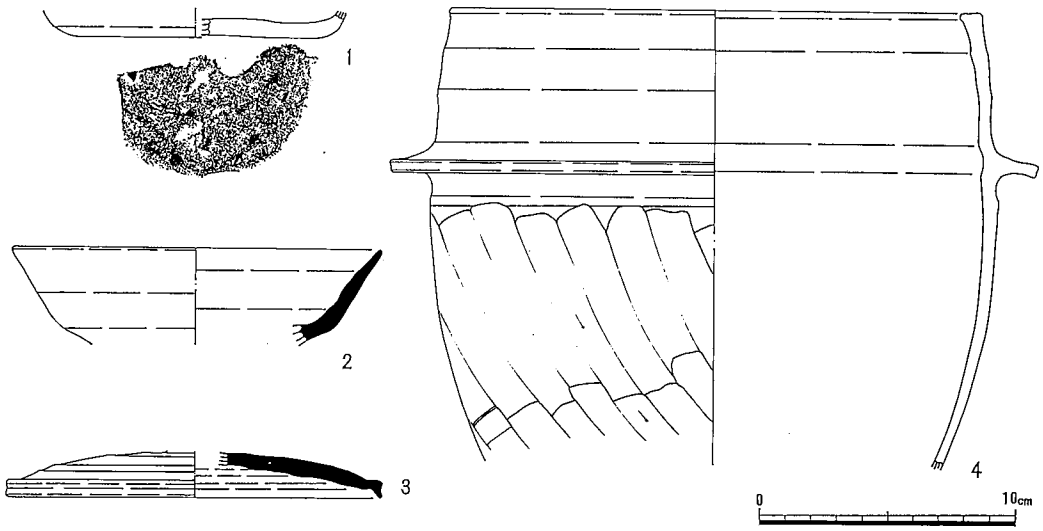
第５層　暗茶褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多量に含む。）

遺物（第21図）

１は土師器坏の底部破片である。推定底径10cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。底部から丸みを帯びて立上がる。ロクロ成形で、外底部は手持ちヘラケズリ調整が施される。橙褐色を呈し、微砂粒、赤色・白色粒子を多く含む。２は推定口径約14.7cm、実測部分の残存率は約25％で



第20図　第４・５・11号住居跡実測図（1/60）



第21図　第４号住居跡出土遺物（1/3）

ある。腰部が張り、体部は逆「ハ」の字に直線的に立上がり、口端は先細る。右回転のロクロ成形で、器面は内外面とも平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。器面には火襷が顕著に認められる。３は須恵器の蓋である。推定口径約14.8cm、実測部分の残存率は約50％である。

全体に偏平な形態である。右回転のロクロ成形で、天井部外面には回転ヘラケズリ調整が施される。返りの内面はヘラ状工具による回転ナデ調整が施される。青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。外面には煤の付着が認められる。４は土師器の羽釜である。推定口径21.1cm、実測部分の残存率は約35％である。粘土紐輪積成形、ロクロ調整と思われ、鍔下の胴部は縦方向のケズリが施される。橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。

〈第５号住居跡〉

遺構（第20図）

調査区北側のほぼ中央部、Ｉ・Ｊ－２・３グリッドで検出され、標高681ｍに位置する。第５・11号住居跡と重複して検出された。第４号住居跡よりも古く、第11号住居跡よりも新しい。東西は推定で４ｍ、南北28.5ｍと、東西方向がわずかに長い長方形プランを呈し、深さ0.11ｍを測る。主軸はＮ－17°－Ｅである。

北辺の東寄りにカマドが付設されるが、袖はわずかに検出されたのみである。焚口から掛口付近は被熱により赤変し、煙道部は緩やかに立ち上がる。

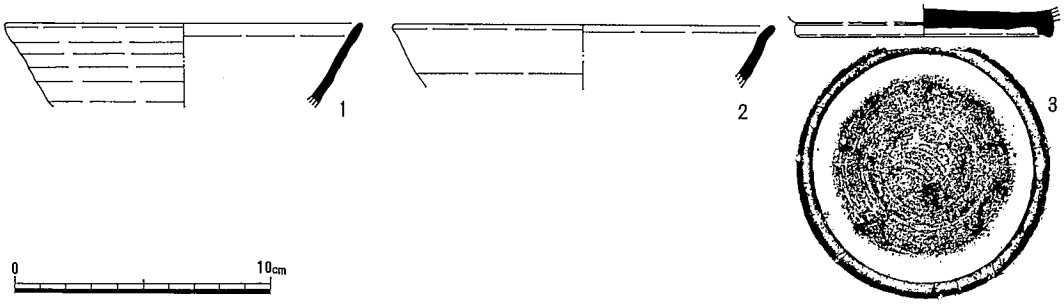
床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かって傾斜する。柱穴は３か所確認された。P_1は59cm×48cmの方形プランを呈し、深さ８cmである。P_2は30cm×28cm、深さ６cmである。P_3は28cm×27cm、深さ９cmである。

出土遺物は、土師器の甕、坏、須恵器の甕、坏が見られた。

〔土層説明〕

第３層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物を少量含む。）

第８層　暗茶褐色土（岩盤粒子を少量含む。焼土粒子を顆粒状に含む。）



第22図　第５号住居跡出土遺物（1/3）

第９層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土粒子、炭化物を少量含む。）

遺物（第22図）

１・２は須恵器坏の口縁部破片である。１は推定口径約14.1cm、実測部分の残存率は約８％である。体部は逆「ハ」の字に直線的に立上がり、口縁はわずかに肥厚し、口端は先細る。右回転のロクロ成形で、外面にはロクロ痕が顕著である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。２は推定口径約15.2cm、実測部分の残存率は約７％である。体部は丸みを帯びて立上がり、口端は外反する。右回転のロクロ成形で、器面は内外面とも平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。３は須恵器高台付坏の底部破片である。底径約10.2cmを測る。外面の高台接合部にはヘラ状工具による回転ヘラナデ調整が施される。高台端部は丸みを帯びる。外底部は回転糸切の後、周縁部に回転ヘラケズリ調整が施され、高台脇は回転ヘラナデ調整が施される。右回転のロクロ成形で、器面は内外面とも平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む外底面には墨痕と思われる黒色の染みが認められ、転用硯と思われる。

〈第６号住居跡〉

遺構（第23図）

調査区北側のやや東寄り、Ｌ･Ｍ－４グリッドで検出され、標高680ｍに位置する。東西に長い長方形プランを呈し、東西4.25ｍ、南北3.24ｍ、深さ0.28～0.05ｍを測る。主軸はＮ－19°－Ｅである。

北辺のやや東寄りにカマドが付設されるが、袖は検出されず、焚口から掛口付近はわずかに深まり、底面は被熱により赤変する。

床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かって傾斜し、東側は壁面がわずかに確認される程度である。柱穴は５か所確認された。P_1は37cm×34cm、深さ９cmである。P_2は35cm×31cm、深さ６cmである。P_3は34cm×33cm、深さ15cmである。P_4は35cm×32cm、深さ５cmである。P_5は33cm×32cm、深さ18cmである。

出土遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕の破片が出土した。

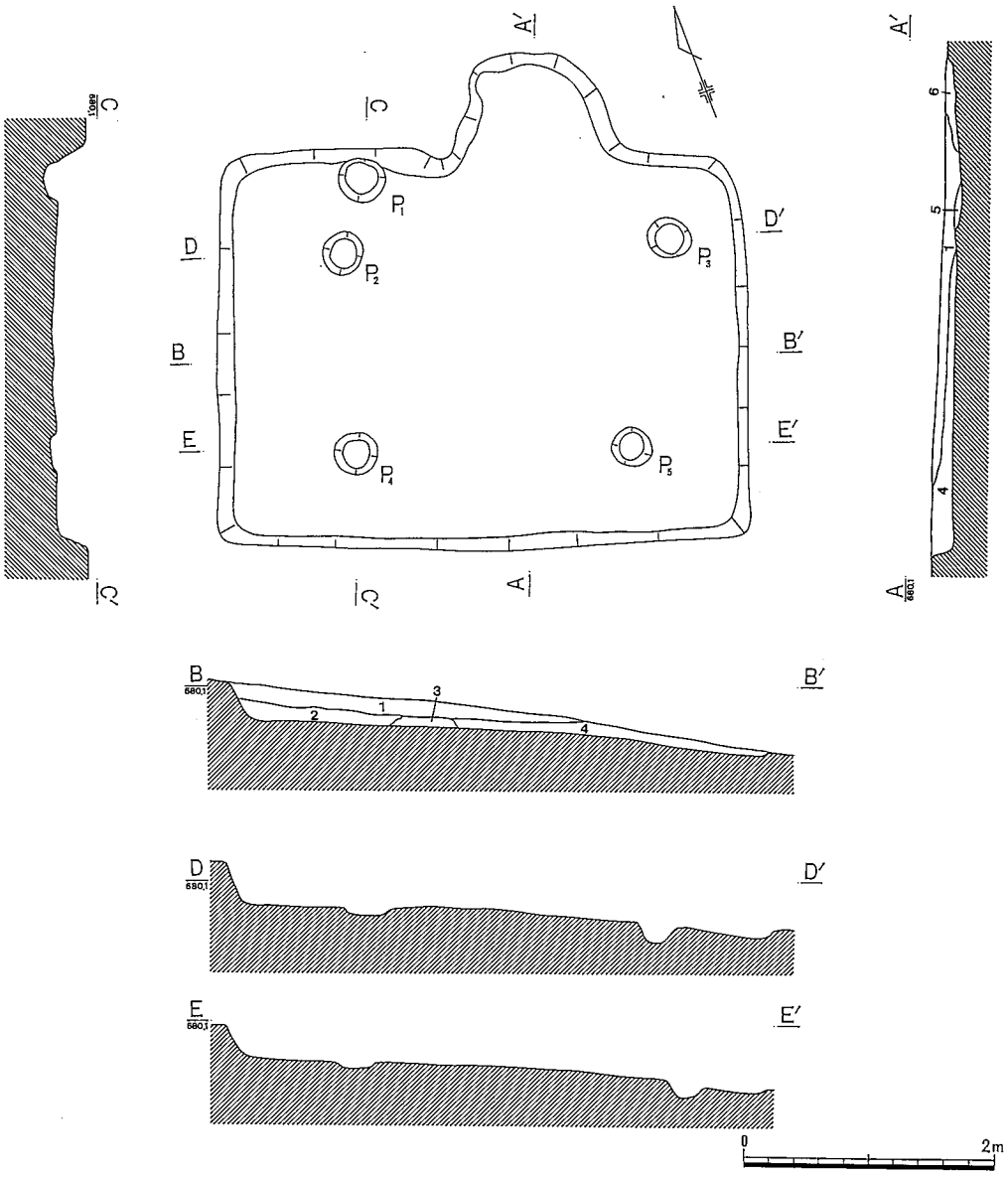
〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。炭化物、焼土粒子を多量に含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を多量に含む。炭化物、焼土粒子を多量に含む。）

第３層　暗黄褐色土（岩盤ブロックを多量に含む。炭化物、焼土粒子を多量に含む。）

第４層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に密に含む。粒子は細かい。炭化物、焼土粒子を少量含む。）



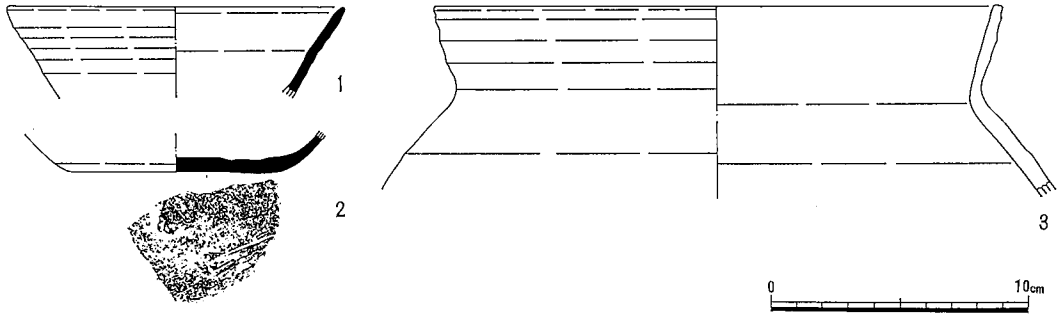
第23図　第６号住居跡実測図（1/60）

第５層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を多量に含む。岩盤粒子をわずかに含む。）

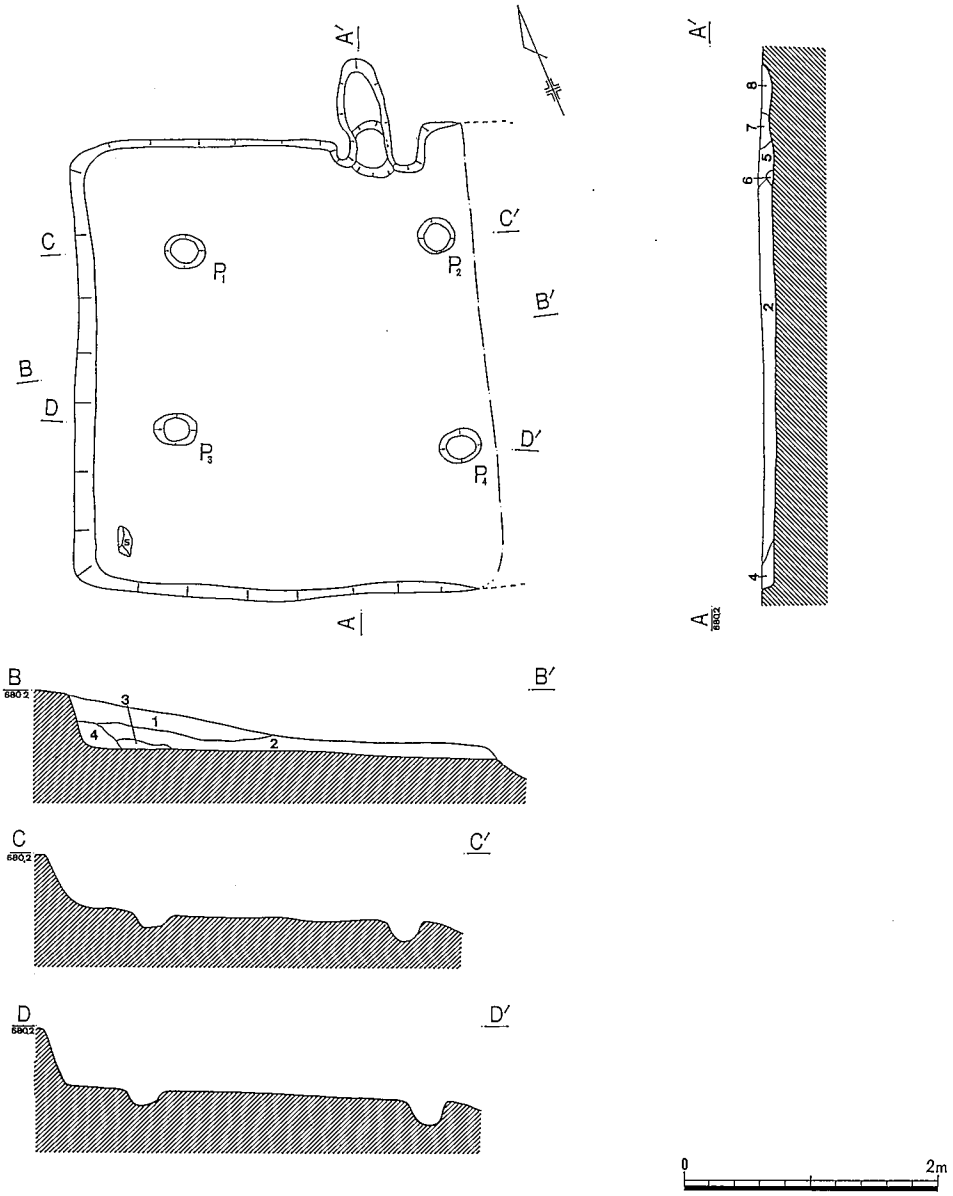
第６層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物、岩盤粒子を全体に含む。粒子は細かく、しまりやや弱い。）

遺物（第24図）

１は須恵器坏の口縁部破片である。推定口径約13.3cm、実測部分の残存率は約10％である。体部は直線的に外反し、口端は先細る。右回転のロクロ成形で、外面にはロクロ痕が顕著に認められる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。２は須恵器坏の底部破片である。推定底径約8.2cm、実測部分の残存率は約25％である。底部から丸みを帯びて立上がり、外底面は手持ちヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。器面の一部に火襷が顕著に認められる。



第24図　第６号住居跡出土遺物（1/3）



第25図　第７号住居跡実測図（1/60）

３は土師器甕の口縁部破片である。推定口径約22.6cm、実測部分の残存率は約15％である。輪積成形、ロクロ調整と思われる。頸部は外反するが、口縁は直立気味である。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多く含む。

〈第７号住居跡〉

遺構（第25図）

第６号住居跡の南側約７ｍ、Ｌ・Ｍ－６グリッドで検出され、標高680～679.5ｍに位置する。元の農道部分に位置し、東側は農道によって削られている。方形プランを呈し、東西は現存で3.4ｍ、南北3.7ｍ、深さ0.4～0.14ｍを測る。主軸はＮ－22°－Ｅである。

北辺のやや東寄りにカマドが付設される。

床面は東にわずかに傾斜し、東側の立上がりは農道によって失われている。柱穴は４か所確認された。P_1は30cm×28cm、深さ10cmである。P_2は29cm×28cm、深さ16cmである。P_3は34cm×25cm、深さ17cmである。P_4は34cm×31cm、深さ25cmである。

住居の南西隅から円礫が床面直上から検出されている。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・甕の破片が見られた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（全体に岩盤粒子多くを含む。焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（全体に岩盤粒子多くを含む。焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第３層　暗黄褐色土（岩盤粒子を密に含む。炭化物を多く含む。）

第４層　暗黄褐色土（岩盤ブロックを多く含む。）

第５層　黒褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第６層　焼土ブロック

第７層　暗茶褐色土（焼土ブロック・粒子を多く含む。しまりやや弱い。）

第８層　暗褐色土（焼土粒子を全体に含む。しまりやや弱い。）

カマド（第26図）

焚口部から掛口部にかけて深まり、煙道部は比較的平らに伸びて立ち上がる。カマドの袖は、住居構築時に袖の部分を掘り残さず、岩盤ブロックを主体に構築している。

〔土層説明〕

第１層　黒褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第２層　暗茶褐色土（焼土ブロック・粒子を多く含む。しまりやや弱い。）

第３層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多く含む。しまりやや弱い。）

第４層　暗茶褐色土（焼土粒子を多く含む。炭化物をわずかに含む。）

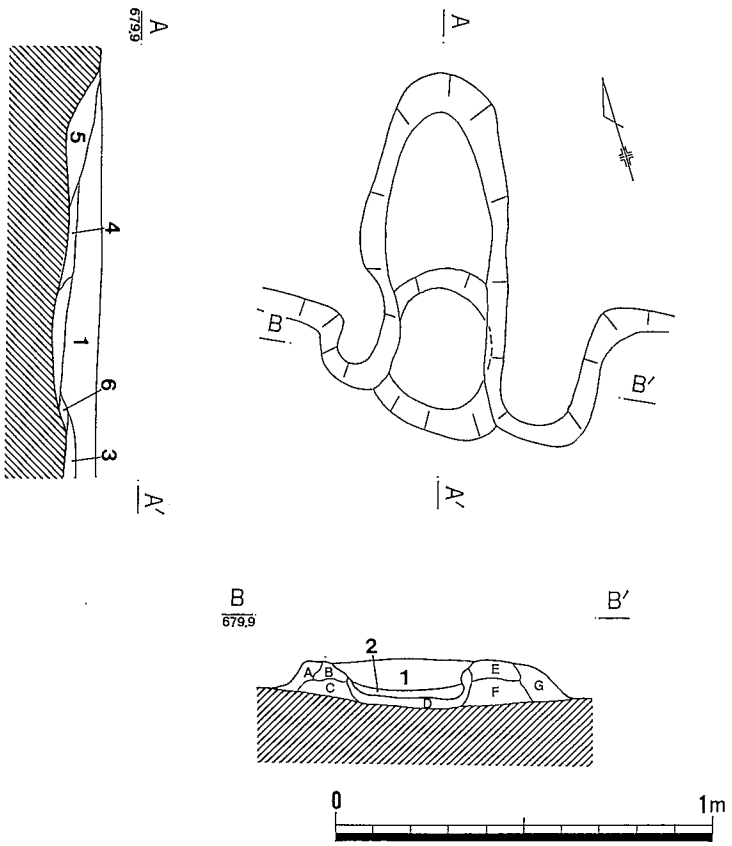
第５層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物を少量含む。しまりやや弱い。）

第６層　焼土ブロック

第Ａ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）

第Ｂ層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）

第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。）



第D層　暗茶褐色土（被熱により赤変・硬化している。）
第E層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）
第F層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。）
第G層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）

第26図　第７号住居跡カマド実測図（1/20）

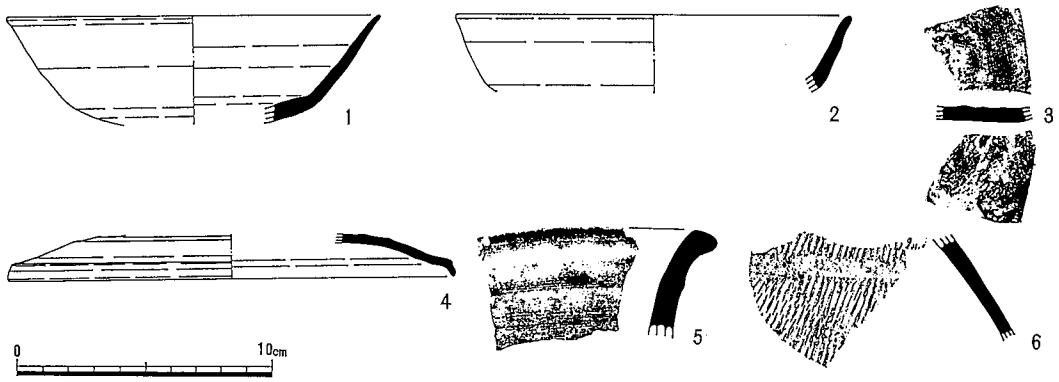
遺物（第27図）

１～３は須恵器の坏である。１は推定口径約14.8cm、実測部分の残存率は約17％である。腰部が張り、体部は直線的に外反し、口端は先細る。右回転のロクロ成形で、器面は平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。２は推定口径約15.7cm、実測部分の残存率は約７％である。腰部がわずかに張り、体部は外反する。口端は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、器面は平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。３は底部破片である。右回転のロクロ成形で、外底面は回転ヘラケズリ調整が施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。４は須恵器の蓋である。推定口径約17.8cm、実測部分の残存率は約16％である。返り部分は丸みを帯び、口端は先細る。右回転のロクロ成形で、天井部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。青灰色～暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。５は須恵器甕の口縁部と思われる。口縁は外方へ突出し、口端は面を成す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。６は須恵器甕の肩部破片と思われる。外面には平行叩きが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。

〈第８号住居跡〉

遺構（第28・29図）

調査区の北東部、Ｏ・Ｐ－５グリッドで検出され、標高678.5～678ｍに位置する。第９号住居跡と重複し、第９号住居跡よりも古い。東側の壁面は第９号住居跡と重複するが、第９号住居跡の床



第27図　第７号住居跡出土遺物（1/3）

面に段差が認められることから、この部分までが第８号住居跡の範囲と考えられる。東西に長い長方形プランを呈し、東西は5.9ｍ、南北4.15ｍ、深さ0.15～0.05ｍを測る。主軸はＮ－13°－Ｅである。北辺の東寄りにカマドが付設される。袖はほとんど検出できなかったが、東袖の基部には円礫が置かれていた。焚口から掛口付近はわずかに深まり、底面は被熱により赤変する。

床面は岩盤まで掘り込まれ、東にわずかに傾斜する。柱穴Ｐ$_{1\sim3}$が、床の中央部付近に東西方向に並ぶ。このほか、第９号住居跡との重複部分にもピットが認められるが、第８号住居跡に属するものは判然としないため、ここでＰ$_7$までを取り上げる。Ｐ$_1$は24cm×22cm、深さ５cmである。Ｐ$_2$は26cm×24cm、深さ９cmである。Ｐ$_3$は31cm×25cm、深さ24cmである。Ｐ$_4$は22cm×21cm、深さ20cmである。Ｐ$_5$は28cm×25cm、深さ12cmである。Ｐ$_6$は46cm×32cm、深さ16cmである。Ｐ$_7$は28cm×23cm、深さ20cmである。

出土遺物は、土師器、須恵器の砕片が見られた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤ブロックを多く含む。焼土、炭化物を全体に含む。）

第２層　暗黄褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土、炭化物をわずかに含む。）

第５層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。焼土粒子、炭化物を全体に含む。）

第６層　暗茶褐色土（焼土粒子を多量に含む。）

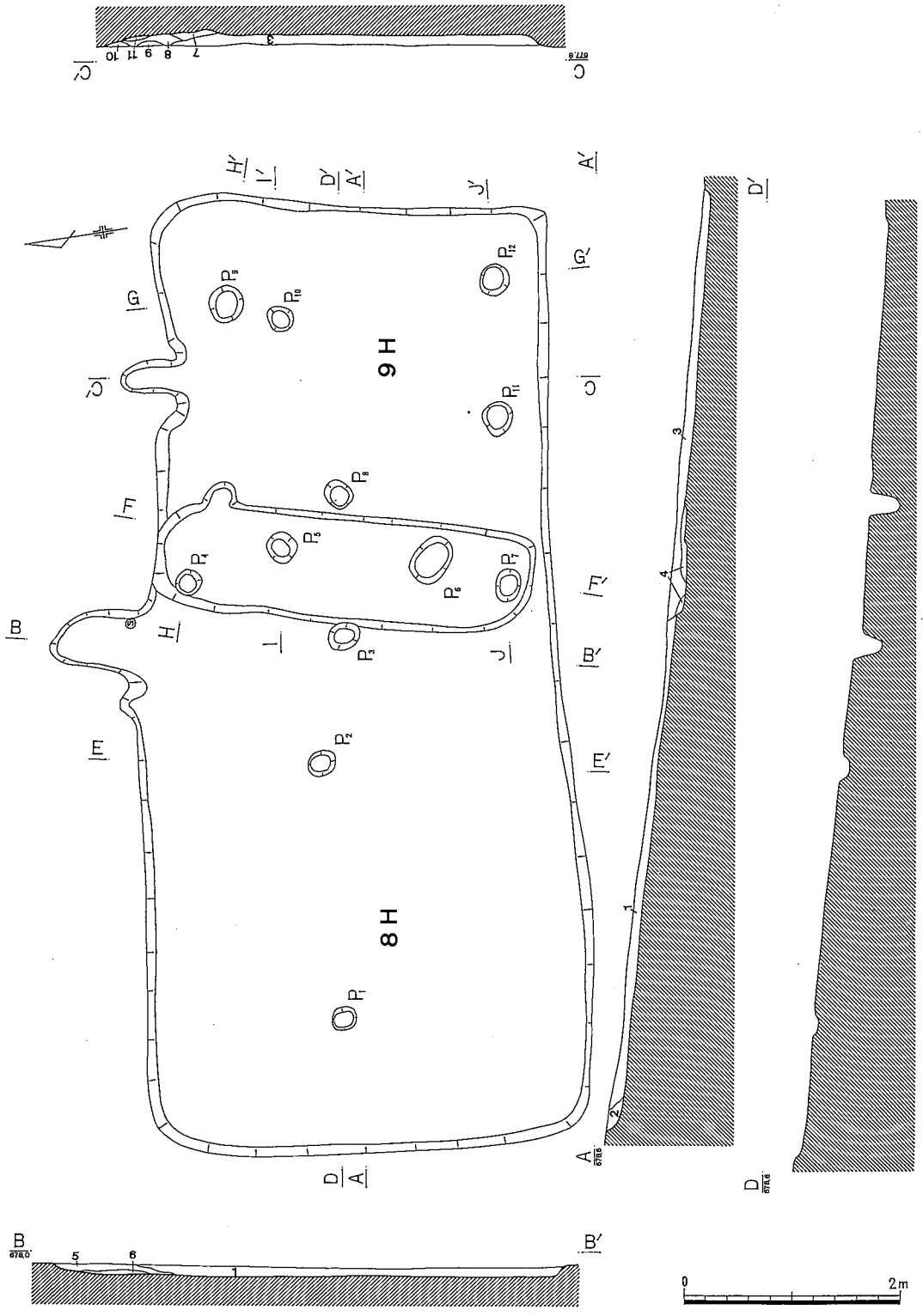
遺物（第30図）

土師器甕の口縁部破片である。推定口径21.8cm、実測部分の残存率は約10％である。口縁は「く」の字に外反する。口縁はヨコナデ、外面の頸部以下はタテケズリが施される。暗黄褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。外面の一部に煤の付着が認められる。

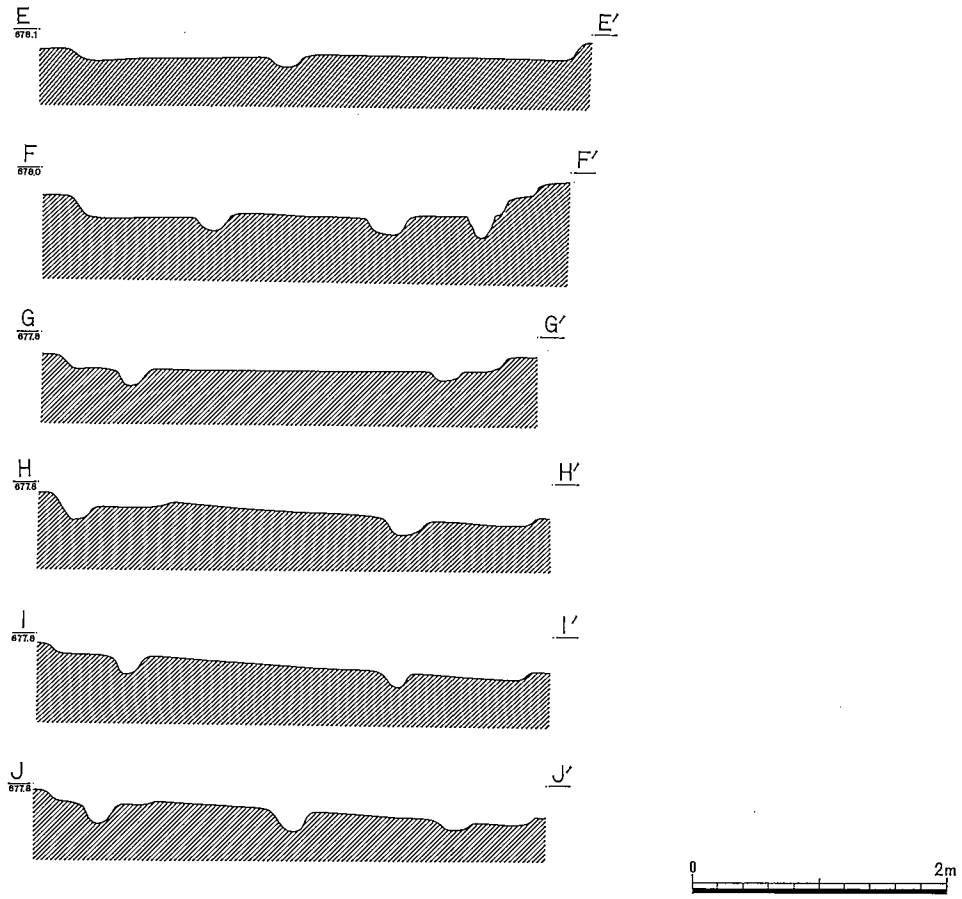
〈第９号住居跡〉

遺構（第28・29図）

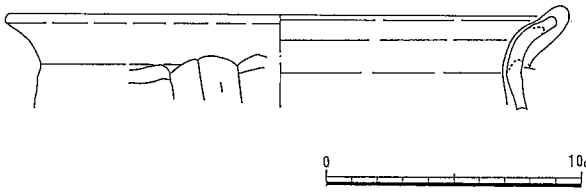
調査区の北東部、Ｐ・Ｑ－５グリッドで検出され、標高678.5～678ｍに位置する。第８号住居跡と重複し、第８号住居跡よりも新しい。西側の壁面は第８号住居跡と重複するが、第９号住居跡の床面に段差が認められることから、この部分までが第９号住居跡の範囲と考えられる。方形プランを呈し、東西は3.9ｍ、南北3.6ｍ、深さ0.08ｍを測る。主軸はＮ－10°－Ｅである。北辺の中央部付



第28図　第８・９号住居跡実測図(1)（1/60）



第29図　第８・９号住居跡実測図(2)（1/60）



◀第30図　第８号住居跡出土遺物（1/3）

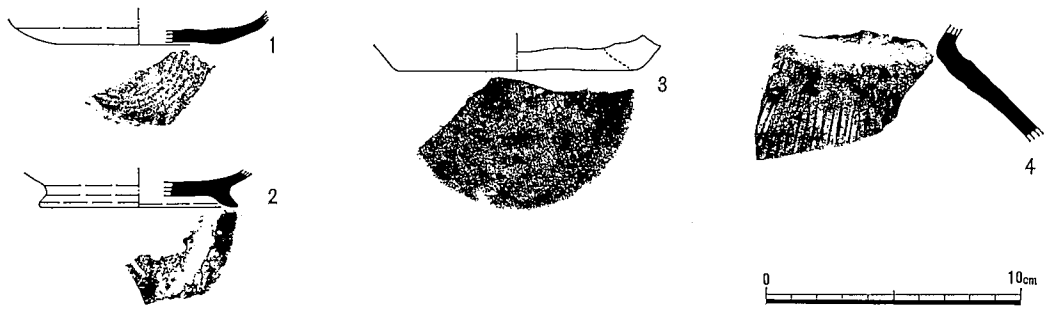
近にカマドが付設される。袖はほとんど検出できなかったが、焚口から掛口付近はわずかに深まり、底面は被熱により赤変している。

床面は岩盤まで掘り込まれ、東にわずかに傾斜する。柱穴P_8は27cm×22cm、深さ19cmである。P_9は35cm×33cm、深さ12cmである。P_{10}は24cm×22cm、深さ13cmである。P_{11}は29cm×27cm、深さ21cmである。P_{12}は29cm×27cm、深さ10cmである。

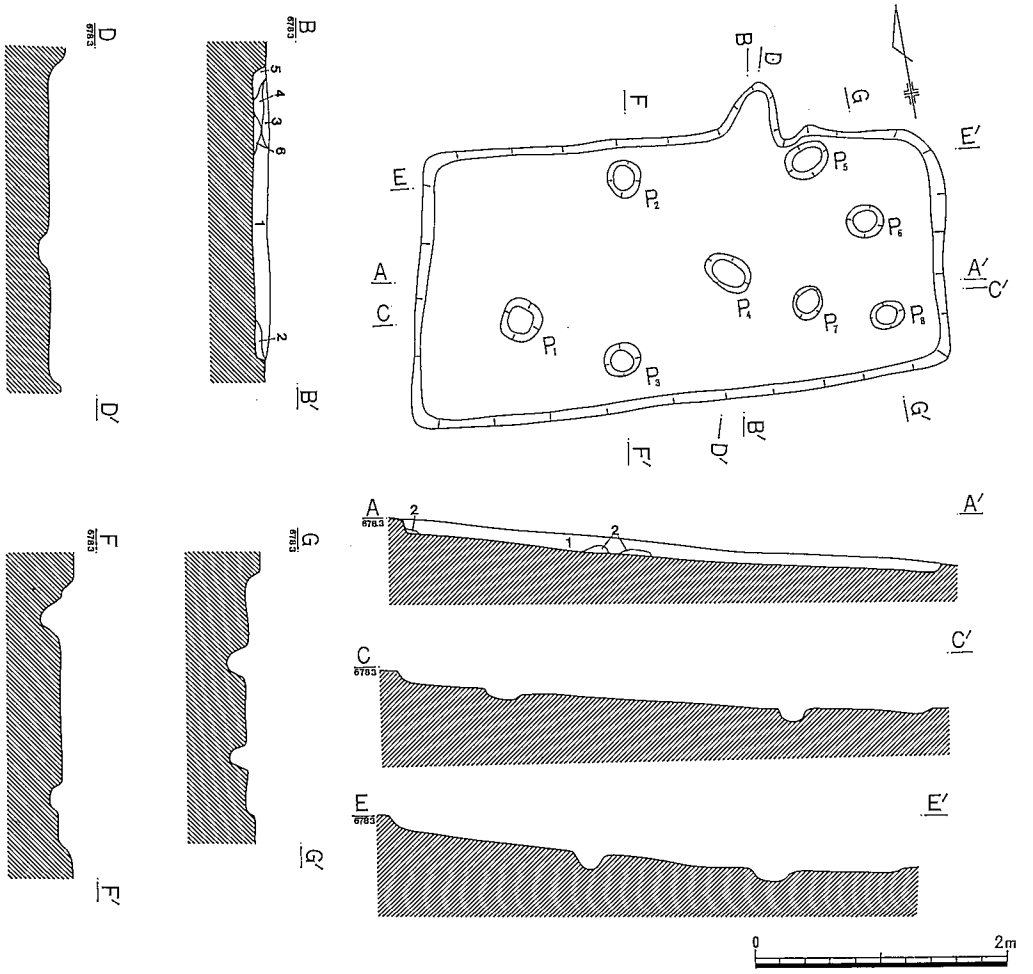
出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・甕の破片が見られた。

〔土層説明〕

第３層　暗褐色土（岩盤粒子を斑に含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）



第31図　第９号住居跡出土遺物（1/3）



第32図　第10号住居跡実測図（1/60）

第４層　暗褐色土（岩盤ブロックを多量に含む。）
第７層　暗茶褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土粒子を多量に含む。）
第８層　暗褐色土（焼土ブロック・粒子を多量に含む。炭化物を多く含む。）
第９層　暗褐色土（岩盤粒子を斑に含む。焼土粒子を多く含む。炭化物を少量含む。）
第10層　暗茶褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土粒子を多量に含む。）
第11層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

遺物（第31図）

１・２は須恵器坏の底部破片である。１は推定底径約6.2cm、実測部分の残存率は約20％である。腰部がわずかに張る。右回転のロクロ成形で、外底部は回転糸切痕が認められる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。２は高台付坏で、推定底径約7.7cm、実測部分の残存率は約16％である。高台は「ハ」の字に開き、端部は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、高台脇はナゾリが施される。暗茶褐色を呈し、微砂粒を含む。胎土の含有鉱物の溶解が見られ、焼成温度は高いと思われる。３は土師器甕の底部破片である。推定底径9.6cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。外底面にはナデ調整が施される。橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。

〈第10号住居跡〉（第32図）

調査区の北東部、G・P－６グリッドで検出され、標高678ｍに位置する。第８号住居跡の南側に近接する。長方形プランを呈し、東西は4.2ｍ、南北2.15ｍ、深さ0.1～0.08ｍを測る。主軸はＮ－15°－Ｅである。北辺の東寄りにカマドが付設される。袖はほとんど検出できなかったが、底面は被熱により赤変する。

床面は岩盤まで掘り込まれ、東にわずかに傾斜する。柱穴は８基検出された。P_1は35cm×33cm、深さ６cmである。P_2は29cm×27cm、深さ13cmである。P_3は31cm×27cm、深さ９cmである。P_4は37cm×28cm、深さ11cmである。P_5は36cm×29cm、深さ11cmである。P_6は29cm×27cm、深さ14cmである。P_7は26cm×25cm、深さ８cmである。P_8は27cm×21cm、深さ13cmである。

出土遺物は須恵器、土師器の砕片がわずかに出土したのみである。

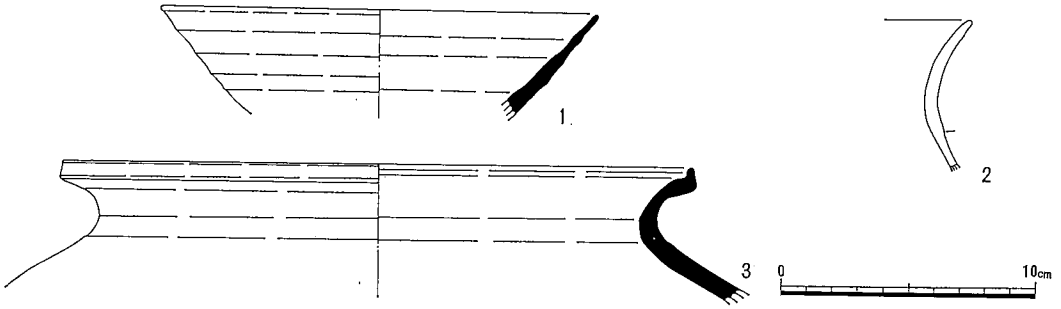
〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）
第２層　岩盤ブロック
第３層　暗茶褐色土（焼土ブロック・粒子を多量に含む。）
第４層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子を多量に含む。）
第５層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。しまり弱い。）
第６層　暗褐色土（焼土粒子を多量に含む。粒子細かく、しまり弱い。）

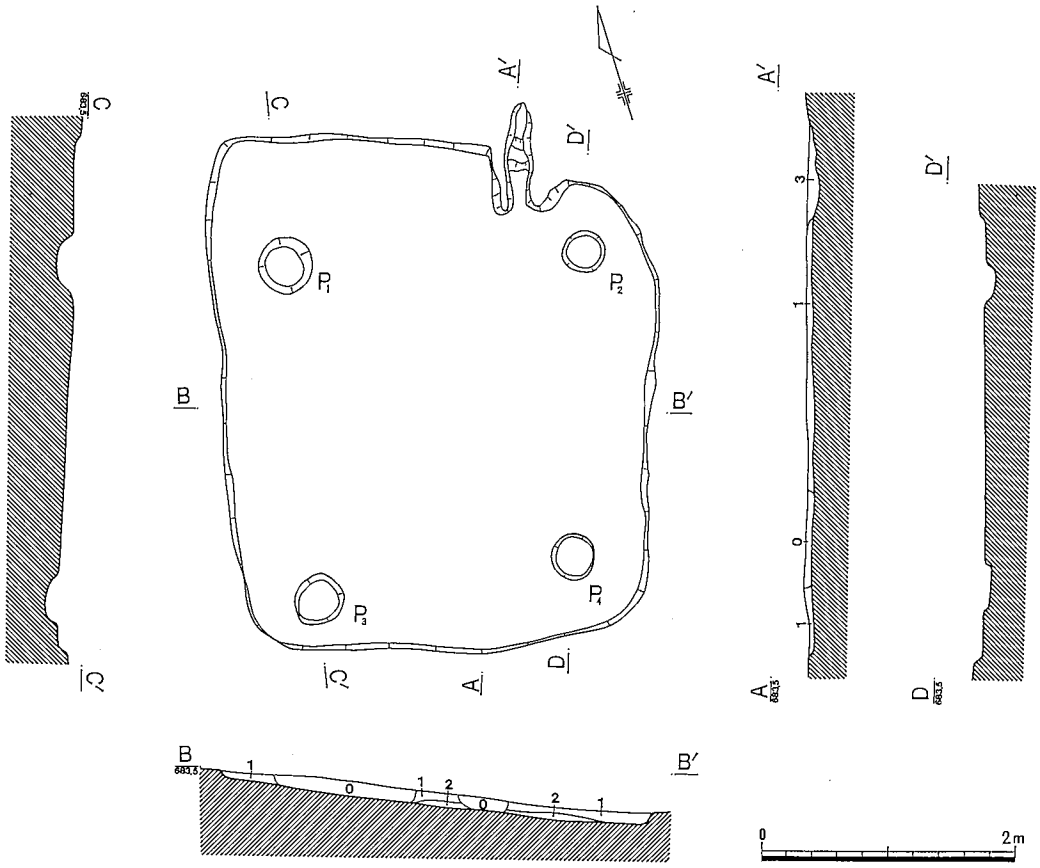
〈第11号住居跡〉

遺構（第20図）

調査区北側のほぼ中央部、Ｉ・Ｊ－２・３グリッドで検出され、標高681ｍに位置する。第４・５号住居跡と重複して検出された。第４・５号住居跡よりも古い。プラン確認時に、カマドの煙道部分が確認されたが、第11号住居跡のプランは、第４・５号住居跡の床面を精査した段階で、初めて



第33図　第11号住居跡出土遺物（1/3）



第34図　第12号住居跡実測図（1/60）

明らかになった。東西2.8～1.8m、南北3.2mと、北辺が長い台形に近いプランを呈し、深さ0.18mを測る。主軸はN－32°－Eである。北辺の西寄りにカマドが付設されるが、袖は判然としなかった。煙道付近は被熱により赤変している。

床面は岩盤まで掘り込まれ、地形に沿って東に向かってわずかに傾斜する。柱穴は2か所確認された。P_1は30cm×28cmの方形プランを呈し、深さ9cmである。P_2は30cm×27cm、深さ8cmである。

出土遺物は、須恵器の坏・甕、土師器の甕の破片が出土した。

〔土層説明〕

第４層　暗褐色土（岩盤ブロックを多量に含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第６層　暗茶褐色土（焼土ブロック・粒子を多量に含む。）

第７層　暗黄褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。やや粘性あり。）

遺物（第33図）

１は須恵器坏の口縁部破片である。推定口径約17.4cm、実測部分の残存率は約７％である。逆「ハ」の字に外反し、口端は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、ロクロ痕が顕著である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。２は土師器甕の口縁部破片である。口縁は緩やかに外反する。口縁部はヨコナデ、肩部は縦方向のケズリが施され、器壁は薄い。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。３は須恵器甕の口縁部破片である。推定口径25cm、実測部分の残存率は約16％である。頸部で屈曲し、口縁は受け口状を呈する。暗青灰色を呈し、微砂粒、小石を含む。

〈第12号住居跡〉（第34図）

調査区の西端、Ｃ－６・７グリッドで検出された。標高683.5～683ｍに位置する。北東隅は丸みを帯びるが、概ね方形プランを呈し、東西3.4ｍ、南北4.05ｍ、深さ0.12ｍを測る。主軸はＮ－22°－Ｅである。北辺の東寄りにカマドが付設される。焚口から掛口付近はわずかに深まり、底面は被熱により赤変する。緩やかに立上がり、煙道に至る。

床面には部分的に耕作時のバックホーの爪痕が認められた。柱穴は４か所確認された。P_1は48cm×44cm、深さ15cmである。P_2は34cm×34cm、深さ10cmである。P_3は44cm×39cm、深さ９cmである。P_4は38cm×34cm、深さ８cmである。

出土遺物は、土師器、須恵器の砕片がわずかに出土した程度である。

〔土層説明〕

第０層　畝跡のカクラン

第１層　暗褐色土（岩盤ブロック、炭化物をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤粒子、炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第３層　暗茶褐色土（岩盤粒子をわずかに含む。焼土粒子を多量に含む。炭化物をわずかに含む。）

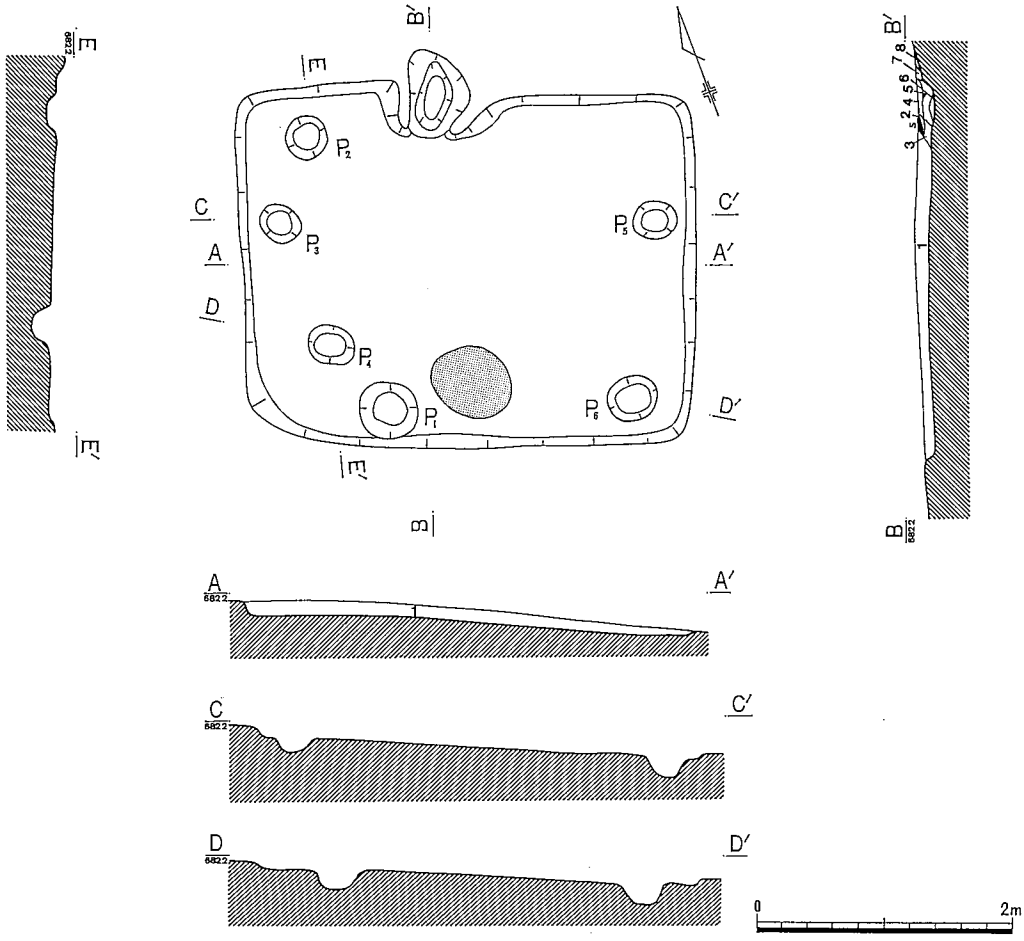
〈第13号住居跡〉

遺構（第35図）

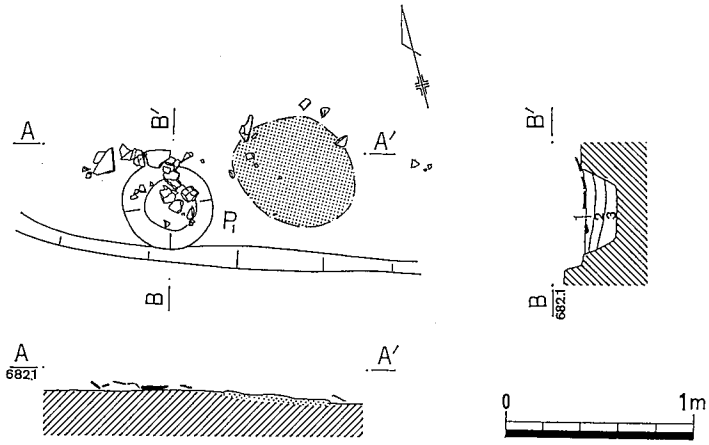
調査区の南西部、Ｅ－８・９グリッドで検出され、標高682ｍに位置する。東西3.6ｍ、南北2.8ｍの東西方向に長い長方形プランを呈し、深さ0.16～0.05ｍを測る。主軸はＮ－22°－Ｅである。北辺の西寄りにカマドが付設される。

床面は東にわずかに傾斜する。柱穴は６基検出された。P_1は48cm×44cm、深さ18cmである。P_2は37cm×33cm、深さ18cmである。P_3は34cm×27cm、深さ12cmである。P_4は40cm×30cm、深さ17cmである。P_5は34cm×30cm、深さ18cmである。P_6は38cm×38cm、深さ17cmである。

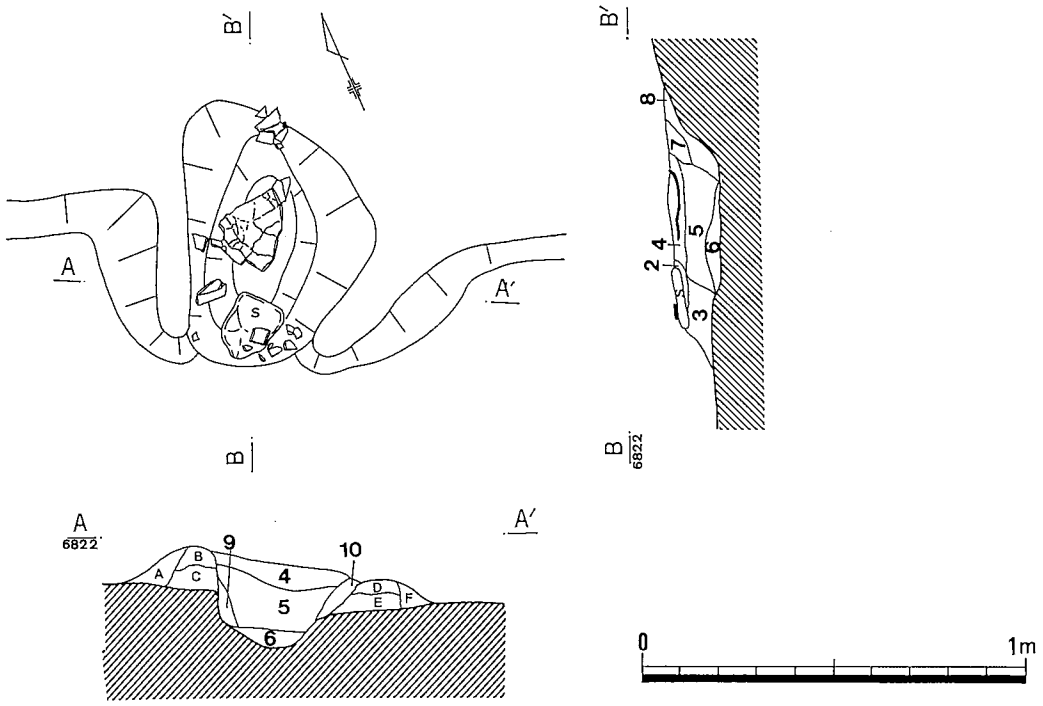
P_1の東側には70cm×60cmの焼土が確認された。長期間に亘って火を受けたと考えられ、火皿状に硬化した面を形成している。また、P_1付近からは、土師器の甕や須恵器の坏の破片がまとめって分布していた（第36図）。小鍛冶の炉床等の可能性が考えられたため、床面の覆土を採取し、磁石で検



第35図　第13号住居跡実測図（1/60）



第36図　第13号住居跡ピット・焼土実測図（1/40）



第37図　第13号住居跡カマド実測図（1/20）

査したが、鍛造剝片等は検出できなかった。

出土遺物は、須恵器の坏・甕、土師器の甕の破片が出土した。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土ブロックを含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第２層　暗茶褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第３層　暗褐色土（焼土粒子を全体に密に含む。炭化物を多く含む。）

第４層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

第５層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。）

第６層　暗茶褐色土（岩盤粒子、焼土粒子を多量に含む。炭化物をわずかに含む。）

第７層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子をわずかに含む。）

第８層　暗褐色土（岩盤ブロック、焼土粒子、炭化物を多く含む。）

〔P_1土層説明〕

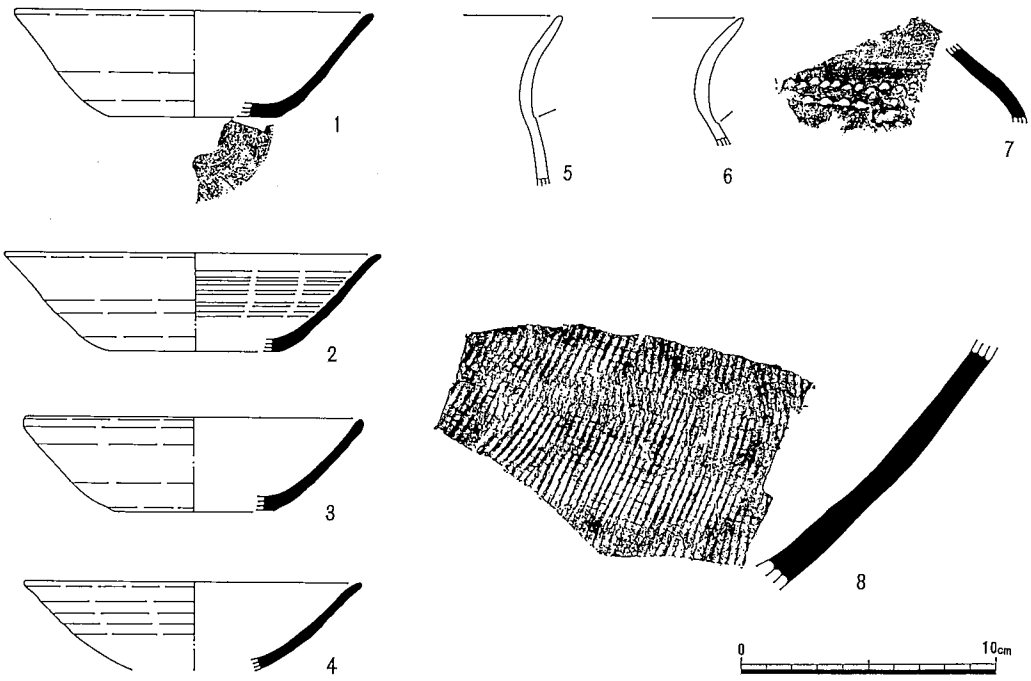
第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。焼土粒子をわずかに含む）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を含む。）

第３層　暗褐色土（岩盤粒子を斑に含む。炭化物をわずかに含む。）

カマド（第37図）

カマドは住居北辺のやや西寄りに位置し、袖は岩盤ブロックで構成する。焚口部分には偏平な円



第38図　第13号住居跡出土遺物（1/3）

礫を配して天井部を構築したと思われる。掛口から煙道に至る部分には土師器甕の胴部破片が内面を上に向けて置かれていた。煙道天井部の補強材か、カマド廃棄時に置かれたものかは判然としない。

〔土層説明〕

第９層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）

第10層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子主体でガリガリしている。）

第Ａ層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、暗黄褐色土粒子を全体に含む。）

第Ｂ層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、暗黄褐色土粒子を全体に含む。）

第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を全体に含む。）

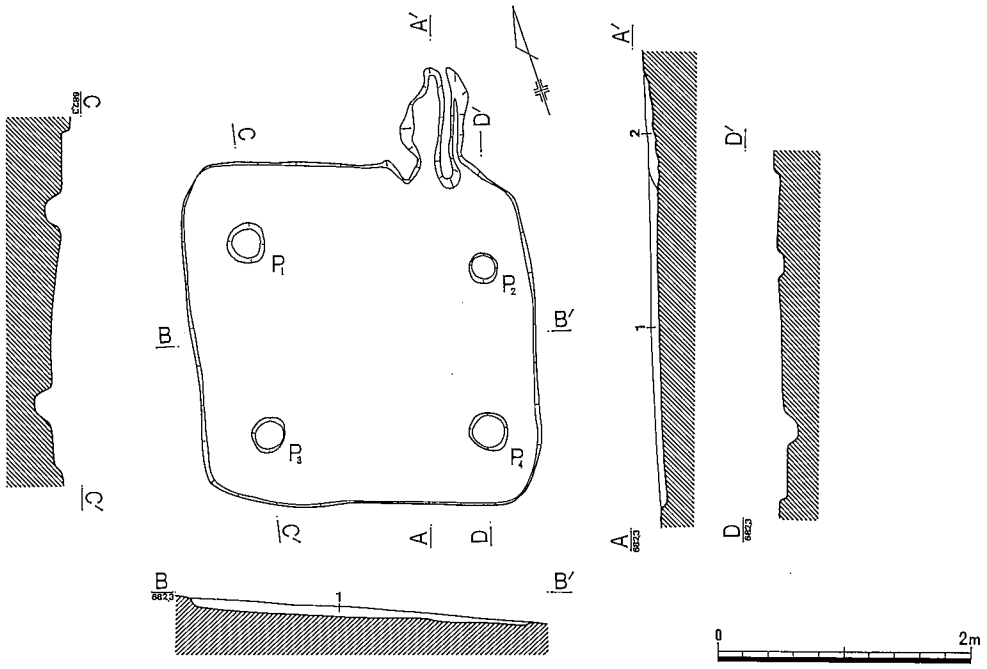
第Ｄ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。焼土粒子、暗黄褐色土粒子をわずかに含む。）

第Ｅ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を多く含む。暗黄褐色土粒子をわずかに含む。）

第Ｆ層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、暗黄褐色土粒子を全体に含む。）

遺物（第38図）

１～４は須恵器の坏である。１は推定口径約14.2cm、実測部分の残存率は約20％である。底部から逆「ハ」の字に外反し、腰部はわずかに丸みを帯びる。口端は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。P_1出土。２は推定口径約14.8cm、実測部分の残存率は約20％である。逆「ハ」の字に外反し、口端は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、内面はロクロ痕が顕著である。外底部には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。３は推定口径約13.4cm、実測部分の残存率は約50％で



第39図　第14号住居跡実測図（1/60）

ある。逆「ハ」の字に外反し、口端は肥厚して直立する。右回転のロクロ成形で、器面は平滑である。外底部には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒を含む。４は推定口径約13.4cm、実測部分の残存率は約25％である。体部は逆「ハ」の字に外反し、口端は丸みを帯びて外反する。右回転のロクロ成形で、ロクロ痕が顕著である。

青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。５・６は土師器甕の口縁部破片である。共に口縁部ヨコナデ、肩部外面は横歩行のヘラケズリが施される。微砂粒を多量に含み、暗橙褐色を呈する。「コ」の字状口縁の甕形土器の系統であろう。７は須恵器壺の肩部破片である。肩部に２列の列点文を巡らせる。外面には自然釉が認められる。暗青灰色を呈し、微砂粒を含む。８は須恵器甕の胴部破片である。外面には平行叩き、内面には指ナデ調整が認められる。青灰色を呈し、微砂粒を多く含む。

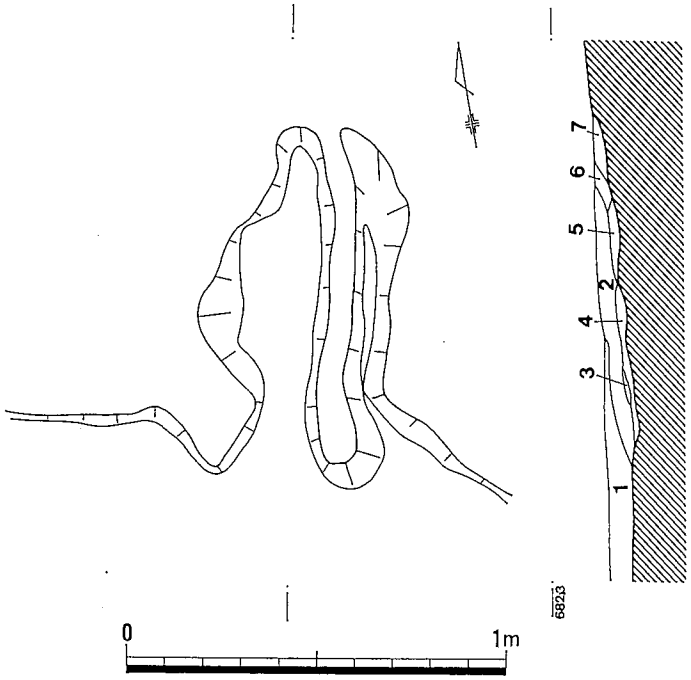
〈第14号住居跡〉

遺構（第39図）

調査区中央部のやや西寄り、Ｆ－６グリッドで検出された。第３号住居跡の南側約７ｍに位置する。標高682.5～682ｍに立地する。方形プランを呈し、東西2.7ｍ、南北2.7ｍ、深さ0.08ｍを測る。主軸方向はＮ－10°－Ｅである。カマドは北辺の東寄りに付設される。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は４か所検出された。P_1は33cm×30cm、深さ15cmである。P_2は24cm×24cm、深さ７cmである。P_3は33cm×27cm、深さ９cmである。P_4は32cm×29cm、深さ８cmである。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・甕、砥石が見られた。



第40図　第14号住居跡カマド実測図（1/20）

〔土層説明〕
第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）
第２層　カマド覆土

カマド（第40図）

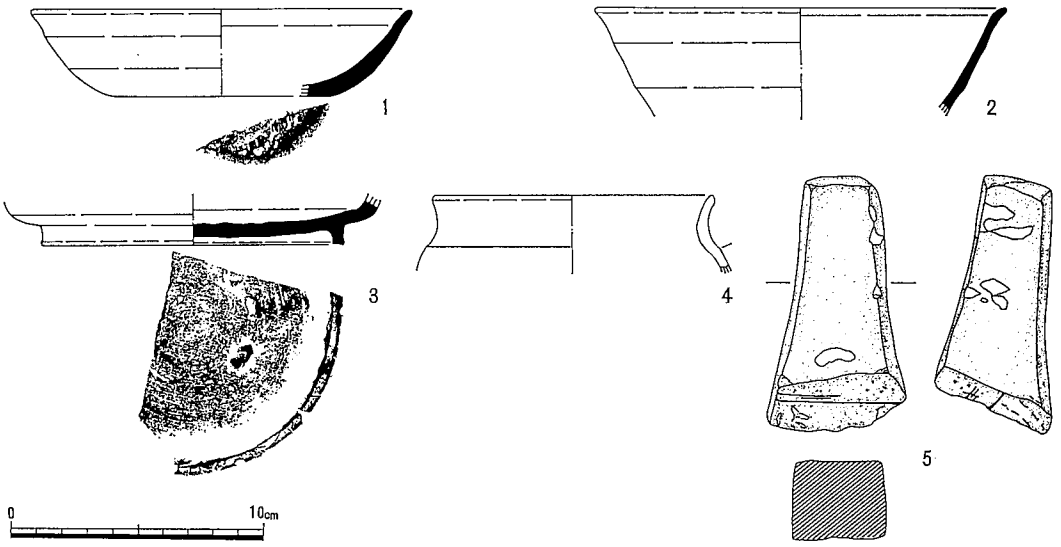
住居北辺の東寄りに位置する。東側の袖はカクランによって変形しているが、概ねカマドの形が理解できよう。焚口から掛口部分は、底面が岩盤面に達し、わずかに深まる。底面は被熱により赤変する。底面はわずかな段をもって煙道部が伸びている。

〔土層説明〕
第１層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）
第２層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子を全体に含む。）
第３層　暗茶褐色土（焼土ブロック）
第４層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に多く含む。ややしまり弱い。）
第５層　暗褐色土（岩盤粒子をわずかに含む。炭化物、焼土粒子を多くに含む。）
第６層　暗褐色土（岩盤粒子、炭化物をわずかに含む。焼土粒子を多く含む。）
第７層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

遺物（第41図）

１～３は須恵器の坏である。１は推定で口径15.2cm、器高3.5cm、底径8.7cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。底部から丸みを帯びて立上がり、口端はわずかに外反する。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が顕著に認められる。２は推定口径16.2cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。腰部にわずかな丸みを帯びるが、体部は逆全体に逆「ハ」の字に外反する。口端は先細り、わずかに外反する。右回転のロクロ成形である。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。３は高台付坏の底部破片で、推定底径12cm、実測部分の残存率は約30％である。高台は台形で、わずかに開く。端面は中央部が窪み、角は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、外底面には回転ヘラケズリ調整が施され、中央部には回転糸切痕を残す。暗褐色～青灰色を呈し、微砂粒、白色粒子、小石を含む。

４は土師器甕の口縁部破片である。推定口径11.2cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。器面は摩耗が著しく、調整技法は判然としないが、口縁部ヨコナデ、肩部は横方向のヘラケズリと



第41図　第14号住居跡出土遺物（1/3）

思われる。暗褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。５は手持ち型砥石である。長さ10.2cm、幅３～5.5cm、厚さ2.7～4.6cm、重さ262ｇを測る。角柱形で、一端の面が広い。広い端面には線状の使用痕が認められる。

〈第15号住居跡〉

遺構（第42図）

調査区中央部の南寄り、Ｇ・Ｈ－８・９グリッドで検出された。第１号炉の北側約３ｍに位置し、第２号炉と重複する。標高681.5～681ｍに立地する。方形プランを呈し、東西は第２号炉と重複するため正確な規模は不明だが、推定で3.3ｍ、南北3.3ｍ、深さ0.32～0.15ｍを測る。主軸方向はＮ－18°－Ｅである。カマドは北辺の中央に付設される。南西隅はカク乱を受けている。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は７か所検出された。P_1は46cm×38cm、深さ12cmである。P_2は34cm×28cm、深さ15cmである。P_3は25cm×20cm、深さ17cmである。P_4は40cm×37cm、深さ11cmである。P_5は28cm×27cm、深さ10cmである。P_6は36cm×32cm、深さ９cmである。P_7は36cm×34cm、深さ11cmである。

中央寄り南に寄った床面に、80cm×70cmの範囲で焼土面が確認された。周辺の土を採取し、磁石で検査したが、鍛造剝片等は検出されなかった。また、土層断面の観察では、本住居跡の覆土を掘り込んだ位置に当たるため、住居跡とこの焼土は時期差が存在する可能性がある。また、土層断面の観察では、第２号炉よりも後に本住居跡が構築されたと考えられる。

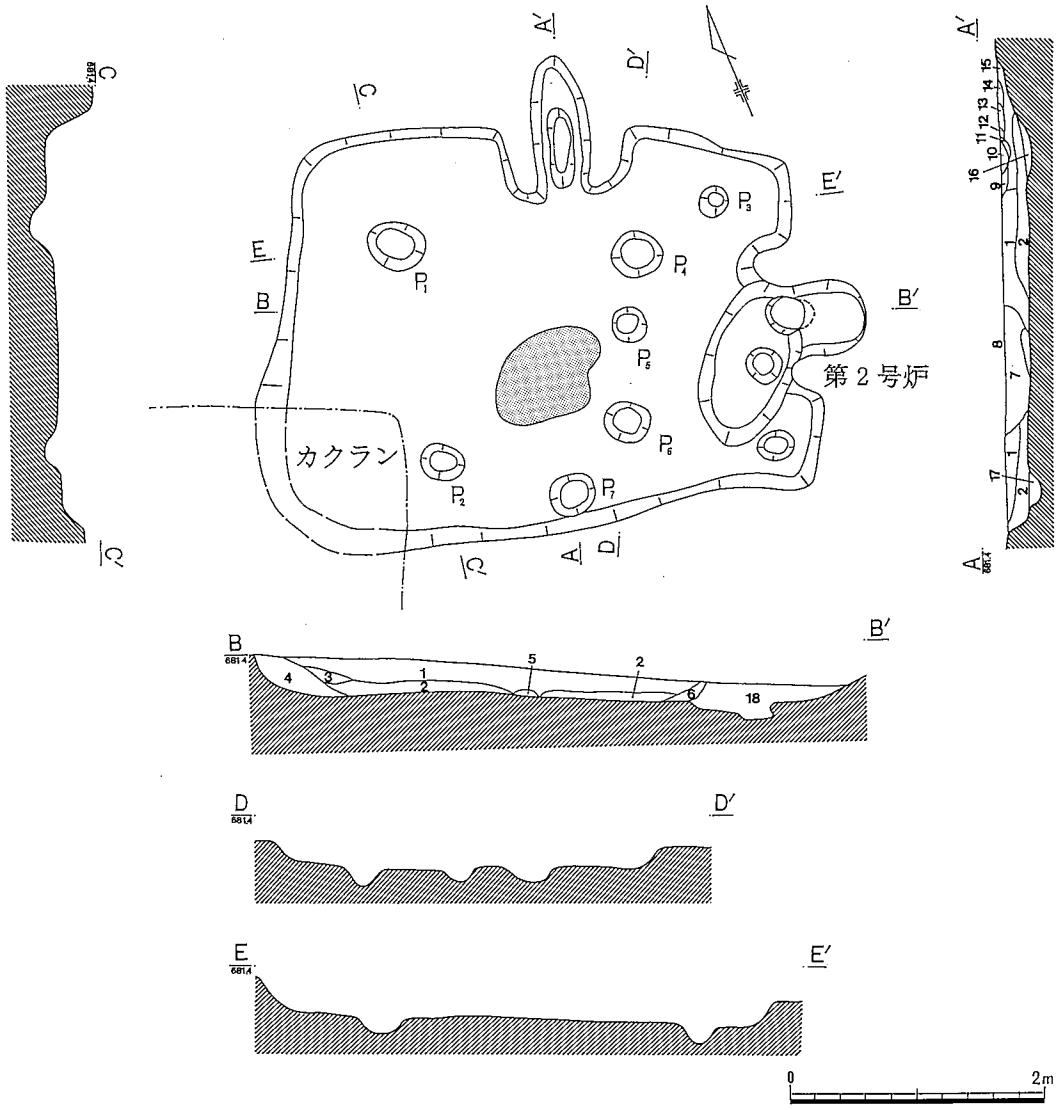
出土遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕の破片が多く見られた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子、炭化物を含む。）

第３層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土粒子を含む。）



第42図　第15号住居跡実測図（1/60）

第４層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土粒子を斑に含む。）

第５層　暗黄褐色土（岩盤粒子を多量に含む。）

第６層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第７層　暗褐色土（岩盤ブロック、暗黄褐色土粒子を全体に含む。炭化物、焼土粒子を少量含む。）

第８層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。）

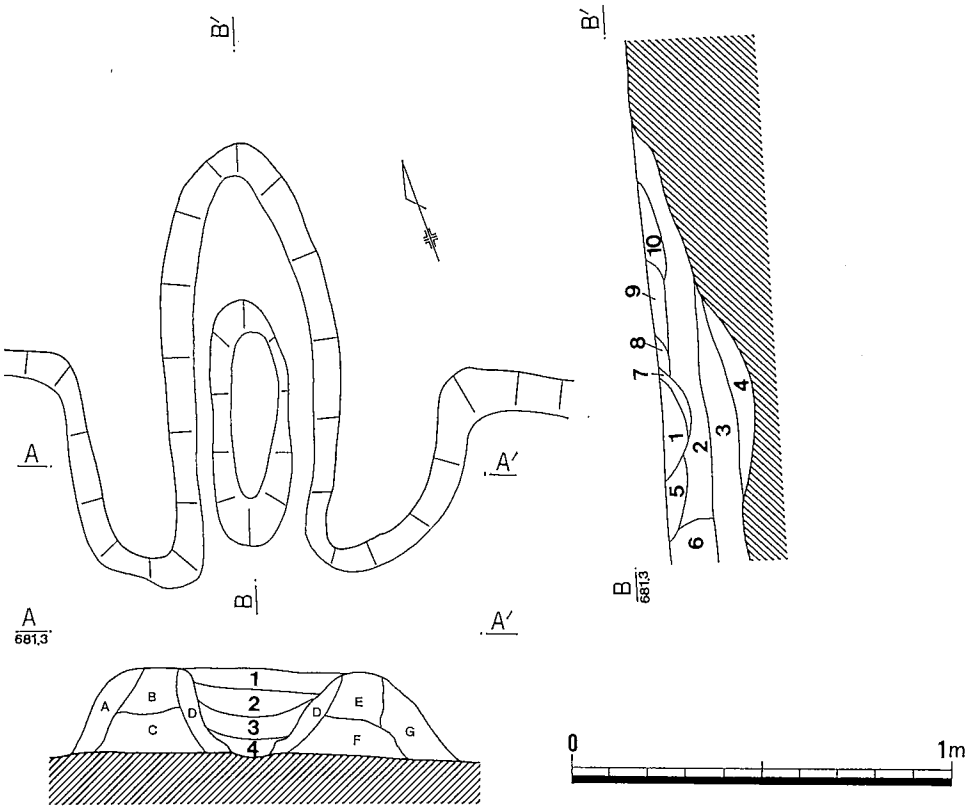
第９層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第10層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第11層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒子を多量に含む。）

第12層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子を含む。）

第13層　黒褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物、焼土粒子を全体に含む。）



第43図　第15号住居跡カマド実測図（1/20）

第14層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第15層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。岩盤ブロックわずかに含む。）

第16層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第17層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。ピット７の覆土）

第18層　第２号炉覆土

カマド（第43図）

住居北辺の中央部に位置する。焚口から掛口部分は、底面が岩盤面に達し、中央部分が一段深まる。底面及び内壁面は被熱により赤変する。底面から段をもって煙道部へ伸びている。

〔土層説明〕

第１層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。岩盤ブロックわずかに含む。）

第３層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子、炭化物を含む。）

第４層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。）

第５層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第６層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）

第７層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒子を多量に含む。）

第８層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子を含む。）

第９層　黒褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物、焼土粒子を全体に含む。）
第10層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ａ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）
第Ｂ層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｄ層　暗茶褐色土（焼土粒子、焼けた岩盤ブロックを多く含む。）
第Ｅ層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｆ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｇ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）

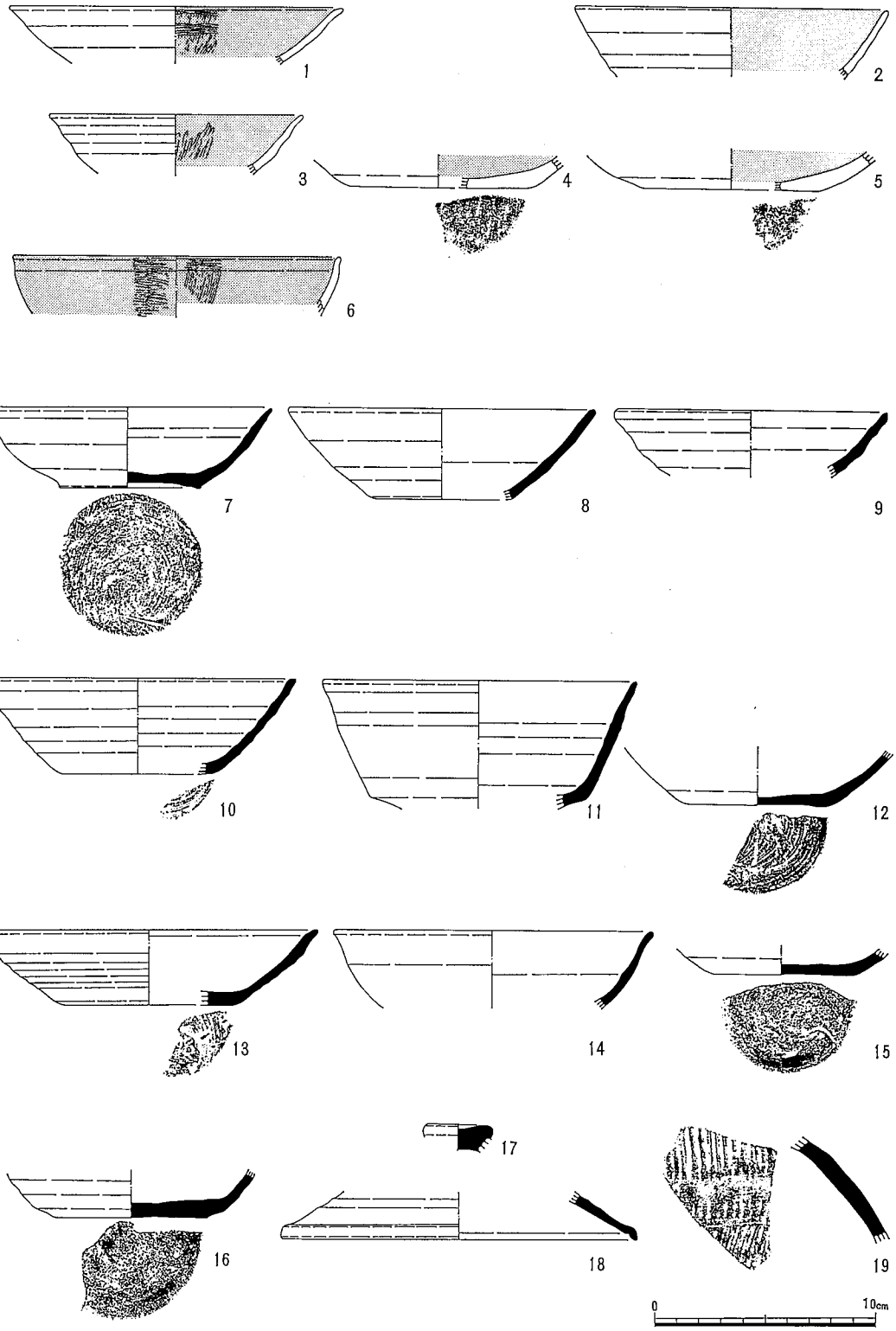
遺物（第44・45図）

第44図１～５は、土師器の坏である。１は推定口径15.4cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。逆「ハ」の字に立上がり、口端は外反する。内面は縦・横方向のミガキ調整される。外面暗黄褐色、内面は黒色処理され、器面は滑沢を有する。胎土に微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。２は推定口径14.4cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。右回転のロクロ成形で、体部はわずかに丸みを帯びる。内面は黒色処理が施されたと思われるが、二次焼成を受け赤変する。胎土に微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。３は推定口径11.7cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。逆「ハ」の字に立上がり、口縁は大きく外反する。右回転のロクロ成形で、外面にはロクロ痕が顕著である。内面は縦方向のミガキが雑に認められる。外面は暗黄褐色から黒褐色、内面は黒色処理が施される。胎土に微砂粒、角閃石を含む。４は推定底径8.2cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。外底部はケズリが施される。外面は暗褐色、内面は黒色処理が施される。胎土に微砂粒、角閃石を含む。５は推定底径８cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。外底部はケズリが施される。外面は暗赤褐色、内面は黒色処理が施される。胎土に微砂粒、角閃石を含む。

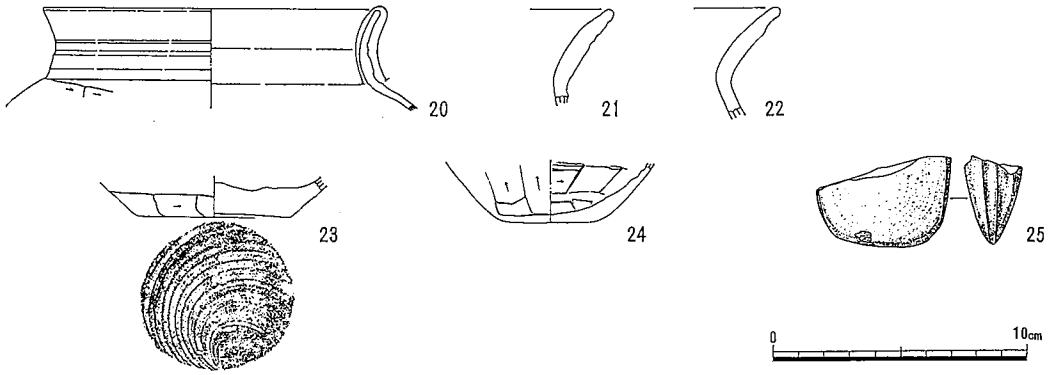
６は黒色土器で、推定口径15.1cmを測り、実測部分の残存率は約９％である。体部は丸みを帯びて立上がり、口端は外反する。内外面はミガキが施される。器面は黒色処理され、滑沢を有する。胎土に微砂粒を含む。

７～16は須恵器の坏である。７は口径13.4cm、器高3.6cm、底径6.5cmを測り、実測部分の残存率は約70％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。腰部が張り、丸みを帯びて立上がり、口端はわずかに外反する。暗青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。８は推定で口径14.2cm、器高4.1cm、底径6.4cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。逆「ハ」の字に外反し、体部上半で丸みを帯びて立上がる。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。９は推定口径12.6cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。逆「ハ」の字に外反し、口端は直立する。右回転のロクロ成形で、器面にはロクロ目が顕著である。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。10は推定で口径14.4cm、器高4.4cm、底径７cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。

右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。逆「ハ」の字に外反し、口端は先細る。暗青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が顕著に認められる。11は推定口径14.5cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。見込みの深い形態で、腰部が張り、体部は



第44図　第15号住居跡出土遺物(1)（1/3）



第45図　第15号住居跡出土遺物(2)（1/3）

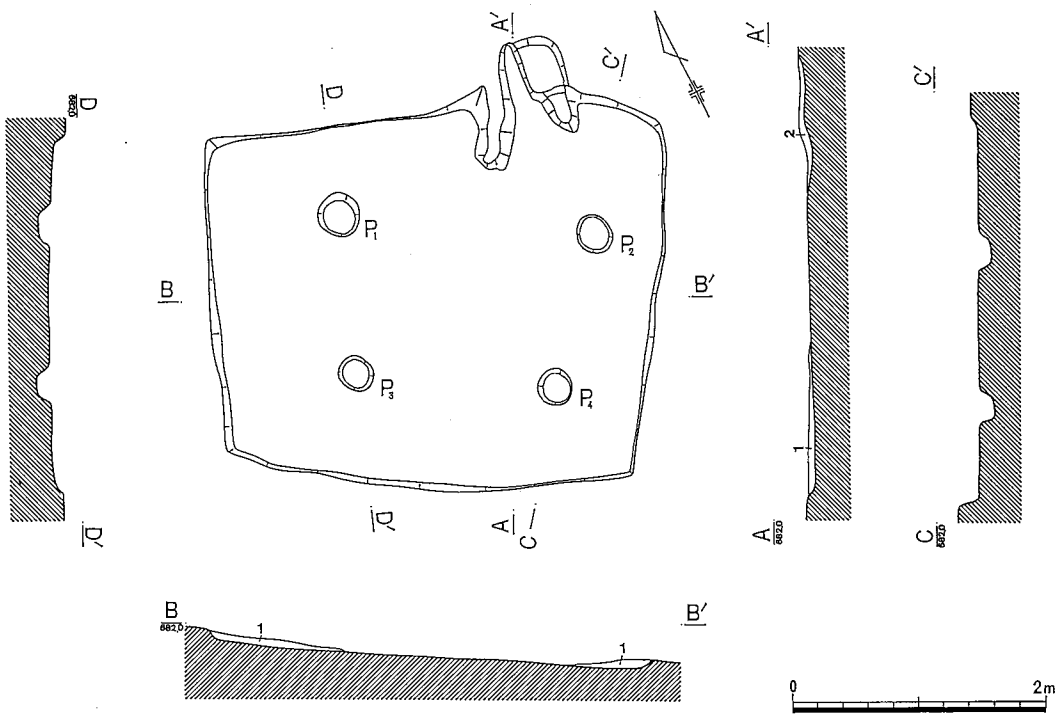
直線的に立ち上がる。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。12は推定底径6.8cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。13は推定で口径15.6cm、器高3.5cm、底径８cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。逆「ハ」の字に立上がり、口端は外反する。体部下半にはロクロ痕が顕著に見られる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。

14は推定口径14.7cmを測り、実測部分の残存率は約14％である。右回転のロクロ成形で、体部は丸みを帯び、口端は外反する。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。15は推定底径6.4cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。16は推定底径７cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、外底部は回転糸ヘラナデ調整が施される。青灰色から暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を含む。

17・18は須恵器の蓋である。17はボタン状のツマミで、中央部が窪んでいる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。18は推定口径16.4cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。

19は須恵器壺の肩部破片と思われる。外面には平行叩きの後、横方向のナデ調整が施される。暗青灰色を呈し、微砂粒を多く含む。

第45図20～24は、土師器の甕である。20は小型の甕で推定口径13.4cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。頸部が直立し、口縁が外反して「コ」の字状を呈する。頸部には軟質木口状工具による横方向のナデの後、口縁がヨコナデ調整される。肩部は横ケズリが施される。暗茶褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。21は口縁及び肩部に軟質木口状工具による横方向のナデが施される。暗黄褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。22は口縁外面が軟質木口状工具による横方向のナデによって段を有し、頸部直下からケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。23は底径６cmを測る。ロクロ調整が施され、外底面には糸切痕が見られる。底部外周は横方向のケズリが施される。暗黄褐色を呈し、微砂粒、小石を含む。24は推定底径2.8cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。外面は縦方向のケズリ、内面は横方向のヘラナデが見られる。暗茶褐色を呈し、微砂粒を



第46図　第16号住居跡実測図（1/60）

多量に含む。

25は磨製石斧の刃部破片である。現存で長さ3.5cm、幅5.3cm、厚さ2.3cm、重さ55ｇを測る。閃緑岩製。

〈第16号住居跡〉

遺構（第46図）

調査区南端の西寄り、Ｅ・Ｄ－９・10グリッドで検出された。第13号住居跡の南側約４ｍに位置する。標高682ｍに立地する。方形プランを呈し、東西3.6ｍ、南北2.85ｍ、深さ0.1ｍを測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅである。カマドは北辺の東寄りに付設される。

床面は地形に沿って東に傾斜し、確認した段階では、覆土はほとんど残っていなかった。柱穴は４か所検出された。P_1は34cm×34cm、深さ10cmである。P_2は32cm×28cm、深さ９cmである。P_3は29cm×28cm、深さ７cmである。P_4は30cm×28cm、深さ11cmである。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・四耳壺の破片、金属器が見られた。

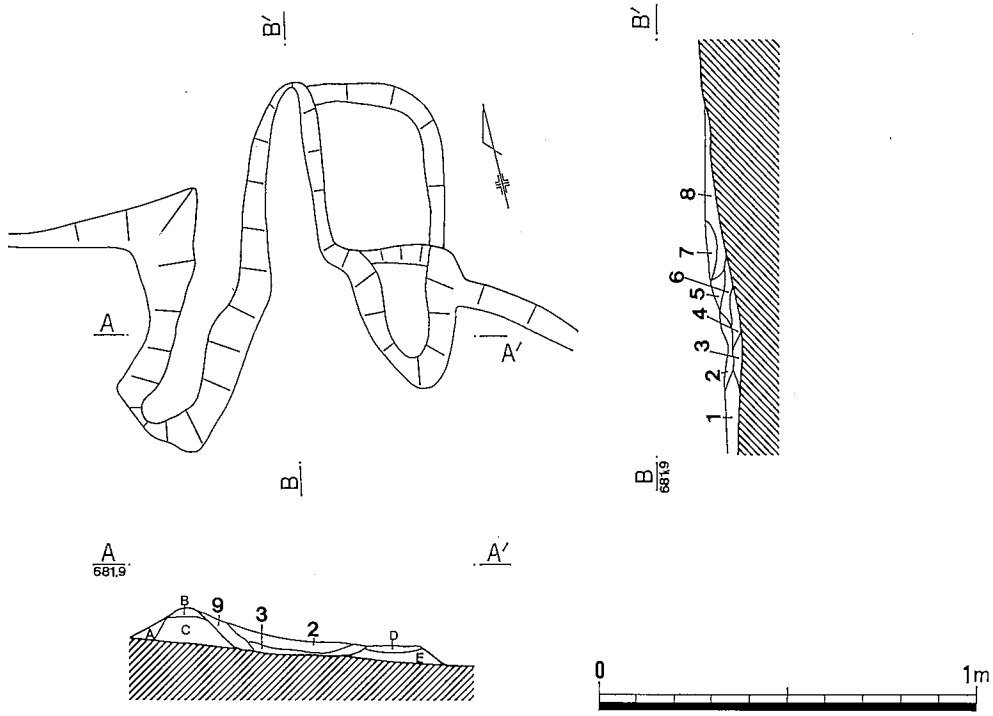
〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤粒子を含む。焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

第２層　カマド覆土

カマド（第47図）

住居北辺の東寄りに位置する。焚口から掛口部分は、底面が岩盤面に達するが、床面とほぼ同じ深さである。底面及び内壁面は被熱により赤変する。底面から段をもって煙道部へ伸びている。



第47図　第16号住居跡カマド実測図（1/20）

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。）

第２層　暗茶褐色土（暗黄褐色土粒子を多く含む。炭化物わずかに含む。）

第３層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を含む。）

第４層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含む。炭化物をわずかに含む。）

第５層　暗褐色土（焼土粒子を全体に含む。炭化物をわずかに含む。）

第６層　暗茶褐色土（焼土ブロック、炭化物を多く含む。）

第７層　暗茶褐色土（焼土粒子を多く含む。炭化物をわずかに含む。）

第８層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物をわずかに含む。）

第９層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子を多く含む。）

第Ａ層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）

第Ｂ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）

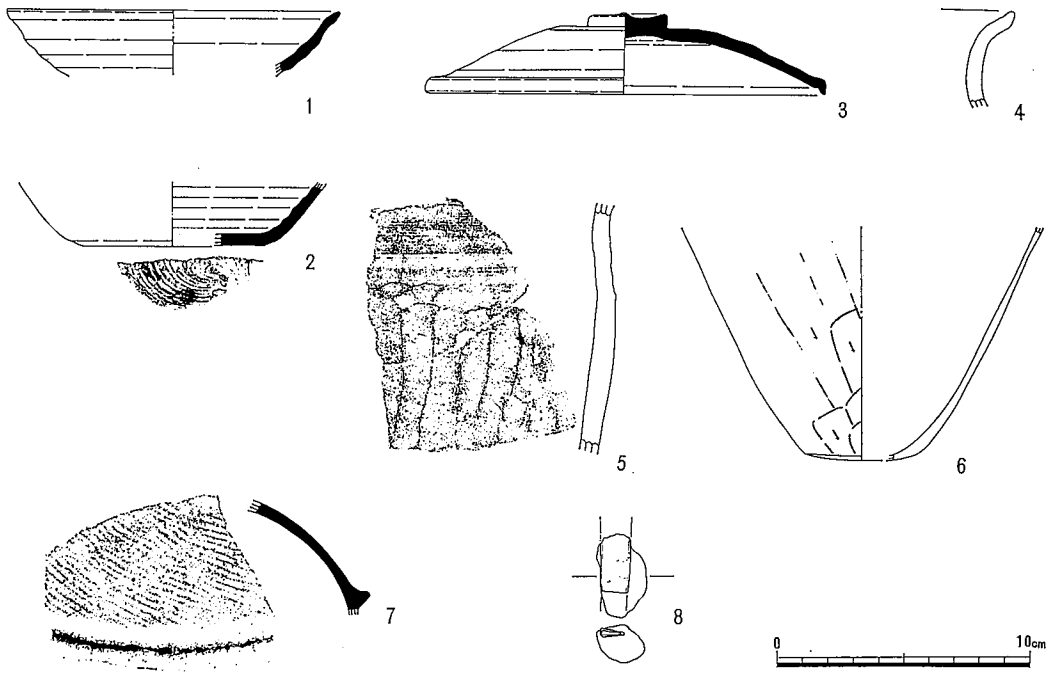
第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）

第Ｄ層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第Ｅ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。）

遺物（第48図）

１・２は須恵器の坏である。１は推定口径13.2cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。丸みを帯びて立上がり、口縁は外反し、口端は先細る。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。２は推定底径7.2cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回



第48図　第16号住居跡出土遺物（1/3）

転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

３は須恵器の蓋である。口径15.9cm、器高3.3cm、天井部径5.4cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。天井部にはボタン状のツマミが貼付され、中央部は突出する。右回転のロクロ成形で、天井部には回転ヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。中心を通って交差する火襷が認められる。

４～６は土師器の甕である。４は頸部が直立し、口縁が外反する「コ」の字状を呈する。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。５は頸部から胴部の破片である。頸部には軟質木口状工具による横方向のナデ、胴部は縦方向（上から下）のヘラケズリが見られる。暗橙褐色を呈し、微砂粒、小石を多く含む。６は推定底径4.6cmを測り、実測部分の残存率は約18％である。胴部には縦方向のケズリが見られる。外底部は丸みを帯び、ケズリ調整が施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、小石を多く含む。

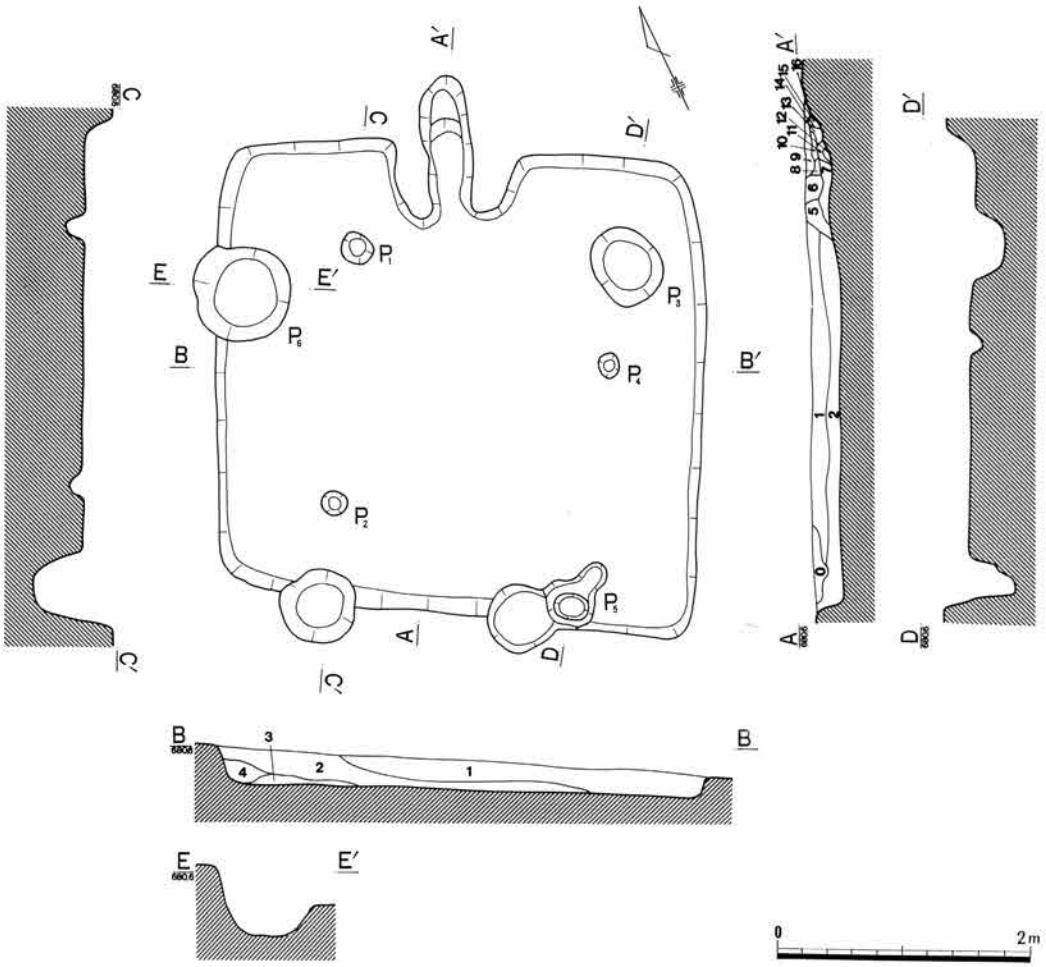
７は須恵器の壺で、四耳壺の肩部破片と思われる。肩部には鍔状の突帯が巡り、肩部には叩き目が認められる。暗青灰色を呈し、微砂粒を多く含む。

８は鉄製品である。全体に錆瘤が発達している。刀子の断片であろう。金属部の現存で長さ2.2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ7.4ｇを測る。

〈第17号住居跡〉

遺構（第49図）

調査区の中央部、Ｉ・Ｊ－７・８グリッドで検出された。標高680.5ｍに立地する。標高680.5ｍに立地する。方形プランを呈し、東西3.9ｍ、南北3.7ｍ、深さ0.3ｍを測る。主軸方向はＮ－22°－Ｅである。カマドは北辺の中央部に付設される。比較的残りの良い住居である。



第49図　第17号住居跡実測図（1/60）

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は6か所検出された。P_1は27cm×25cm、深さ20cmである。P_2は21cm×20cm、深さ11cmである。P_3は64cm×53cm、深さ26cmである。P_4は20cm×17cm、深さ10cmである。P_5は30cm×25cm、深さ14cmである。P_6は75cm×75cm、深さ25cmである。第7号掘立建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。本住居跡を確認した段階では第7号掘立建物跡の柱穴は確認されていないことから、本住居跡の方が新しい可能性がある。また、P_5・P_6は、本住居跡の柱穴とは別の遺構の可能性が高い。出土遺物は、カマドの東側を中心に須恵器の坏・蓋、土師器の甕がまとまって出土した（第51図）。

〔土層説明〕

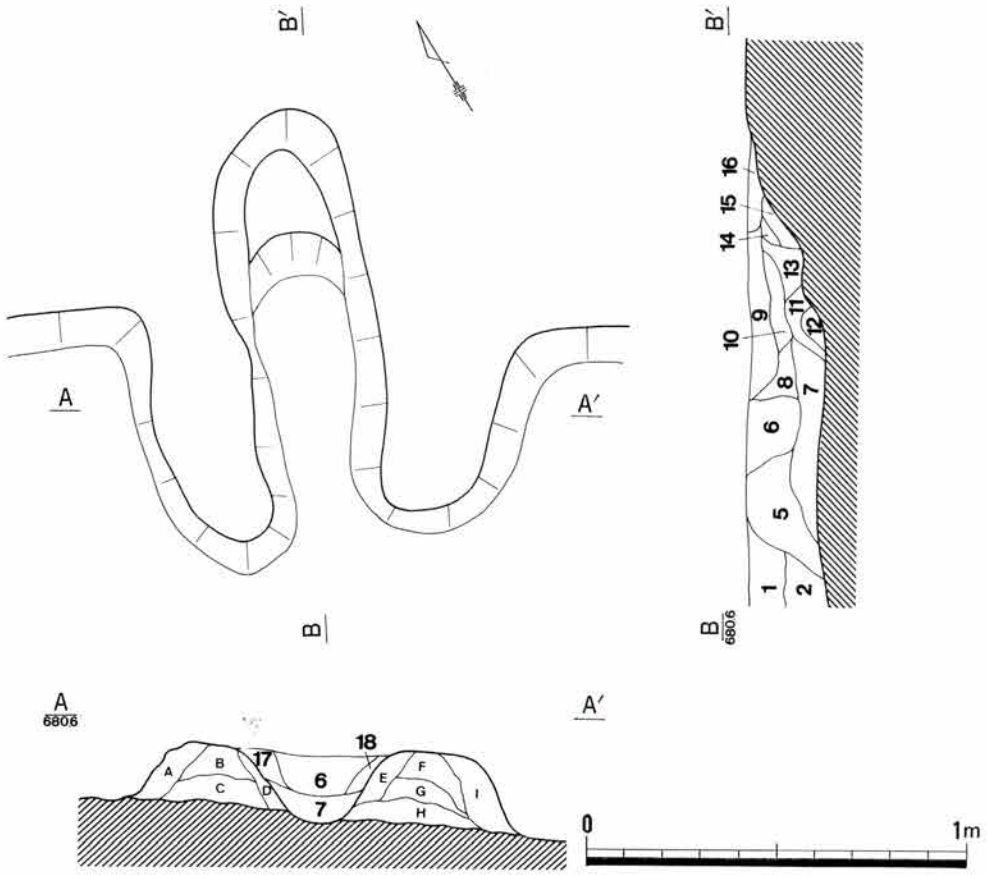
第0層　耕作によるカク乱。

第1層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。焼土粒子を含む。）

第2層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。岩盤ブロックをわずかに含む。）

第3層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。岩盤粒子をわずかに含む。）

第4層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を多く含む。）



第50図　第17号住居跡カマド実測図（1/20）

第５層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を全体に含む。）

第６層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を全体に含む。第５層より色調明るい。）

第７層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒子を全体に多く含む）

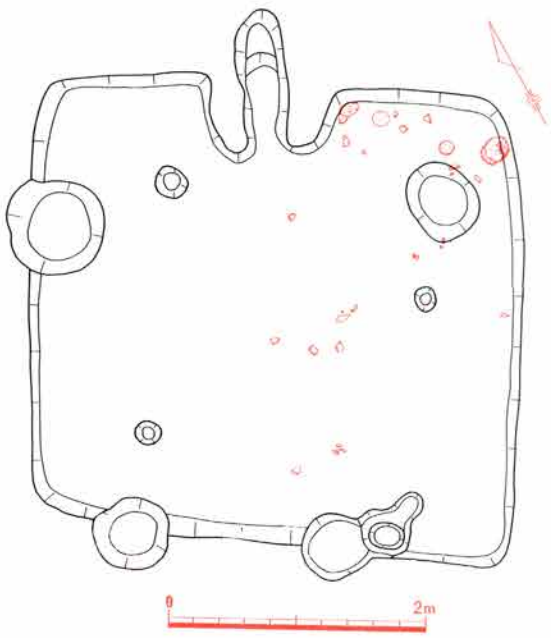
第８層　暗茶褐色土（焼土粒子を多量に含む。）

第９層　暗灰褐色土（焼土粒子をわずかに含む。暗灰褐色粘土主体。カマド天井部。）

第10層　茶褐色土（焼土粒子を多量に含む。）

第11層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に密に含む。）

第12層　暗灰褐色土（焼土粒子をわずかに含む。）



第51図　第17号住居跡遺物出土状況（1/60）▶

第13層　暗灰褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。しまり弱い。）
第14層　焼土ブロック
第15層　暗茶褐色土（焼土粒子を全体に密に含む。）
第16層　暗灰褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。しまり弱い。）

カマド（第50図）

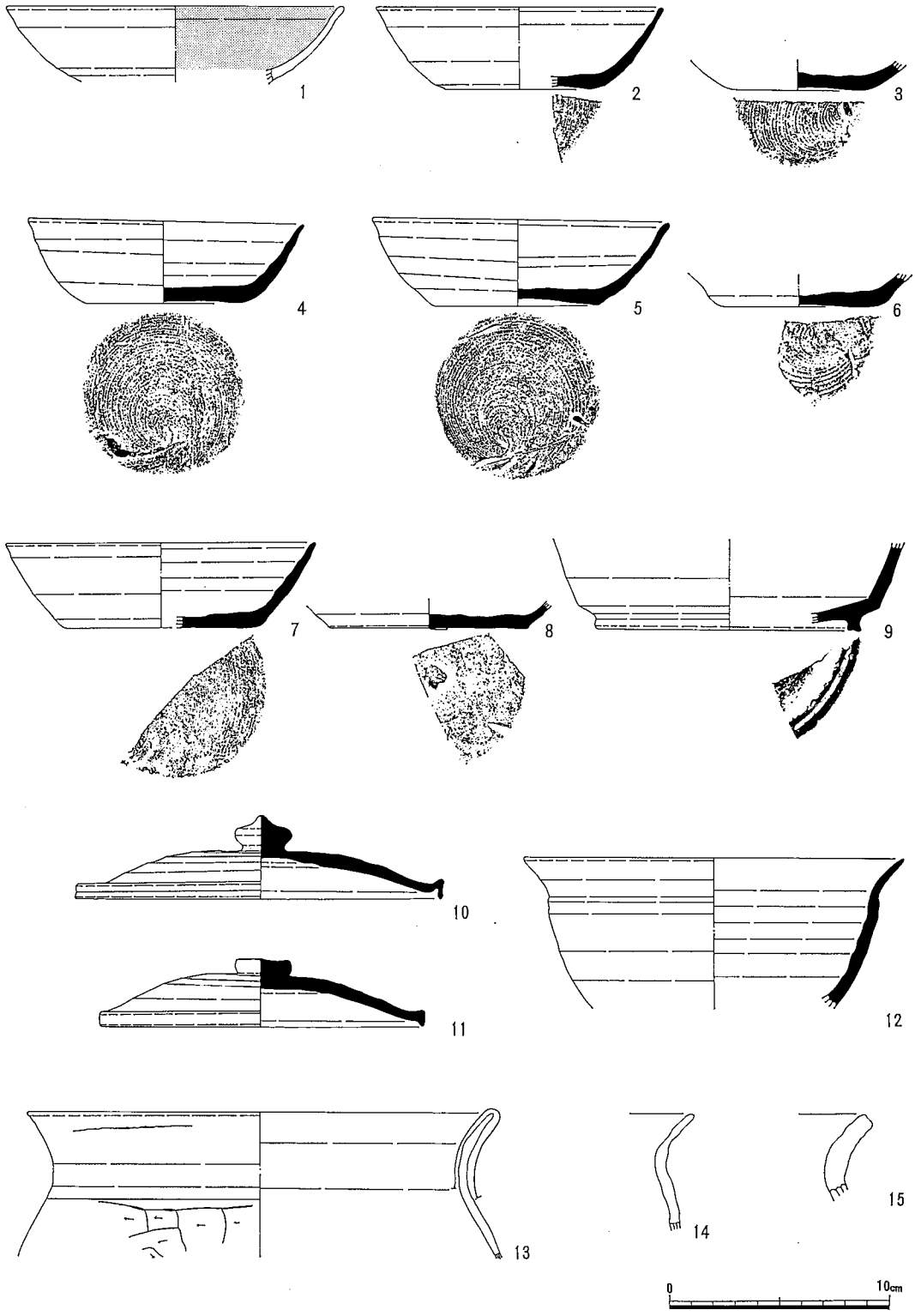
住居北辺の中央部に位置する。底面は床面よりわずかに深まり、段を有して煙道部に至る。カマド内から須恵器の蓋が出土した。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。焼土粒子を含む。）
第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。岩盤ブロックをわずかに含む。）
第５層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を全体に含む。）
第６層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を全体に含む。第５層より色調明るい。）
第７層　暗茶褐色土（炭化物、焼土粒子を全体に多く含む）
第８層　暗茶褐色土（焼土粒子を多量に含む。）
第９層　暗灰褐色土（焼土粒子をわずかに含む。暗灰褐色粘土主体。カマド天井部。）
第10層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含む。）
第11層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に密に含む。）
第12層　暗灰褐色土（焼土粒子をわずかに含む。）
第13層　暗灰褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。しまり弱い。）
第14層　焼土ブロック
第15層　暗茶褐色土（焼土粒子を全体に密に含む。）
第16層　暗灰褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。しまり弱い。）
第17層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に密に含む。）
第18層　暗灰褐色土（焼土粒子を多く含む。暗灰褐色粘土わずかに含む。）
第Ａ層　暗褐色土（焼土粒子、暗灰褐色粘土わずかに含む。土器片わずかに出土。）
第Ｂ層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。）
第Ｄ層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子を多く含む。）
第Ｅ層　暗茶褐色土（焼けた岩盤粒子を多く含む。）
第Ｆ層　暗褐色土（焼土粒子をわずかに含む。岩盤粒子を多く含む。）
第Ｇ層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｈ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。）
第Ｉ層　暗褐色土（焼土粒子、暗灰褐色粘土わずかに含む。）

遺物（第52・53図）

１は土師器の坏である。推定口径15.7㎝を測り、実測部分の残存率は約15％である。丸みを帯びて立上がり、口端は外反する。内面は横方向の研磨が施されるが、口縁部分は擦れている。外面暗



第52図　第17号住居跡出土遺物(1)（1/3）

黄灰色、内面は黒色処理により黒褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を含む。

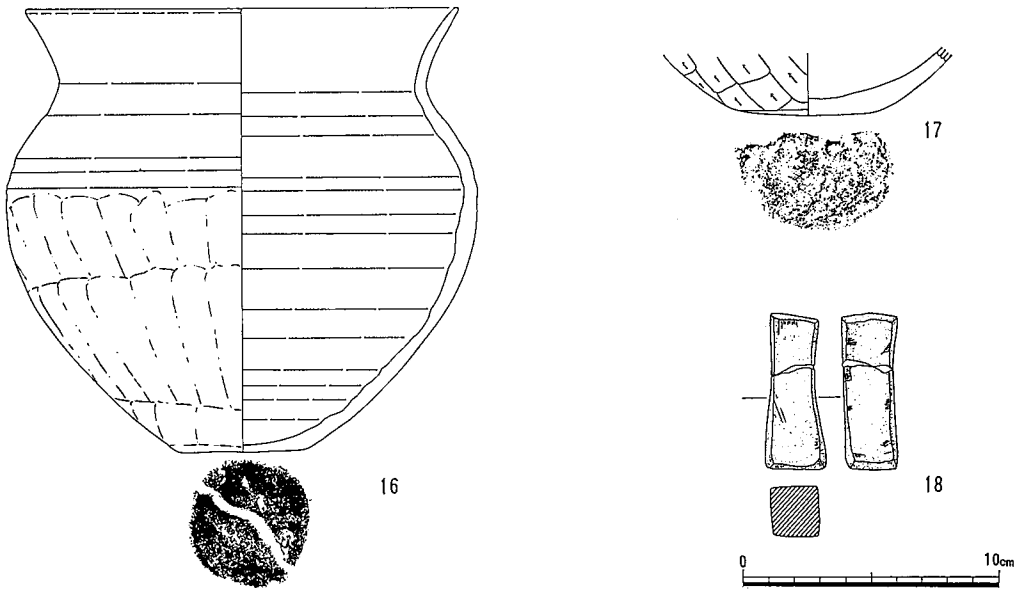
2～9は須恵器の坏である。2は推定で口径13.4cm、器高3.8cm、底径6.8cmを測り、実測部分の残存率は約15%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。全体に丸みを帯びて立上がり、口端は丸い。器面は平滑である。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。3は推定底径6.2cmを測り、実測部分の残存率は約50%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。内定面は中央が高まる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。4は口径12.8cm、器高3.9cm、底径7.2cmを測り、実測部分の残存率は約80%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。腰部が張り、口端はわずかに外反する。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。5は口縁の一部を欠くがほぼ完形で、口径13.8cm、器高4cm、底径7.6cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。全体に丸みを帯びて立上がり、口端は外反する。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。6は推定底径7cmを測り、実測部分の残存率は約30%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

器面には火襷が認められる。7は推定で口径14.4cm、器高3.9cm、底径9cmを測り、実測部分の残存率は約40%である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。腰部がわずかに張るが、体部は全体に直線的に立ち上がる。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。8は推定底径9.2cmを測り、実測部分の残存率は約25%である。右回転のロクロ成形で、外底面は回転ヘラケズリ調整が施される。外底部には粘土片の付着、ヘラの当たりが認められる。外底面の調整は粘土が柔らかい時機に行われたと思われる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。9は高台付坏の底部破片である。推定底径12.4cmを測り、実測部分の残存率は約13%である。腰部がわずかに張るが、直線的に立ち上がる。高台端面は段を持ち、高台脇はナゾリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

10･11は須恵器の蓋である。10は口縁の一部を欠くがほぼ完形で、口径17.2cm、器高3.9cm、天井部径4cm、ツマミの最大幅2.2cmを測る。右回転のロクロ成形で、天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。天井部には擬宝珠状のツマミが貼付される。返りの内面は深く屈折する。暗青灰色を呈し、微砂粒、小石、角閃石を含む。カマド内から出土した。11は完形品で、口径15cm、器高3.2cm、天井部径5cm、ツマミの最大幅2.7cmを測る。右回転のロクロ成形で、天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。天井部にはボタン状のツマミが貼付される。返りの内面は深く屈折する。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。外面には中心で交差する火襷が顕著に認められる。

12は須恵器の鉢と思われる。推定口径17.6cmを測り、実測部分の残存率は約20%である。右回転のロクロ成形で、体部下半は回転ヘラナデ調整が施される。体部は丸みを帯び、口縁は外反する。青灰色を呈し、微砂粒、白色粒子を多く含む。

13～17は土師器の甕である。13は推定口径21.6cmを測り、実測部分の残存率は約18%である。口縁は外反し、頸部は直立気味である。頸部直下には横方向のヘラケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を多く含む。14は小型の甕と思われる。口縁は外反し、頸部は直立する。肩部は横方向のヘラケズリが施される。暗褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を多く含



第53図　第17号住居跡出土遺物(2)（1/3）

む。15は口縁が外反する。外面には軟質木口状工具による横方向のナデ調整が認められ、口端に段を持つ。暗黄褐色を呈し、微砂粒、白色粒子を多く含む。16は口径17.1cm、器高17.6cm、底径4.8cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。口縁は外反し、胴部は丸みを帯びて最大径が中央に位置する。ロクロ調整の甕で、内面にはロクロ痕が顕著に見られる。胴部下半には縦方向のヘラナデが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を多く含む。17は推定底径5.4cmを測り、実測部分の残存率は約50％である。ロクロ調整の甕と思われ、外面及び外底部にはヘラケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、赤色粒子、角閃石を多く含む。

18は手持型の砥石である。角柱形を呈し、現存で長さ6.2cm、幅2.5～1.9cm、厚さ２cm、重さ54ｇを測る。石質は木目細かく、白色を呈する。

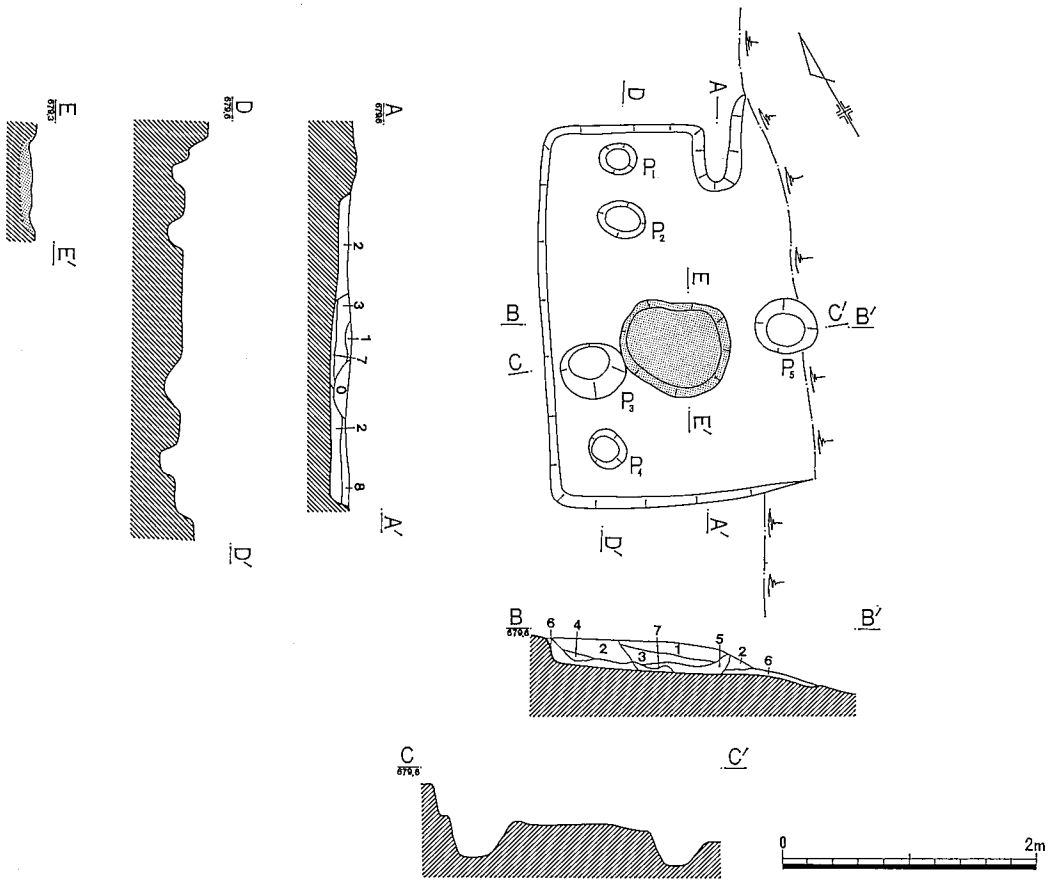
〈第18号住居跡〉

遺構（第54図）

調査区の中央部よりも南東寄り、Ｊ・Ｋ－10・11グリッドで検出された。標高679ｍに立地する。調査前の農道の真下に位置し、東側の立上がりは削られて消失していた。方形プランを呈すると思われ、東西は現存で２ｍ、南北3.1ｍ、深さ0.2ｍを測る。主軸方向はＮ－31°－Ｅである。カマドの位置は北辺の中央部と思われ、西側の袖を検出したのみである。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは無い。柱穴は５か所検出された。P_1は31cm×26cm、深さ13cmである。P_2は40cm×31cm、深さ15cmである。P_3は55cm×45cm、深さ28cmである。P_4は33cm×30cm、深さ16cmである。P_5は50cm×44cm、深さ30cmである。

床面中央のやや南寄りで、90cm×75cmの範囲で焼土が確認された。被熱によって硬化した面は床よりもわずかに深まる。この焼土面の下には構造物は認められず、被熱によって変色・硬化しているのみである。焼土周辺の土を採取し、磁石で検査したが、鍛造剝片等は検出されなかった。また、



第54図　第18号住居跡実測図（1/60）

土層断面の観察では、本住居跡の覆土を掘り込んだ位置に当たるため、住居跡とこの焼土は時期差が存在する可能性がある。また、土層断面の観察では、住居跡埋没後に穴が掘りこまれたと考えられる。

出土遺物は、

〔土層説明〕

第０層　耕作のカク乱。

第１層　黒褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。焼土粒子を含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

第３層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。焼土粒子を含む。）

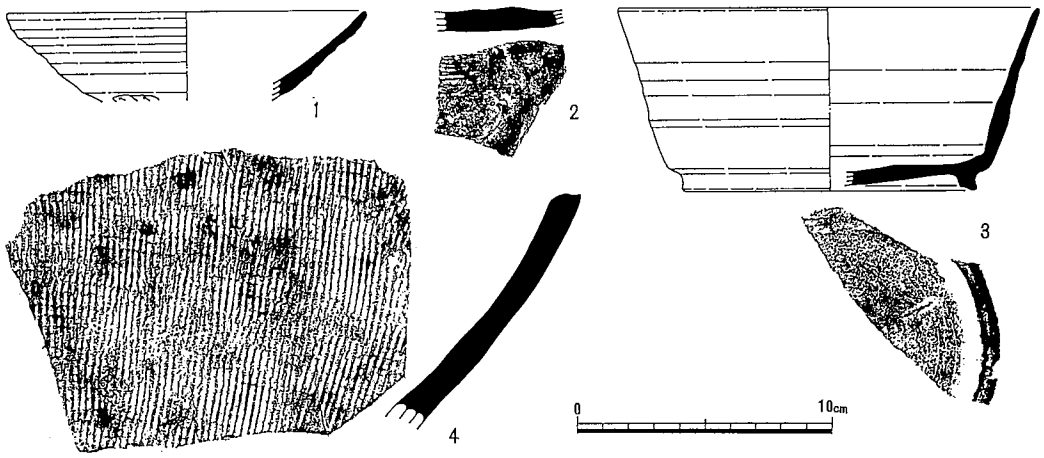
第４層　暗褐色土（暗黄褐色土ブロックを多く含む。）

第５層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物、焼土粒子を多く含む。）

第６層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）

第７層　茶褐色土（焼土ブロック・粒子、炭化物を多く含む。）

第８層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）



第55図　第18号住居跡出土遺物（1/3）

遺物（第55図）

１～３は須恵器の坏である。推定口径14.4cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。体部は逆「ハ」の字に直線的に開き、口端は直立する。右回転のロクロ成形で、外面にはロクロ痕が顕著に見られる。底部外周には手持ちヘラケズリが施される。青灰色から暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。内面には火襷が認められる。２は底部破片である。右回転のロクロ成形で、外底面は糸切後にヘラナデ調整が施され、板目状の圧痕が認められる。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。３は高台付坏である。推定で口径16.7cm、器高7.3cm、底径11.6cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。直線的に立上がり、体部中央にはロクロ痕が顕著に見られる。高台は「ハ」の字に開き、端部は突出する。外底面には回転ヘラケズリ調整が施される。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。器面は自然釉による光沢を帯びる。４は須恵器の大甕の破片である。胴部下半と思われ、粘土接合面で割れている。外面には平行叩き、内面には指ナデ調整が認められる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

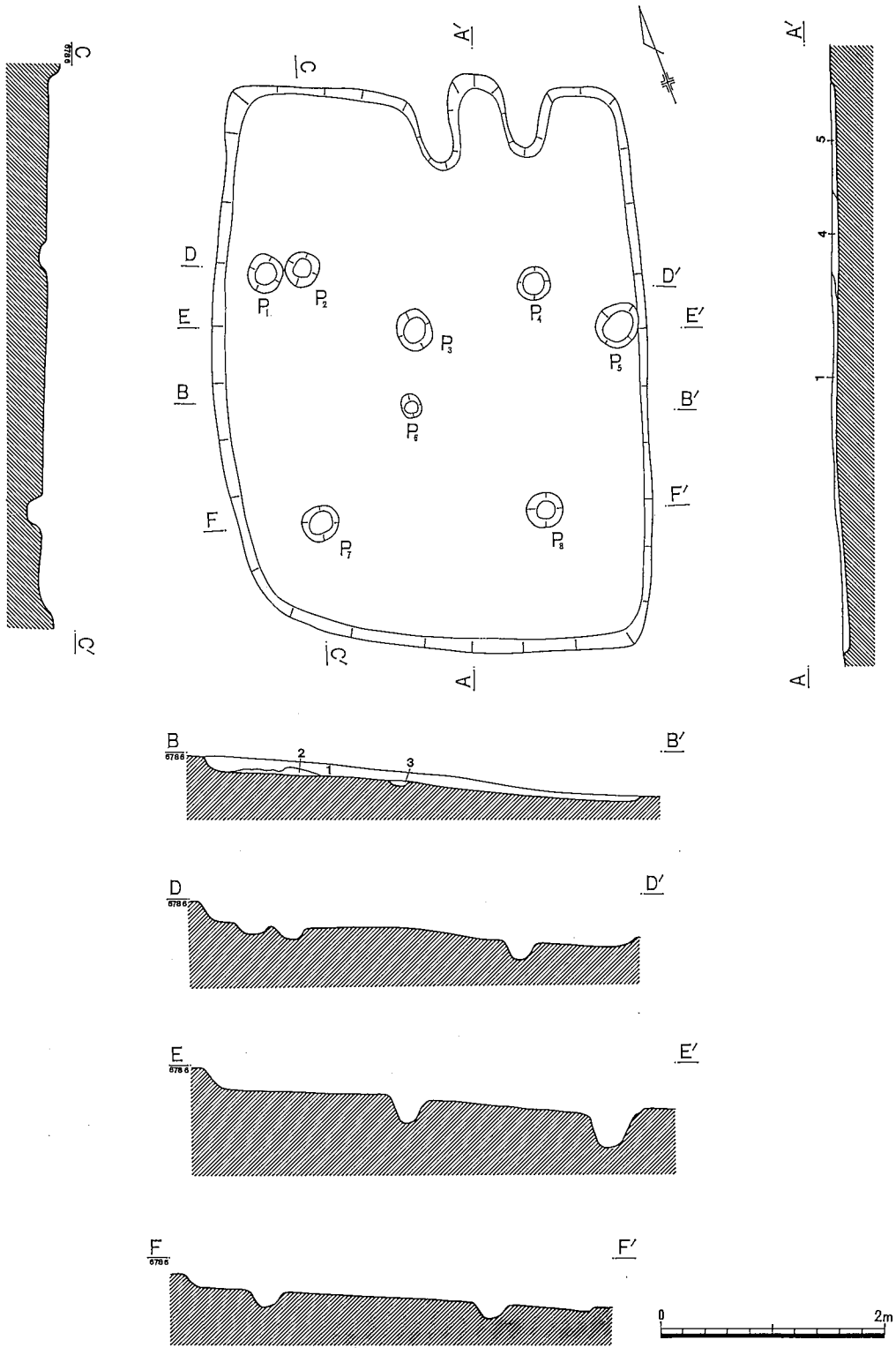
〈第19号住居跡〉

遺構（第56図）

調査区中央より南東寄り、Ｌ・Ｍ－10・11グリッドで検出された。第21号住居跡の北側約１ｍに位置する。標高678.5ｍに立地する。方形プランを呈し、東西3.85ｍ、南北５ｍ、深さ0.19ｍを測る。主軸方向はＮ－23°－Ｅである。カマドは北辺のやや東寄りに付設される。カマドの覆土はほとんど確認できず、被熱による赤変部分が確認された程度である。

床面は地形に沿って東に傾斜し、覆土はほとんど残っておらず、東側の立上がりは浅い。柱穴は８か所検出された。P_1は33cm×32cm、深さ10cmである。P_2は33cm×33cm、深さ13cmである。P_3は35cm×32cm、深さ25cmである。P_4は30cm×29cm、深さ12cmである。P_5は45cm×38cm、深さ33cmである。P_6は21cm×20cm、深さ９cmである。P_7は35cm×32cm、深さ15cmである。P_8は33cm×30cm、深さ13cmである。

出土遺物は、西側で多く確認されたが、これは覆土の残存状態と関わるのであろう（第57図）。



第56図　第19号住居跡実測図（1/60）

〔土層説明〕

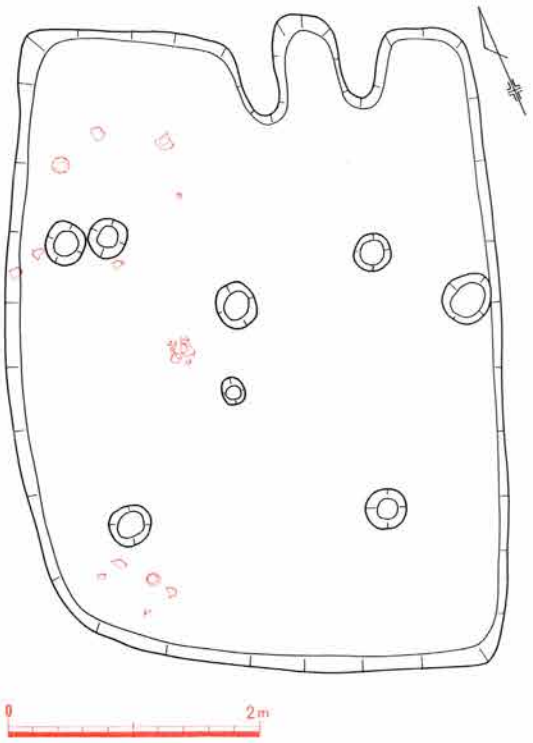
第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

第２層　暗黄褐色土（暗黄褐色土ブロック・粒子を全体に含む。炭化物わずかに含む。）

第３層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。ピット６覆土。）

第４層　暗褐色土（岩盤ブロックを多く含む。炭化物少量含む。）

第５層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

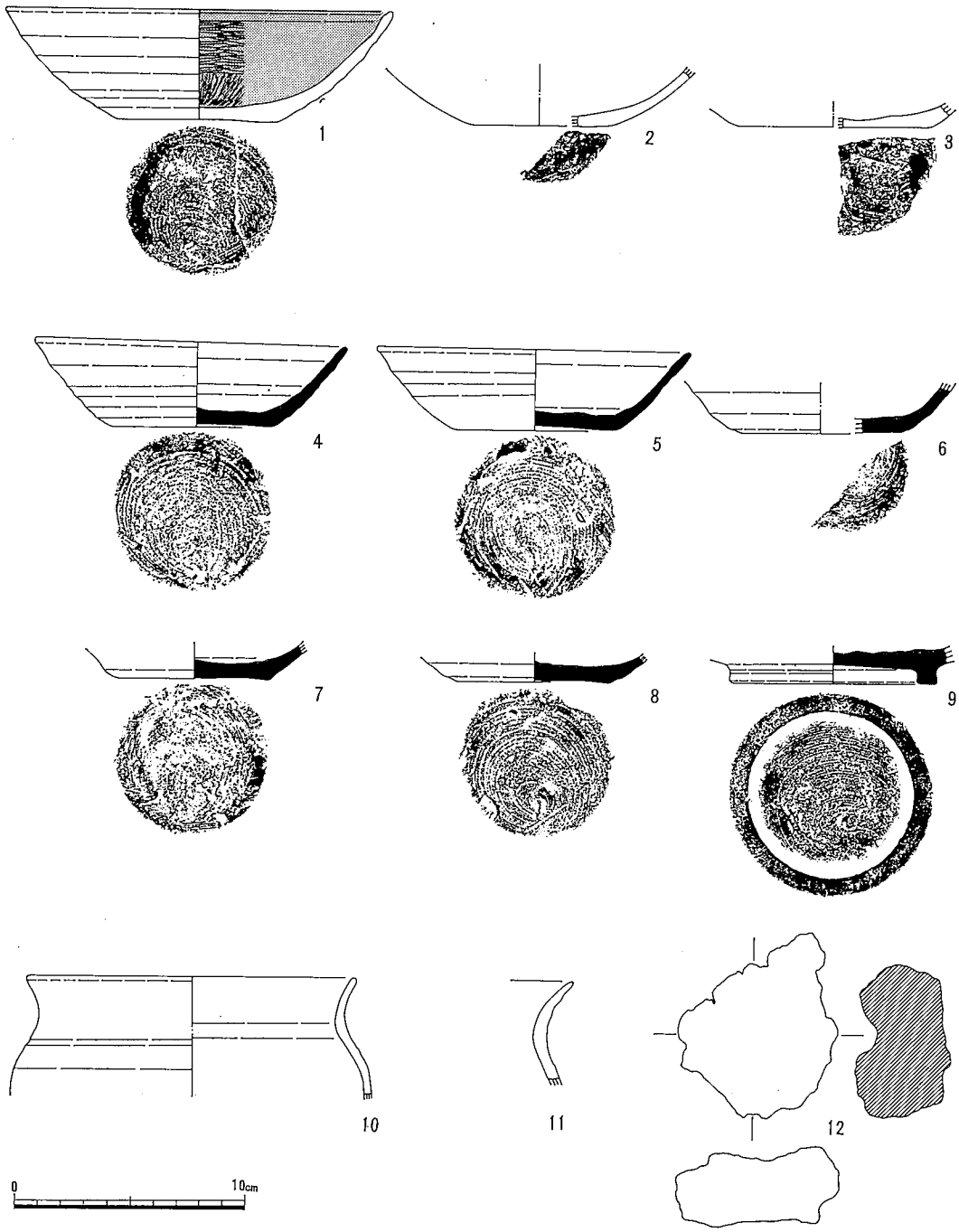


第57図　第19号住居跡遺物出土状況（1/60）

遺物（第58図）

１～３は土師器の坏である。１は口径17cm、器高4.8cm、底径7.1cmを測り、実測部分の残存率は約70％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。体部は丸みを帯びて立ち上がる。内面はミガキが施される。外面暗黄灰色、内面は黒色処理により黒褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。２は推定底径6.2cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。右回転のロクロ成形で、外底面はヘラケズリ、内面はミガキが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。３は推定底径cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。内面はミガキが施される。暗赤褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。

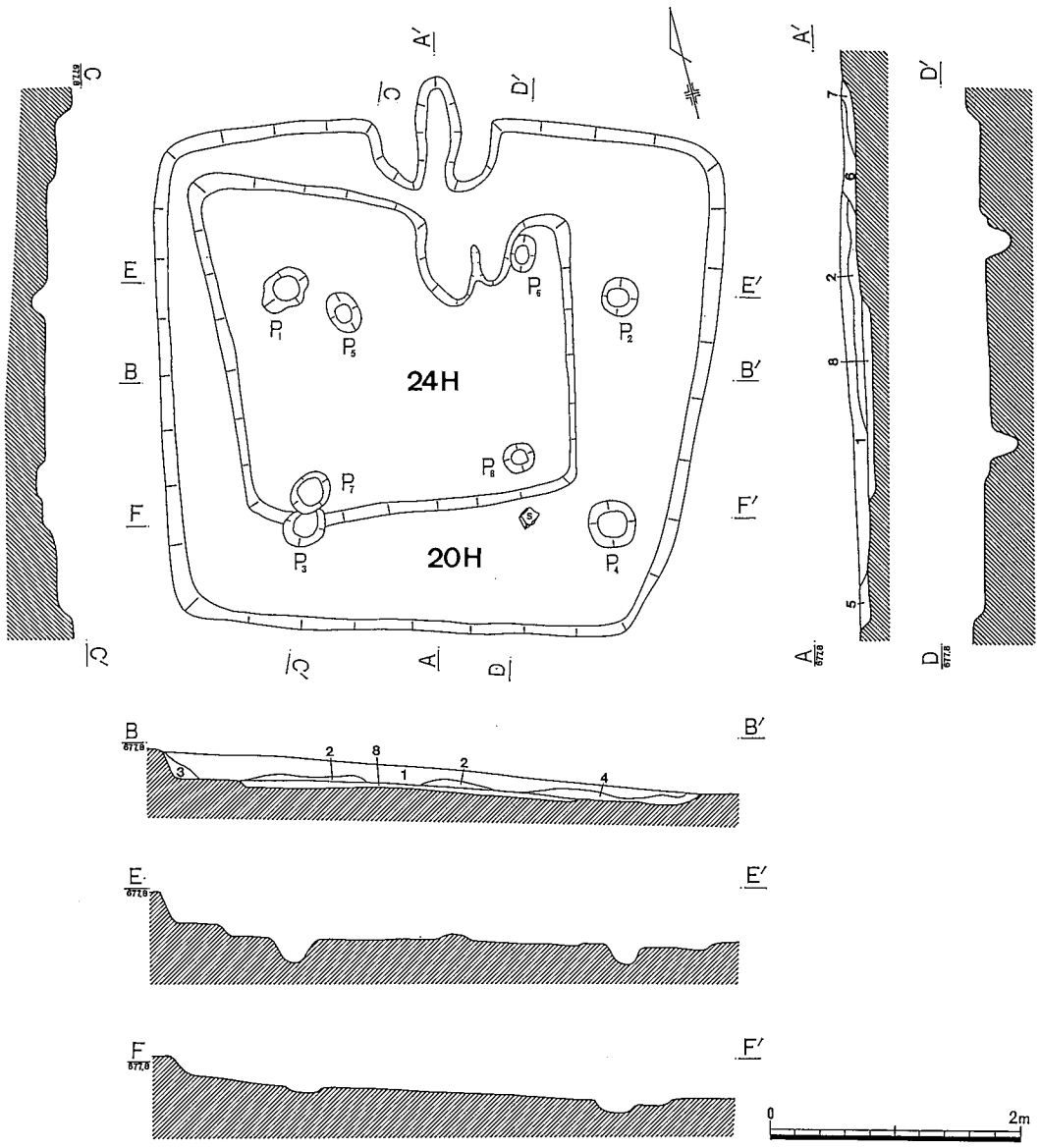
３～８は須恵器の坏である。３は口縁をわずかに欠くがほぼ完形で、口径13.6cm、器高3.8cm、底径７cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。体部はわずかに丸みを帯びて立ち上がる。外面にはロクロ痕が顕著に見られる。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。４は口径13.8cm、器高3.6cm、底径７cmを測り、実測部分の残存率は約80％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残し、板目状圧痕が認められる。体部はわずかに丸みを帯びて立ち上がり、口縁は肥厚する。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。６は推定底径７cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含み、器面には火襷が認められる。含有鉱物の溶解が見られ、焼成温度は高いと思われる。７は底径6.8cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残し、一部に板目状圧痕が認められる。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。含有鉱物の溶解が見られ、焼成温度は高いと思われる。８は底径6.8cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白



第58図　第19号住居跡出土遺物（1/3）

色粒子を含む。9は高台付坏の底部破片で、底径9㎝を測る。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。高台はわずかに「ハ」の字に開き、高台脇はナゾリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

10・11は土師器の甕である。10はロクロ調整の甕と思われ、推定口径14.4㎝を測り、実測部分の



第59図　第20・24号住居跡実測図（1/60）

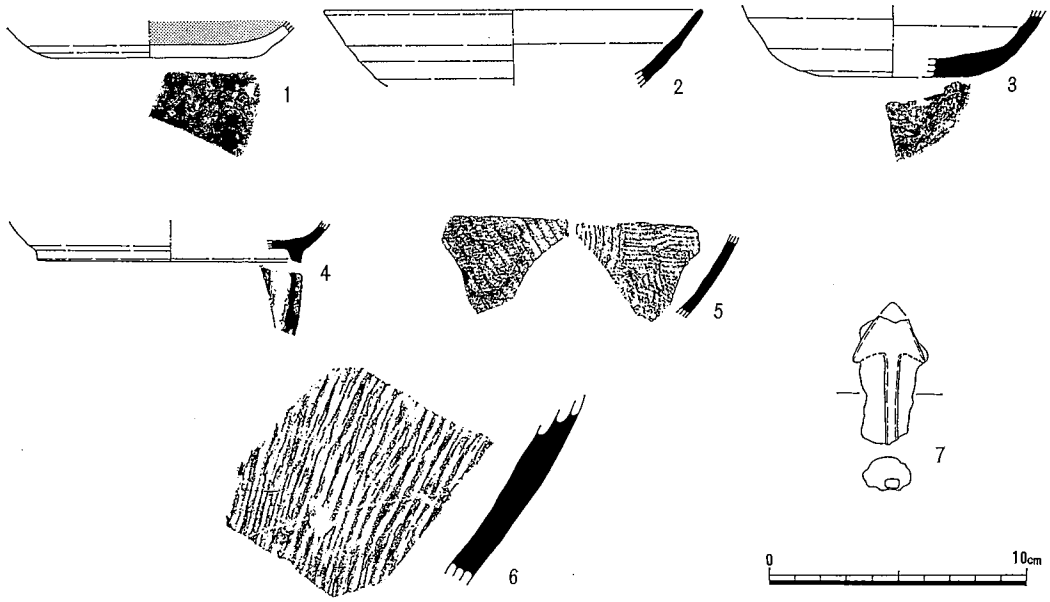
残存率は約12％である。器面は全体に荒れている。口縁内面には煤の付着が見られる。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色・赤色粒子を含む。11は口縁部ヨコナデ、肩部には横方向のケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

12は鉄滓である。現存で長さ8.2cm、幅７cm、厚さ3.5cm、重さ220ｇを測る。

〈第20号住居跡〉

遺構（第59図）

調査区の南東部、Ｎ・Ｏ－10・11グリッドで検出された。第23号住居跡の西側約２ｍに位置し、標高677.5ｍに立地する。方形プランを呈し、東西4.4ｍ、南北4.1ｍ、深さ0.24ｍを測る。主軸方向



第60図　第20号住居跡出土遺物（1/3）

はＮ－14°－Ｅである。カマドは北辺の中央部に付設される。床面とほぼ同じレベルで、ゆるやかに煙道部へ続く。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。本住居跡の床面を精査した段階で、第24号住居跡が確認された。本住居跡の柱穴は４か所と思われる。P_1は42cm×33cm、深さ21cmである。P_2は32cm×29cm、深さ14cmである。P_3はP_7と重複するが36cm×32cm、深さ６cmである。P_4は39cm×37cm、深さ９cmである。

出土遺物は、土師器・須恵器の他、鉄鏃がみられた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を１層より多く含む。焼土粒子をわずかに含む。）

第３層　暗褐色土（暗黄褐色土ブロックを斑に含む。）

第４層　暗黄褐色土（暗黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物をわずかに含む。）

第５層　暗褐色土（岩盤ブロックを多く含む。炭化物をわずかに含む。）

第６層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物、暗黄褐色土粒子を多く含む。）

第７層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に含む。）

第８層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物、岩盤ブロックを含む。第24号住居跡覆土）

遺物（第60図）

１は土師器の坏である。推定底径7.8cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。外底面はヘラケズリ調整、内面はミガキ調整される。外面橙褐色、内面は黒色処理され黒褐色を呈し、胎土の微砂粒、角閃石、白色・赤色粒子を含む。

２～４は須恵器の坏である。２は推定口径15cmを測り、実測部分の残存率は約７％である。体部

は直線的に開く。右回転のロクロ成形と思われる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。３は推定底径６cmを測り、実測部分の残存率は約７％である。底部から丸みを帯びて立ち上がる。右回転のロクロ成形で、外底面は回転ヘラケズリ調整が施される。。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。４は高台付坏である。推定底径10.4cmを測り、実測部分の残存率は約５％である。高台はわずかに開き、高台脇はナゾリが施される。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。５は須恵器の壺と思われる。外面には平行叩き、内面には同心円叩きが見られる。暗茶褐色を呈し、微砂粒、白色粒子を含む。６は須恵器の大甕の胴部下半の破片である。外面には平行叩き、内面は横方向の指ナデ調整される。青灰色を呈し、微砂粒、白色粒子を含む。

７は鉄製品で、鉄鏃と思われる。全体に錆瘤が発達し、原形は判然としないが、先端と中茎を欠損する。返り部分は錆瘤のため形状は不明である。現存で長さ５cm、返り部の幅2.9cm、中茎部分は厚さ0.5×0.3cmの角柱形で、重さ18.6ｇを測る。

〈第21号住居跡〉

遺構（第61図）

調査区の南東部、Ｌ・Ｍ－11・12グリッドで検出された。第19号住居跡の南側約１ｍに位置し、標高678ｍに立地する。方形プランを呈し、東西4.1ｍ、南北4.5ｍ、深さ0.15ｍを測る。主軸方向はＮ－21°－Ｅである。カマドは北辺の中央部に付設されるが、西側の袖が確認できただけで、残存状態は悪かった。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は８か所検出された。P_1は42cm×34cm、深さ11cmである。P_2は29cm×27cm、深さ７cmである。P_3は31cm×30cm、深さ８cmである。P_4は30cm×23cm、深さ13cmである。P_5は50cm×46cm、深さ16cmである。P_6は38cm×35cm、深さ22cmである。P_7は36cm×34cm、深さ21cmである。P_8は34cm×32cm、深さ12cmである。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・甕の破片が出土した。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を斑に含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物、岩盤粒子を多く含む。）

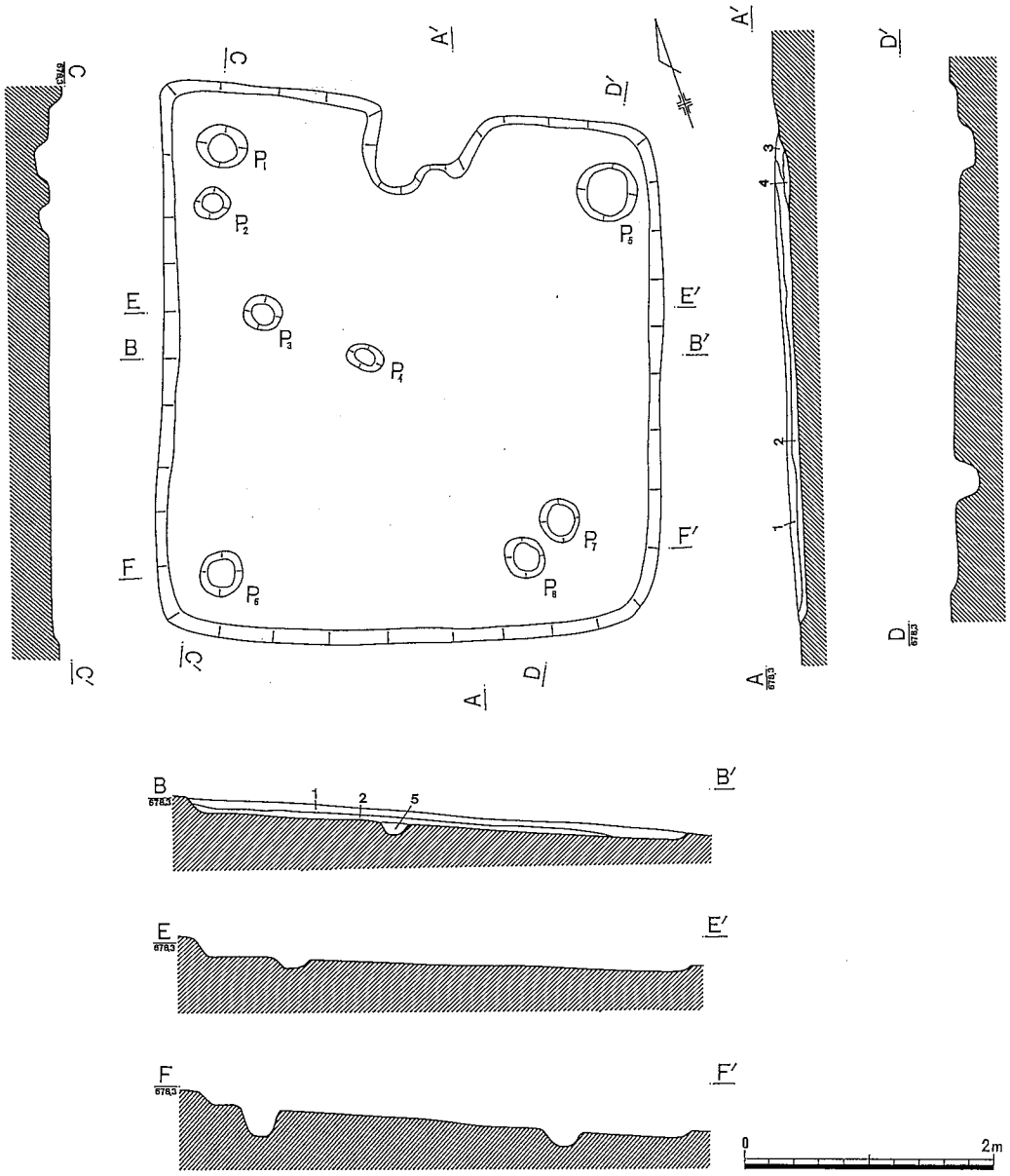
第３層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、焼土粒子、炭化物を多く含む。カマド覆土。）

第４層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物を多く含む。カマド覆土。）

第５層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。炭化物をわずかに含む。ピット４覆土）

遺物（第62図）

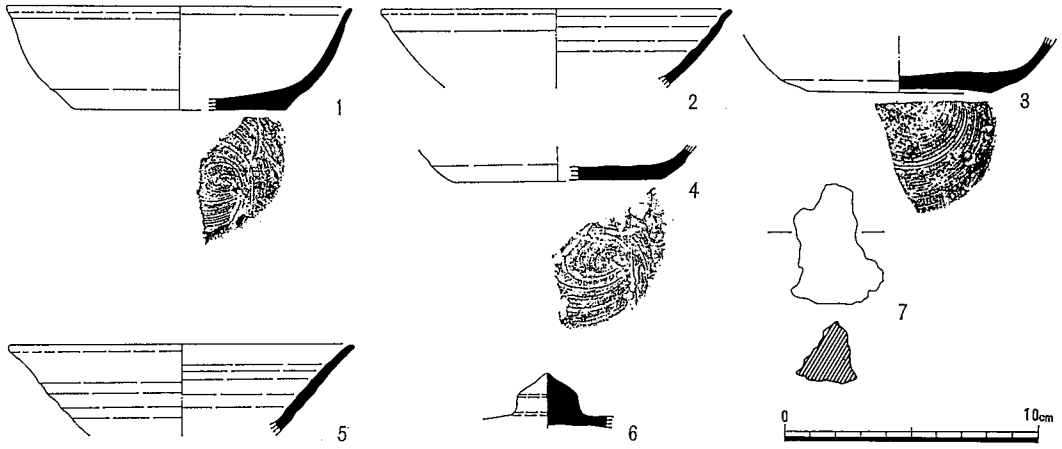
１～５は須恵器の坏である。１は推定で口径13.6cm、器高4.1cm、底径8.4cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。腰部が張り、口端は外反する。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。器面には火襷が顕著に見られる。２は推定口径14cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。体部は丸みを帯び、口端は外反する。右回転のロクロ成形と思われる。器面は青灰色、断面は暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。器面には火襷が顕著に見られる。３は推定底径7.4cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。体部は丸みを帯びる。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。青灰色を呈



第61図　第21号住居跡実測図（1/60）

し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。器面には火襷が顕著に見られる。また、含有鉱物の溶解が見られることから、焼成温度は高いと思われる。４は推定底径８cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形と思われ、外底面には回転糸切痕を残す。青灰白色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。６は須恵器の蓋のツマミ部分の破片である。中央部が突出した円柱状のツマミが貼付される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

７は鉄滓である。残存する表面は流動状である。現存で長さ4.8cm、幅3.7cm、厚さ2.5cm、重さ37.2ｇを測る。



第62図　第21号住居跡出土遺物（1/3）

〈第22号住居跡〉

遺構（第63図）

調査区の南東部、Ｏ・Ｐ－12・13グリッドで検出された。第23号住居跡の南側約５ｍに位置し、標高677～676.5ｍに立地する。最も低地に近い場所に位置する住居跡である。方形プランを呈し、東西4.4ｍ、南北3.5ｍ、深さ0.29～0.07ｍを測る。主軸方向はＮ－10°－Ｅである。カマドは北辺の中央部に付設される。

床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は９か所検出された。P_1は34cm×33cm、深さ14cmである。P_2は59cm×56cm、深さ11cmである。P_3は37cm×33cm、深さ17cmである。P_4は37cm×34cm、深さ19cmである。P_5は22cm×19cm、深さ18cmである。P_6は39cm×35cm、深さ18cmである。P_7は23cm×23cm、深さ20cmである。P_8は40cm×37cm、深さ19cmである。P_9は22cm×20cm、深さ18cmである。P_{10}は100cm×63cm、深さ18cmである。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤粒子、白色粘土粒子、炭化物を含む。）

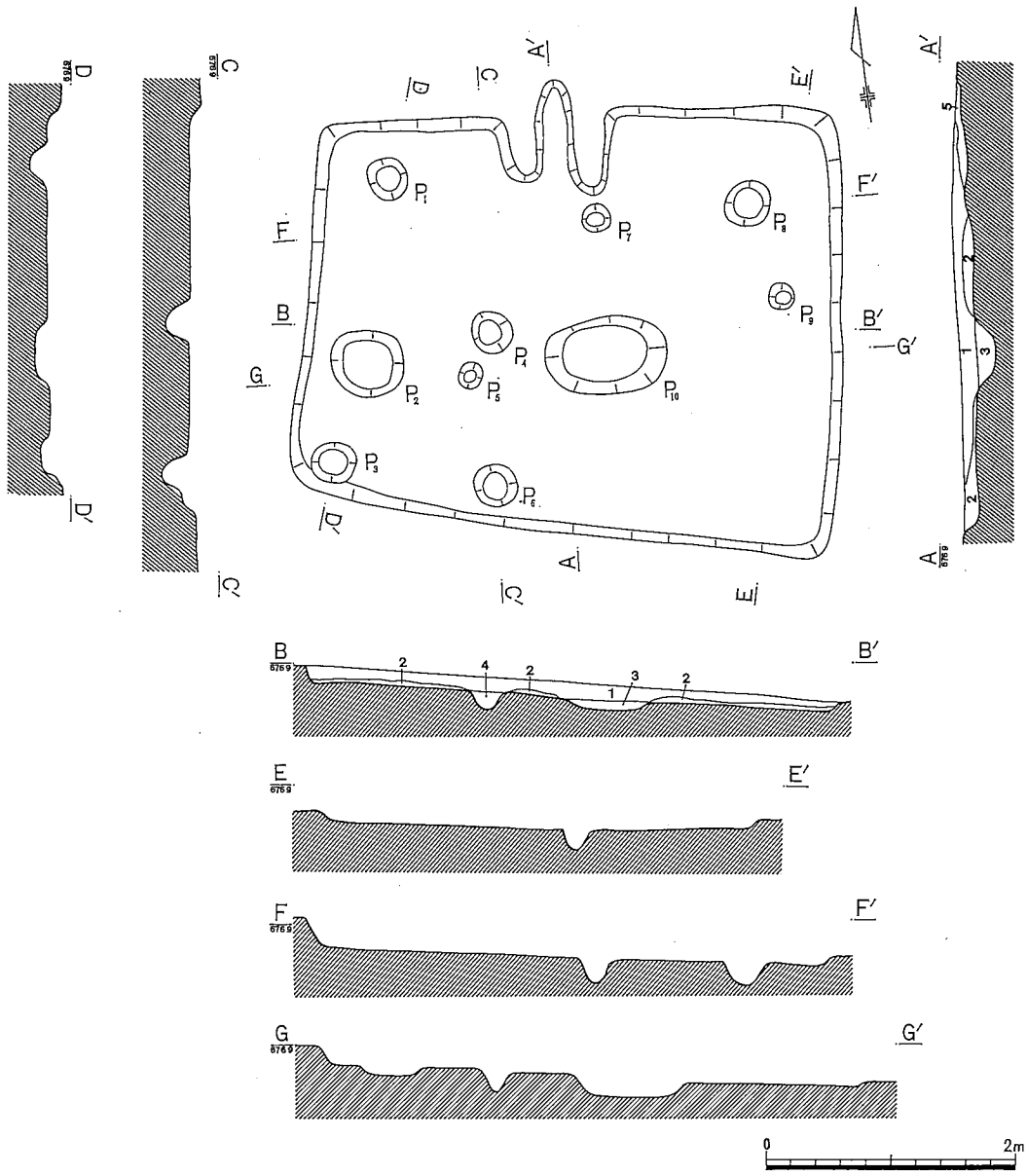
第３層　暗褐色土（岩盤粒子を多く含む。ピット４覆土。）

第４層　暗褐色土（岩盤粒子、炭化物を含む。ピット10覆土。）

第５層　暗茶褐色土（焼土粒子、炭化物、岩盤粒子を含む。）

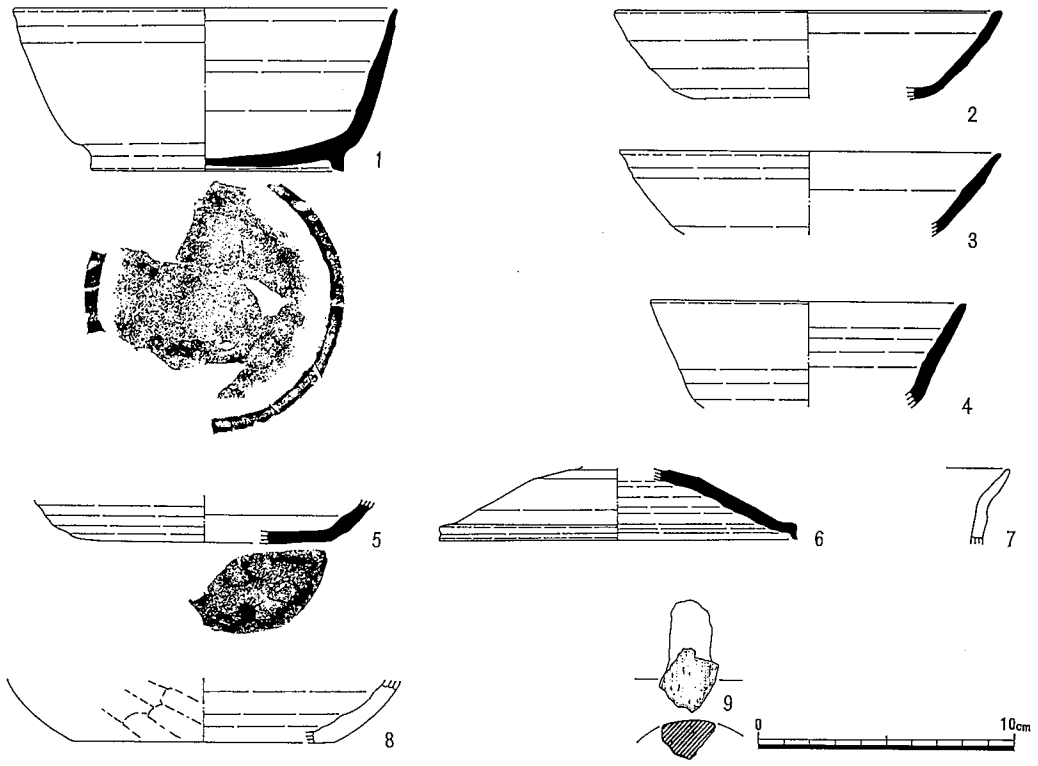
遺物（第64図）

１～５は須恵器の坏である。１は高台付坏である。推定で口径15.2cm、器高6.5cm、底径10.1cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。右回転のロクロ成形で、外底面には回転ヘラケズリが施される。暗青灰色を呈し、微砂粒を含む。含有鉱物の溶解が見られる。２は推定口径15.4cmを測り、実測部分の残存率は約７％である。口端は内削ぎ状を呈する。暗青灰色～茶褐色を呈し、微砂粒を含む。３は推定口径15cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。体部はわずかに丸みを帯び、口端は外反する。青灰色を呈し、微砂粒を含む。４は推定口径12.5cmを測り、実測部分の残存率は



第63図　第22号住居跡実測図（1/60）

約８％である。暗青灰色を呈し、微砂粒を含む。５は推定底径10.2cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。右回転のロクロ成形で、外底面は手持ちヘラケズリが施される。青灰色～暗橙褐色を呈し、微砂粒を含む。６は須恵器の蓋で，推定口径14.2cmを測り、残存率は約10％である。右回転のロクロ成形で、天井部は回転ヘラケズリが施される。暗青灰色を呈し、微砂粒を含む。７・８は土師器の甕である。７は頸部が直立気味で、口縁は外反する。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多く含む。８はロクロ調整の甕と思われる。推定底径10.4cmを測り、実測部分の残存率は約18％である。外面は斜め方向のケズリ調整が施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多く含む。９は土製羽口の破片である。外径は推定６cmを測る。外面青灰色、断面橙灰褐色を呈し、微砂粒を多く含む。



第64図　第22号住居跡出土遺物（1/3）

〈第23号住居跡〉

遺構（第65・66図）

調査区南東部、Ｐ・Ｑ－10・11グリッドで検出された。第20号住居跡の東側約３ｍに位置し、標高677ｍに立地する。方形プランを呈し、東西5.1ｍ、南北4.8ｍ、深さ0.38ｍを測る。主軸方向はＮ－18°－Ｅである。カマドは北辺の東寄りに付設される。覆土上部には地山に似た暗黄褐色土が広がり、当初はプランが判然とせず、２軒の住居跡のようにも見えた。人為的に埋め戻された可能性も考えられた。今回検出された竪穴住居跡の中では最も大きく、しかも残りの良い住居跡である。

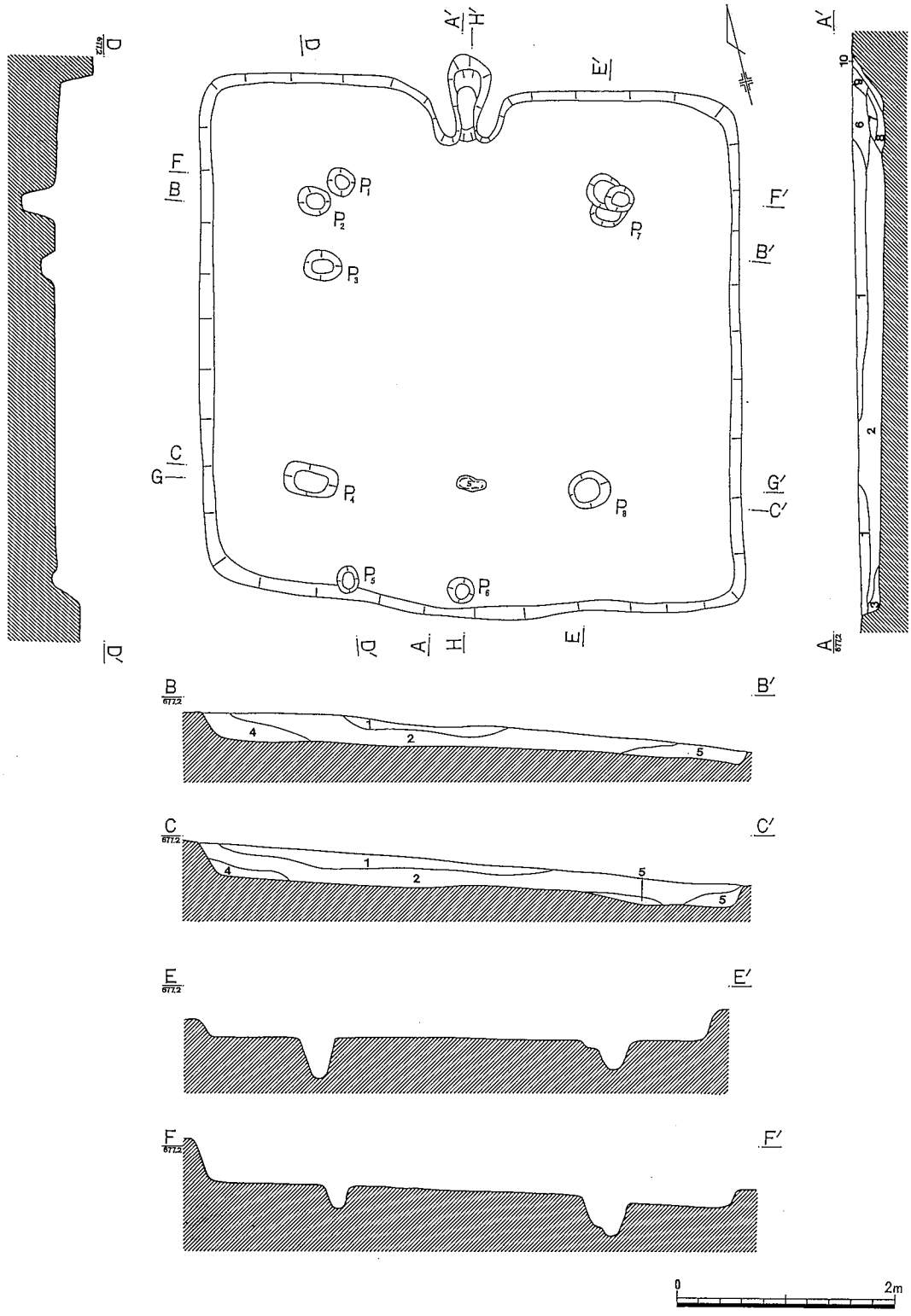
床面は地形に沿って東に傾斜し、東側の立上がりは浅い。柱穴は８か所検出された。P_1は26cm×24cm、深さ22cmである。P_2は30cm×26cm、深さ24cmである。P_3は35cm×28cm、深さ14cmである。P_4は50cm×30cm、深さ24cmである。P_5は25cm×20cm、深さ12cmである。P_6は27cm×24cm、深さ17cmである。P_7は３基のピットが重複した状態で、46cm×40cm、最深で30cmである。P_8は40cm×35cm、深さ39cmである。

ピット５・６は、南辺の西寄りに位置し、出入り口部に関連するものかも知れない。また、重複するピット７とピット１～３の位置から、建て替えが行われた可能性も考えられる。

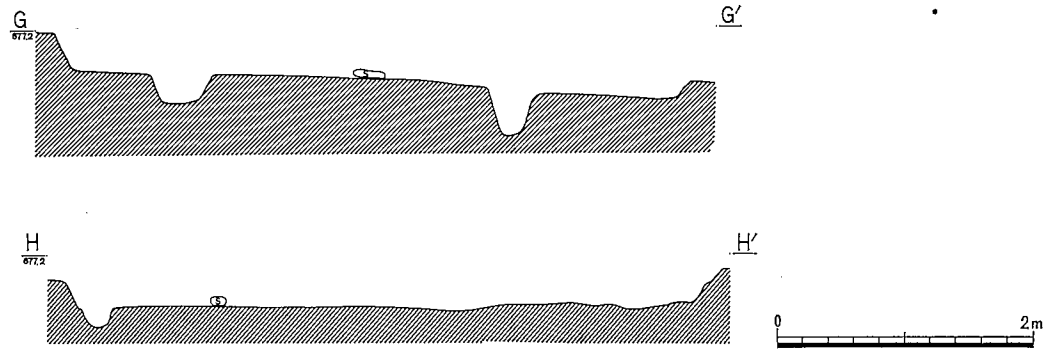
出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・甕などが大量に出土したほか、ピット４と５の中間の床面に円礫が置かれていた。

〔土層説明〕

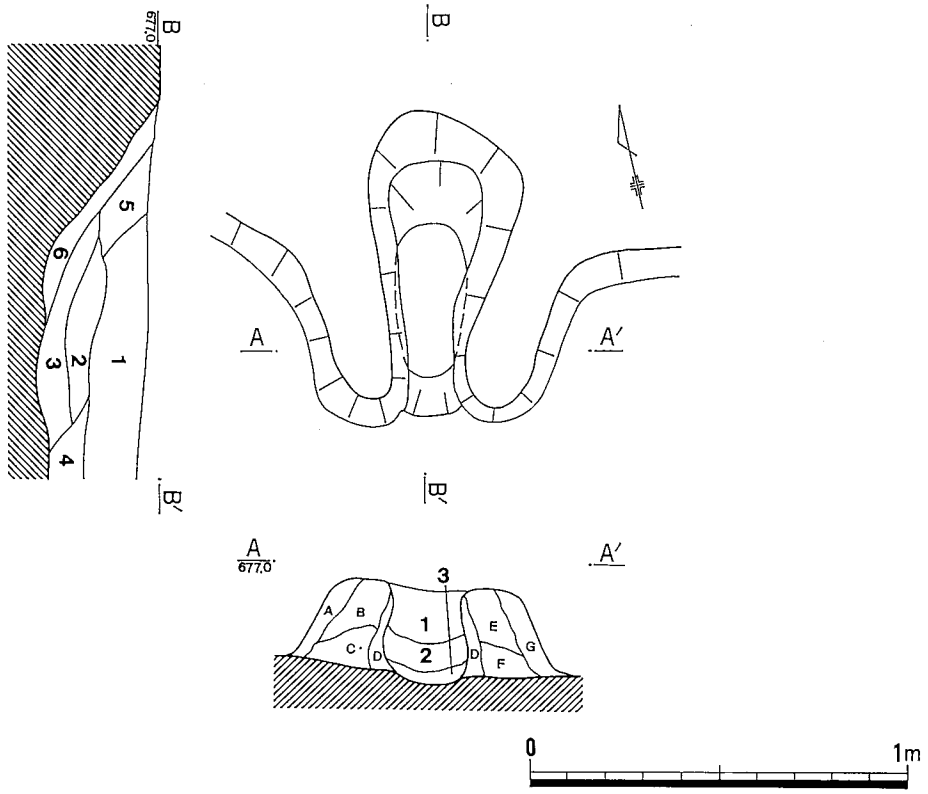
第１層　暗黄褐色土（暗黄褐色土を主体とする粘質土。炭化物、焼土粒子をわずかに含む。）



第65図　第23号住居跡実測図(1) (1/60)



第66図　第23号住居跡実測図(2)（1/60）



第67図　第23号住居跡カマド実測図（1/20）

第２層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子、岩盤粒子を全体に含む。）
第３層　暗黄褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。）
第４層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を含む。）
第５層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子、炭化物を含む。）
第６層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子を全体に含む。）
第７層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）

第８層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子、灰を多く含む。ややしまり弱い。）
第９層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含む。土師器甕の破片を含む。）
第10層　暗茶褐色土（焼土ブロック、岩盤粒子を含む。）

カマド（第67図）

住居北辺の中央部に位置する。焚口から掛口部分は、底面が岩盤面に達し、中央部分が一段深まる。底面及び内壁面は被熱により赤変する。底面から段をもって煙道部へ伸びている。

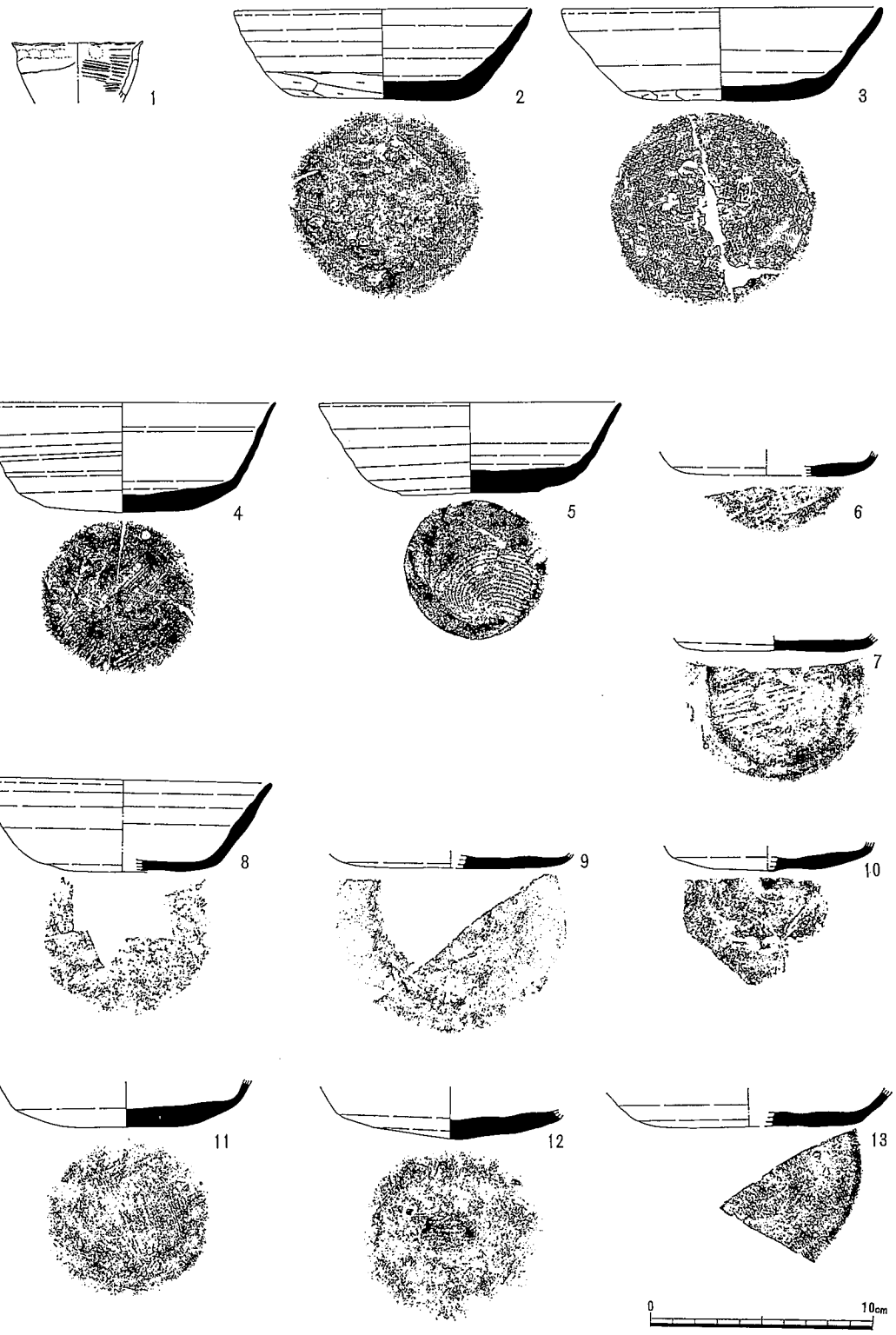
〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子を全体に含む。）
第２層　暗褐色土（岩盤粒子を全体に含む。焼土粒子を多く含む。）
第３層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子、灰を多く含む。ややしまり弱い。）
第４層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子、岩盤粒子を全体に含む。）
第５層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含む。土師器甕の破片を含む。）
第６層　暗茶褐色土（焼土ブロック、岩盤粒子を含む。）
第Ａ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）
第Ｂ層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｃ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｄ層　暗茶褐色土（焼土粒子、焼けた岩盤ブロックを多く含む。）
第Ｅ層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｆ層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。暗黄褐色土粒子、焼土粒子をわずかに含む。）
第Ｇ層　暗褐色土（岩盤ブロック・粒子、暗黄褐色土粒子、焼土粒子を含む。）

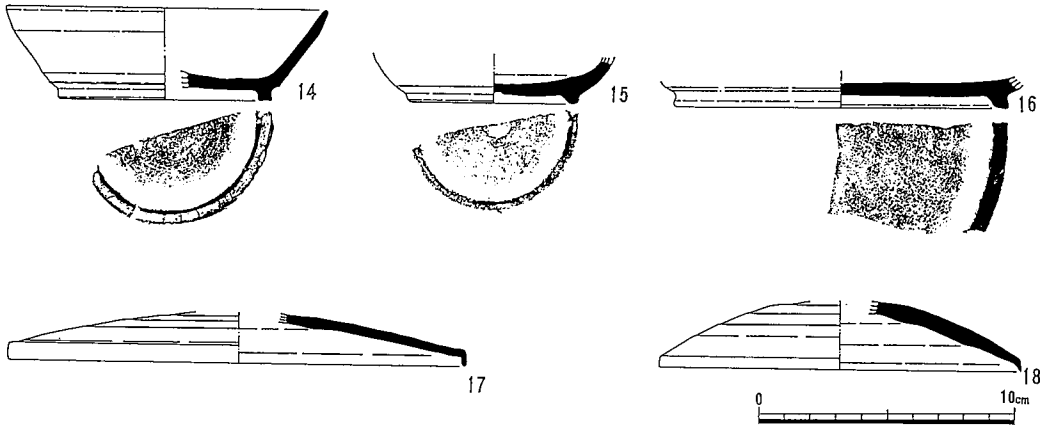
遺物（第68～72図）

１は土師器のてミニチュア土器である。推定口径5.8cmを測り、実測部分の残存率は約26％である。口縁は外反し、頸部は括れる。頸部は指オサエで整形し、口端は先細る。外面の一部に粘土接合痕が認められる。内面は木口状工具で調整される。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

２～12は須恵器の坏である。２は口径13.6cm、器高4.2cm、底径7.6cmを測り、口縁の一部を欠くものの、ほぼ完形である。右回転のロクロ成形で、体部は逆「ハ」の字に立上がる。底部は厚手で、手持ちヘラケズリが施される。暗青灰色を呈し、微砂粒、白色粒子の混入が目立つ。一部に火襷が認められる。３は口径14.8cm、器高4.2cm、底径7.8cmを測り、一部を欠くがほぼ完形である。右回転のロクロ成形で、体部は逆「ハ」の字に立上がり、口縁は直立する。底部は糸切による切り離しの後、手持ちヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。４は口径13.8cm、器高5.1cm、底径７cmを測り、口縁の一部を欠くがほぼ完形である。右回転のロクロ成形で、体部は逆「ハ」の字に立上がり、口縁は直立する。底部は厚手で丸みを帯び、手持ちヘラケズリが施される。一部に掻目、板目状の圧痕が認められる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。５は口径13.8cm、器高4.3cm、底径6.2cmを測り、口縁の一部を欠くがほぼ完形である。右回転のロクロ成形で、腰部がわずかに張り、体部は逆「ハ」の字に立上がる。底部は厚手で、回転糸切の後、手持ちヘラケズリが施される。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。



第68図　第23号住居跡出土遺物(1)（1/3）

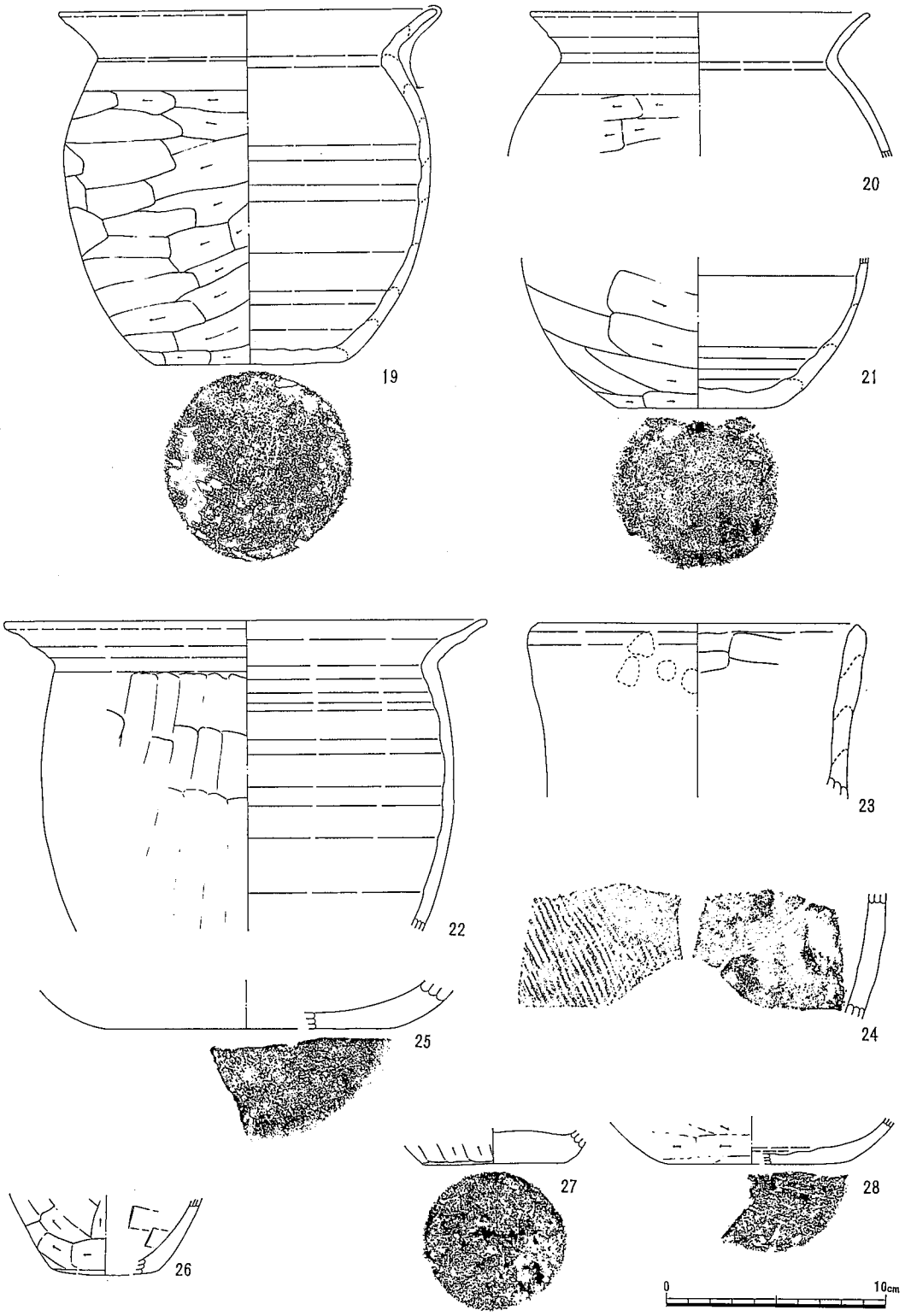


第69図　第23号住居跡出土遺物(2)（1/3）

6は底部破片で、推定底径7.1cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。外底面には手持ちヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。7は底径7.8cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、手持ちヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。8は推定で口径13.6cm、器高4.2cm、底径6.2cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。右回転のロクロ成形で、体部は逆「ハ」の字に立上がり、口縁は直立する。外底面は砂底状に荒れており、内定面には掻目状の調整痕が認められる。器体は歪みが著しい。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。9は底部破片で、推定底径8cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、手持ちヘラケズリが施される。灰白色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。10は底部破片である。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、ヘラキリによる切り離しと思われる。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

11は底径5.5cmを測る。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、手持ちヘラケズリが施される。一部に掻目状の調整痕が認められる。灰白色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。12は底径7cmを測る。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、外底部の中央が突出し、手持ちヘラケズリが施される。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。13は底径8.2cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。右回転のロクロ成形で、底部は丸みを帯び、手持ちヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

第69図14～16は須恵器の高台付坏である。14は推定で口径12.6cm、器高3.6cm、底径8.5cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。右回転のロクロ成形で、体部は逆「ハ」の字に立上がる。高台は中央が窪み、高台脇にはヘラナデが施される。外底面は回転ヘラケズリ調整される。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。15は推定底径6.6cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。右回転のロクロ成形で、高台は低い。外底面は回転ヘラケズリ調整され、中央部は深まる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。16は推定底径13.4cmを測り、実測部分の残存率は約16％である。右回転のロクロ成形で、外底面は回転ヘラケズリ調整される。灰白色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。



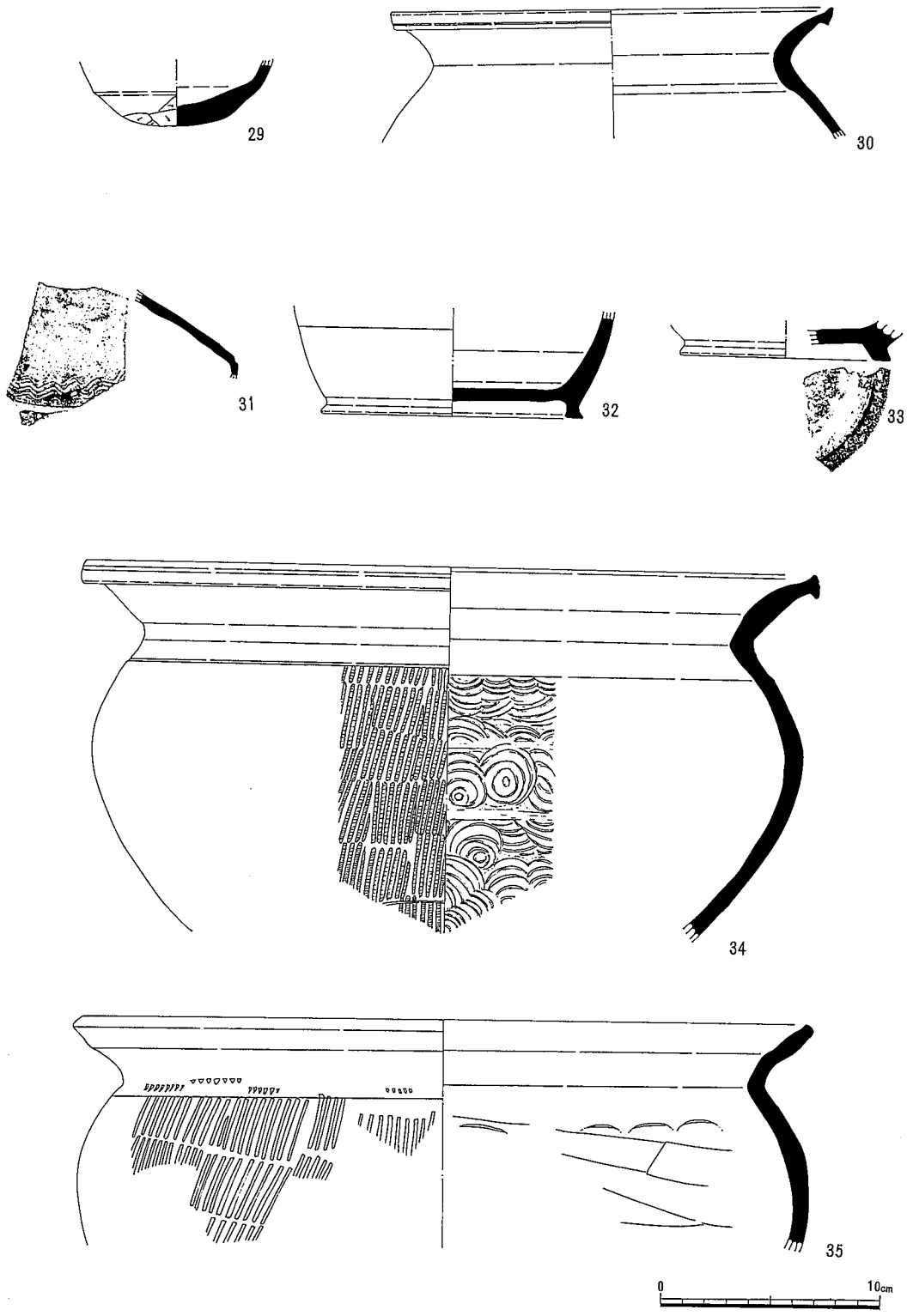
第70図　第23号住居跡出土遺物(3)（1/3）

17・18は須恵器の蓋である。17は推定口径18cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。右回転のロクロ成形で、天井部は回転ヘラケズリ調整が施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。18は推定口径14.5cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。右回転のロクロ成形で、天井部は回転ヘラケズリ調整が施される。返りは浅い。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。

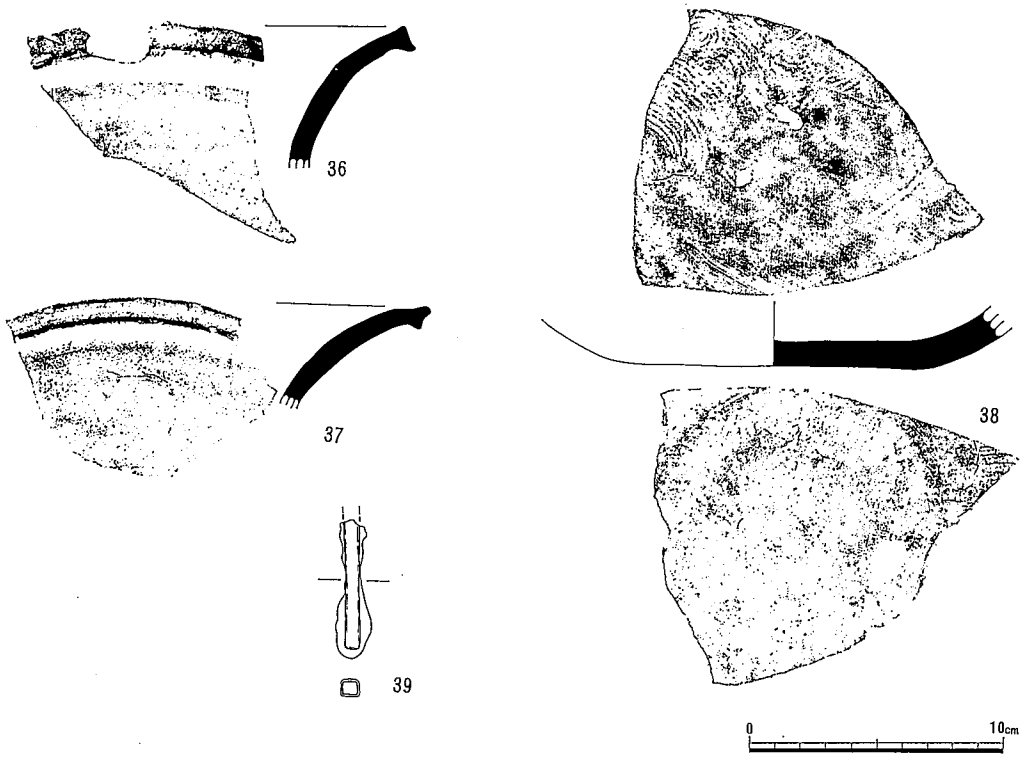
第70図19～28は土師器の甕である。19は推定で口径17.6cm、器高16.6cm、底径8.8cmを測り、実測部分の残存率は約60％である。ロクロ調整の甕で、胴部は丸みを帯び、口縁は「く」の字に外反する。外面は横方向にケズリが施される。外底面はヘラナデ調整される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。頸部内面には帯状に煤の付着が認められる。20は推定口径15.8cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。ロクロ調整の甕で、胴部は丸みを帯び、口縁は「く」の字に外反する。口縁はヨコナデ、肩部以下は横方向にケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。頸部内面には帯状に煤の付着が認められる。21は胴部下半の破片で、推定底径7.4cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。外面は横方向のヘラケズリ、外底面はヘラナデ調整される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。22は推定口径22.4cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。口縁は大きく外反し、胴部は長い。口縁はヨコナデ、外面は縦方向のヘラケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。

23は推定口径14.8cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。円筒形を呈し、器面の調整はほとんど見られず、外面の一部に指オサエ、口縁内面には横方向のヘラケズリが認められる。橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。24は胴部破片で、外面には掻目が見られる。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。25は推定底径12.4cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。底部外周及び外底面はヘラナデされる。外面暗黄褐色、内面は黒色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。26は推定底径4.8cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。底部は丸みを帯び、砲弾形を呈すると思われる。底部外周は横、胴部は縦方向のケズリが施される。内面にはヘラナデが施される。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。27は底径6.4cmを測る。外底面には回転糸切後、ナデ調整される。外面は胴部まで縦方向の削りが施される。暗黄褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。28は推定底径８cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。ロクロ甕の底部破片で、底部外周及び外底面はケズリ調整が施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、小石を多量に含む。

第71図29は須恵器の小型壺と思われる。底部は丸底で、右回転のロクロ成形、底部は手持ちヘラケズリ調整される。灰白色を呈し、微砂粒を多く含む。30は須恵器の甕の口縁部破片である。推定口径20.4cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。頸部は外反し、口縁は折り返して縁帯を成す。暗青灰色を呈し、微砂粒を多く含む。31は肩部破片で、櫛描波状文が施される。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。32は推定底径12.2cmを測り、実測部分の残存率は約70％である。高台は外方へ突出する。右回転のロクロ成形で、胴部下端は回転ヘラケズリされる。外底面は回転ヘラケズリが施され、高台脇はナゾリが見られる。暗褐色から赤褐色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を多く含む。33は推定底径9.8cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。高台は外方へ突



第71図　第23号住居跡出土遺物(4)（1/3）



第72図　第23号住居跡出土遺物(5)（1/3）

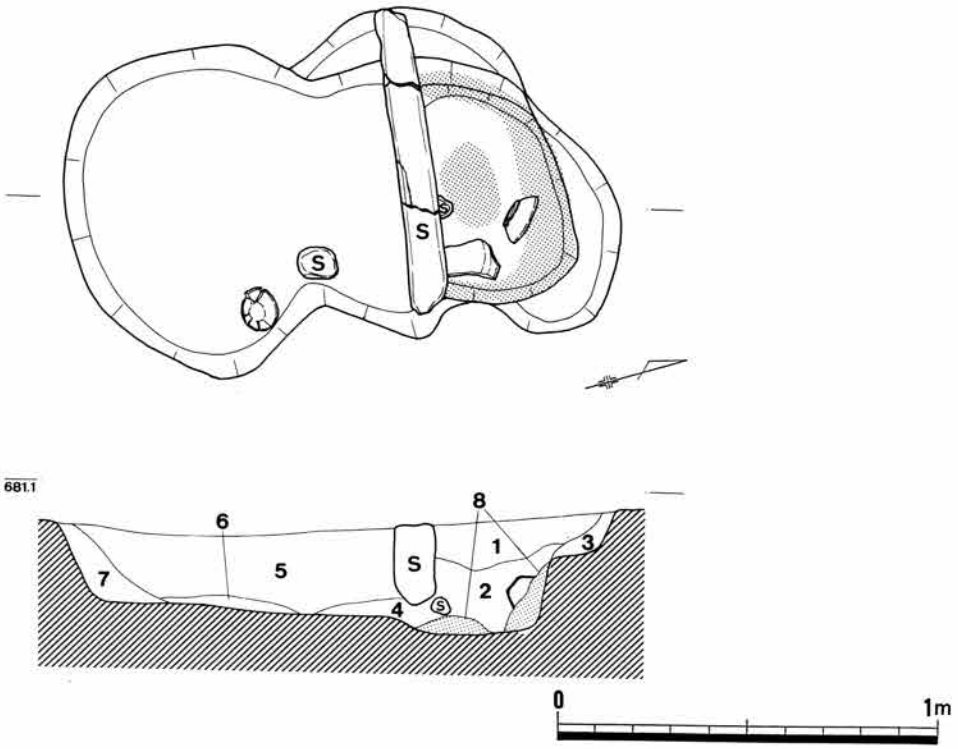
出する。右回転のロクロ成形で、外底面は回転ヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。34は推定口径34cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。肩部はわずかに張り、頸部が「く」の字に外反し、口縁は折り返して縁帯を成す。外面は平行叩き、内面は同心円文の当て具が観察される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。35は推定口径33.8cmを測り、実測部分の残存率は約18％である。肩部はわずかに張り、頸部が「く」の字に外反する。外面は平行叩きが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。

第72図36は須恵器甕の口縁部破片である。口縁は折り返して縁帯を成す。頸部は平行叩き後、ヨコナデされる。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。37は口縁が大きく外反し、口縁は折り返して縁帯を成す。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。38は須恵器甕の底部破片で、底径12.8cmを測る。外面は平行叩き、内面は同心円文の当て具が観察され、叩き成形の後、外面は回転ヘラケズリ、内面は指ナデ調整が施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。

39は鉄製品の破片である。現存で長さ5.2cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重さ10.4ｇを測る。両端は欠損し、錆瘤が著しく発達している。角柱形を呈するもので、釘或いは鏃の中茎と思われる。

〈第24号住居跡〉（第59図）

調査区の南東部、Ｎ・Ｏ－10・11グリッドで検出された。第23号住居跡の西側約２ｍに位置し、標高677.5ｍに立地する。第20号住居跡の床面を精査した段階で、本住居跡のプランが確認された。当初は第20号住居跡の掘り方とも考えられたが、北辺の東寄りにカマドの痕跡と思われる焼土面を確認したため、第24号住居跡とした。第20号住居跡よりも古い住居跡と考えられよう。不整方形呈



第73図　第1号炉実測図(1)（1/20）

し、東西2.8m、南北2.7～2.3m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN－14°－Eである。カマドは北辺の東寄りに付設される。

床面は地形に沿って東に傾斜し、覆土はほとんど残っていない。柱穴は4か所検出された。P_5は34cm×25cm、深さ14cmである。P_6は28cm×18cm、深さ23cmである。P_7は35cm×30cm、深さ8cmである。P_8は25cm×24cm、深さ10cmである。

出土遺物は、須恵器の甕がわずかに見られた程度である。

第4節　鍛　冶　炉

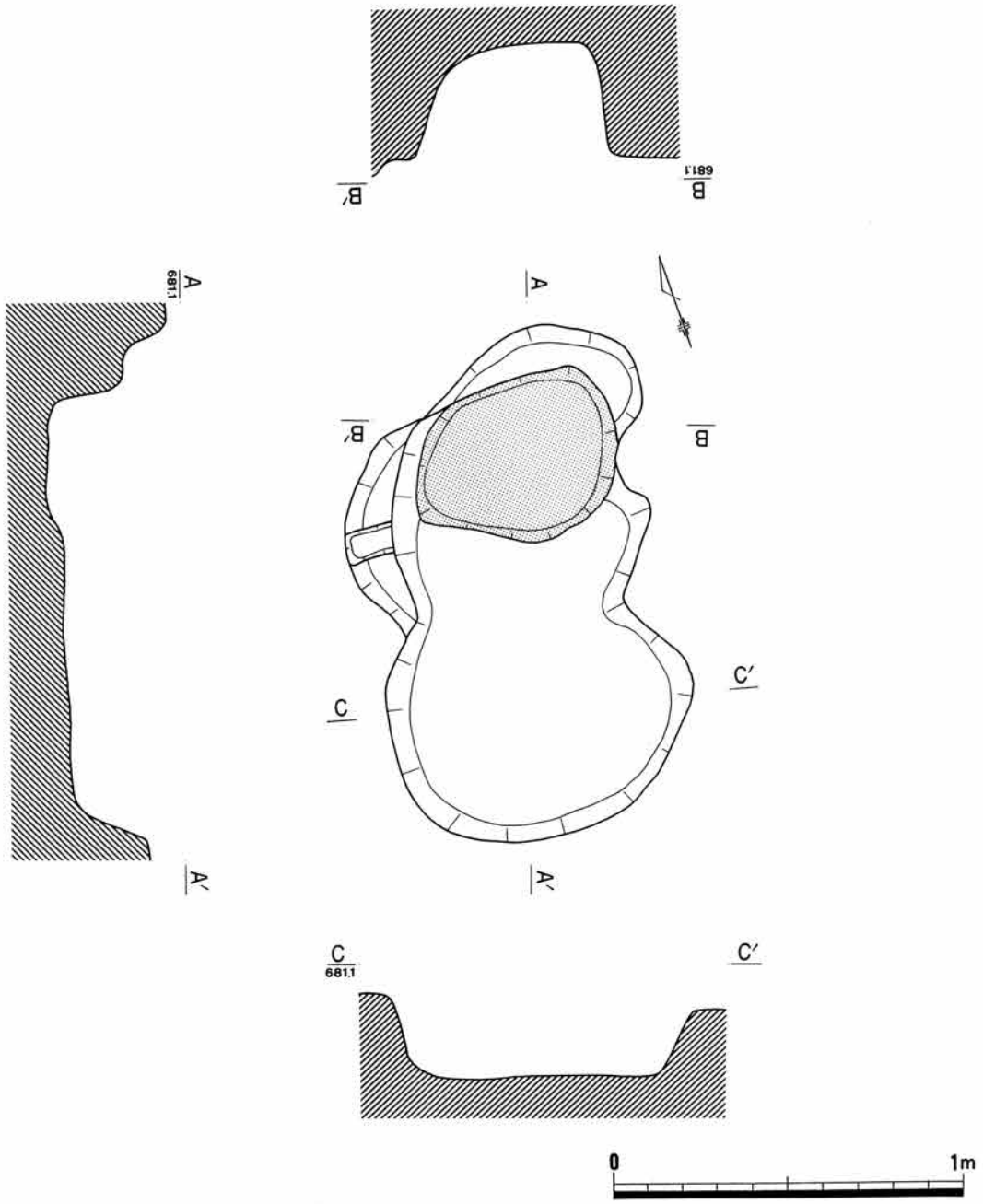
〈第1号炉〉

遺構（第73・74図）

調査区南側の中央部の南側、G－9・10で検出された。炉と前庭部から成り、完掘状態で瓢箪形を呈する。全長1.5m、長軸方向はN－18°－Eである。

炉は径0.5m、深さ0.35mで、炉壁は地山の岩盤を掘り込む。前庭部との境には、角柱形に成形した岩盤が架かり、上部を閉塞し、下部はトンネル構造を呈する。焼土は炉底面全体に及ぶが、特に炉壁北側と閉塞部分にはブロック状の焼土塊が顕著に認められた。炉壁部分は全体が被熱によって赤変し、長方形を呈する。閉塞石の前庭部側には被熱は認められない。焼土塊が堆積した上から須恵器杯、土師器甕の破片が出土している。

前庭部は閉塞部分から括れ、この括れ部分には円礫が配置されていた。径0.8m、深さ0.2mを測

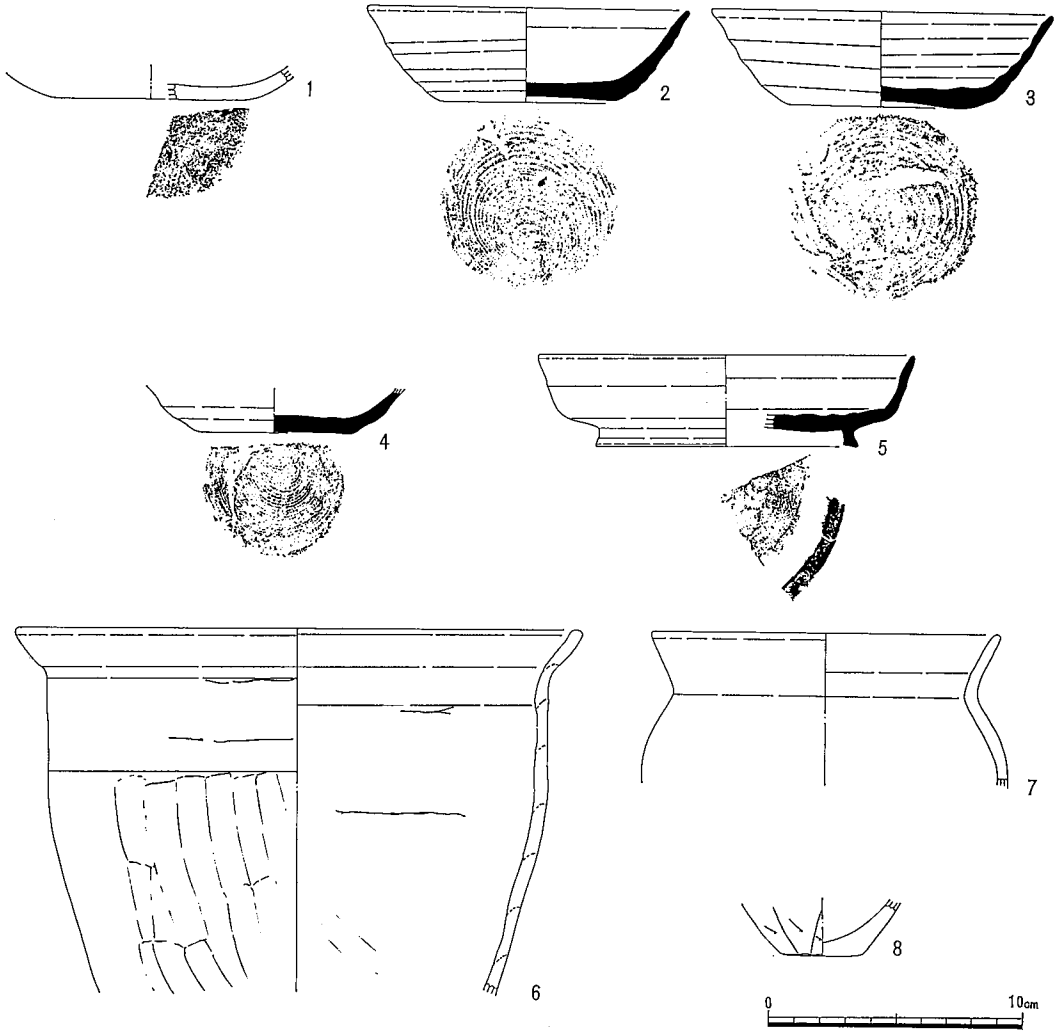


第74図　第１号炉実測図(2)（1/20）

り、底面は平坦だが、炉底面よりもわずかに浅い。前庭部の覆土には、細かい木炭片が焼土と混在して確認されたが、鉄滓などは見られなかった。覆土を磁石で検査したところ粒状滓が見られた。前庭部の東壁際から、須恵器の杯が出土している。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子、炭化物を全体に含む。焼土粒子を含む。）



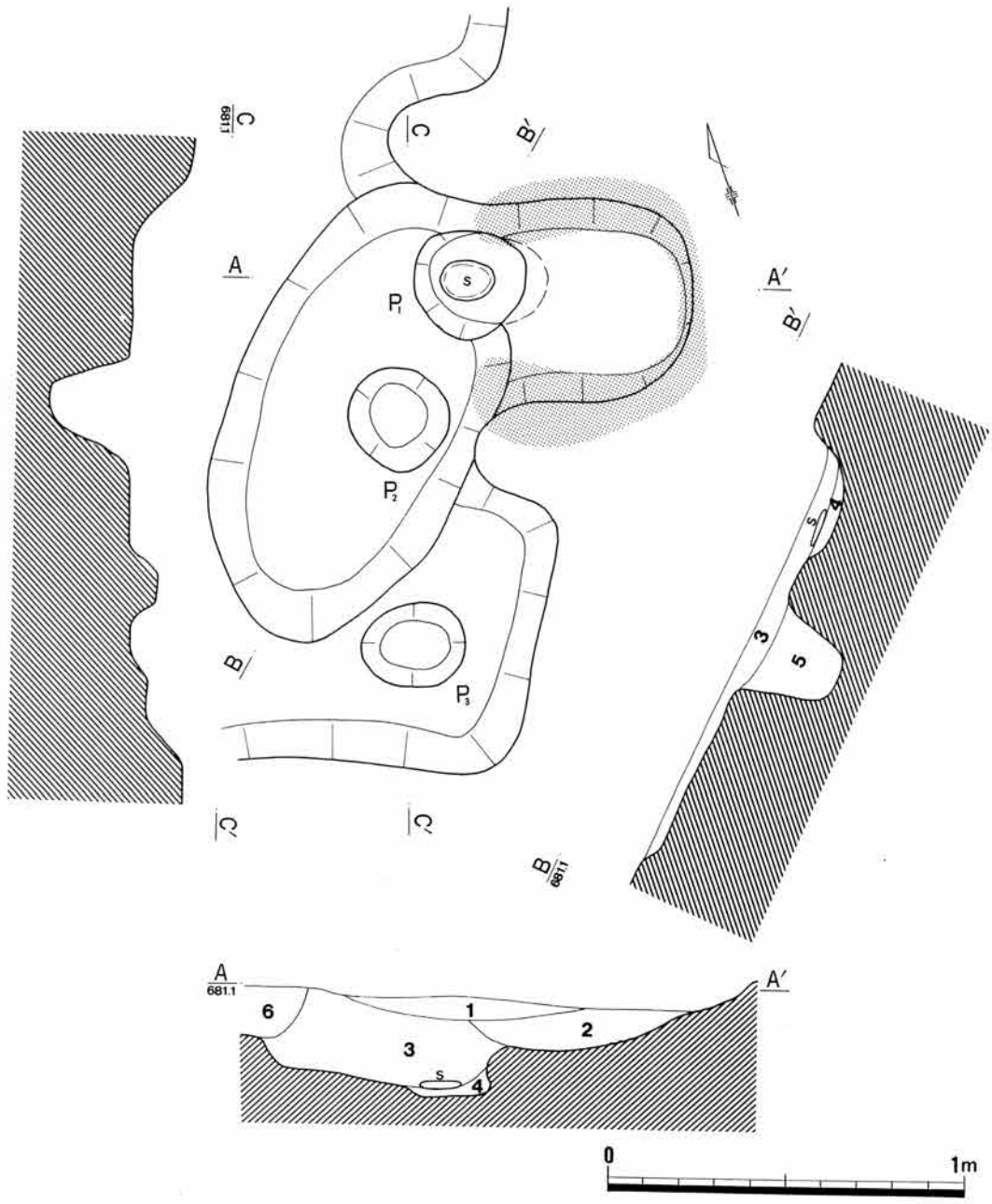
第75図　第１号炉出土遺物（1/3）

第２層　暗褐色土（岩盤ブロック、炭化物を斑に含む。焼土ブロックを多く含む。）
第３層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物、岩盤粒子を全体に粗く含む。）
第４層　暗赤褐色土（焼土ブロック、炭化物を全体に含む。）
第５層　暗褐色土（焼土ブロック・粒子を全体に多量に含む。炭化物の混入多い。）
第６層　暗褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に多量に含む。）
第７層　暗褐色土（岩盤粒子、焼土粒子、炭化物を全体に含む）
第８層　焼土塊（細かい炭化物を全体に含む。）

遺物（第75図）

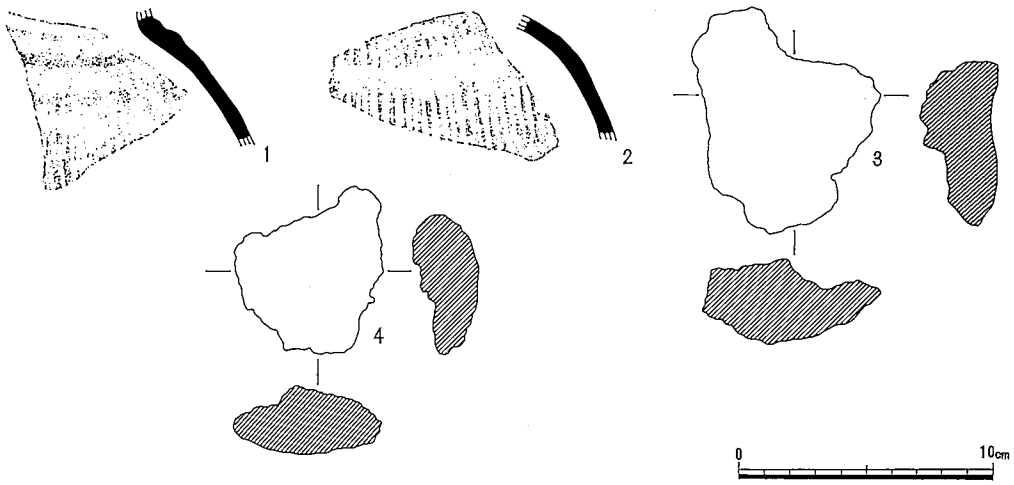
１は土師器の杯と思われる。推定底径7.4cmを測り、実測部分の残存率は約30％である。器面は全体に摩耗が著しいが、外底面はヘラケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

２～５は須恵器の杯である。２は口径12.8cm、器高3.8cm、底径7.1cmを測り、口縁の一部を欠く



第76図　第２号炉実測図（1/20）

がほぼ完形である。体部は丸みを帯びて立上がる。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。３は口径13.5cm、器高3.8cm、底径７cmを測り、実測部分の残存率は約80％である。体部は丸みを帯びて立上がる。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。４は底径6.2cmを測る。右回転のロクロ成形で、外底面には回転糸切痕を残す。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。器面には火襷が認められる。５は高台付杯である。



第77図　第２号炉出土遺物（1/3）

推定で口径15cm、器高3.6cm、底径10.5cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。腰部が張り、口縁はわずかに外反する。高台は外方がわずかに突出する。右回転のロクロ成形で、底部手持ちヘラケズリ後に高台を貼付する。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

６～８は土師器の甕である。６は推定口径22.1cmを測り、実測部分の残存率は約15％である。口縁は外反し、底部に向かって細くなる。口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向の削りが施される。器面の一部に粘土接合痕が見られる。暗橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。７は推定口径13.8cmを測り、実測部分の残存率は約20％である。口縁は外反し、肩部が張って胴部は球形を呈すると思われる。器面は摩耗が著しい。橙褐色を呈し、微砂粒、角閃石、赤色粒子を含む。８は推定底径３cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。外面にはヘラケズリが顕著に認められる。暗褐色を呈し、微砂粒、角閃石を多く含む。

〈第２号炉〉

遺構（第76図）

調査区中央の南寄り、Ｈ・Ｇ－９グリッドで検出された。第１号炉の北側約２ｍに位置し、第15号住居跡と重複し、第15号住居跡より古い。プラン確認の段階で、焼土が「コ」の字形に巡っているのが認められた。当初は住居跡のカマドの可能性も考慮して調査したが、焼土の範囲がカマドと異なること、楕円形に掘り込まれた前庭部が認められること、遺構確認時に鉄滓が出土していること、本遺跡では東辺にカマドを持つ住居跡は検出されていないことから、製鉄関連の遺構と判断し、磁石で検査したところ粒状滓が確認された。

炉は0.5ｍ×0.5ｍの「コ」の字形で深さ0.15ｍを測る。前庭部は長径1.3ｍ、短径0.7ｍの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－35°－Ｅである。底面にはピットが２基検出された。ピット１は30cm×28cmの円形プランで、炉底面からの深さ15cmを測る。炉底側へオーバーハングする。底面よりわずかに浮いた状態で円礫が出土している。ピット２は27cm×26cmの円形プランで、前庭部からの深さ24cmを測る。前庭部の南側で検出されたピット３は、30cm×23cmの楕円形プランで、深さ５cmを測る。

炉底面よりも前庭部が深まり、炉底面は全体的に被熱によって赤変していたが、構造的には判然としない。炉及び前庭部の北・南側が張り出しているが、何らかの構造物があった可能性も考えられる。

〔土層説明〕

第１層　暗茶褐色土（焼土ブロック・粒子を多く含む。炭化物を含む。）

第２層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子を多く含む。岩盤ブロックを含む。）

第３層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子を多く含む。岩盤ブロックを多量に含む。）

第４層　黒褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。しまり弱い。）

第５層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子をわずかに含む。岩盤ブロックを多く含む。）

第６層　第15号住居跡覆土。

遺物（第77図）

１は須恵器の甕の頸部破片である。平行叩きの後に頸部にロクロ調整を施す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。２は須恵器の甕の肩部破片である。外面には平行叩きが見られる。暗青灰色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。

３・４は鉄滓である。ともに遺構確認時に出土した。３は片面が流動状を呈し、現存で長さ９cm、幅7.5cm、厚さ3.5cm、重さ268ｇを測る。４は椀形滓である。現存で長さ6.8cm、幅６cm、厚さ2.8cm、重さ108ｇを測る。

第５節　土　　壙

今回の調査で検出された土壙は８基を数える。この内第１～３号土壙は一定間隔で並んで検出された。掘立建物跡の可能性が高いと判断され、周辺を精査したものの、関連遺構は見られなかった。また、第７・８号土壙は、被熱を受けた痕跡があり、鍛冶炉に関連する遺構とも考えられる。

〈第１号土壙〉（第78図）

調査区の西寄り、Ｅ－８グリッドで検出された。55cm×48cmの隅丸方形プランを呈し、深さ14cmを測る。長軸方向はＮ－28°－Ｅである。壙底は平坦で、立上がりは急である。出土遺物は見られなかった。

〔土層説明〕

第１層　黒褐色土（炭化物をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

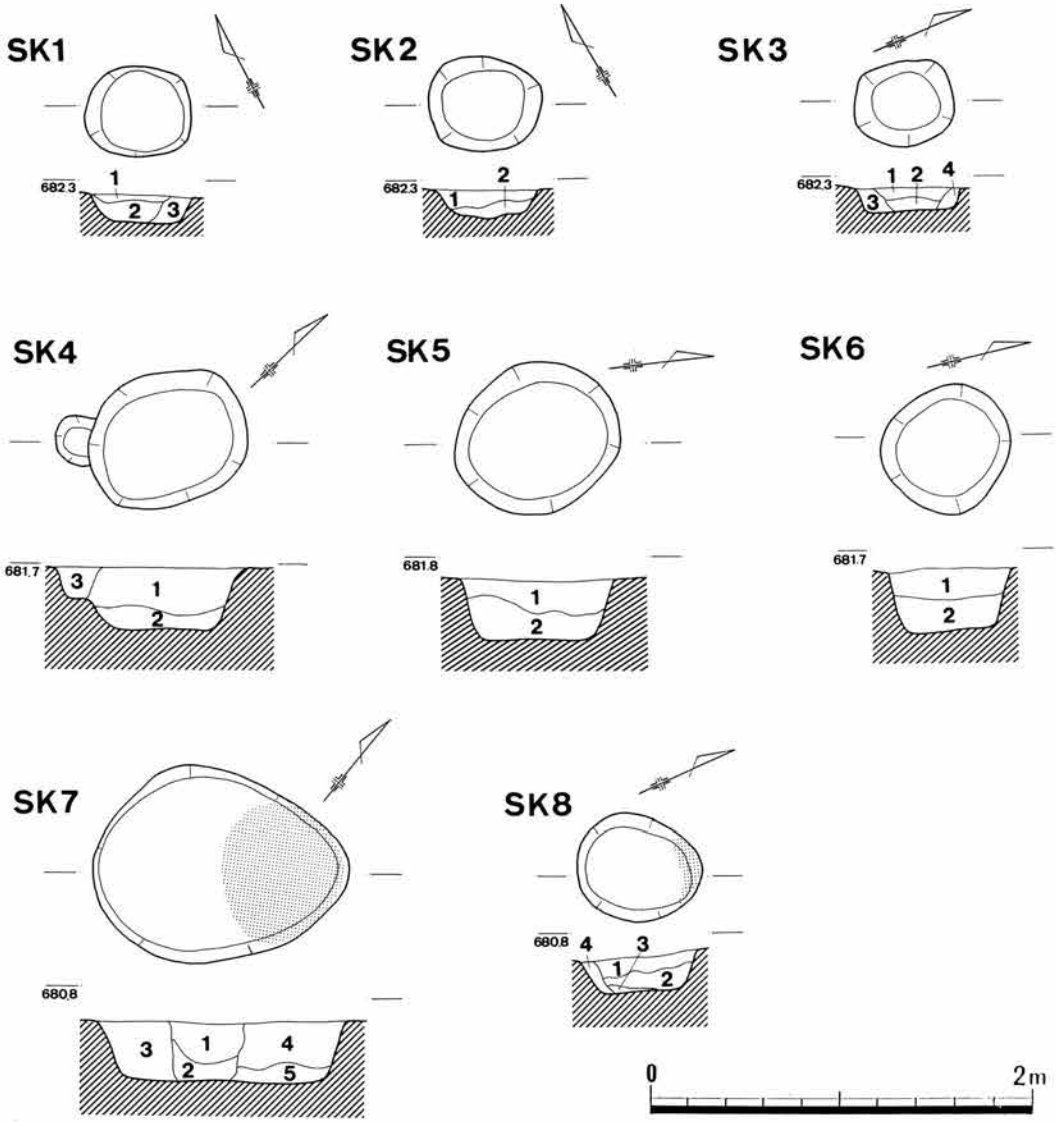
第３層　暗褐色土（岩盤ブロックを斑に含む。炭化物をわずかに含む。）

〈第２号土壙〉（第78図）

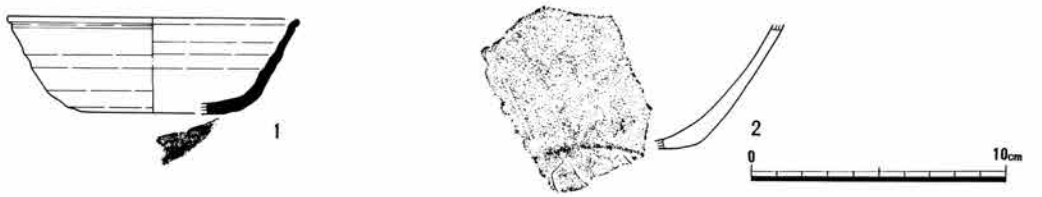
調査区の西寄り、Ｅ－８グリッドで検出された。60cm×50cmの隅丸方形プランを呈し、深さ15cmを測る。長軸方向はＮ－68°－Ｗである。壙底は概ね平坦だが、中央部がわずかに深まる。立上がりは急である。出土遺物は須恵器の坏・甕、土師器の甕の砕片がわずかに見られた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）



第78図　土壙実測図（1/40）



第79図　第4号土壙出土遺物（1/3）

第２層　暗褐色土（岩盤ブロックを多く含む。炭化物をわずかに含む。）

〈第３号土壙〉（第78図）

調査区の西寄り、Ｅ－７グリッドで検出された。50cm×46cmの隅丸方形プランを呈し、深さ13cmを測る。長軸方向はＮ－25°－Ｅである。壙底は平坦で、立上がりは急である。出土遺物は見られなかった。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（岩盤粒子、暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

第２層　暗褐色土（岩盤ブロック、暗黄褐色土粒子、炭化物を含む。）

第３層　暗褐色土（岩盤ブロックを多量に含む。炭化物わずかに含む。）

第４層　暗褐色土（岩盤ブロック、暗黄褐色土粒子を主体とする。）

〈第４号土壙〉

遺構（第78図）

調査区の中央の南寄り、Ｆ－８グリッドで検出された。84cm×68cmの隅丸長方形プランを呈し、深さ34cmを測る。長軸方向はＮ－42°－Ｅである。壙底は平坦で、立上がりは急である。南側の段は、土層断面の観察から、土壙埋没後に掘りこまれたピットである。ピットは26cm×22cm、深さ17cmを測る。出土遺物は須恵器の坏・甕、土師器の甕の破片がわずかに見られた。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを多く含む。炭化物を全体に含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

第３層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤粒子をわずかに含む。）

遺物（第79図）

１は須恵器の坏である。推定で口径11.6cm、器高3.9cm、底径5.6cmを測り、実測部分の残存率は約18％である。腰部が丸みを帯び、口端直下に沈線が巡る。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕が見られる。暗茶褐色を呈し、微砂粒、角閃石を含む。２は土師器の甕の底部破片である。外面は縦方向のケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。

〈第５号土壙〉（第78図）

調査区の中央の南寄り、Ｆ・Ｇ－７・８グリッドで検出された。88cm×76cmの楕円形プランを呈し、深さ29cmを測る。長軸方向はＮ－35°－Ｗである。壙底は平坦で、立上がりは急である。出土遺物は見られなかった。

〔土層説明〕

第１層　暗褐色土（暗黄褐色土ブロックを多く含む。炭化物をわずかに含む。）

第２層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを含む。）

〈第６号土壙〉（第78図）

調査区の中央部の西寄り、Ｇ－６・７グリッドで検出された。67cm×61cmの楕円形プランを呈し、深さ32cmを測る。長軸方向はＮ－35°－Ｗである。壙底は平坦で、立上がりは急である。出土遺物は見られなかった。

〔土層説明〕

第1層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

第2層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、岩盤ブロックを多く含む。）

〈第7号土壙〉（第78図）

調査区の中央部、J－7グリッドで検出された。127cm×104cmの不整円形プランを呈し、深さ32cmを測る。長軸方向はN－48°－Eである。壙底は平坦で、立上がりは急である。覆土中に焼土を多く含み、壙底面には被熱による赤変が認められた。出土遺物は見られなかった。

〔土層説明〕

第1層　暗茶褐色土（焼土ブロックを多量に含む。炭化物を多く含む。）

第2層　黒褐色土（焼土粒子、炭化物を全体に多く含む。）

第3層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子、暗黄褐色土粒子を全体に含む。）

第4層　暗褐色土（炭化物、焼土粒子、暗黄褐色土粒子を多く含む。）

第5層　暗褐色土（炭化物、暗黄褐色土粒子を斑に含む。）

〈第8号土壙〉（第78図）

調査区の南側中央部寄り、F・G－10グリッドで検出された。第1号炉の南西約1mに位置する。67cm×58cmの楕円形プランを呈し、深さ20cmを測る。長軸方向はN－20°－Eである。壙底は平坦で、立上がりは急である。覆土中に焼土粒子を含み、壙底及び北側の立上がりに被熱による赤変が認められた。出土遺物は須恵器の坏、土師器の甕の砕片がわずかに見られた。

〔土層説明〕

第1層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、焼土粒子、炭化物をわずかに含む。）

第2層　暗褐色土（岩盤ブロック、炭化物を斑に含む。焼土粒子を多く含む。）

第3層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子、炭化物を全体に含む。）

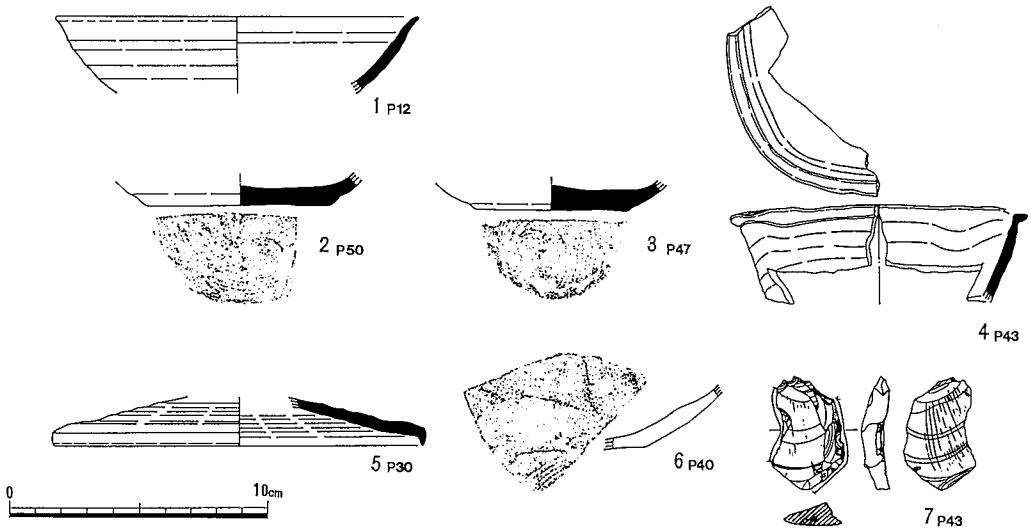
第4層　暗褐色土（暗黄褐色土粒子を多く含み、粘性あり。炭化物を多く含む。）

第6節　ピ　ッ　ト

検出ピットは75基を数えた。特に調査区の南東部では、ピットが集中分布する傾向が認められた。試掘調査した段階で掘立建物の存在が予想されていたが、必ずしも建物跡として認識できなかった。土師器・須恵器の破片が出土する例も多数認められ、建物の可能性も十分考えられるものの、配列や規模、柱穴の位置関係が明確にされなかったため、ピット群としておきたい。斜面地の裾から低地へ地形が変わり、集落の外れに位置することも考慮するならば、柵列の可能性も高いと思われる。

遺物（第80図）

ピットから出土した遺物は、いずれも破片資料であり、実測可能なものを選択して図示した。1は須恵器杯の口縁部破片である。推定口径14.4cmを測り、実測部分の残存率は約12％である。体部は丸みを帯びて立上がり、口端は先細って外反する。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。P_{12}出土。2は須恵器杯の底部破片である。推定底径7.2cmを測り、実測部分の残存率は約40％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、



第80図　ピット出土遺物（1/3）

白色粒子を含む。P_{50}出土。3は須恵器杯の底部破片である。推定底径6.2cmを測り、実測部分の残存率は約50％である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。P_{47}出土。4は須恵器杯の口縁部破片である。推定口径12cmを測り、実測部分の残存率は約25％である。口縁下に沈線が巡り、口端は外方に突出して上部には面を成す。全体に器形の歪みが大きく、内面は変質している。焼成不良品か、或いは坩堝に使われたのかもしれない。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。P_{43}出土。

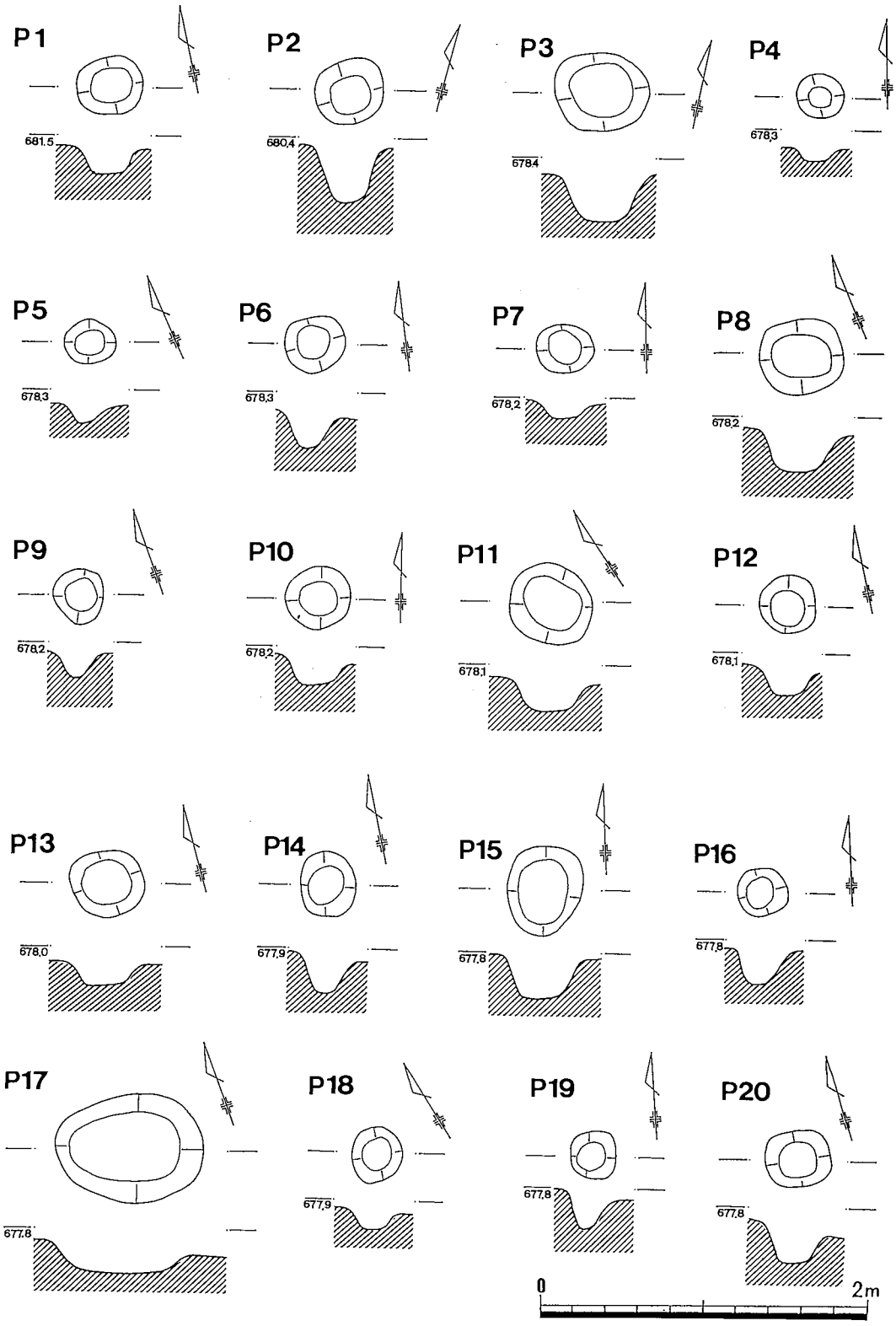
5は須恵器の蓋である。推定口径14.8cmを測り、実測部分の残存率は約10％である。右回転のロクロ成形で、天井部は回転ヘラケズリが施される。青灰色を呈し、微砂粒、角閃石、白色粒子を含む。P_{30}出土。6は土師器のロクロ甕の底部破片である。右回転のロクロ成形で、外底部には回転糸切痕を残す。外面は縦方向のケズリが施される。暗橙褐色を呈し、微砂粒を多量に含む。P_{40}出土。7は使用痕のある剥片である。両面ともに打点方向が同一で、両側縁を使用面としている。現存で長さ4.5cm、幅1.9cm、厚さ0.9cm、重さ9.9gを測る。黒曜石製。P_{43}出土。

ピット番号	調査区	形態	規模 (長径×短径×深さ)cm	長軸方向	出土遺物、備考
1	G－8	楕円形	43×36×18	N－85°－W	なし。
2	J・K－8	〃	46×40×37	N－61°－E	〃
3	L－12	〃	60×49×37	N－72°－E	須恵器甕1・坏1。
4	L－12	円形	31×28×6	N－84°－E	なし。
5	L－12	〃	34×28×12	N－71°－W	〃
6	K・L－12	不整円形	39×34×25	N－81°－E	須恵器甕1・坏1、土師器甕1。
7	L－12	楕円形	38×32×13	N－84°－E	なし。
8	L－12	隅丸方形	55×47×28	N－74°－W	〃
9	L－13	不整楕円形	36×32×16	N－8°－W	〃
10	L－13	円形	42×38×20	N－65°－E	〃
11	L－13	楕円形	56×50×23	N－38°－W	〃
12	L－13	不整円形	36×38×20	N－14°－E	〃
13	M－12	隅丸方形	50×42×16	N－84°－E	〃
14	L・M－12・13	楕円形	43×36×26	N－8°－E	〃
15	M－13	〃	58×47×29	N－4°－E	〃
16	M－13	隅丸方形	34×31×24	N－75°－E	〃
17	L・M－13	楕円形	94×70×20	N－78°－W	〃
18	M－11・12	不整円形	38×32×15	N－15°－E	〃
19	M－12	隅丸方形	34×29×27	N－2°－E	〃
20	M－12	〃	42×36×28	N－82°－W	〃
21	M－12	円形	38×34×27	N－0°	〃
22	M－12	楕円形	28×21×16	N－70°－E	〃
23	M－13	円形	38×33×20	N－85°－W	須恵器甕2・壺1、土師器甕1。
24	M－13	不整楕円形	52(44)×38×33	N－8°－E	須恵器甕1、土師器甕1。南側に段をもつ。
25	N－13	〃	52×45×20	N－30°－E	須恵器甕2・坏1
26	N－13	隅丸方形	34×26×18	N－84°－E	須恵器甕2、土師器甕2
27	N－13	円形	77×59×32	N－64°－E	須恵器甕2・坏2、土師器甕7・坏1。
28	N－13	〃	39×37×28	N－75°－E	土師器甕1。
29	N－13	楕円形	43×32×18	N－45°－E	須恵器甕3、土師器甕2・坏1。
30	N－12・13	円形	47×45×20	N－64°－E	須恵器蓋2、土師器甕1
31	N－13	〃	57×52×22	N－88°－W	須恵器甕2・坏1、土師器甕1
32	N・O－13	不整楕円形	47×40×17	N－11°－W	なし。
33	O－13	不整円形	36×32×11	N－10°－W	須恵器坏1。
34	O－13	〃	38×34×16	N－82°－E	なし。
35	O－12	隅丸方形	37×31×21	N－7°－W	須恵器坏2。
36	O－12	不整円形	40×36×16	N－30°－W	須恵器甕3・坏1、土師器甕2。
37	O－12	円形	36×34×24	N－70°－W	なし。
38	N・O－12	楕円形	66×56×26	N－18°－E	なし。P_{39}と重複。
39	O－12	隅丸方形	26×(22)×16	N－74°－W	須恵器甕3・坏7、土師器甕8。P_{38}と重複
40	O－12	楕円形	70×59×36	N－54°－E	須恵器蓋1、土師器甕4・坏1。

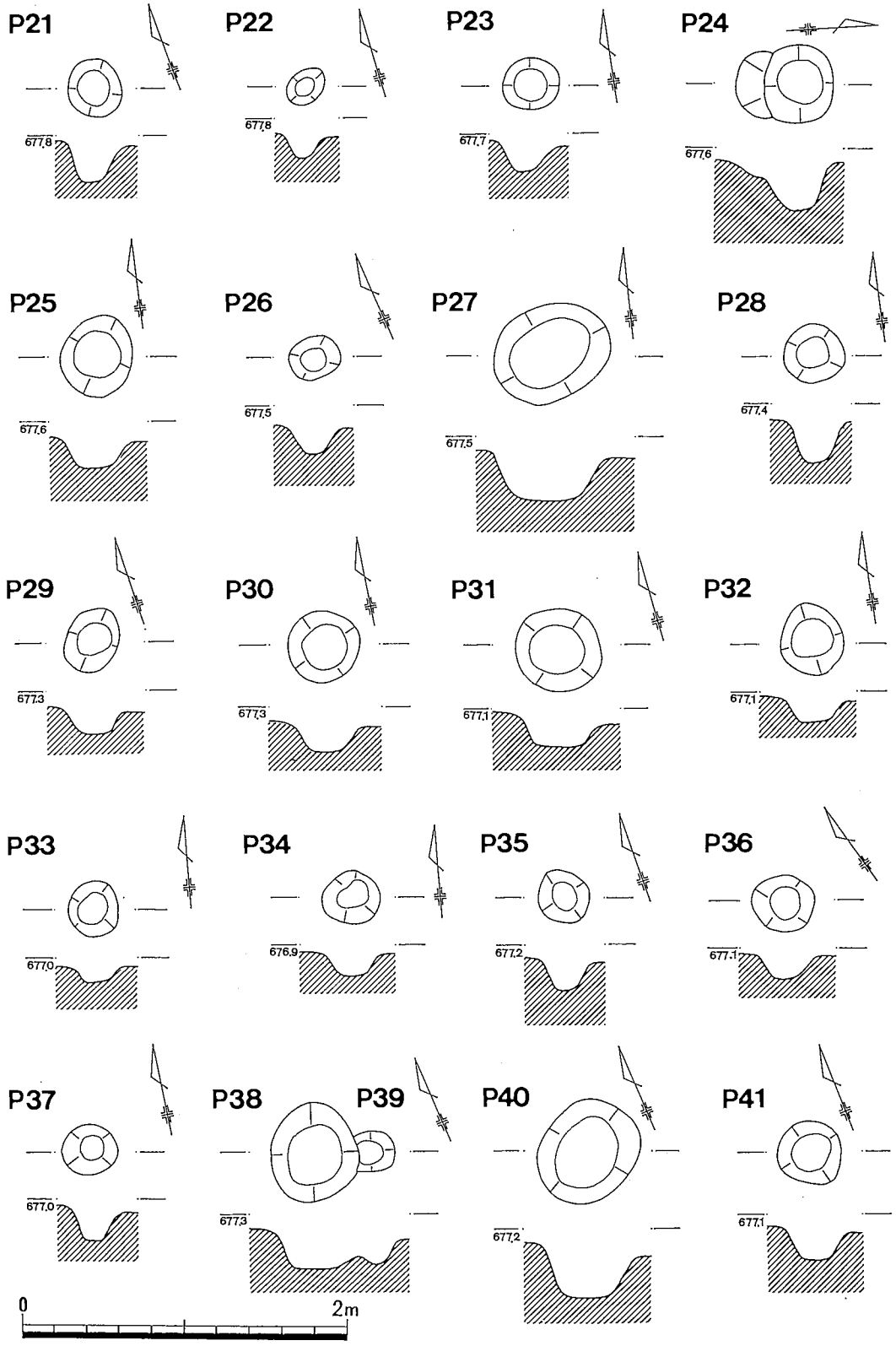
第2表　ピット一覧表(1)

ピット番号	調査区	形態	規模 (長径×短径×深さ)cm	長軸方向	出土遺物、備考
41	O－12	不整円形	44×41×22	N－13°－W	須恵器坏1、土師器甕8・坏1。
42	O－12	隅丸方形	43×38×26	N－43°－E	須恵器甕1・坏1。
43	O－13	円形	32×29×16	N－38°－W	須恵器3・坏6、土師器甕2、黒曜石1。
44	O－13	不整楕円形	54×43×18	N－52°－W	須恵器坏1・蓋1、土師器甕2。
45	O－13	不整円形	50×44×22		須恵器甕1。
46	O・P－13	〃	45×42×12	N－64°－E	なし。
47(上)	P－13	円形	72×64×9	N－8°－W	須恵器甕1・坏2。
47(下)		不整円形	38×34×26	N－89°－E	土師器甕1。底面南にピットを持つ。
48	P－13	〃	34×30×14	N－69°－E	須恵器坏1。段を持って深まる。
49	P－13	〃	31×28×14	N－9°－E	須恵器坏1。
50	P－14	不整楕円形	70×56×14	N－10°－W	須恵器甕1・坏2。
51	P－14	隅丸方形	58×54×14	N－51°－W	土師器甕1。
52	P－14	〃	32×28×18	N－65°－W	須恵器坏1・蓋1、土師器甕1・坏1。
53	O－14	楕円形	46×34×26	N－4°－W	須恵器坏3、土師器甕1、黒曜石1。
54(上)	P－14	不整楕円形	68×49×10	N－80°－E	なし。底面にピットを持つ。
54(下)		隅丸方形	22×26×16	N－54°－W	
55(上)	P－14	楕円形	52×43×16	N－43°－W	須恵器甕1・坏2、土師器甕2。底面南西にピットを持つ。
55(下)		〃	18×14×28	N－6°－W	
56	P－14	隅丸方形	44×37×14	N－23°－W	なし。
57	P－14	〃	42×38×18	N－66°－E	〃
58	P－11	〃	51×45×30	N－41°－W	〃
59	P－11	〃	75×72×27	N－49°－W	〃
60(南)	P－11・12	不整円形	54×46×25	N－57°－W	須恵器甕4・坏3・蓋2。北東部のピットと重複する。
60(北)		〃	27×24×35	N－60°－W	
61	O－11・12	〃	41×36×24	N－27°－E	須恵器甕7・坏2、土師器甕10。
62	N－12	〃	42×38×19	N－11°－W	なし。
63	O－12	〃	29×24×14	N－64°－E	〃。P_{64}と重複する。
64	O－12・13	〃	42×31×10	N－83°－E	〃。P_{63}と重複する。
65	L－12	〃	46×40×16	N－8°－W	須恵器坏1、土師器坏1。
66	M－12	隅丸方形	40×35×18	N－71°－W	なし。
67	O－13	不整楕円形	32×27×13	N－80°－W	〃
68	P－14	円形	38×34×20	N－62°－W	〃
69	P－14	不整楕円形	40×34×24	N－28°－W	〃
70	N－12	〃	37×31×16	N－0°	〃
71	N－12	〃	40×32×16	N－55°－E	〃
72	G－8	隅丸方形	31×27×16	N－84°－W	〃
73	Q－11	楕円形	30×23×12	N－2°－E	〃
74	J－8	不整円形	48×43×42	N－70°－E	〃
75	O－13	〃	36×30×10	N－76°－E	〃

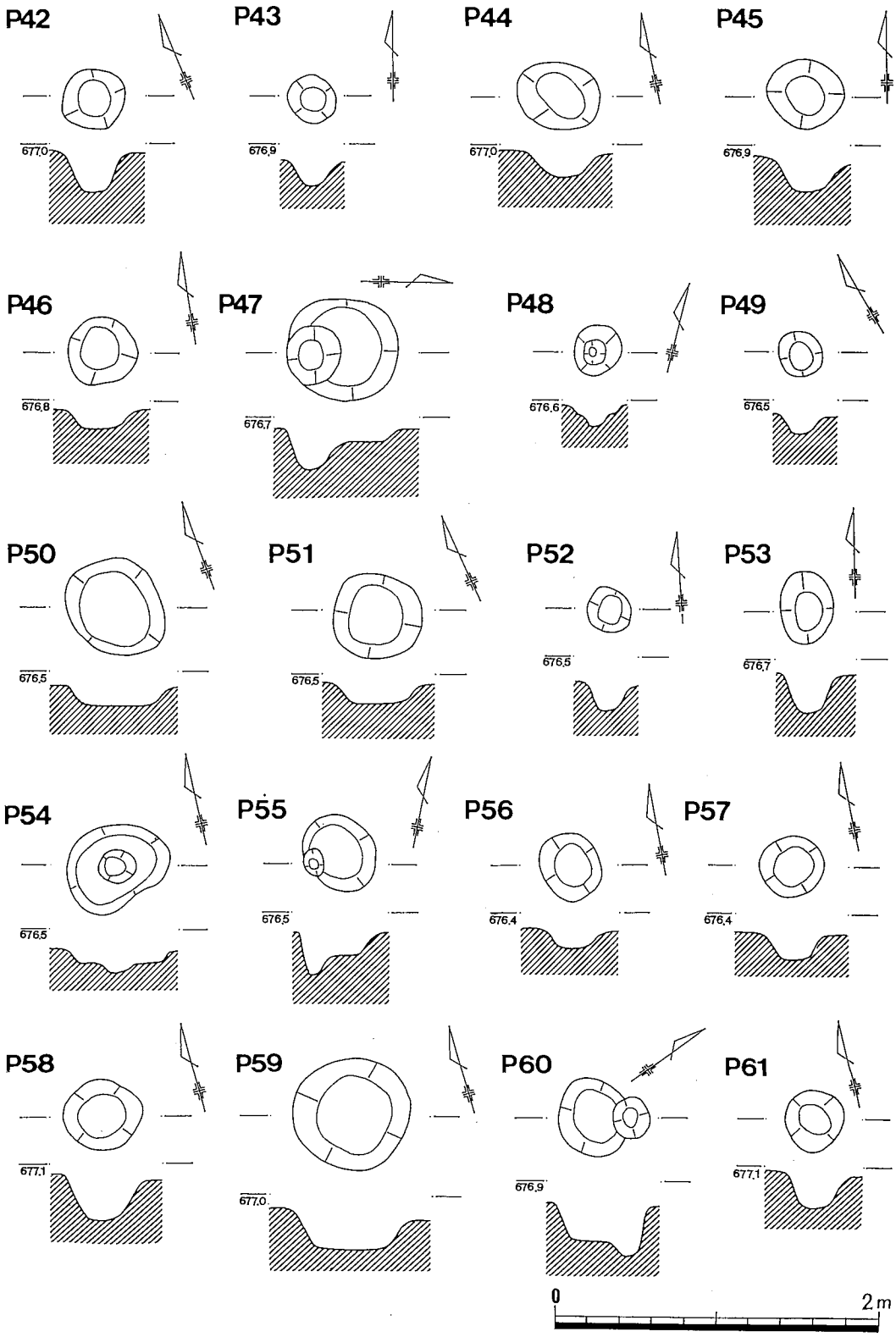
第3表　ピット一覧表(2)



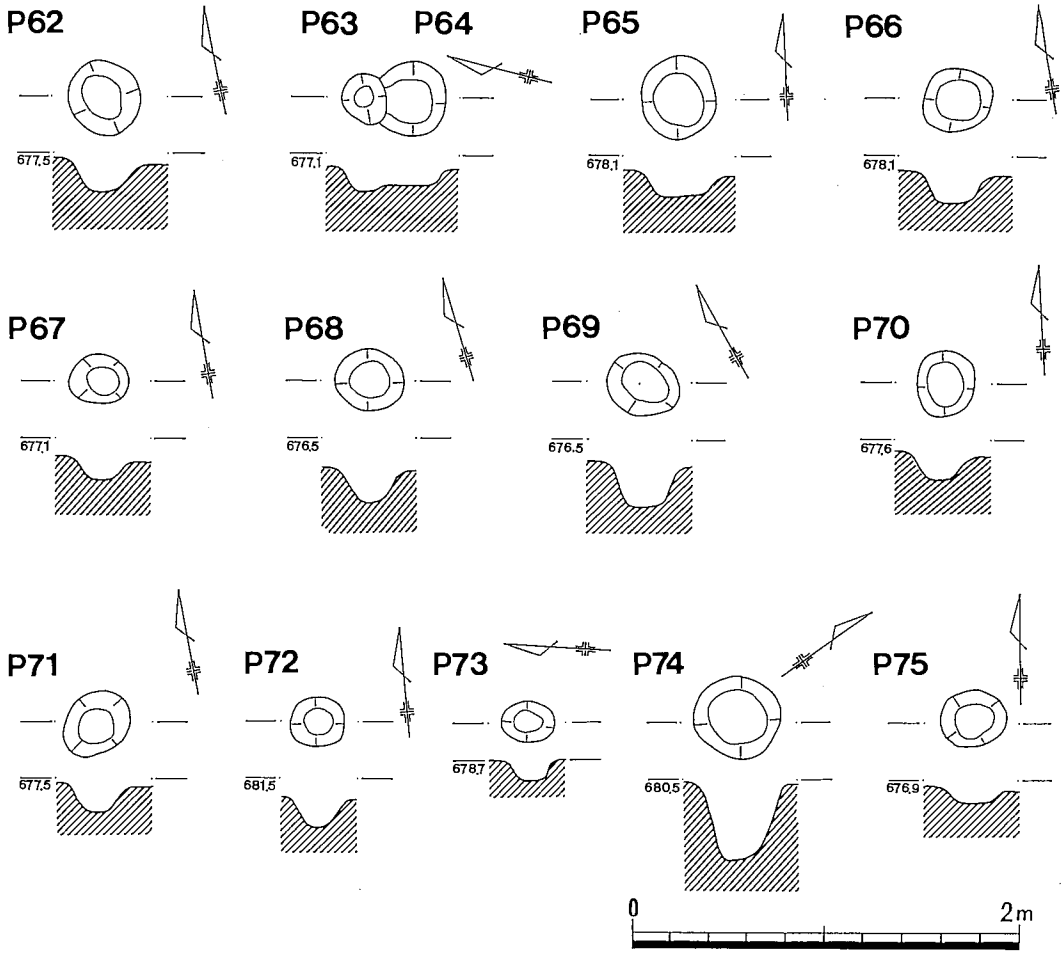
第81図　ピット実測図(1)（1/40）



第82図　ピット実測図(2)（1/40）



第83図　ピット実測図(2)（1/40）



第84図　ピット実測図(2)（1/40）

第Ⅴ章　ま　と　め

第１節　集落の変遷

今回の発掘調査では、奈良・平安時代の住居跡が24軒検出された。これは浅科村に置ける過去の発掘調査で検出された古代集落遺跡の中では、かなりまとまりのある調査事例といえよう。そこで、今後のこの地域の古代集落研究の前提として若干の基礎的分析を提示し、まとめとしたい。

北佐久地域に於ける古代土器の研究には笹沢浩、堤隆氏らによる先行研究が知られている。今回出土した土器について、こうした研究成果を踏まえて時期決定を進めることとした。しかし、各住居跡から出土した遺物は、質・量ともに残存状態の差異が大きく、器種組成なども十分反映された遺物内容を示しているとは思えない。また、一定期間継続した集落であるため、住居跡の覆土中から出土した遺物の中には、他の時期の資料が混在している可能性も高い。本来ならば、時期決定の素材として扱う遺物については、出土状況などの遺構・遺物の同時代性の保証を確定した上で行うべきであろうが、遺構時期の段階設定に時間幅を持たせ、大きく第Ⅰ～Ⅴ段階に分けた。

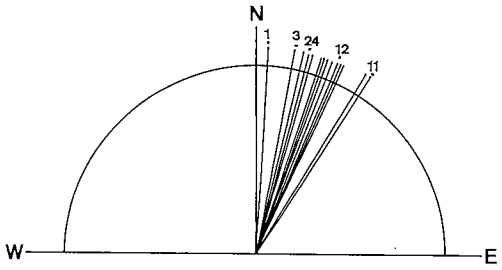
第Ⅰ期　須恵器の坏では、底部ヘラキリにより、厚みを持った丸底の資料が第23号住居跡でまとまって出土しており、本集落では最古段階に位置付けられる。回転糸切による切り離し後、手持ちヘラケズリも見られ、時間幅が認められるものであるが、８世紀中葉～後半に位置付けられる。資料内容が、第23号住居跡以外では貧弱なため、時間幅を持たせて段階を設定した。さらに細分することが可能であろう。第８・14・18・23号住居跡が該当し、遺物が見られなかった第24号住居跡は、遺構の切り合い関係から、次の段階の第20号住居跡よりも古い時期であるため、この段階に位置付けられる可能性がある。

第Ⅱ期　須恵器坏の底部は回転糸切痕を残すが、底径が大きく、口径：底径の比率に佐賀少ないものが主体である。また、「コ」の字形へ移行する土師器甕も見られる。第２・６・７・20・22号住居跡が該当する。

第Ⅲ期　須恵器坏では底径が小さくなる傾向にある。土師器甕では「コ」の字形が進む。第９・10・17・19号住居跡が該当する。また、遺構の切り合い関係から、第11号住居跡もこの段階と思われる。

第Ⅳ期　須恵器坏では底径が小さくなり、焼成の悪い資料も見られる。須恵器蓋のツマミでは、擬宝珠状が変化した資料が見られる。土師器甕では頸部調整手法の変化から「コ」の字形が著しくなる。第５・13・17・15・16・21が該当する。

第Ⅴ期　羽釜が出現した段階である。灰釉陶器の伴出は見られなかった。10世紀前半に位置付けられよう。第４号住居跡が該当する。



第85図　竪穴住居跡の主軸方向

以上大まかな分類を行ったが、遺構分布から見ると、第Ⅱ期では第20・22号住居跡が近接し、第Ⅳ期では第13・15・16号住居跡が集まった状況となり、時期決定に関しては、今後更に精密に分類する必要があると思われる。

遺構時期の決定を、出土遺物のみに依存する場合、各器種の形態変化の連続性を踏まえた段階設定を行うことは当然であるが、連続変化は同じ時期の中にも型式学的傾斜があることを考慮する必要がある。ここでの段階設定は、資料内容の変異幅が大きいことに加え、土師器甕と須恵器坏の相互関係の検証経ておらず、今後の再検討によって、細分及び段階の再設定を要することを明示しておきたい。

さて、集落遺跡研究では、同時期の住居跡軒数が問題になるが、前述の雑駁な時期段階を基本としながら、他の属性についてまとめておきたい。竪穴住居跡の分析については、様々な属性が考えられる。例えば主柱穴やカマド、主軸方向や規模などである。ここでは二つの属性について基本的な資料提示をしておきたい。一つは住居跡の規模であり、もう一つは住居跡の主軸方向である。

(1)　竪穴住居の主軸方向

本遺跡で検出された竪穴住居跡は、すべてカマドが北辺に付設される特徴がある。カマドを通るラインを主軸方向とし、その方向の分布を見ると、いずれも東に偏した方向を示している。第85図中に示した数字は、出土遺物から住居跡の時期を決定できなかったものである。最も北寄りが第1号住居跡のN－3°－E、東寄りがN－32°－Eである。特に第3～12号住居跡の主軸方向、つまりN－10～22°－Eに集中する傾向にある。

(2)　竪穴住居跡の規模

竪穴住居跡の東西、南北方向の規模について、第86図に示した。縦方向が東西、横方向が南北を示し、図中の数字は、出土遺物から住居跡の時期を決定できなかったものである。また、規模が判然としない住居跡については除外してある。先に述べたが、本遺跡では、カマドが北辺に位置することから、南北方向が主軸方向となる。1：1の中心線は、東西・南北同比率を示し、このラインよりも上に位置するのは、南北（主軸）方向が長いもの、下に位置するのが東西の長い住居跡となる。つまり、ラインから離れることによって、主軸方向に対して縦長か横長の長方形になる。全体としては、横長の長方形プランを呈する住居跡が多い傾向と言えよう。

大きさについてみると、一辺が3ｍ以下、3～5ｍ、5ｍ以上の3グループに大別され、大部分が一辺3～5ｍの規模である。

(3)　各時期の様相

遺跡内での各時期の住居跡分布と、主軸方向、規模についてまとめたのが第87図である。

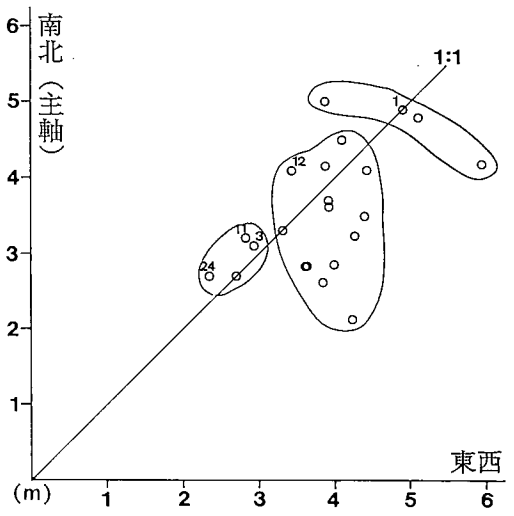
第Ⅰ期　標高の低い部分にまとまった分布が見られる傾向が強い。住居の規模は変異差が大きい。

第Ⅱ期　分布は拡散する。主軸は比較的集中する傾向で、規模にもまとまりが認められる。

第Ⅲ期　主軸方向や規模に変異幅が大きく、異なる要素の竪穴住居で構成される。

第Ⅳ期　標高の高い部分にまとまりのある分布を示す。主軸方向はＮ－20°－Ｅを中心にまとまりが認められ、規模も変異差が少ない。

第Ⅴ期　１軒のみであるが、全段階と同様の規模・主軸方向と思われる。



第86図　竪穴住居跡の規模

以上、竪穴住居跡について基礎的な分析を試みたが、出土遺物から本遺跡で最も古い段階が第23号住居跡で、８世紀中葉に位置付けられ、新しい時期が羽釜を出土した第４号住居跡である。遺跡の中心となる時期は９世紀の前半を中心とし、後述の第１号炉もこの時期に含まれる。掘立建物跡については、出土遺物を伴うものが少なく、時期決定をする根拠に乏しいが、遺物が出土した第７号建物跡は９世紀後半に比定され、第17号住居跡との切り合い関係とも整合する。

また、第10号住居跡の様に主軸方向に対した極端に横長なものは、工房等の特殊な性格を持つ可能性が考えられる。

南東部で検出されたピット群は、竪穴住居跡の分布の外縁に位置している。掘立建物跡との予想に基づき調査を行ったが、明確な配列を把握することはできなかった。掘立建物が並列している様でもあり、柵列の様にも思える。建物跡を想定すると、第21・22号住居跡と近接しており、竪穴住居跡との時期差を考慮する必要がある。

竪穴住居跡の広がりについては、今回発掘を行った範囲が、概ね集落全体を収めていると思われる。これは①東西方向の沢筋によって南北が区分されること、②東側の低地は、試掘調査の結果遺構・遺物が見られず、湧水が著しい沖積土で形成される、という２点の地形的な特徴からの判断である。東側の沖積地は、試掘調査で遺構が見られず湧水があったことから、沢筋からの水を利用した耕作地の可能性が高いと思われる。但し、西側の尾根続きに関しては、今回の開発対象外であるため試掘調査を行っておらず、西側に集落が拡大することも予想されることを特に明記し、今後の遺跡範囲の取扱について注意を喚起しておきたい。

（内田・小宮山）

参考文献

笹沢　浩　1988年「古代の土器」『長野県史考古資料編』４

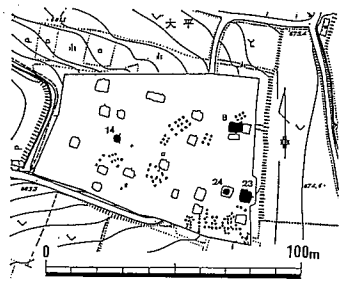
笹沢　浩・原田勝己　1974年「長野県の須恵器（上・下）」『信濃』Ⅳ26-9･11

堤　　隆　1987年「佐久地方における奈良時代を中心とした様相」『長野県考古学会誌』55・56

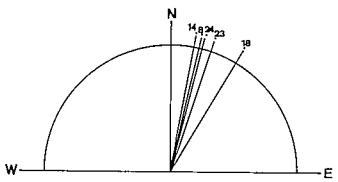
御代田町教育委員会　1987年『前田遺跡』

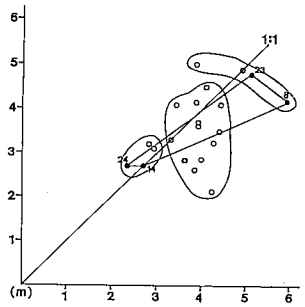
御代田町教育委員会　1988年『十二遺跡』

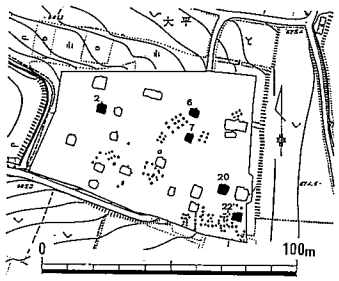
御代田町教育委員会　1989年『根岸遺跡』



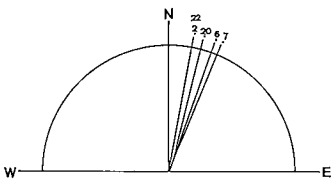
第Ⅰ期

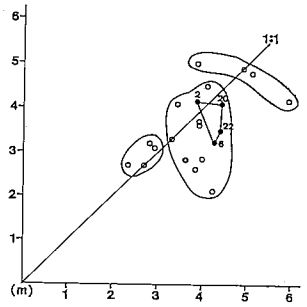


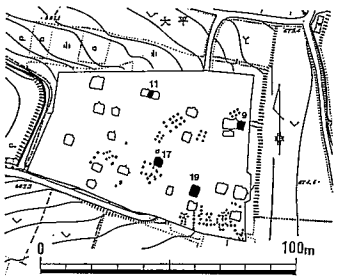




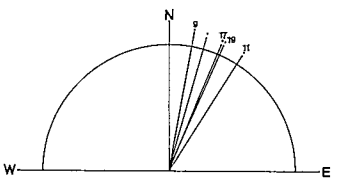
第Ⅱ期

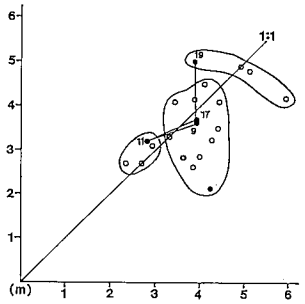


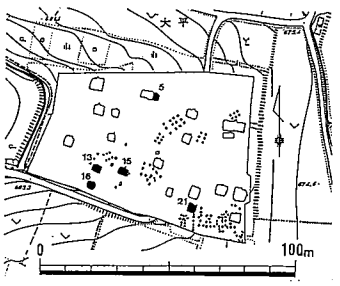




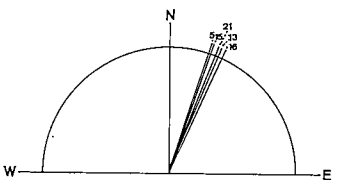
第Ⅲ期

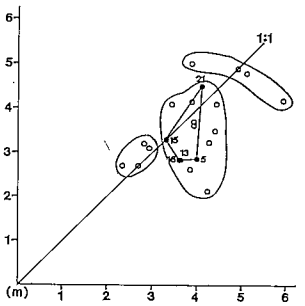


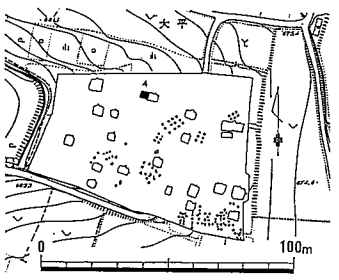




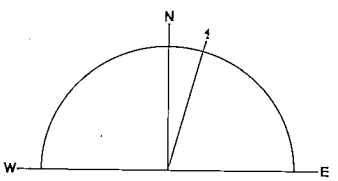
第Ⅳ期

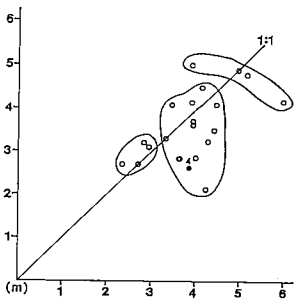






第Ⅴ期





第87図　各時期の様相

第２節　鍛　冶　炉

古代の製鉄遺跡は、近年検出事例が増加しつつある。砂鉄から鉄を還元・精製するタタラ製鉄の他、鉄素材を二次加工する精練・鍛練遺構（ここでは小鍛冶遺構とする）については、長野県内でも規模の大小を問わず多くの報告がなされている。

今回の調査で、製鉄に関連する遺構と考えられるものとして、調査区の西部の斜面地から２基の炉跡が検出された。第１号炉は角柱状に整形した岩盤を架けたもので、構造的な特徴から判断された。第２号炉は、住居跡のカマドと異なり、遺構確認時に焼土が「コ」の字形に巡っており、付近から鉄滓が出土した。しかしこの様な遺構の常として、地上の構造物については不明である。

また、製鉄との関連を裏付けるものとして第21号住居跡から鉄滓、第22号住居跡からは羽口が出土した他、第15・18号住居跡の床面の焼土跡、第７・８号土壙覆土内から焼土が確認されている。しかし、鉄製品が釘・鏃が各１点の出土で、未成品は見られないことや、鉄を溶解するのに必要な木炭窯が無いこと、住居跡の床面の焼土周辺から鍛造剝片は検出されなかったことから、恒常的な生産とは考えられず、鉄加工に於ける鍛練工程の欠如も、本遺跡での特徴と言えるかもしれない。また、鉄滓や羽口の出土点数が圧倒的に少ないことも指摘される。

本遺跡の地山を構成する相浜層中には砂鉄を含んでおり、砂鉄を採取して鉄を精製することは不可能ではないと思われるが、検出された遺構は、砂鉄から鉄を精製したのではなく、鉄素材を二次的に溶解して再生産を行った小鍛冶の遺構と推測される。集落内の需要に応じて、鉄製産を行っていたのであろう。他の遺跡と生産工程を分業した可能性も否定できないが、大平遺跡は８世紀中葉に集落が形成された。製鉄遺構は９世紀前半に位置付けられ、集落形成期と鍛冶炉との時間的相違からも、集落内部の需要に応じたと理解しておきたい。今回の調査で検出できなかったとは言え、関連する遺構や遺物が周辺に存在する可能性もあり、製鉄に関しては今後の調査に期待される。

集落遺跡の中での小鍛冶遺構は、集落内部に必ずと言って良いほど検出されるが、鉄製産を専業化していた手工業技術者集団の存在を裏付けるもの、若しくは移動工人の一時的な作業施設であったのか、などの研究は進んでいないのが現状である。鉄板の加工などを行う工程では、組織的な生産状況ではなく、鉄製産に関わる痕跡を探す事は難しい。小鍛冶址として確認されている例では、竪穴住居跡内に施設をもつものと、単独で土壙状に存在するものに大別され、規模や形態もまちまちである。こうした状況からも、集落内の需要を満たす程度の施設であることを裏付ける証左となるのではないだろうか。古代社会に於ける生産基盤は「租」＝稲作生産であるが、北佐久郡一帯では、牧や須恵器窯業といった「庸」「調」に傾斜した特殊な生産形態が際立った地域であり、小規模な製鉄業とは言え、他の生産様式と関連する可能性も含めた研究の深化が期待されよう。

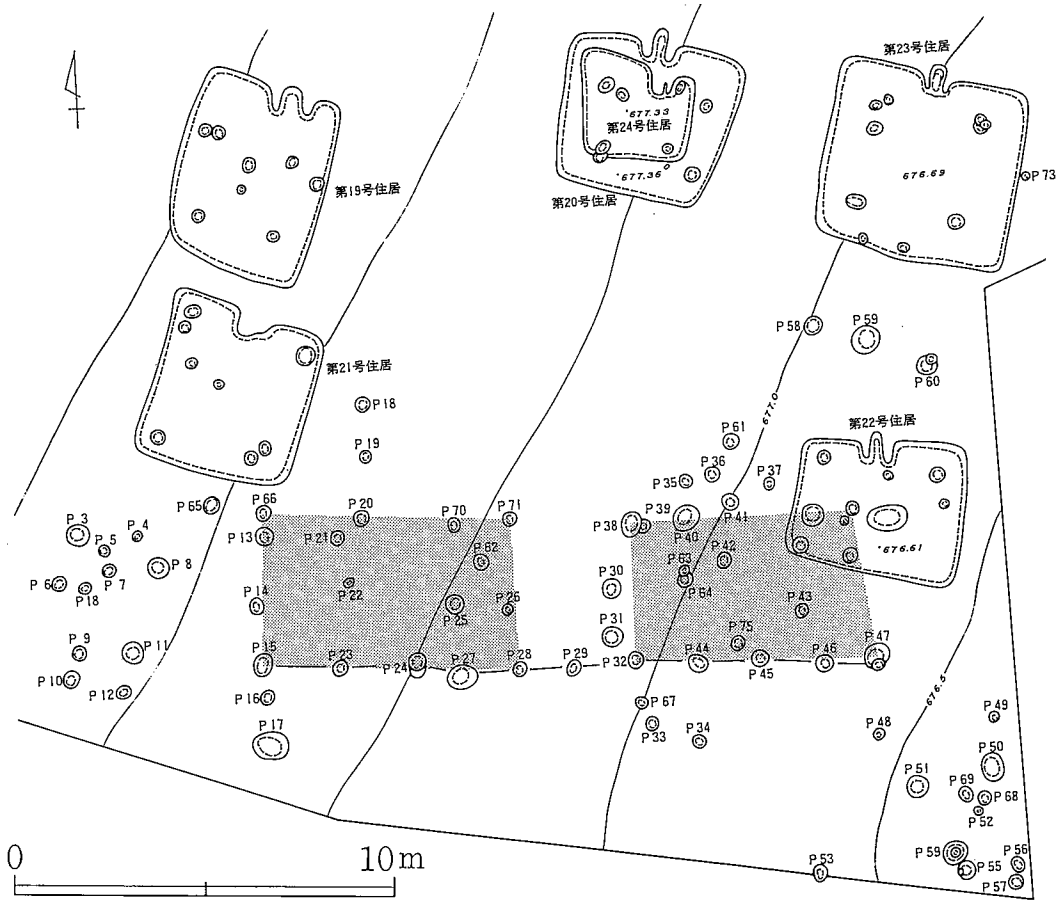
（岡田）

参考文献

『古代東国の産業』　栃木県立なす風土記の丘資料館　1995年

『長野県史　通史編』　第一巻原始・古代　1989年

『長野県史　考古資料編』　全１巻(4)遺構・遺物　1988年



第88図　ピット群の復元（1/200）

第3節　ピット群

調査区の南東部のピット群については、掘立建物跡か柵列のどちらかの可能性がある事を述べてきた。調査区の南東部は、地山が白色粘土で、沖積層へと地形が変化する場所に位置する。白色の地山に黒色の覆土を持つピットで、遺構確認は容易であったと言える。この部分は、試掘調査の段階でピットが確認され、集落の外れに掘立建物が分布する予測を持って発掘調査を行ったが、必ずしもピットの配列は思うように確認されなかった。発掘調査時点では、直線的に並ぶピットとして認識し、多分に柵列の可能性を追及した。こうしたピットの配列から建物跡を推定するには、覆土の特徴、遺物、ピットの形態、規模を考慮し、現地で検証を行った上で建物跡を認識すべきであろうが、ピットが集中分布する状況では、必ずしも良好な結果に至らなかった。最後に第88図として、柵列状に並ぶ部分と、建物状の配列を指摘できる部分を明示しておきたい。

（石坂・小宮山）

あとがき

大平遺跡の発掘調査は、平成９年の６月から９月にわたって実施しました。調査が始まった当初は、ちょうど梅雨の時期でもあり、雨が降ると地面がぬかって一輪車も動かないこともありました。また、夏の暑い最中には、地面が乾いて全面が白くなり、地山と遺構の区別もできず、また、乾燥して硬くなった粘土質の土は、発掘用具を容易に受け付けず、遅々として調査が進まない日もありました。

発掘調査の担当者としては力量不足なことも多く、ご迷惑をおかけしたこともあったと思います。深くお詫びします。

厳しい条件の中、毎日発掘調査に参加してくださった調査協力員の皆さん、夏休みの中、応援にかけつけてくれた学生さん達には本当に感謝いたします。

また、調査に際して、裏方で東奔西走されていた教育委員会の有賀係長、調査を暖かく見守っていただきました栁澤教育長、浅科村役場の皆さん、発掘調査から報告書刊行までご指導いただいた小宮山先輩、遺跡見学会に際してご参加いただいた多くの浅科村民の皆様、ありがとうございました。

今回の発掘調査は、開発に先立つ記録保存を目的としています。つまり、現地での調査が終了しても、その成果をまとめなければ、目的が果たされたとは申せません。本書の刊行で、ようやく記録保存の義務と責任を果たすことができました。

内容は、発掘調査によって検出された遺構・遺物についての報告が主体になっていることから、専門用語も多く、難解の部分もあると思います。事実記載の部分は、担当者として極力正確を期して図版や文章をまとめました。しかし、発掘成果の総括部分については、様々な条件の下で努力しましたが、更に分析を進める余地が多分に残っており、今後の研究に期待したいと思います。

本書にまとめた発掘成果や出土した資料が、郷土学習や考古学研究の材料として広く活用されることが、担当者として望外の喜びであります。

平成10年３月

大平遺跡発掘担当者　岡田　裕

佐藤幸信

浅科村文化財調査報告書

第１集　『土合１号墳の調査』(1969年)

第２集　『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書（1985年)

第３集　『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開した用水路の調査（1987年)

第４集　『矢嶋城跡』第２曲輪部の建築遺構（1988年)

第５集　『矢嶋城跡』主郭部の試掘調査（1991年)

第６集　『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村（1993年)

第７・８集　『矢嶋城跡』村道２－８号線道路改良工事に伴う発掘調査（1996年)

第９集　『御馬寄古城跡』村道北－50号線道路改良工事に伴う発掘調査（1996年)

第10集　『寺田遺跡』古東山道・中仙道沿いの村（1995年)

第11集　『入の沢遺跡』村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査（1997年)

浅科村文化財調査報告　第12集

大平遺跡

発　行　1998年３月

発行所　浅科村教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社

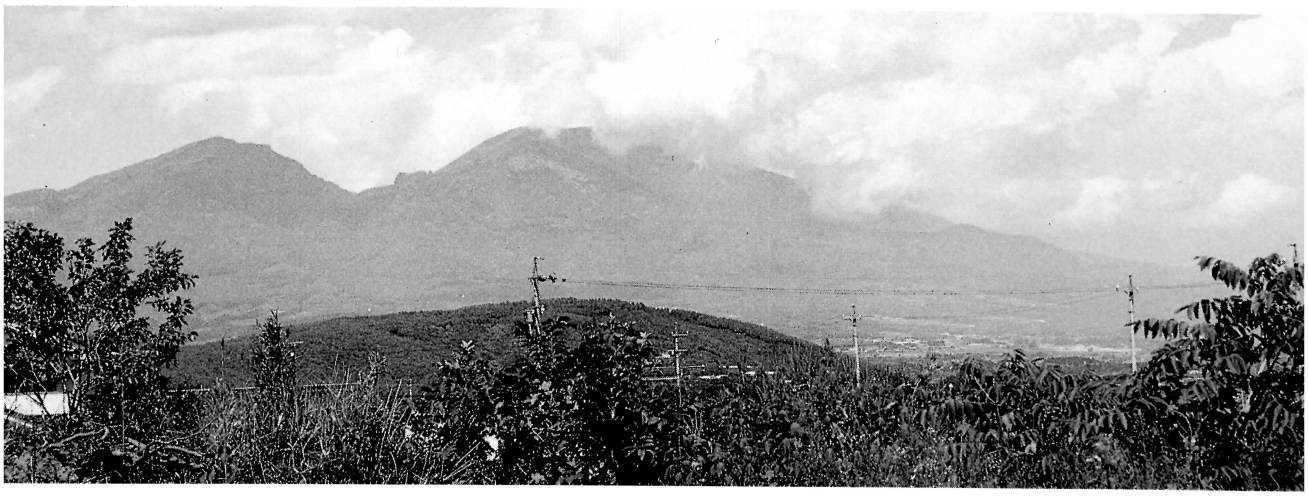
報告書抄録

ふりがな	おおひらいせき
書名	大平遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	浅科村文化財調査報告
シリーズ番号	第12集
編著者名	岡田　裕・佐藤幸信・小宮山克己・内田宏美・秀島幸江・宮沢真央・石坂智子
編集機関	浅科村教育委員会
所在地	長野県北佐久郡浅科村甲1,399
発行年月日	平成10年3月31日

所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大平遺跡	長野県北佐久郡 浅科村大字八幡	203254	No.58	36度 15分 47秒	138度 23分 29秒	19970713 ～ 19970930	5,000㎡	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡24軒 掘立建物跡7棟 土壙8基 ピット75基 鍛冶炉2基	須恵器 土師器 鉄製品 鉄滓 羽口 石製品	平安時代の集落跡。 小鍛冶関連遺構検出。

図　　版



古代住居跡からのぞむ浅間山

図版１

遺跡遠景（北側調査区、東から）

遺跡遠景（南側調査区、東から）

調査区全景（北側調査区、南西から）

調査区全景（北側調査区、西から）

図版 3

調査区全景（南側調査区、北東から）

調査区全景（南側調査区、北から）

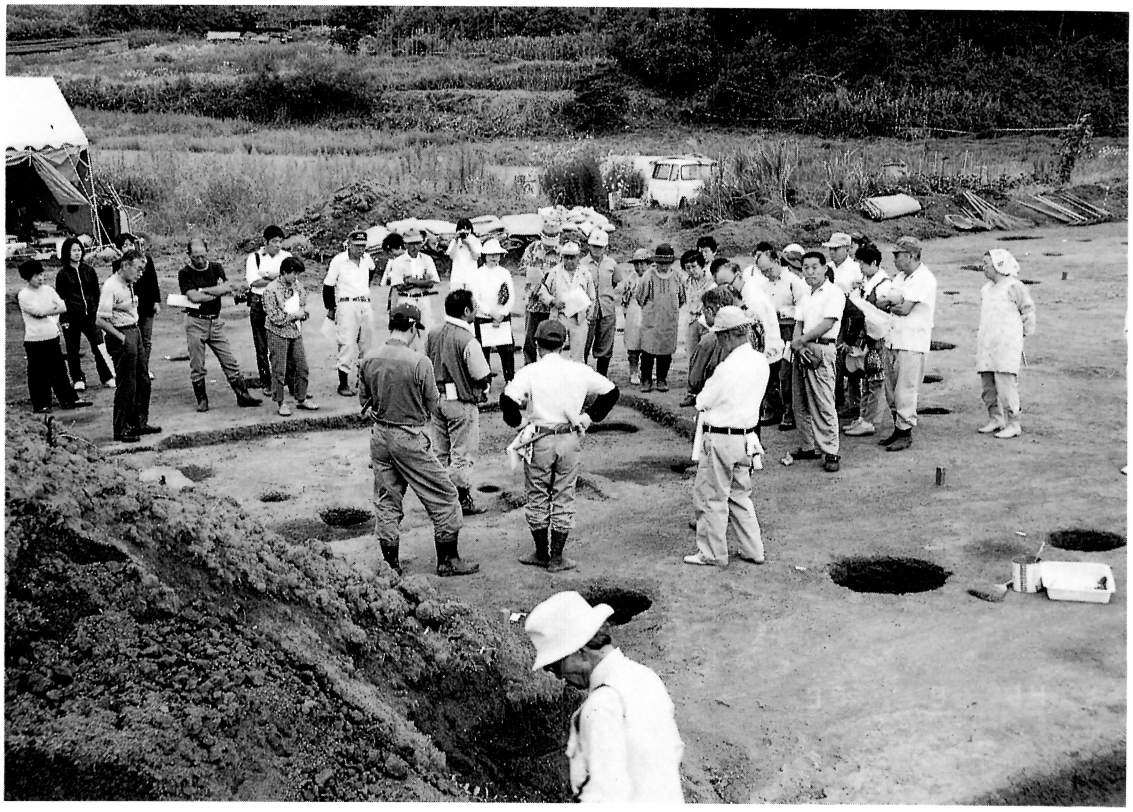
調査区全景（南側調査区、北から）

重機による表土掘削（南から）

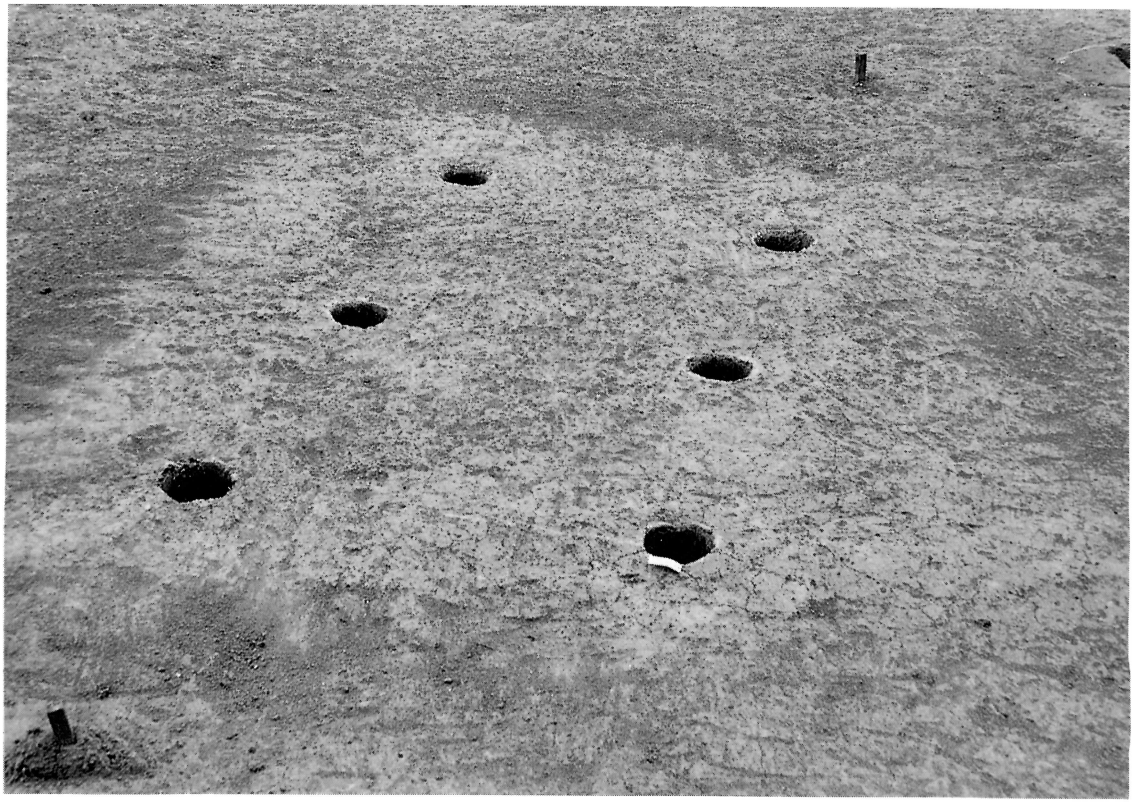
図版 5

遺構確認作業（北側調査区、南から）

遺構調査風景



遺跡見学会風景

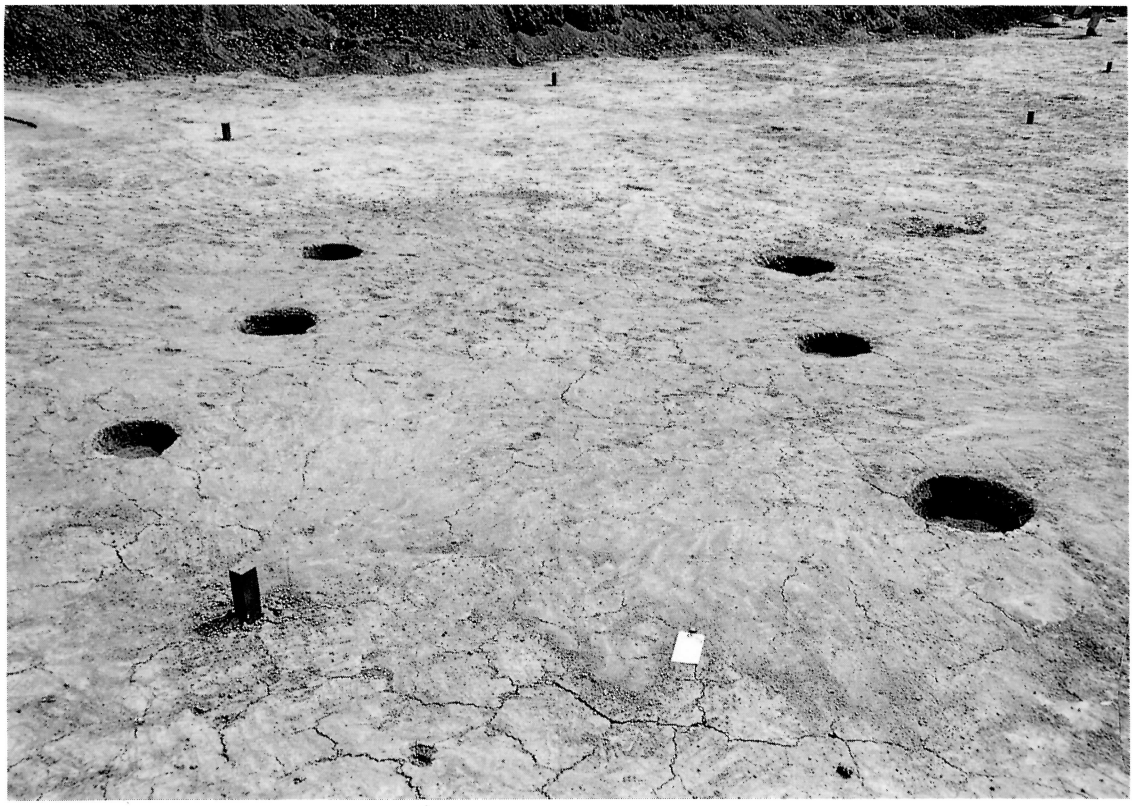


第 1 号建物跡（南から）

図版 7

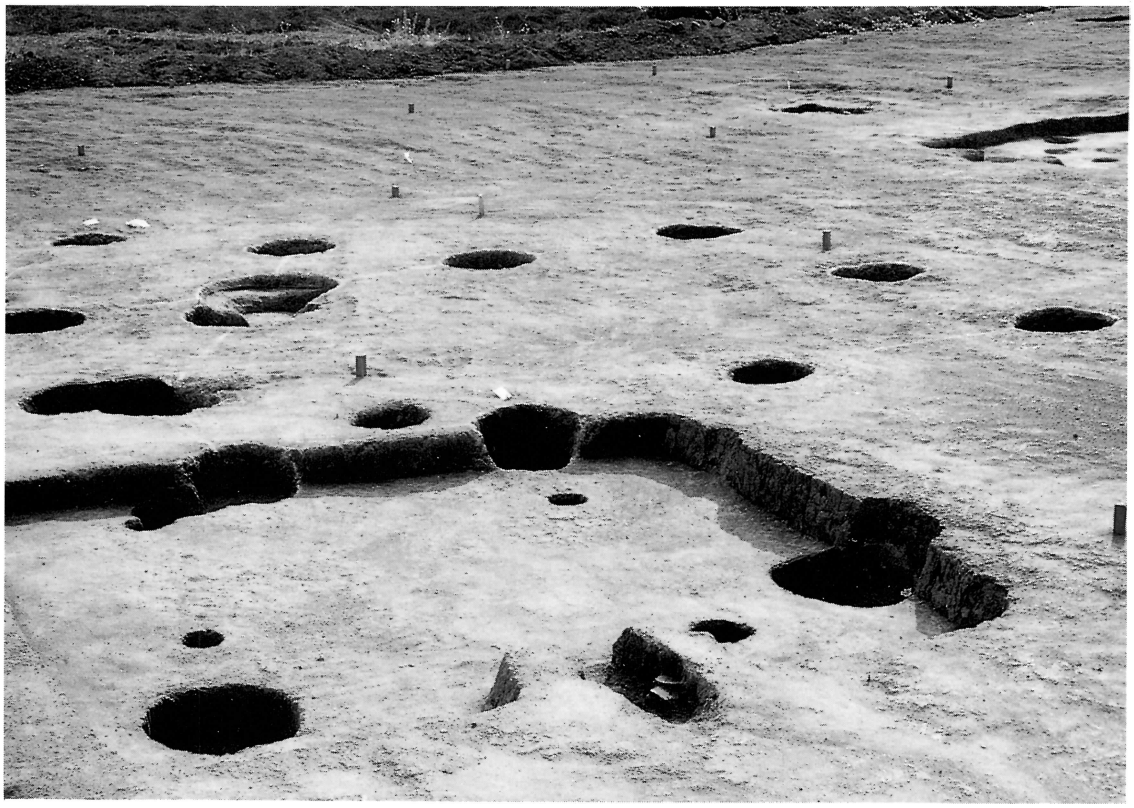
第 3 号建物跡（西から）

第 4 号建物跡（南から）

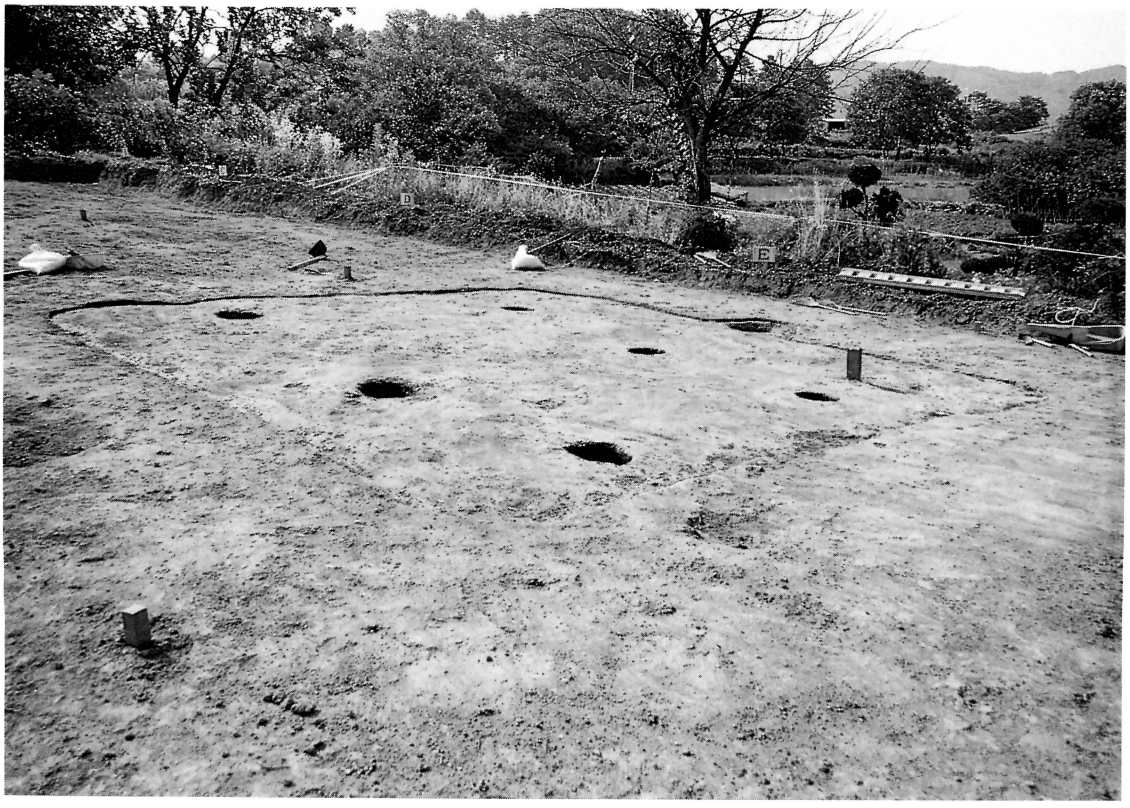


第 5 号建物跡（北から）

第 6 号建物跡（南から）



第 7 号建物跡（北から、手前は第17号住居跡）



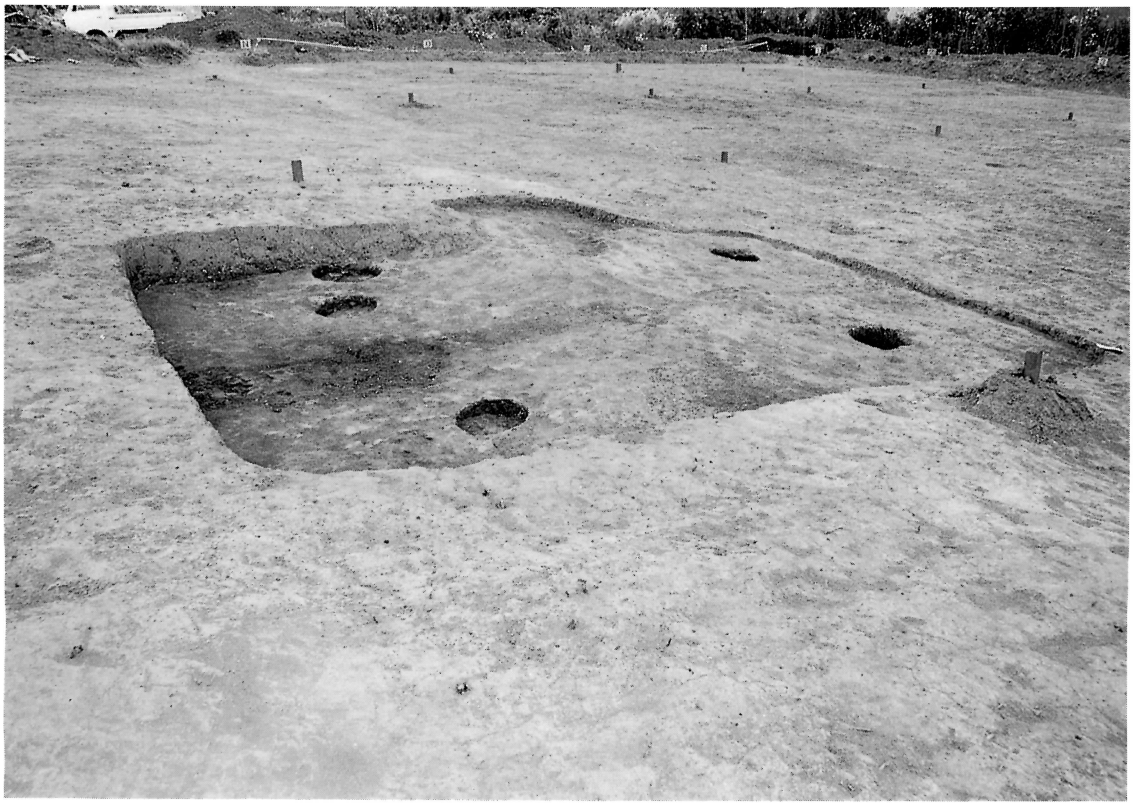
第 1 号住居跡（南東から）

第２号住居跡（南東から）

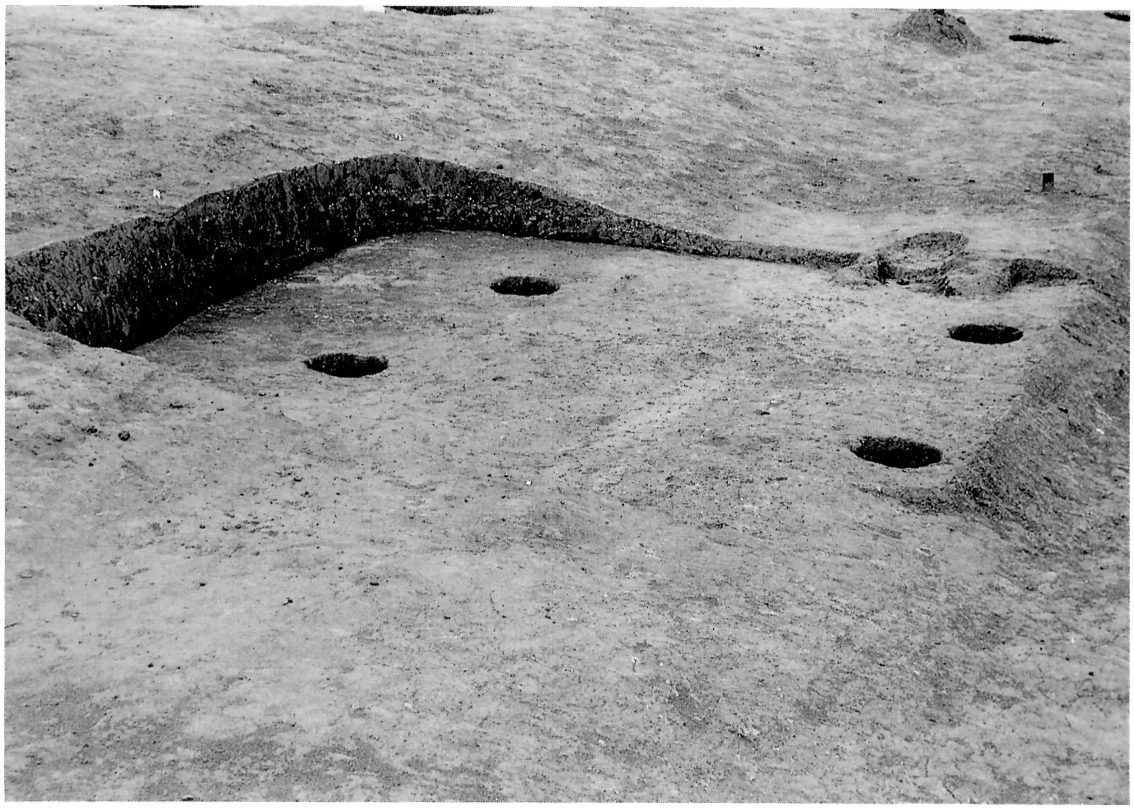
第２号（左）、第３号（右）住居跡（南から）

図版11

第４号（奥）、第11号（中）、第５号（手前）住居跡



第６号住居跡（南から）



第７号住居跡（南から）

第８（左奥）、９号（右奥）、第10号（手前）住居跡（南から）

図版13

第12号住居跡（南から）

第13号住居跡（南東から）

第13号住居跡ピット１遺物出土状態（南から）

第14号住居跡（南西から）

図版15

第15号住居跡（南から）

第17号住居跡（南西から）

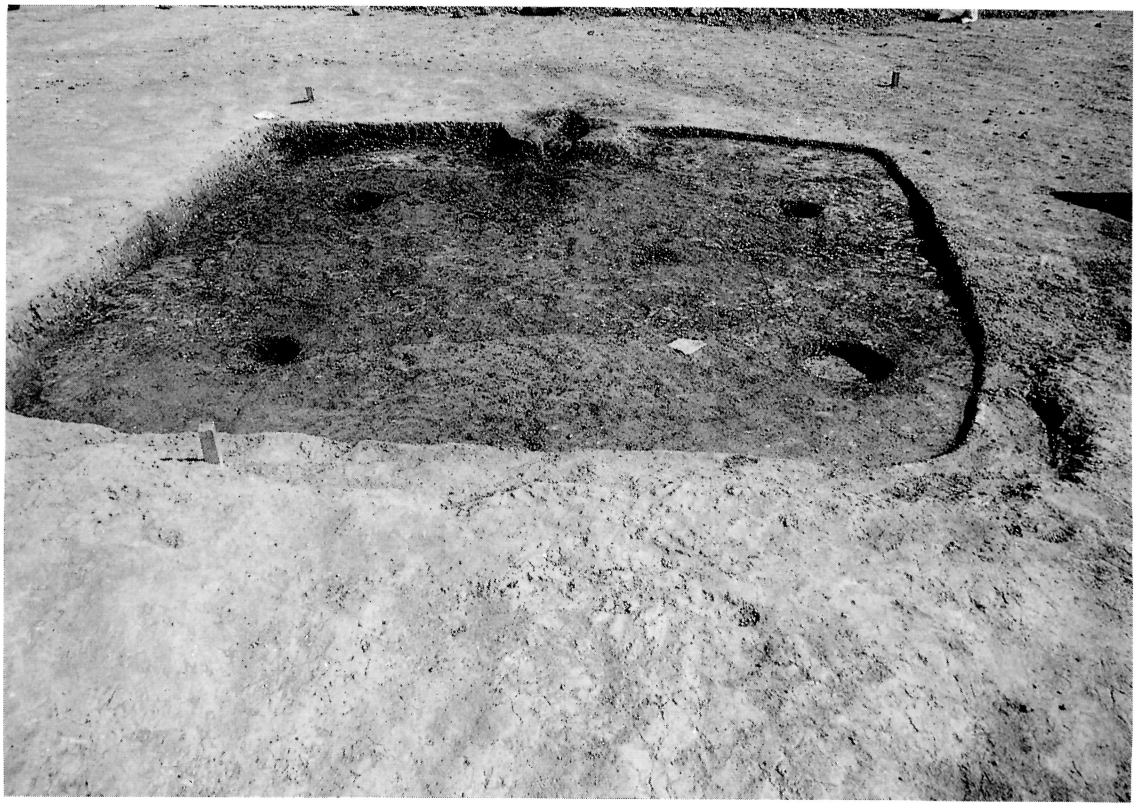
第17号住居跡遺物出土状況（南東から）

第17号住居跡遺物出土状態（カマド東側）

第17号住居跡遺物出土状態（カマド東脇）

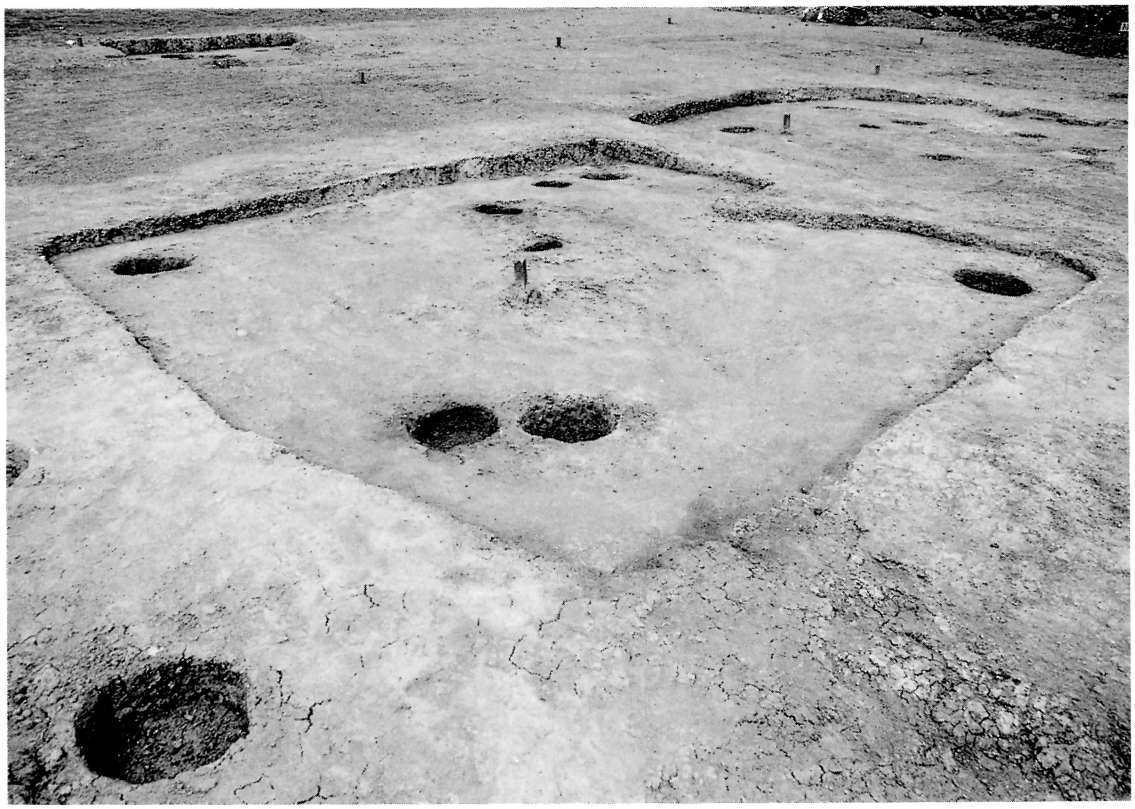
第18号住居跡（南から）

第19号住居跡（南から）



第20号住居跡（南から）

図版19



第21号（手前）、第22号（奥）住居跡（南東から）

第23号（右）、第20、24号（左）住居跡（東から）

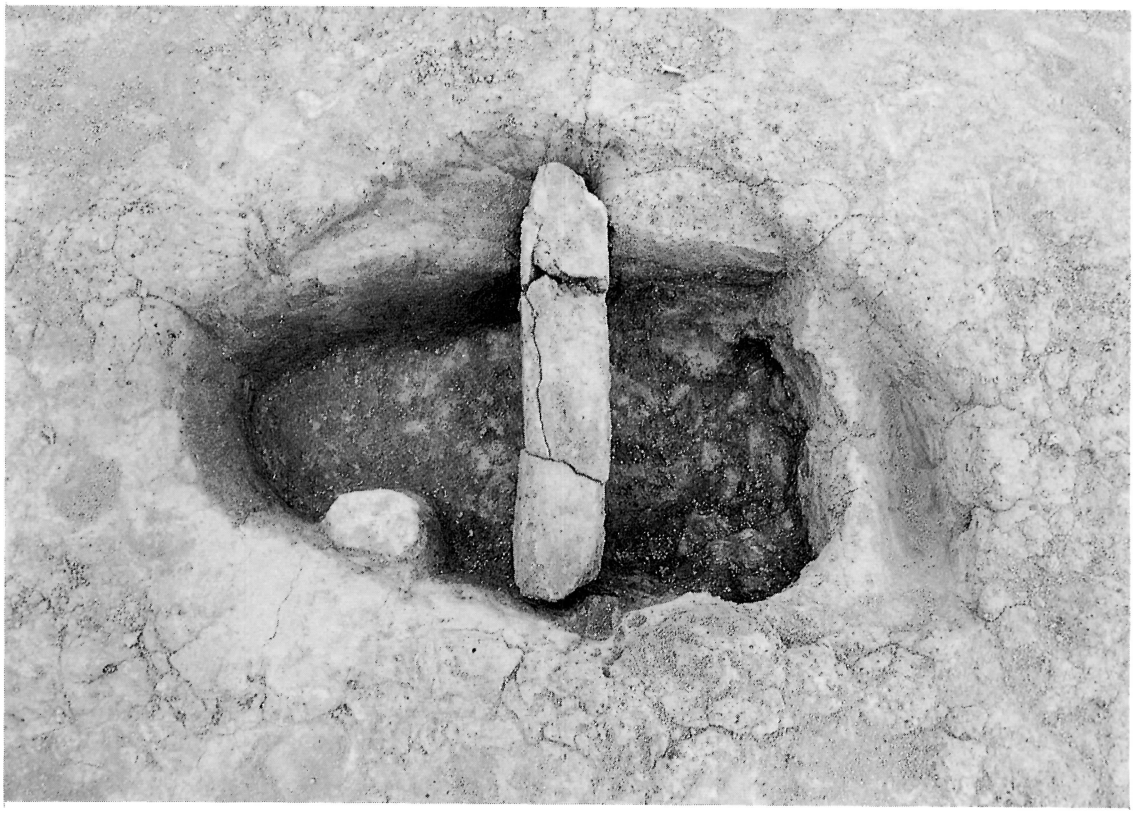
第23号住居跡遺物出土状態（南東から）

第20、24号住居跡（南東から）

図版21

第１号炉完掘状態（南西から）

第１号炉遺物出土状態（北東部、東から）



第１号炉復元状況

第１号炉遺物出土状態（南から）

図版23

第２号炉完掘状態（西から）

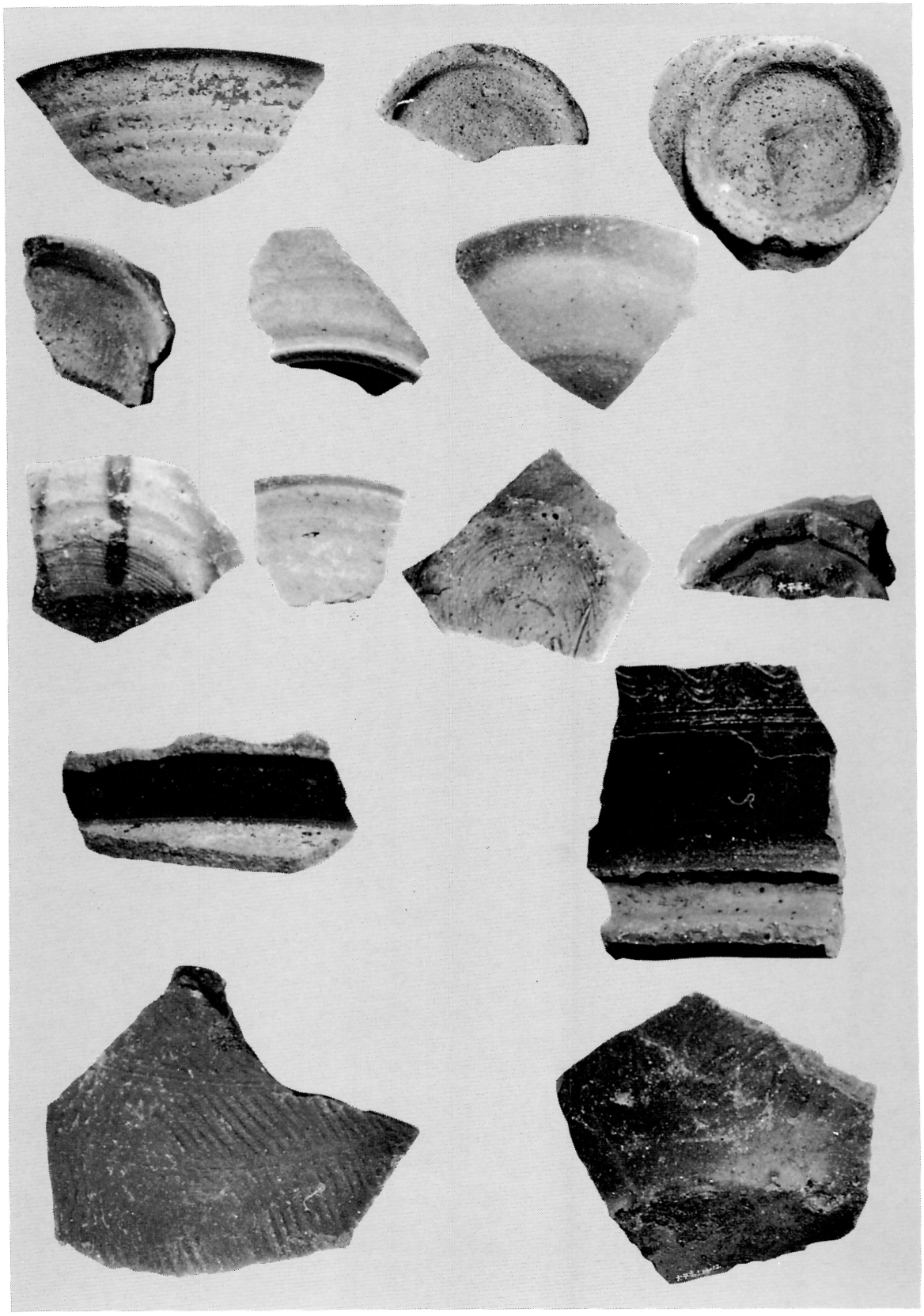
第２号土壙完掘状態

第 3 号土壙完掘状態

第 5 号土壙完掘状態

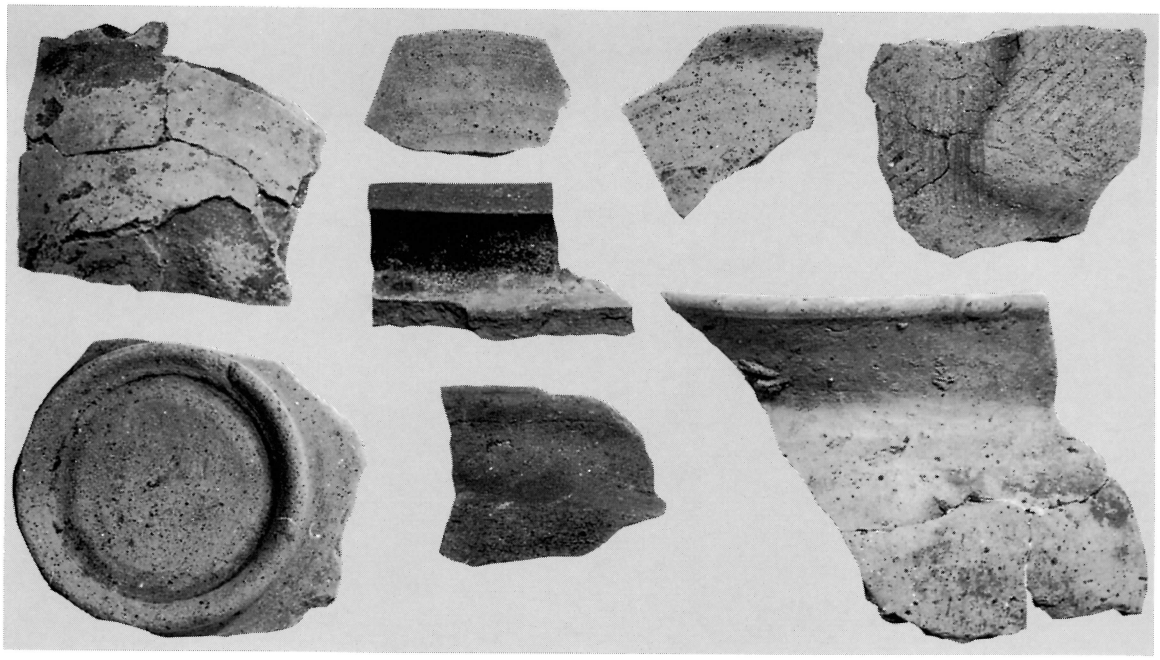
第７号土壙土層断面

ピット群



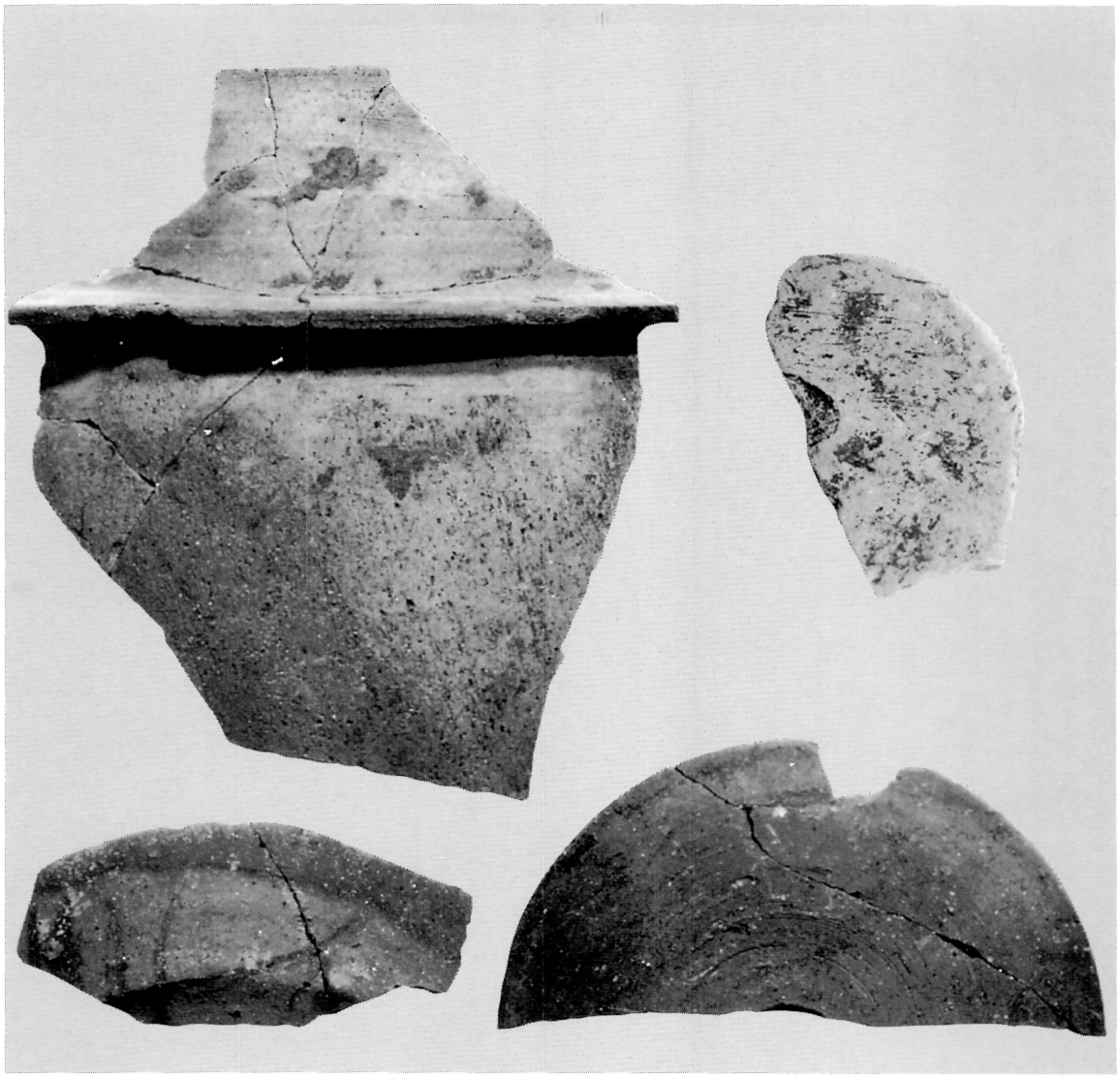
遺構外出土遺物

図版27



第 7 号建物出土遺物

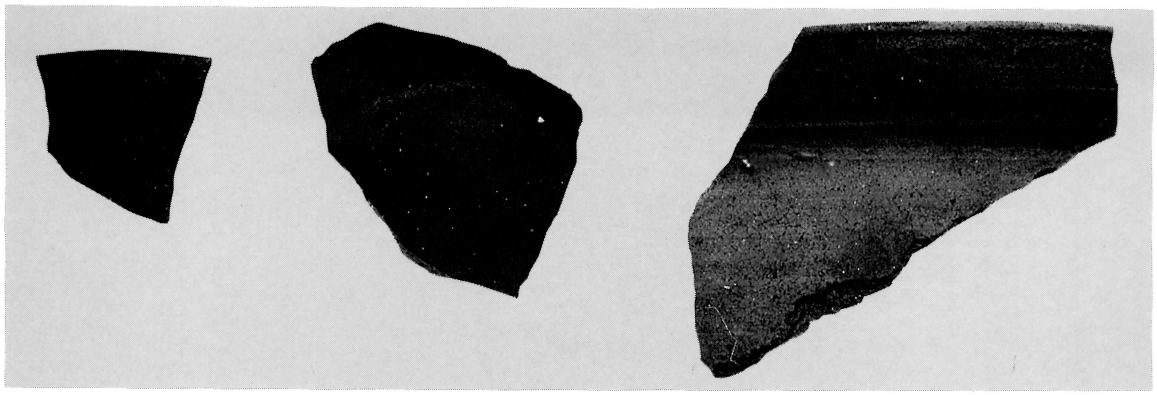
第 2 号住居跡出土遺物



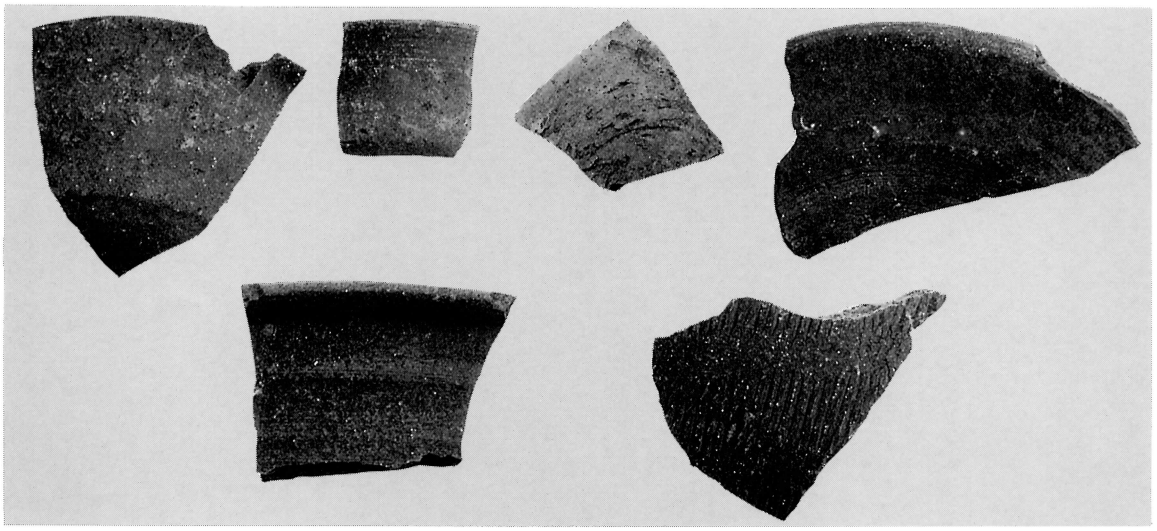
第 4 号住居跡出土遺物

第 5 号住居跡出土遺物

図版29

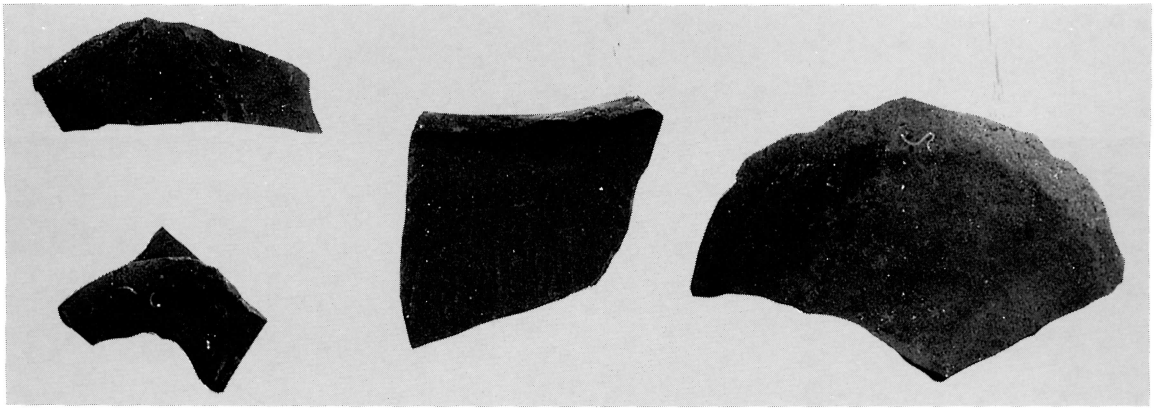


第 6 号住居跡出土遺物

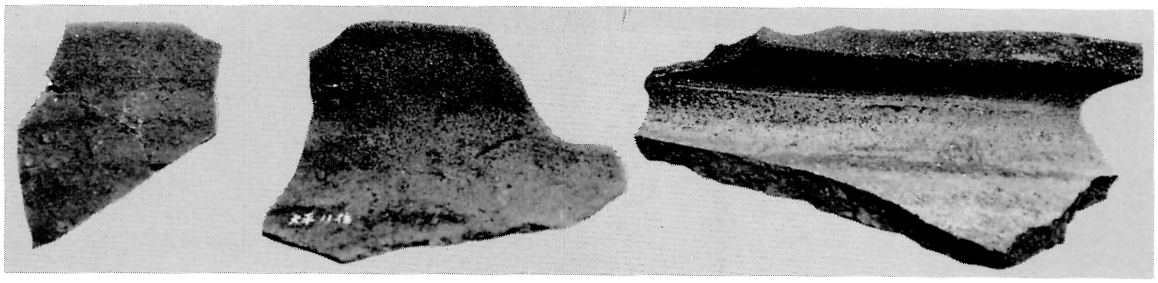


第 7 号住居跡出土遺物

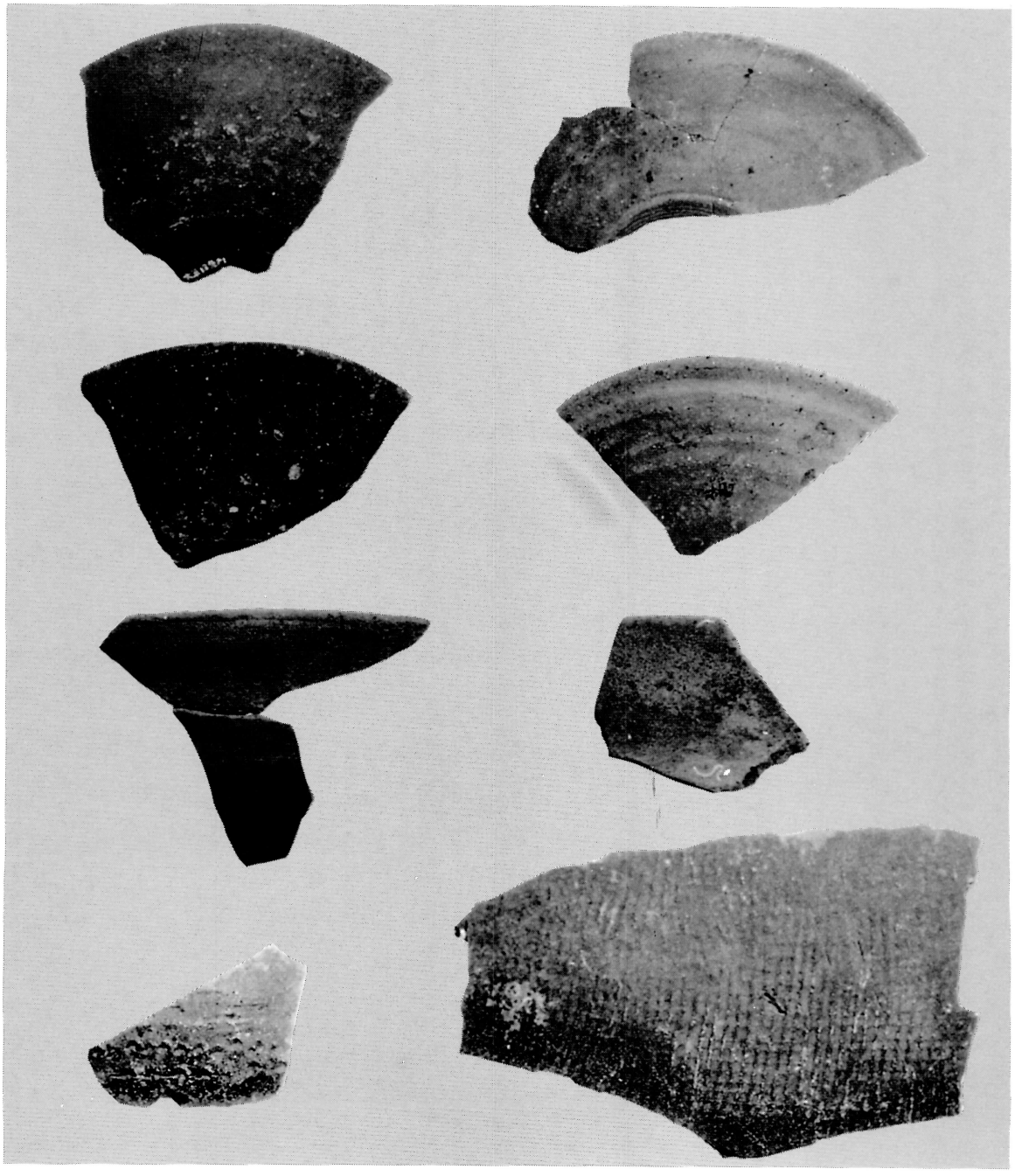
第 8 号住居跡出土遺物



第 9 号住居跡出土遺物

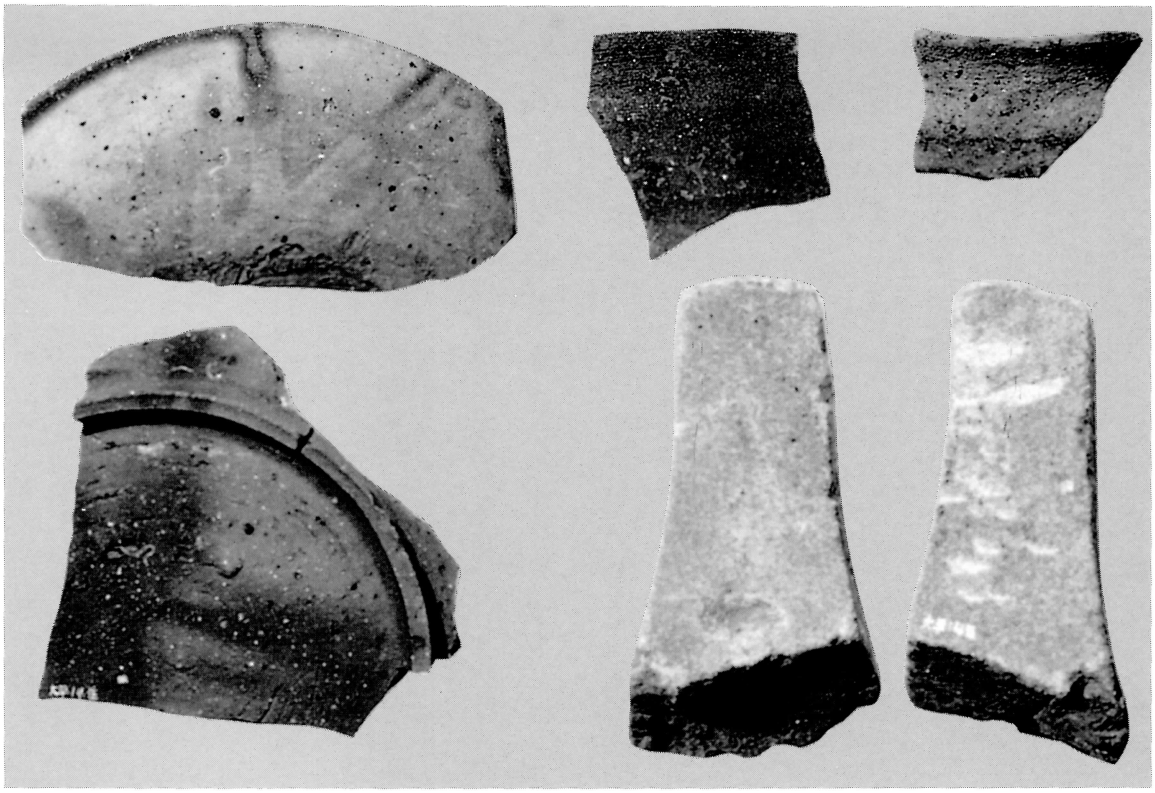


第11号住居跡出土遺物

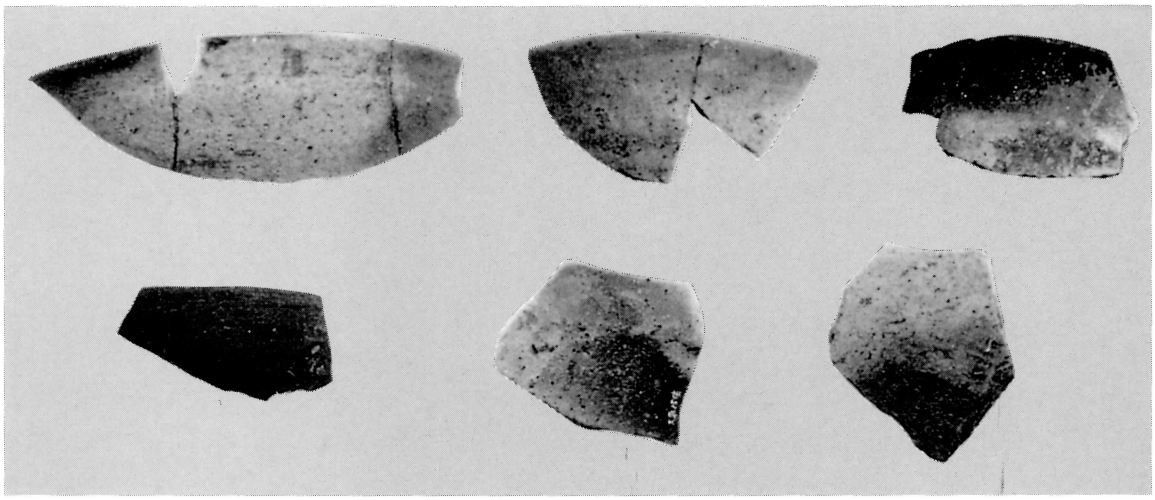


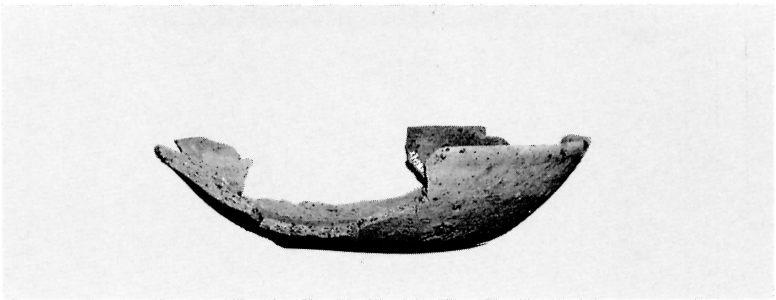
第13号住居跡出土遺物

図版31

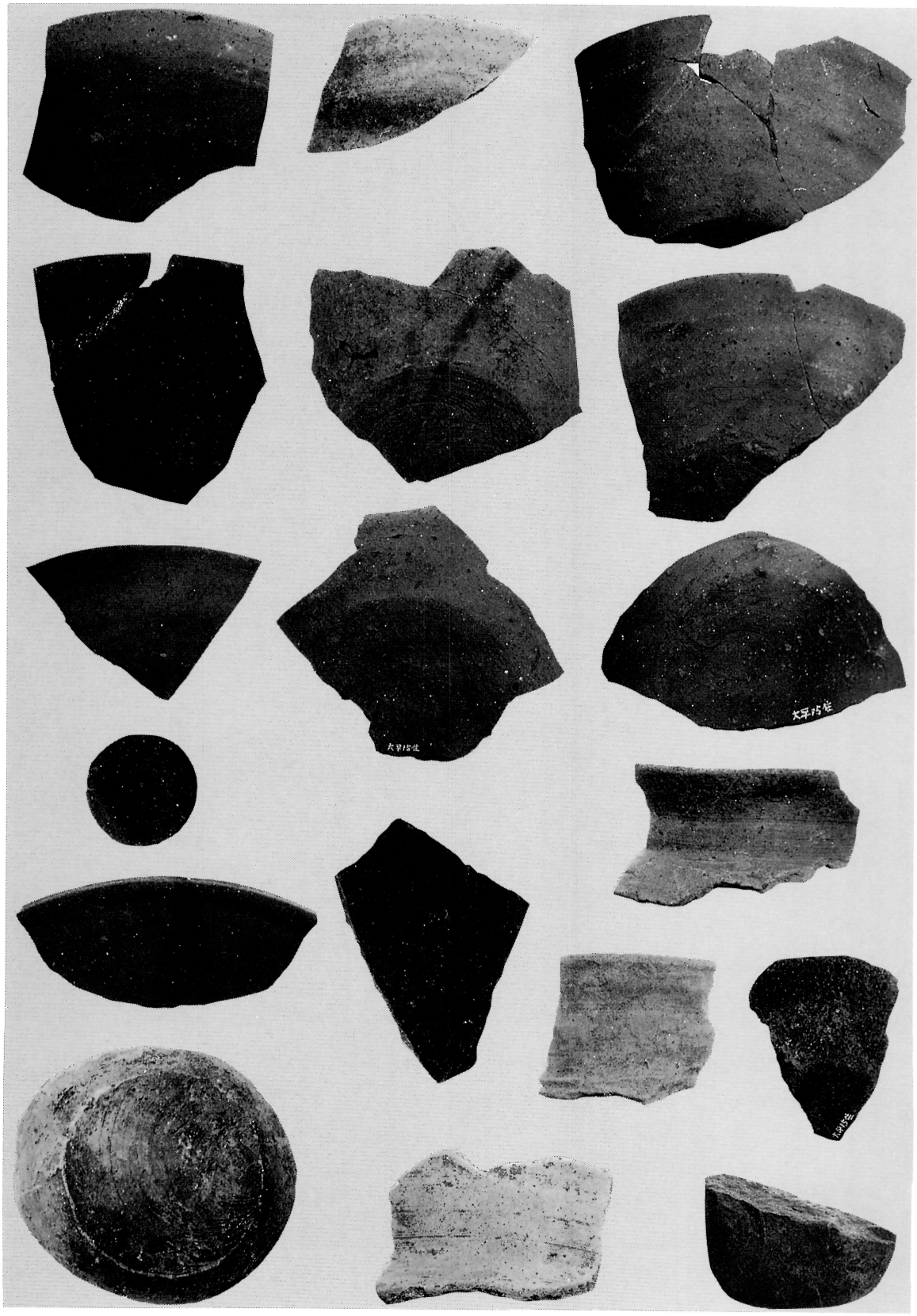


第14号住居跡出土遺物



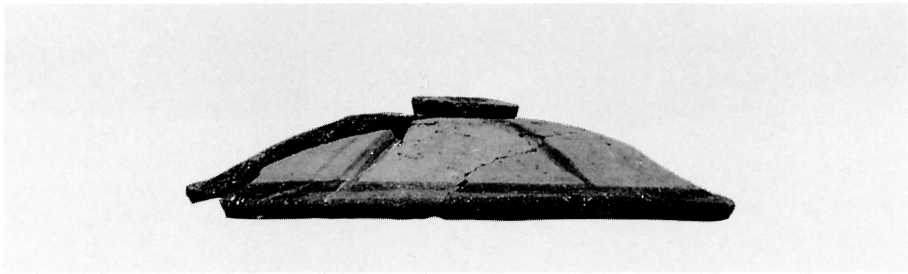


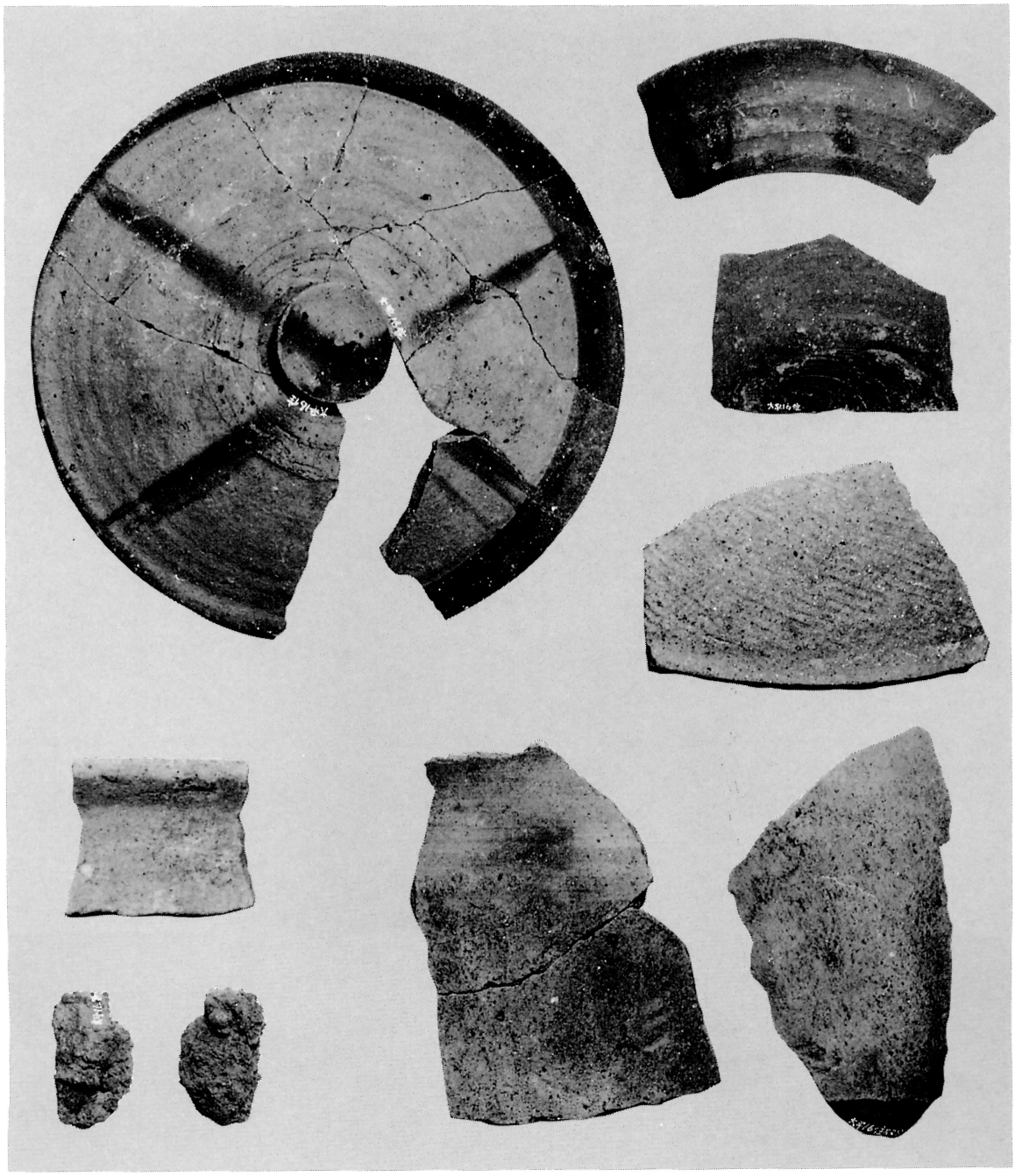
第15号住居跡出土遺物(1)



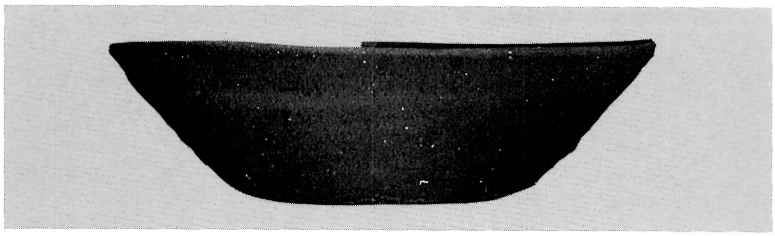
第15号住居跡出土遺物(2)

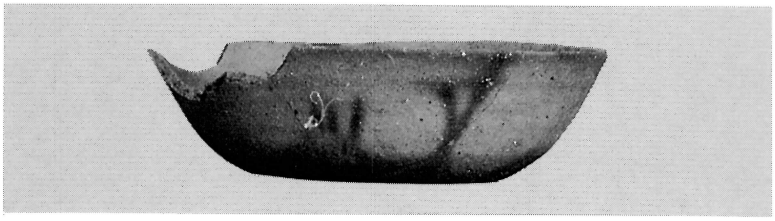
図版33

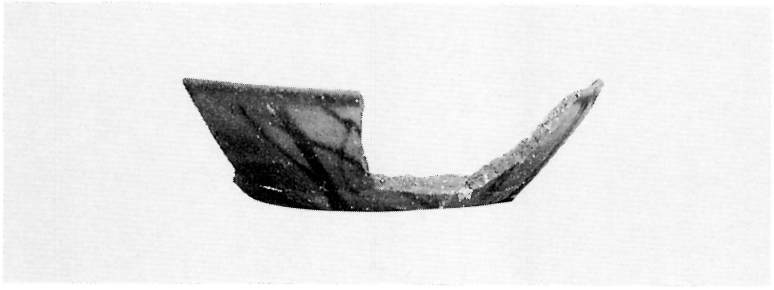


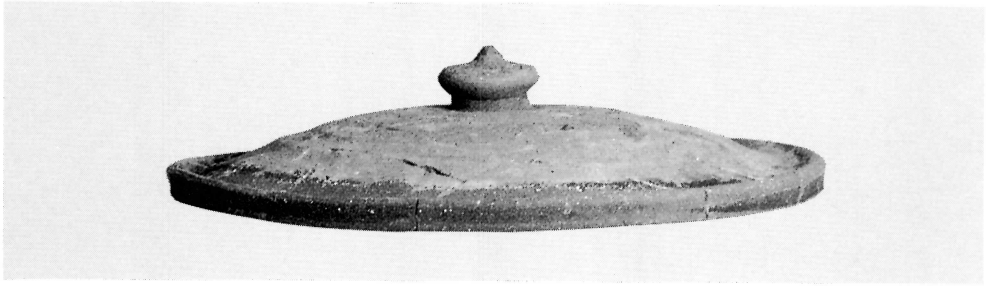


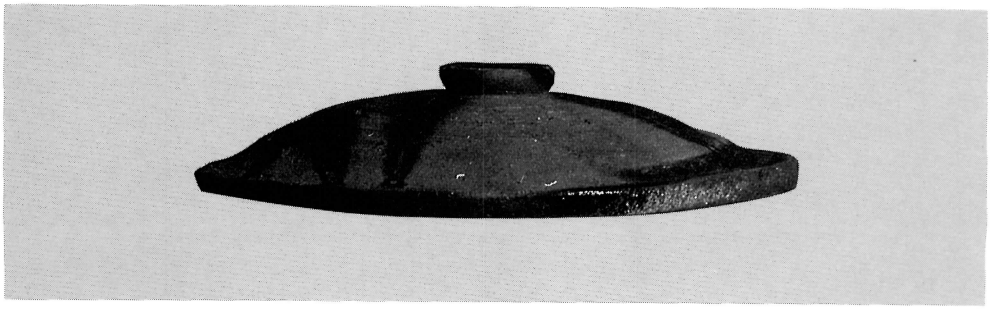
第16号住居跡出土遺物





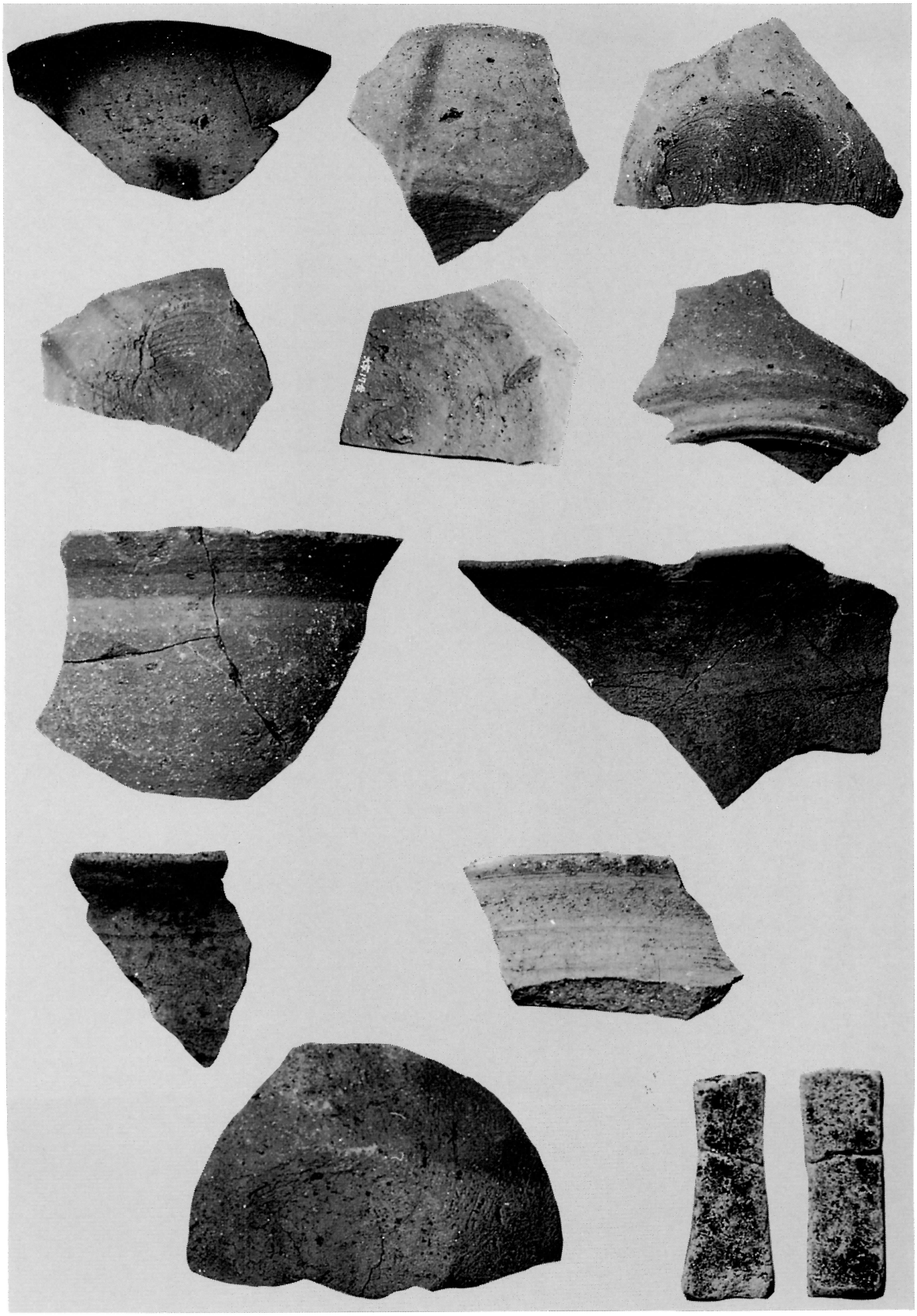






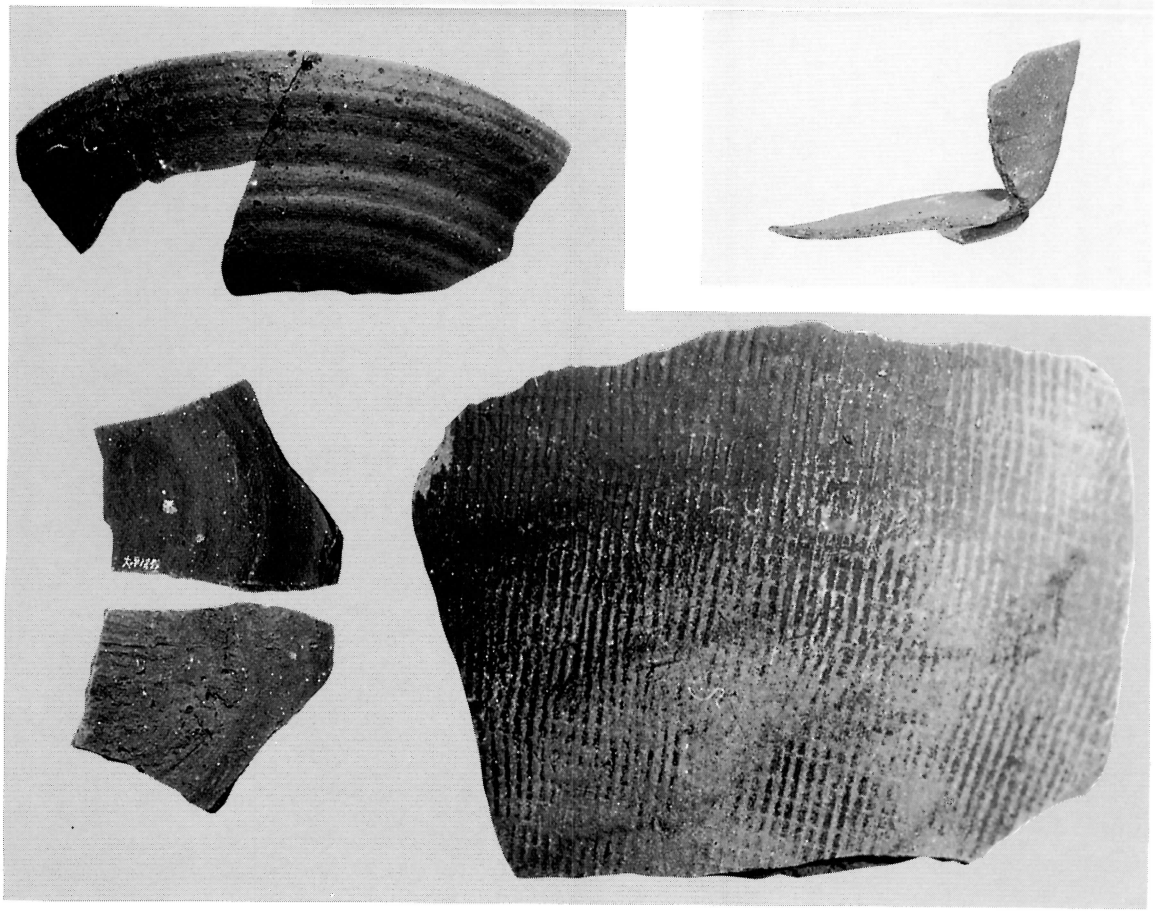
第17号住居跡出土遺物(1)

図版35

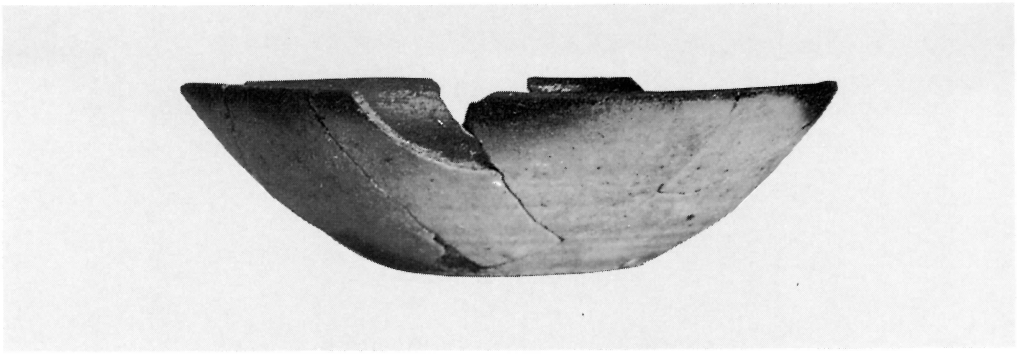


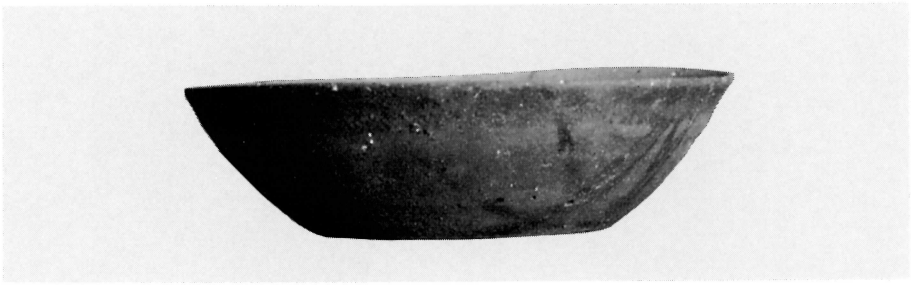
第17号住居跡出土遺物(2)

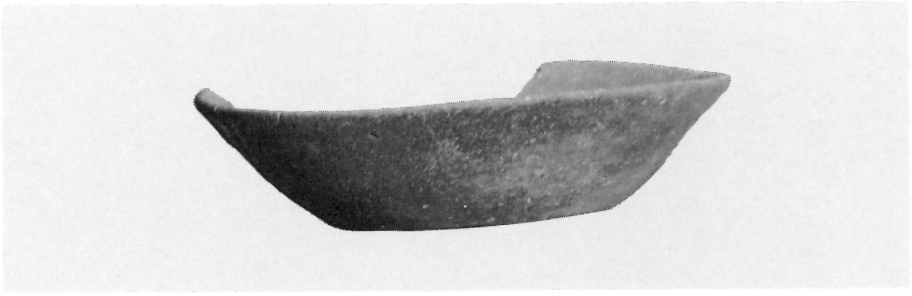
第17号住居跡出土遺物(3)

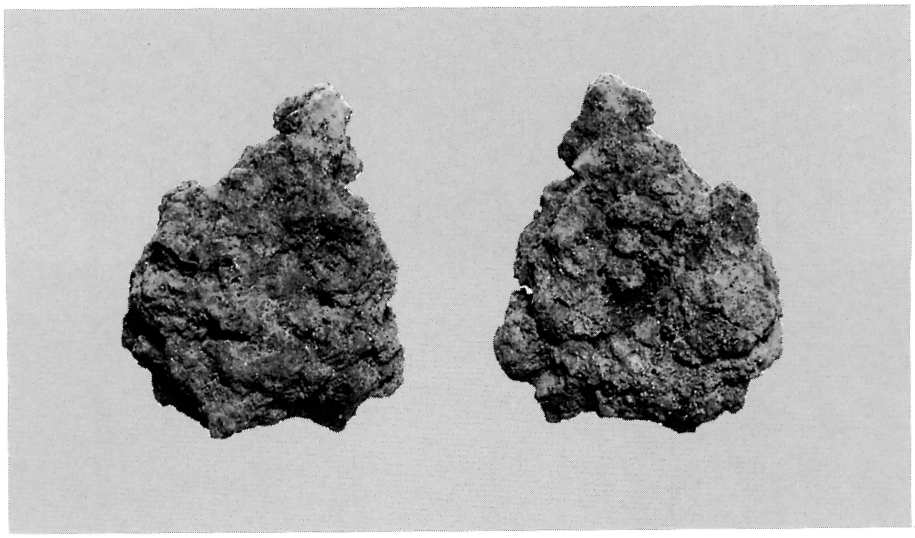


第18号住居跡出土遺物

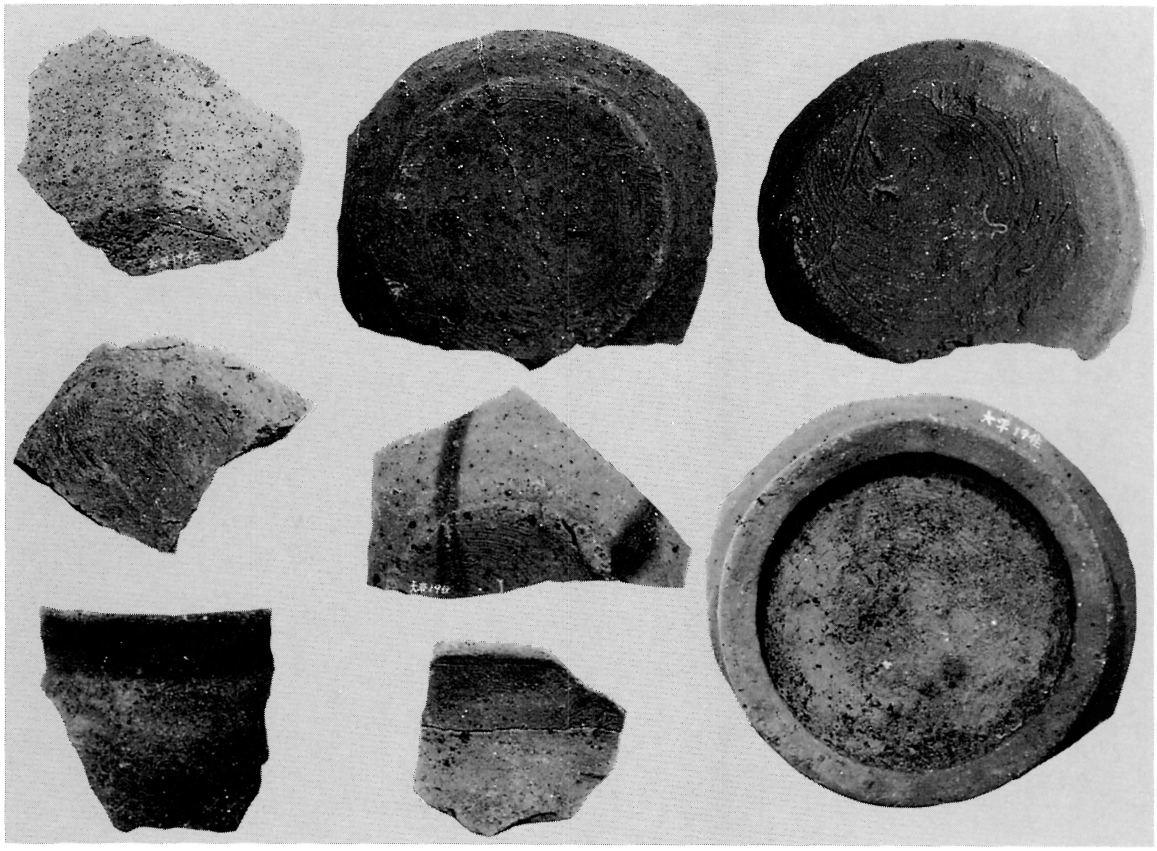




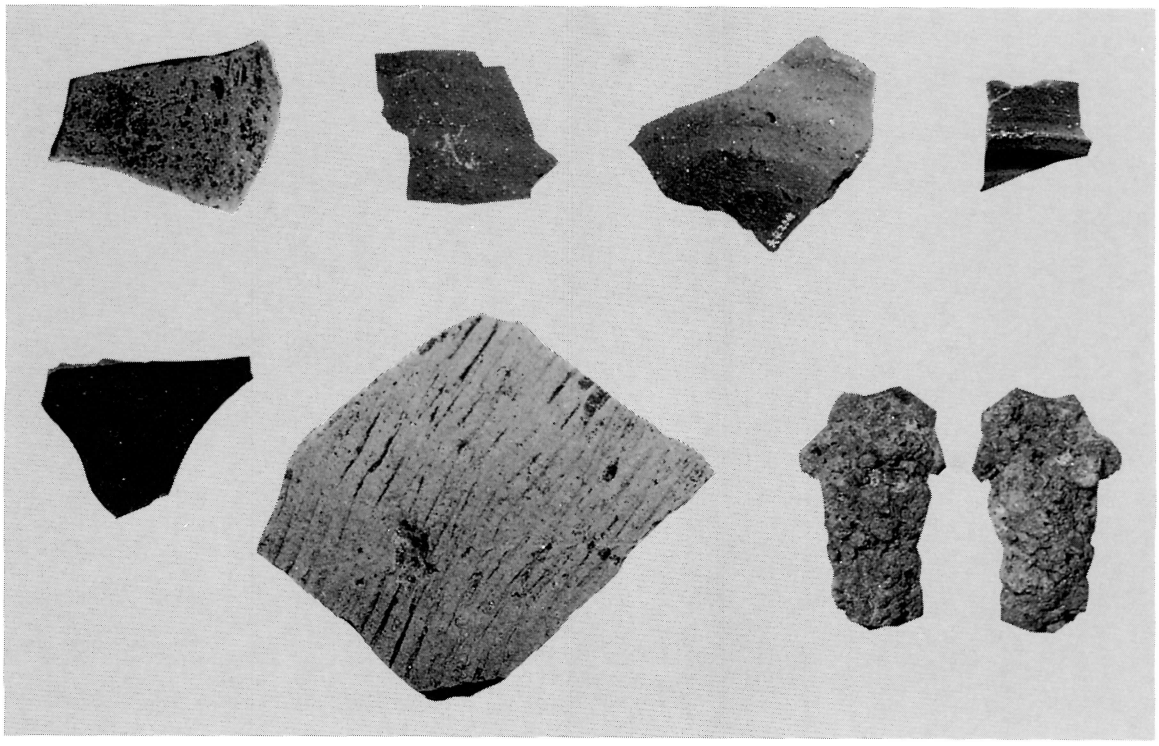




第19号住居跡出土遺物(1)

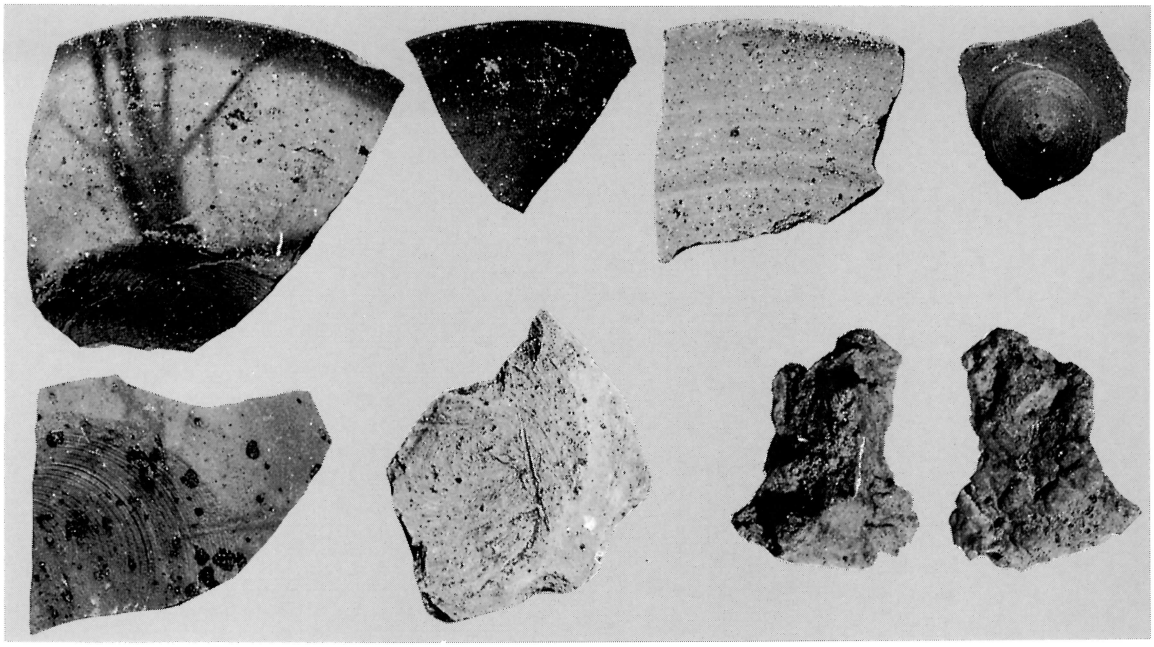


第19号住居跡出土遺物(2)

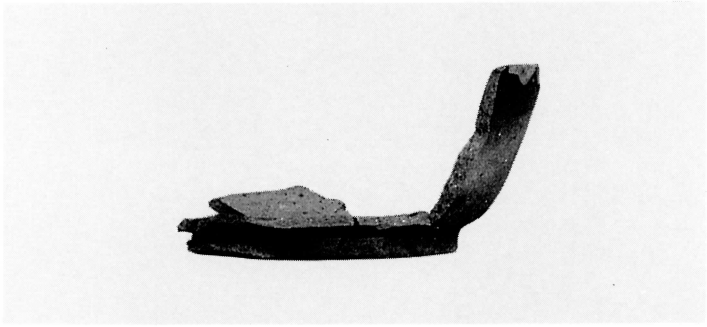


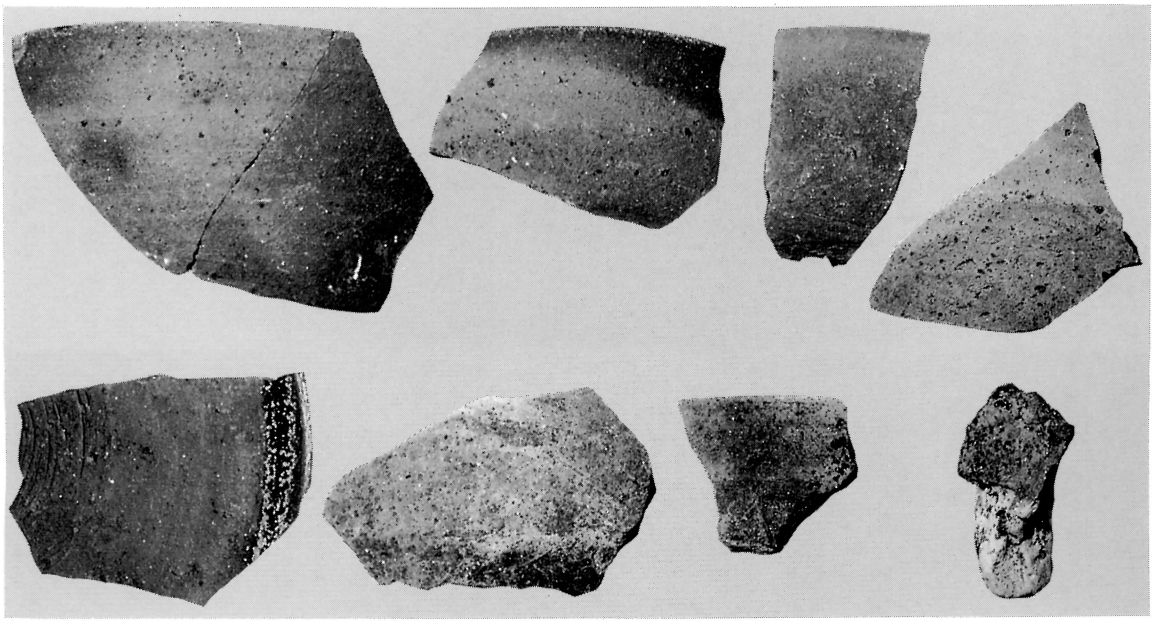
第20号住居跡出土遺物

図版39

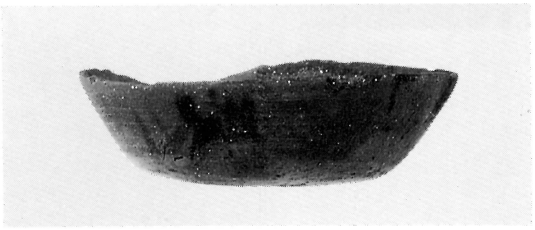


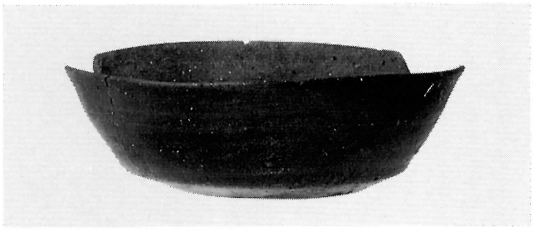
第21号住居跡出土遺物

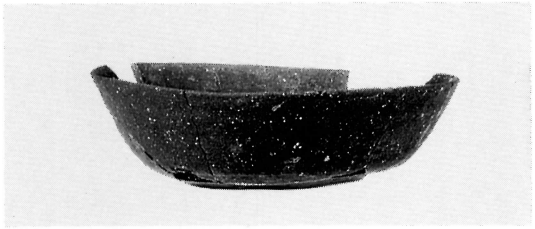


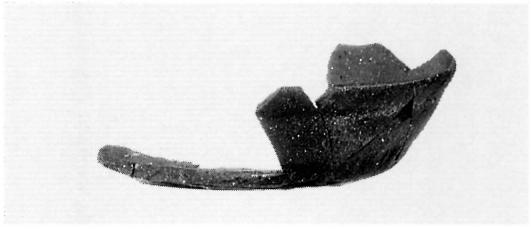


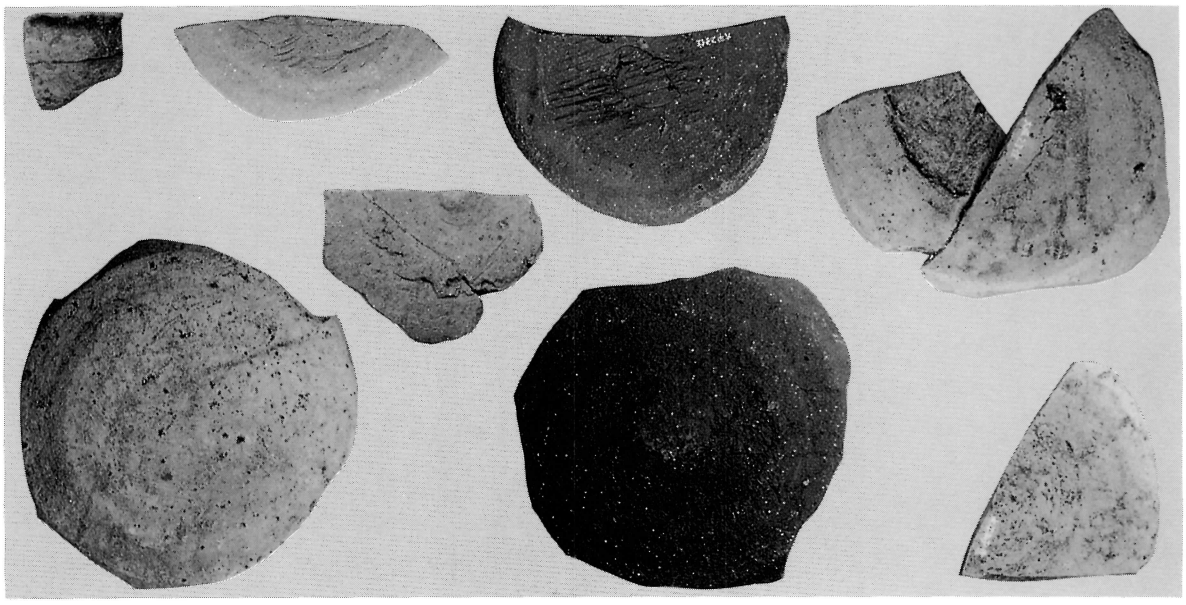
第22号住居跡出土遺物





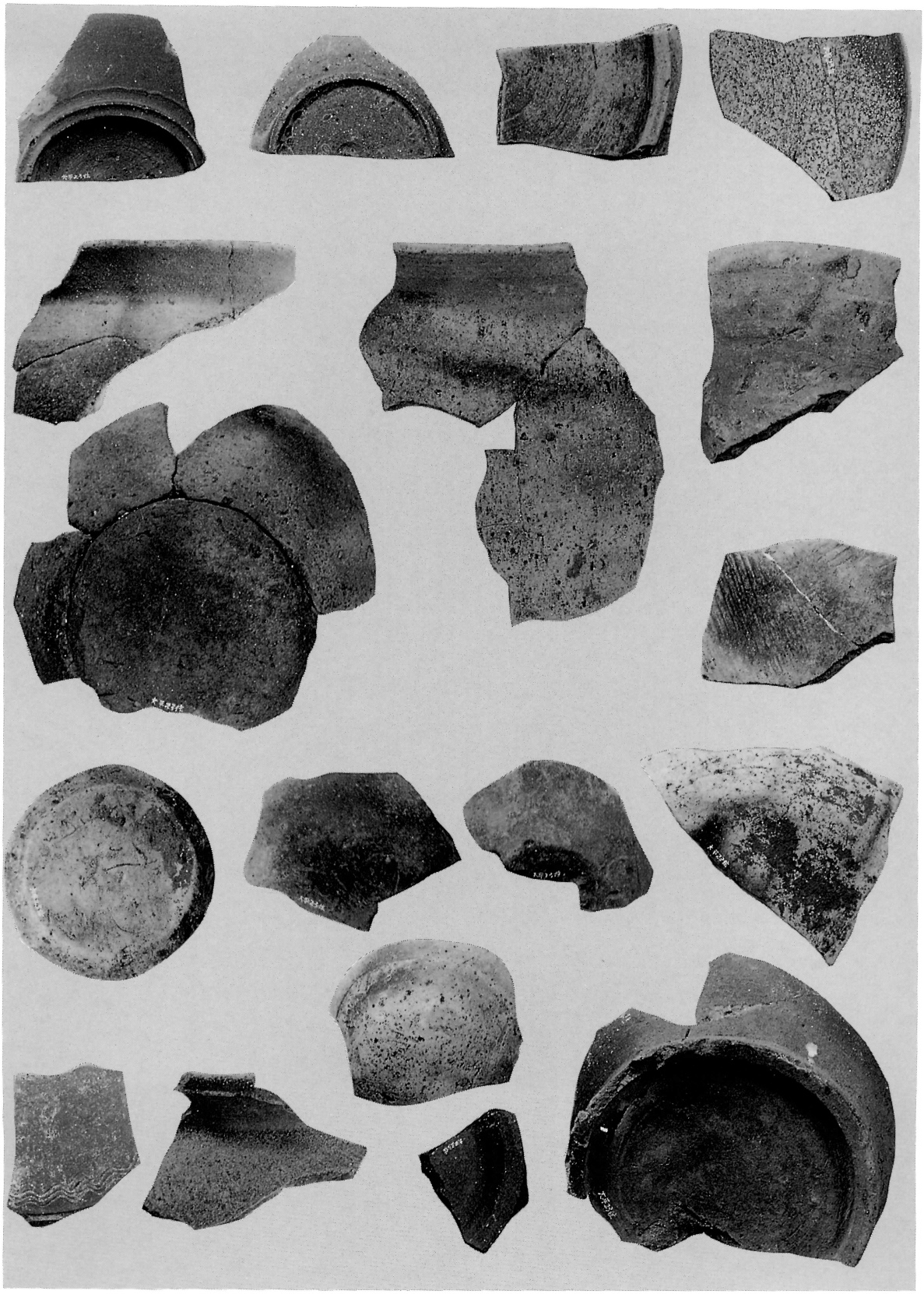




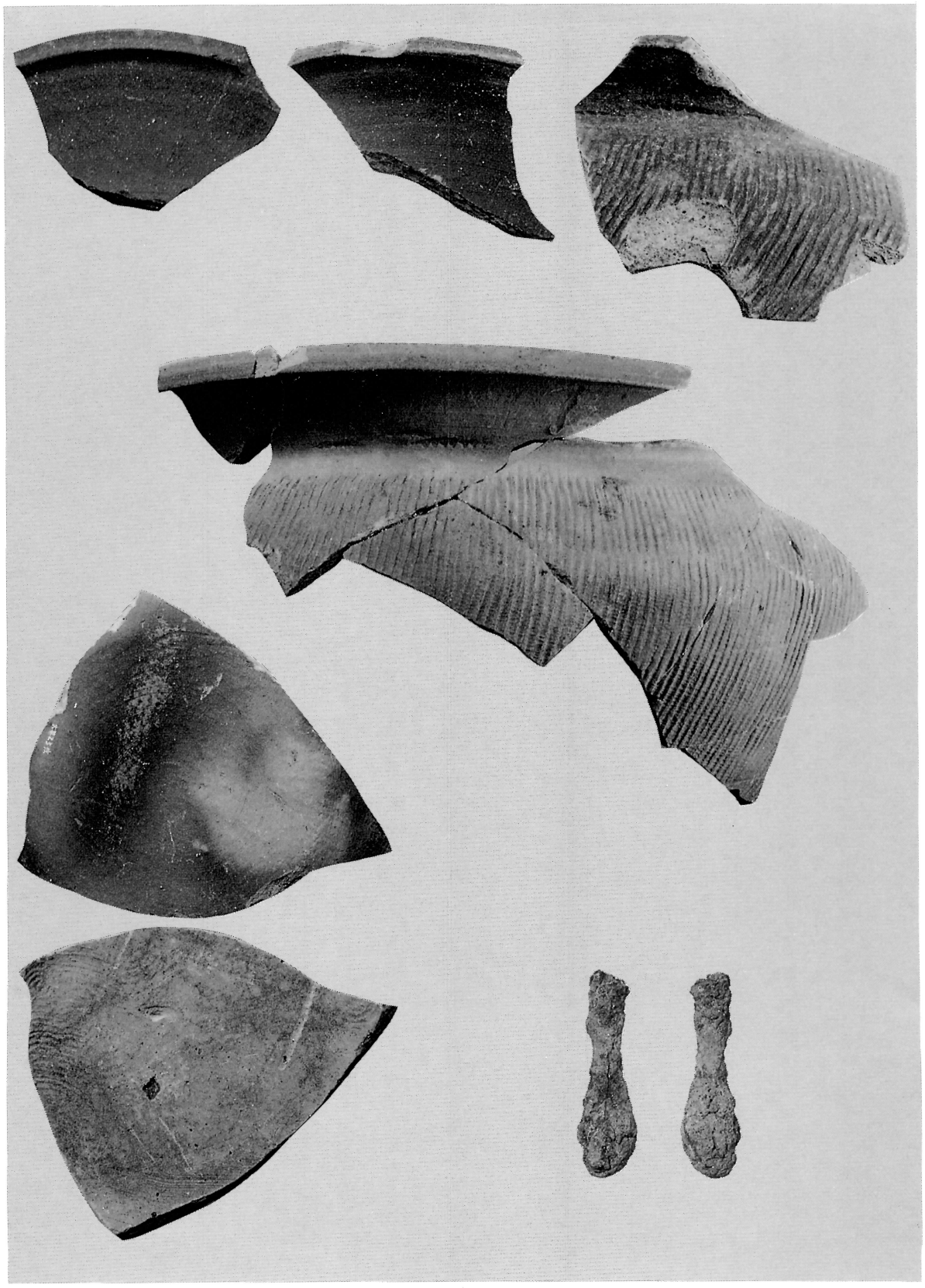


第23号住居跡出土遺物(1)

図版41

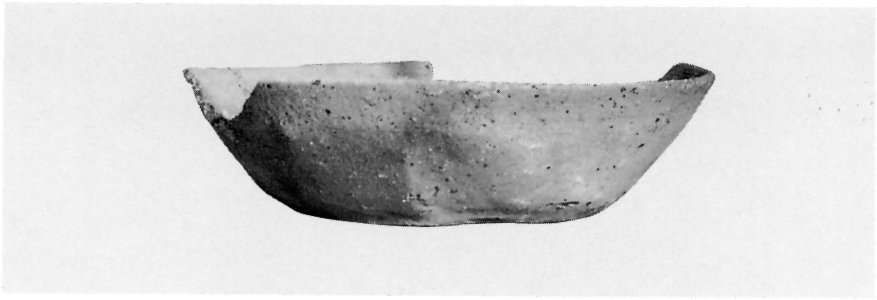


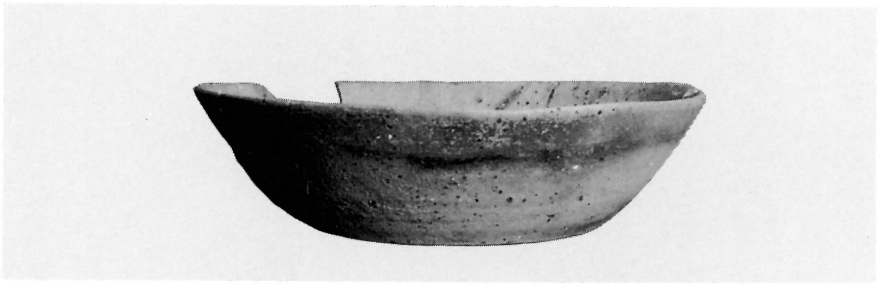
第23号住居跡出土遺物(2)

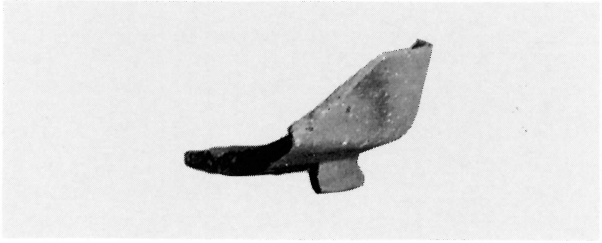


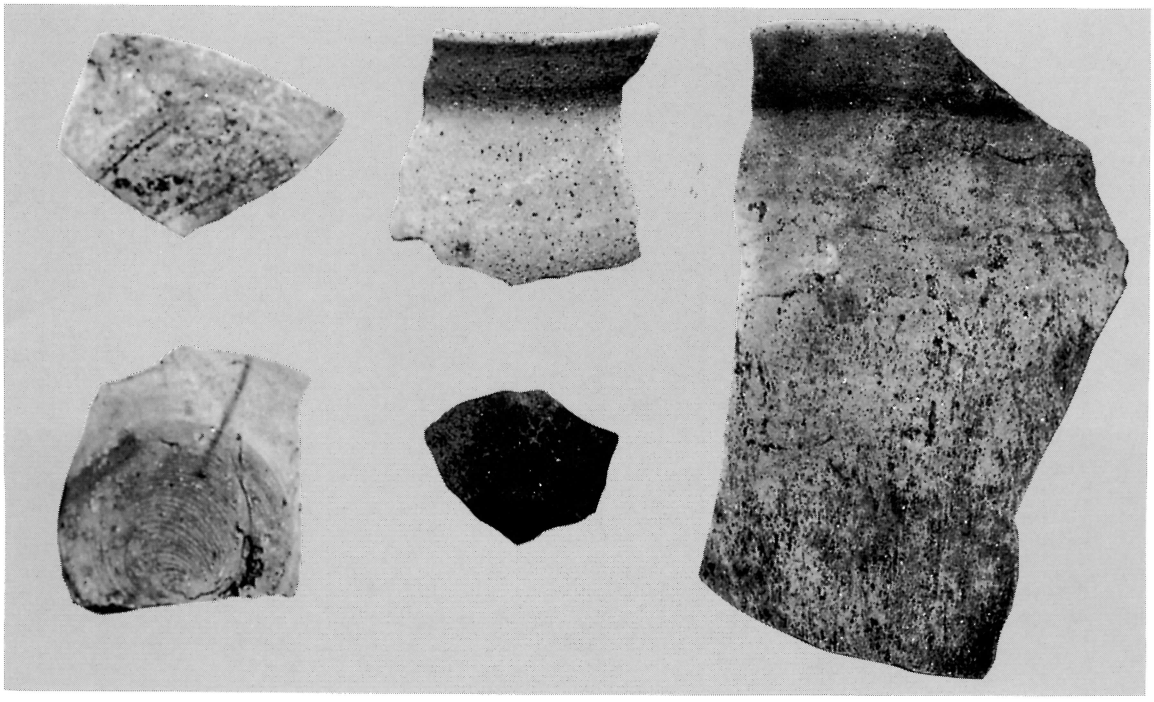
第23号住居跡出土遺物(3)

図版43

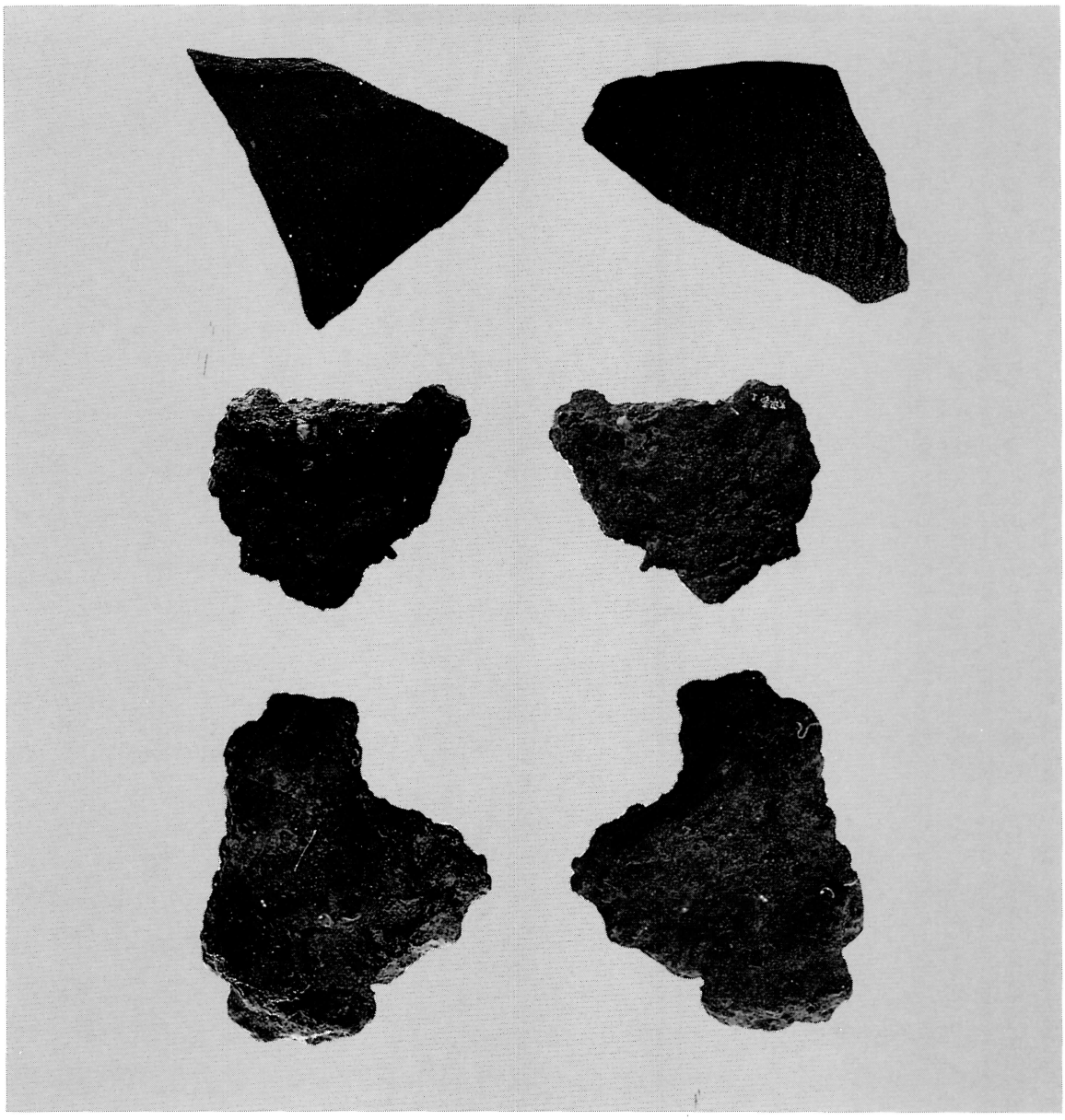




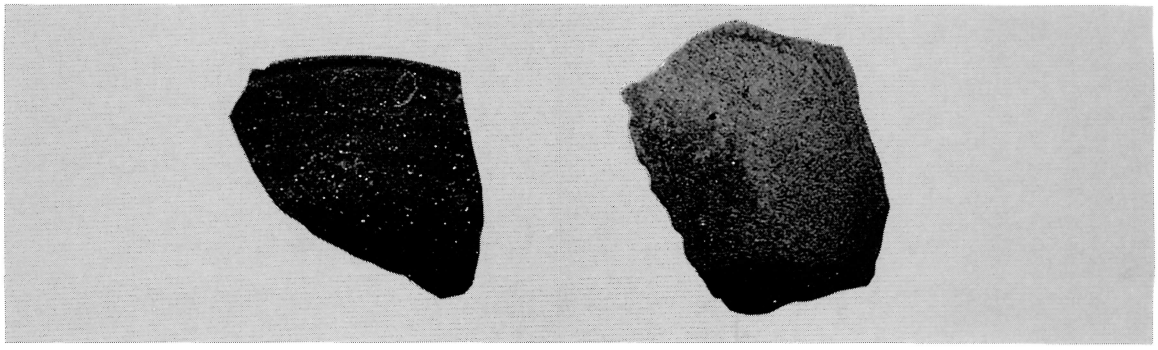




第１号炉出土遺物

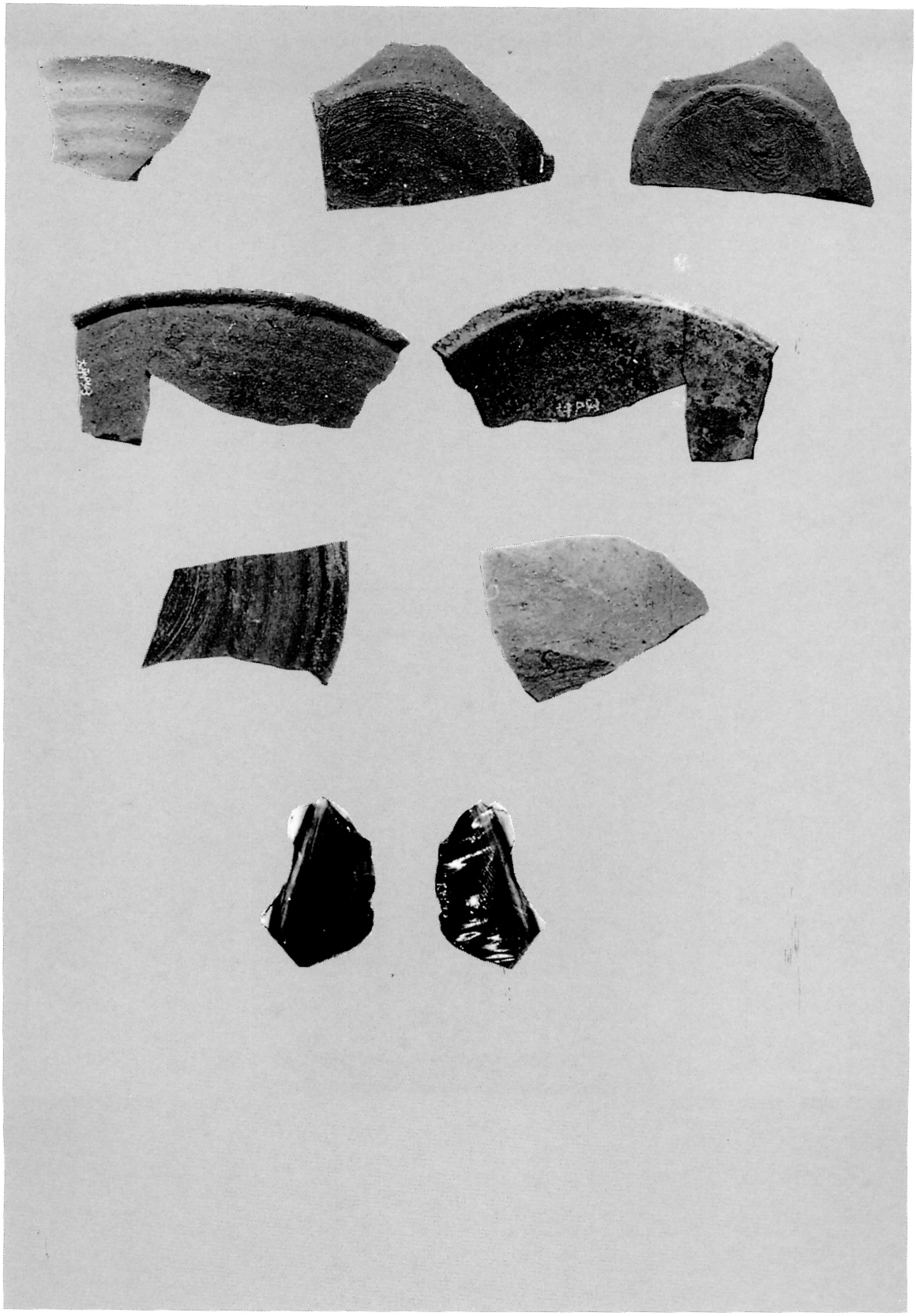


第 2 号炉出土遺物



第 4 号土壙出土遺物

図版45



ピット出土遺物

大平遺跡全体測量図

1:100

株式会社・東京航業研究所調製

浅科村教育委員会

平成9年測図　座標系 第Ⅷ系　等高線間隔 50cm

浅科村文化財調査報告　12集　付図